

東郷海斗は勇者である

しい君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

家族を1度失い、新しい家族を得た。

幼馴染が姉になった、やくそくは叶わず。

それでも、少年は夢を見る。

いつかの日の夢を。

目次

花結（はなゆい）の章

Happy Halloween

仮装パーティーによるこそゝ | 1

銀色に輝いて | 16

六枚の花びらと温かい心 | 26

樹ツチンと好きな理由 | 49

クリスマスに祝福を | 57

咲くは金糸梅、大晦日の昼に | 69

私が貰った世界一最高のプレゼント

78

何気ない日常を愛する者 | 87

I swear for you

95

子犬のようなあなたと、猛獣のような

あの子 | 101

バレンタインは愛の日です | 110

花を結った勇者たち | 119

ホワイトデーに甘い声 | 131

『偶然』と『必然』、『運命』と『奇跡』

141

やくそくと縁と愛 | 152

お嬢様と執事君 | 164

東郷海斗の章 | エガオノキミへ

prologue 「昔と今」 | 170

第一話「望みのない恋と知りながら」

175	第二話「困難に打ち克つ心」	—
	第三話「勝利の喜び」	—
233	第四話「あなたを守ると言う思い」	215
248	第五話「姉弟のコンビネーション」	—
	第六話「不思議な出会い」	—
	第七話「偶然の再会」	—
	第八話「ツバキの勇者」	—
319	第九話「最悪の神託で終着点を知る」	287
	第十話「夏凜ちゃんの誕生日と精霊会	—

	第十一話「未来に向けた布石」	—
356	第十二話「その時、終わりの音（満開）がした」	—
408	閑話「勉強会とお風呂タイム」	—
	第十三話「力の代償とこれからのお役目」	—
439	第十四話「変わりゆく季節の中で」	—
456	第十五話「最高の日で最悪の日」	—

議

332

374

423

第十六話 「俺のお役目」 — 479

第十七話 「思いと想い」 — 494

最終話 「世界を救うは勇者（ヒーロー）

の役目」 — 520

epilogue 「エガオデアスへ」

546

絆の章

prologue 「物語は終わらない」

565

第一話 「地獄に見た花と崇りの刻印」

586

第二話 「足搔く人、嘆く人」 —

599

最終話 「足りなかったものは絆 (Nex

us)」 — 625

epilogue 「まだ見ぬ明日 (未

来) を目指して」 — 660

花結（はなゆい）の章

Happy Halloween 仮装パーティーに
ようこそ

吹く風が、肌寒く感じるようになってきた。十月三十一日、世の中はハロウィンという季節のイベントに浮かれているだろう。現に勇者部もそうなのだから。

「暇だな」

「ああ、ホントに暇だ」

学校の屋上。少年二人はある時間になるまで、ここで暇を潰していた。今日は、下級生である小学施組&中一組にハロウィンパーティーに招待されていたのだ。だが、まだ準備が終わっていないのでこうして待っているのだ。

勘のいい人はお気づきだろう、ここは神樹様の中の世界。造反神という神に奪われた

四国の土地を取りも出す為に、あらゆる時代から勇者が集められた世界なのだ。

空は青く、木枯らしが吹く。秋にしては、今日は気温が寒く冷え込んでいるが二人はあまり気にしていない。というか、全然寒くないのだ。彼らは鍛えている為に、この程度では寒さなどは感じてはいない。

海斗が時間を確認するために、スマホを取り出す。その瞬間、耳に鳴り響く嫌な音。

「樹海化、か」

「海斗！直ぐに出るぞ」

景夜が屋上のフェンスから身を投げ出す。

そして、海斗も後を追いついて飛び降りる。

二人が飛び降りたと同時に樹海化が始まり、数瞬の内に世界が書き換えられる。二人が地面に衝突する数秒前に樹海化が終わり、二人は急いで変身をする。

運が悪ければ死んでいたかもしれないが、そんなことは関係ない。二人は誰よりも早く戦場に着き、敵を屠り始めた。

「せやあ！」

「おらあ！」

二人の声が響く。景夜は、浮いている槍の穂先で相手を複数体同時に倒す。海斗は、銃で遠くの厄介な敵に牽制しつつ刀で敵を捌く。

五分もしない内に、全員が合流する。

「二人とも、ゴメンネ。遅れたワ！」

「別に大丈夫ですよ。そんなに待ってませんので」

「おっ！何か今の会話女子力高い感じするワ！」

会って早々に、こんな会話をするのは風だけなのだが、他のメンバーも位置に着き戦闘を開始している。

「行くよ！ぐんちゃん！」

「任せて！高嶋さん！」

友奈（高）と千景が、完璧なコンビネーションでバーテックスは殴られ、切り刻まれていく。

他の勇者も各々連携を行い、敵を倒して行くが一向に敵の勢いが収まらない。

「何か！イベントごとになると何時も決まって出てくるよね。」

「そうね、そのうち。何か理由があるのかしら？」

辺りを見回しても、明らかに敵がいつもより多い。だがそれ以上に、気付くことがあつた。

「…そういうえば。中一組と小学生組が居ないか？どうしたんだ…？」

棗が疑問の気付き、風が答えた。

「あの子たちには準備に集中できるように、樹海化のアラームが鳴らないようにしたの

「三」

「でも風先輩、亜耶ちゃんが一緒に居るんだったら信託が行くんじゃ？」

「そうよ、風。巫女の亜耶ちゃんが居るから周りの時間は止まらないけど、信託はどうにもならないでしょ」

友奈（結）と夏凜の指摘は最もだ。この世界では、巫女の周りの時間は止まらないが、それでも信託は届く。なら、どうやって小学生組と中一組が来ないようにしたのか。

簡単だ、巫女が信託を伝えなければいい。信仰強い亜耶に信託を言わせないのは酷だが、けれど折角上級生の為に頑張っている彼女たちの為だと言い、風が命令と言うことで納得させた。

「亜耶ちゃんに、口止めさせたのヨ。ちよっと心苦しいけど、アタシたちの為に頑張ってるんだから。戦いの方は、アタシたちが何とかするわよ。勇者部ー！ファイターー！」

「oooooooooooooooooooooo！」

みんな声が重なり、一体感が増す。そんな中一人、スマホを操作してメールを送る者がいた。

園子（小）は少し感じていた。だが、ある人からのメールを見てそれに気づかない振りをした。

「おーい！園子！スマホ見てないでこっち手伝ってくれー！」

「わかったよ、今行くねミノさん」

スマホをしまい、銀の方に動き出す。少し頬が緩んでいて、明らかに先程より機嫌が良さそうだ。

戦いが終わり、急いで部室の方に向かう。部室の前には、ひなたと水都が出迎えた。

「お疲れ様です、皆さん。早速で悪いのですが、別室で着替えて来てください」

「みんなの衣装はこっちで、景夜さんと海斗さんはこちらの部屋で」

水都に案内されて部屋に入る景夜と海斗。

「サンクス、みーちゃん！」

「分かった、ありがとう。ひなた」

女子たちもそれぞれ部屋に入り、着替えを始めた。

数分が経ったのだろうか、景夜と海斗は着替えを終えて外に出た。景夜は狼男、海斗は奇術師に扮して出てきた。

「何だかなく、この服凄いいしくりくるんだよ。どうしてかな？」

「さあ？俺に聞くなよ」

海斗は黒い正装を着てシルクハットを被り、短めの黒い杖を持っている。対する景夜は、上下の服は何てことのない私服で、頭の上に獣耳とお尻から尻尾が出ている。時たま、耳が動いているので海斗も少し驚いていた。

「その耳、どうやって動かしてんの？ちよつと触っても良い？」

「ダメだ。この耳は高性能で、脳の神経と連動して動かせるし、耳自体にも疑似的に神経を付けてるらしいからな」

ちえり、と海斗の声が響くと同時に女子の方が、出て来た。

みなそれぞれ、仮装をしていてどの子も可愛らしい。その仮装の中でも、千景は群を抜いていた。小悪魔のコスプレだろうか、とても綺麗で景夜の心に印象深く残る。

そして、風が合図を出してみんなで中に入る。

「トリックオアトリート！」

中からは可愛らしい、仮装をした中一組と小学生組が出迎え

パーティーが始まり、景夜の所にもお菓子を求めて人がやって来た。

「景夜ー！トリックオアトリート！お菓子くれ」

「景夜さん！トリックオアトリート！お菓子下さい」

「タマに銀か…、ほらよ」

こちらに來た球子と銀に、ハロウィン風の紙袋を渡す。中には、チョコタルトが入っていた。

「おお！流石景夜だな！めっちゃ美味そうだ！」

「景屋さんの作るお菓子、毎度のことながら完成度高いですねー！尊敬できます」

笑顔で言われると、気恥ずかしい部分があり景夜は顔を逸らしてしまう。その内に、球子と銀は他の所に行ってしまう。

次にターゲットにされたのは……海斗だ。

「海斗ー！トリックオアトリート！お菓子くれ」

「海斗さん！トリックオアトリート！お菓子下さい」

「銀に球子ちゃんか…、はい！これで悪戯は勘弁してね」

球子の銀の二人に、景夜と同じようにハロウィン風の紙袋を渡す、中には、クッキーが入っている。初歩的なお菓子だ。だからこそ、作り手のお菓子作りの上手さが良く見える。

「何で、景夜も海斗も男なのにそんなに料理が出来るんだ。タマの立場的には悔しくてタマらん」

「そうっすか？球子さんはそう思ってるんですか？」

「まあな」

球子が少し悔しそうに言っているが、それでも仲間とこうやって過ごせるのは嬉しいのか段々と元の球子に戻っていく。

「別に言ってくれれば、いつでも教えるよ?」

「ホントか!助かるぞ海斗」

海斗からお菓子を貰った後は、また他の所に駆けていく。その姿は、まるで雪が降つてハシヤグ子供のように見えた。

今度はまた景夜の下に、新しい子が現れる。

「お兄ちゃん、!トリックオアトリートゥ!お菓子くださーい」

「ちよつと、待ってろ。……はい、園子。Happy Halloween」

「うん! Happy Halloween!」

景夜と園子(小)のやり取りは、まるで本当の兄妹のようで見えて、とても微笑ましい光景だ。

だが、そんな楽しい時間にも終わりが来る。

楽しい時間も終わり、片付けに入っていた。多くの者が片付けに勤しむ中、六人が机で眠りについていった。

「グツスリだな。良い顔してる」

「そうだにゃー、みんなやりきった顔してるねー」

雪花も景夜の意見に賛同して、六人の寝顔を覗いていた。六人とも、とてもいい寝顔をしていた。

景夜は、寝ている六人の頭を撫でていた。それには、愛情や慈愛が込められていた。全員が全員、また一段と安らかな表情になっていた。

景夜の人を撫でる姿には、撫でている人に本当に愛をもって接していることが分かる。

景夜は勇者としての適性一は、あまり良い訳ではない。

だが、その心とその生き方は誰よりも勇者だった。

「そろそろ、お開きにしましょうか」

「そうね、寝てる子は誰かがおぶってやりなさい。それじゃあ、解散！じゃあね〜」

風の指示により、みんなが帰る支度をする。須美を海斗が、銀を園子（中）が、園子（小）を景夜が、樹を風が、杏を球子が、亜耶を夏凜がおぶって行く。

全員が全員を送り終わる。

今日も一日が終わり、幸せな時間が過ぎていく。

景夜の部屋には、ひなたが居た。相も変わらず、景夜は隠し事が苦手らしい。

「何か、あつたんですか？」

「別に何でもないことだよ」

流そうとして、でも流せなくて、結局今回も全てを語る。

「この日常を、もっと過ごしたいと思った」

「…そうですね」

「明るい未来を生きる奴らを見て、俺たちの時代での出来事は無駄じゃなかったと証明された」

「…その通りですね」

「この世界で、みんなと過ごしたい。でも、ダメなんだ。こんな世界はホントは出来ちゃいけなかった。だってそうだから。この世界は、造反神なんて言うのが居て今は危機的状態なんだがら」

「…そうですね」

「でもさ、もっと見ていたいんだ。明日に希望を持っている、あいつらの顔を」

景夜は呟くように言った。ひなたはその言葉に、相槌を打つ程度で他には何も言わな

かった。

一日一日が楽しく感じた、こんな感覚は久しぶりだと景夜は思った。

銀色に輝いて

神樹の中に来てから、一年以上が経った。仲間も増えに増えて、今では相当な数だ。最近では、亜耶の防人仲間である。芽吹、雀、しずく、シズク、夕海子の五人が加わり部室も賑やかだ。

今日は十一月一〇日、銀の誕生日である。

海斗は一人、イネスに来てブラブラとプレゼントの品を探していた。

みんなでは十一月二〇日の亜耶の誕生日も兼ねて、遊園地に行く予定になっていた。だが、彼がそんなことで満足するはずもなく、こうして買い物に来ている。

「これか？ いや、こつちも捨てがたい」

雑貨屋に入った海斗が、可愛いコップやら髪留めなどを吟味する。

雑貨屋に入ってから一時間が経っただろうか、ようやく買う物が決まったのか綺麗に包装された二つのプレゼント箱持ちながら店を出る。

その時の海斗の顔は、とても柔らかい笑顔だった。

時刻は夕方、頃合いを見計らって寄宿舎に向かう。

できるだけ他の人にばれないように銀の部屋の前に着く。

ノックをして銀を呼ぶ。

「俺だ海斗だよ、中に入れてくれ」

「はあくい！今行きます」

銀に部屋の中に入れて貰う、そこには須美と園子（小）がすでにいた。

「何だ、園子と須美ちゃんもいたのか。お邪魔してごめんな、渡す物渡したら直ぐに出てくから」

「別にいいのよ……いいんですよ、海……海斗先輩」

「わっしーはおもしろいね」

園子の茶化するような言葉に、須美が頬を赤くしていく。

「そのっちー！」

その後は、須美の気が済むまで園子は玩具にされ続けていた。

園子と須美のやり取りのさなか、海斗は手短に銀にプレゼントを渡す。

「はい、ハッピーバースデー銀！あんまり物は送らない方が良いんだけどな……」

「それでも嬉しいっす！ありがとうございます、海斗さん！」

銀はウキウキしながら、箱の中身を開けると。

そこには、サンチョの仲間アモーレがプリントされたマグカップが出できた。

「カワイイ、カワイイですよ！海斗さん、大切にしますね！」

「銀が喜んでくれたならそれでいいや、じゃあ俺はこれで」

銀が何か言いたそうな顔をしたが、海斗は見なかつた振りをして外に出る。

銀のことだから、何かお礼がしたいとか言い始めるかもしれないので見なかった振りをした。

ちなみに、あのマグカップは自作である。

唐突にアイデアが思いつき、急遽園子（中）に連絡を取りアモーレの画像を送つてもらった。

アモーレとは遊園地に行つた時に、園子（小）や須美から渡されるサンチヨの仲間の名前だ。

園子（小&中）以外からしたら、サンチヨの違いを見分けるなど至難の業だ。

海斗ですら、覚えるのに一ヶ月は掛かっている。

いつも、園子と一緒にいる銀でもそこまでは気付くまいと、海斗なりのサプライズであつた。

歩く、歩く、歩く、時刻は六時を回る。

空は既に真っ暗で、道路は街頭に照らされている。一番星が見えた頃には、既に目的の場所に着いていた。

「三ノ輪」と書かれた表札の家だ、インターホンを鳴らして少し待つ。

中から、エプロンを身に着けた銀が出てくる、だが右腕の部分はやや歪だ。なぜなら、その右腕は義手なのだから……

どういいう意図なのか知らないが、中学生になった銀もこの神樹の中の世界に来ている。

戦う力は既に無い、夏凜に端末を継承してしまっているためだ。

「よう！海斗、待ってたぞ！須美も園子ももう来てるから早く中に入れよ」

「そうだな、上がらせてもらおうわ」

玄関で靴を脱ぐ、靴置きには美森や園子の物と思われる靴が並んでいた。

銀に案内されて辿りついたのは、リビングだった和風で整った部屋であまりゴチャゴチャしていない。

リビングの奥にはキッチンがあり、そこから美森と園子の声が聞こえてくる。

「あら、海斗。遅いわよ、時間厳守と言ったのは誰かしら？」

「そうだよ、かーくん。おそいんだよ」

美森と園子の言葉に、苦笑しつつ答える。

「ゴメンゴメン！遅れて申し訳ない、ちよつとプレゼント用意するのに手間取っちゃつて」

海斗が銀に向かって、プレゼントを渡す。

中からは、サンチョが刺繍されたハンカチが出てくる。

こちらは、銀（小）に渡したアモーレではなく普通にサンチョだ。

銀は喜んでくれたのか、嬉しそうにそのハンカチを手を取った。

「ありがとな！海斗！一生大切にするよ！」

この言葉を言われるだけで、こちらも嬉しくなる。そんなことを思っていた。

海斗の顔は雑貨屋を出た時と同じ、柔らかい笑顔になった。

その後は、みんなで誕生日会をして楽しく過ごした。

美森と海斗が手品ショーしたり、園子の小説朗読会が始まったりと、盛り上がる誕生日になった。

楽しい時間は、幕を閉じる。誕生日会はお開きとなり、みんなが帰っていった。

家に帰り、いつも通り日記を書く。

こんなことに意味はないのは分かっているが、染みついた習慣はあまり抜けず海斗は毎日書いている。

部屋の襖が開く音がした。

「遅くにごめんなさいね、海斗」

「別にいいよ、それで？何か用？」

「あら、用が無いと義弟弟の部屋に入っちゃいけないの？」

「……それもそっか」

そこからは、ただ意味もなく駄弁った。

この時間が、何よりも心地いいと二人は感じていた。

「今日はとても良い、誕生日会になったわね」

「まあ、この世界においての誕生日なんてたいして意味ないんだけどね」

この世界は、神樹の中なので基本的に歳は取らない。

と言うか、こんな世界で歳を取りながら戦っていくとかはあまり考えたくない二人だった。

でも……

誕生日に意味がない訳じゃない。

「海斗でも……」

「分かってるよ。誕生日は祝うことこそに意味がある、誰に祝って貰えるかってのも関係があるけど」

「でも、みんなから祝われるのはとても嬉しいわ」

誕生日とは、その人が生まれて来たことを祝福するための、行事だ。

嫌いな人に祝って貰っても嬉しくない、大切な人、友人、仲間祝って貰うからこそ意味がある。

「今度は、亜弥ちゃんの誕生日会か」

「亜弥ちゃんにも何かあげるの？」

「うん、いつも心配掛けちゃうからね。その詫びつてことで無理矢理押し付ける」

純粋な亜耶に対しては、グイグイ行った方が押し切れる時がある。

その方法を生かしていく、念のために防人組のメンバーにも事前に連絡している。

それのお陰で何を渡すのかも、もう決めてある。

「亜耶ちゃん、喜んでくれるかな？」

「海斗が心を込めて選んだものだったり、心を込めて作ったものだったらきつと喜んでもらえるわ！」

「そうかな〜」

「きつと大丈夫よ」

美森の言葉で安心した海斗を眠気が襲う。

「眠い〜、美森ちゃん。そろそろ寝るから電気消すよ」

「分かったわ」

二人で同じ布団の中に入る。

この行為に慣れつつある自分に呆れながらも……

この温もりを離したくないと思う海斗であった。

六枚の花びらと温かい心

十一月二二日、今日は国土亜耶の誕生日。

今日、この日。

二人の少年が、プレゼントを持って亜耶の部屋を訪れていた。

【終景夜の場合】

終景夜、初代勇者にして歴代最強とも言われる人。

だが、亜耶からしたらいつも自分のことを気遣ってくれる、頼れる先輩だ。

そんな、景夜が亜耶の部屋を訪れたのは午後六時頃。

「悪いな亜耶、入れて貰って」

「いえいえ、大丈夫ですよ。防人の皆さんと誕生日のお祝いをしてた所です！」

だったら、尚更自分は来るべきではないだろうと思ひ、景夜は早めに用を済ませるところにした。

景夜は、防人組がコタツに入って寛いでいる空間に気まずそうな顔で入る。

「邪魔して悪いな、プレゼントを持ってきた」

「話が見えてこないのですが？」

「プレゼントって何ですか？……はっ!?もしかして、私の命を一回守ってくれる券とか」

「そんなものはありませんわよ、それにしても柊さんがこんな時間にレディーの部屋に上がるなんて、大丈夫なんですかの？」

「……私も……そう思う」

四人が個性的な返答を返す中、その返答を返す気力も無いので急いでプレゼントを開ける。

実際は、若葉とひなたに怒られるのが怖かったと言うのは秘密だ。

「はいよ」

テーブルの上にカキツバタと言う花をモチーフにしたガラス細工の大きなネックレスを置いた。

大きさは、花卉一つ一つが五cmはあり、花全体の大きさはソフトボール位ある。

カキツバタの花言葉は「幸運は必ず来る」と「幸せはあなたのもの」と「贈り物」だ。

「大きすぎますよ！それに！こんな高そうな物貰う訳には……」

「そう言うと思った、だからな……」

景夜がネックレスの花弁の部分を取る、このネックレスは磁石で繋がっており花卉を取り外して収容が可能な物なのである。

花卉には既に、チェーンを通すための穴が開けられている。

花卉六枚を丁寧取ってチェーンと一緒に一人一人に渡していく。

「しずくには、シズクの方も合わせて二個な」

「シズクの方も……いいの？……」

「良いんだよ、別に」

景夜はチェーンを通すのに手間取ってる連中を手伝いつつ、部屋全体を見渡す。そこは、幸せで満ちていた。カキツバタの花言葉通りの物がそこにあつた。

「景夜先輩！本当にありがとうございますー！」

丁寧な言葉では覆い切れない程の感謝の念が伝わってくる。

景夜は、そんな亜耶の行動を見てクスリと笑い呟いた。

「Happy Birthday！亜耶」

そんな言葉を残して、景夜は亜耶の部屋を去つた。

【東郷海斗の場合】

呼び出した時刻は七時頃、玄関前にて。

「外に呼び出してゴメンね！亜耶ちゃん」

東郷海斗、神世紀の四国を救つた英雄。

けれど、亜耶から見たら優しく、趣味なのか持ち物が偶にカワイイちよつと面白い

先輩だ。

「大丈夫ですよ、海斗先輩。それで、何の御用でしょうか？」

「ああ、これ誕生日プレゼント」

海斗はバックから二枚のチケットを取り出す。そこには、最近新しくリニューアルオープンした水族館の名前があった。

二枚しかないのは、リニューアルオープンして日数が経っていない為、チケットの値段が高かったと言うのが理由だ。

海斗にも、大赦でプログラマとして働いて給与は貰ってはいるがアルバイトと変わらないのだ。

なので、二枚しか買えないというわけだ。

「水族館？どおゆう所何でしょうか？」

「ううん、海の生き物がいっぱい居るところで。ショーをやったり、触れ合いコーナー

があつたりするよ」

何とも、その水族館ではペンギンと触れ合えて、尚且つイルカショーがあるなどボリューム満点なのだ。

買ったチケツトは、二十五日の日曜日のもの。

土曜日が遊園地で日曜日が水族館と中々にハードスケジュールだが、亜弥ちゃんの未知への興奮は凄まじいので大丈夫だろうと海斗は思っていた。

(まあ、一緒に行くやつは少し辛いかもしれんが頑張れ)

「へえ〜!!面白そうですね!…日曜ですか…」

「ゴメンね、そこらへんしかいい感じの日がなかったんだよ。まあ、二枚しかないから行きたい人は亜耶ちゃんが自由に決めてね!それじゃあ」

もろもろの説明は終わったので帰ろうとしたら、服の袖を引つ張られていた。余りにも弱い力だったので、海斗が気付いたのは幸運だっただろう。

「あ、あの!……海斗先輩でもいいですか?」

亜耶の予想外の言葉に驚きつつも、返事をする。

「……別にいいけど。…俺なんかでいいの？防人メンバーじゃなくていいの？」

「はい……本当は防人の皆さんと行きたいんですが、チケットも二枚しかありませんし。なら！私が皆さんより先に行つて、良い所を防人の皆さんに紹介出来ればなと思うんです」

亜耶の目は本気だ、亜耶がそれでいいならそれでいいだろうと思つた海斗は諦めたよ
うな顔で頷いた。

「分かつた！俺が水族館の素晴らしい所を亜耶ちゃんに教えてあげよう！」

「ありがとうございます……私が防人の皆さんに出来る事つて多くないので、こう言う
日常の場面で皆さんを支えたいんです！」

（亜耶ちゃんの言葉には、本当に感動させられた。やっぱりいい子だな）

「じゃあ二十五日の日曜朝八時、亜耶ちゃんを寄宿舎の前に迎えに行くから。それまで

に容易を済ませて置いてね」

「分かりました！……楽しみにしてますね」

天然なのか何なのか、その笑顔は天使にも見えれば小悪魔にも見えた。

その後、家に帰った海斗はと言うと……

「カチ…カチカチ…カチカチ…」

パソコンに向かい必死にマウスを動かす海斗の姿があった。

美森はそれを微笑ましい顔で見つめている、後輩の為に頑張っている海斗義弟を見るのはとても嬉しいものなのだろう。

美森に見つめられる中、海斗は必死に水族館の情報とにらめっこしていた。

十一月二五日、朝九時頃。

「混んでますねえ〜！」

「そうだね、はぐれないようにしないと」

「そうだ、海斗先輩！」

亜耶が思いついたような顔をするので「どうしたの？」と尋ねると。

「手を繋いで貰ってもいいですか？」

「手？…ああ、そういうこと…はい」

海斗は亜耶の小さい手を握る、柔らかくてほんのり温かい。
赤ちゃんの肌の様に感じる。

「まずは、熱帯魚のコーナーから行こうか！」

「はい！分かりました！」

嬉しそうに頷く亜耶をとて愛らしいと思う海斗であった。

一時間が経った、亜耶は笑顔だが海斗は苦笑を浮かべている。

海斗は亜耶の未知への興奮を舐めていた、想像以上の食いつきの良さに水族館やその中に居る生き物たちについて調べた四日間が、とても有意義な時間だったと確認できた。

熱帯魚のコーナーから入り、クラゲコーナーや蟹やエビなどの甲殻類のコーナー。色々な所を巡り、その度に亜耶の質問攻めにあっているので若干疲れている。

「海斗先輩？大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ。ほらほら、触れ合いコーナーが解放される時間だよ？」

「ペンギンさんですね！行きましょう！海斗先輩！」

今日の亜耶は本当にテンションが高い、海斗はそれを嬉しく思う。

「自分に妹が居たらこんな感じだったのかな？」と思い、その考えを頭の片隅に放り捨てた。

（やっぱり、俺は弟の方が生に会ってるな）

こういう時、無意識に美森を浮かべてる辺りは相当だと言えよう。五分も歩かないうちに触れ合いコーナーに着き、亜耶がはしやぎ始める。

「海斗先輩見て下さい！ペンギンさんですよ！ペンギンさん！」

「だね、やつぱ生で見ると可愛いな…」

海斗が見たことあるのはテレビの中だけだ、こうやって生で見る機会には恵まれていなかった。

触れ合いコーナーに着いた亜耶は、ペンギンにモテまくり。

バケツに入った餌（五〇〇円）にペンギンが群がっている。

だが――

「ペンギンさん、行儀よく並んでくれなとお魚さんをあげられませんよ？」

亜耶エンジェルスマイルの笑顔と一言により収まった。

海斗も餌をあげてはいたが、殆どが亜耶の方に行ってしまう少し寂しい感じだった。

(亜耶ちゃんが楽しめてるならそれでいいか…)

そのまま触れ合いコーナーで思う存分ペンギンと遊んだ。

それから更に時間は流れてお昼過ぎ。

海斗と亜耶は水族館の中にあるレストランで昼食を取っていた。

「パンケーキ！美味しいです！」

「そっか、それは良かったよ」

亜耶はペンギンの型に焼かれたパンケーキを食べている、最初は「食べるのが可哀そうですね」と言っていたが、海斗が「食べてあげない方が作ってくれた人もペンギンさんも可哀そうだよ」と言い納得して食べている。

海斗はフィッシュフレオサンドイッチを食べている、水族館なのにフィッシュとはこれいかに。

レストランには水槽があり、その中には普通に魚が泳いでいる。

海斗は食べながらも、「何ともシユールな光景だなー」と思った。

(多分夏凜辺りがいたら、「何で水族館に来てるのに魚料理食べんのよ!」とか言いそうだな)

一方、その頃

「ヘックシユン!」

「夏凜?大丈夫かしら?」

「大丈夫よ、芽吹。誰かに噂されてるのかしら?まあ良いわ!さて!鍛錬再開よ!」

「ええ!」

鍛錬中な二人でした。

料理を食べ終えた二人は、今日の目玉でもあるイルカショーを見に行つた。

「うわあー!人がいっぱいですね!海斗先輩!前の席空いてますよ!」

「ちよつと待つて亜耶ちゃん！」

亜耶は海斗の声で止まらず、前の席に座つてしまつた。

イルカシヨ一の前の席は司会の人に当てられるのは定番だけど、イルカの跳ねた水が飛んでくるのも定番だ。

海斗は一樣着替えを持ってきているが、亜耶には伝えられていない為におよそ持つてきていないだろうと踏んでいた。

時期は冬、この時期はなるべくジャンプは控えるように言われているのかもしれないが、ジャンプは目玉でもある。

多分、他の客は準備をしているだろう。

シヨ一が始まり数分が経つた、フープ抜けやボール遊び、見事なシンクロした演技を魅せる中で司会のお姉さんが亜耶や海斗の方に寄つて来た。

「こんにちはお嬢ちゃん！さて次は何が見たい？ジャンプ？それとももう一回バレエボール？」

「ジャンプが見たいです！」

「分かったわ！それじゃあ！ジャンプに行きます！お客様はご注意ください！」

亜耶が司会のお姉さんが言ってる意味が分かってないのだろう、首を傾げている。

海斗はため息を吐き亜耶に自分のバックを持って貰う。

「亜耶ちゃん俺のバック持つててくれない？」

「はい！大丈夫ですよ！でも…さっきのお姉さんは何でご注意くださいと言ったのでしようか？」

「その意味は今に分かるよ…」

海斗の言葉の後、イルカが高くジャンプする。その姿はとても綺麗で、亜耶は思わず見とれてしまう。

見とれている亜耶を余所に、「あと少しで水面に着く」となった瞬間。亜耶の視界を何かが遮った。

物凄い水飛沫の音が響く、亜弥は足に少し冷たいものが当たった感覚がして直ぐに海斗に呼びかける。

「海斗先輩？どこですか？」

「はいだよ」

海斗の声が聞こえたと思ったら、いきなり視界が元に戻った。

亜耶はその時にやっと分かった。

（海斗先輩、私に水飛沫が当たらないように庇ってくれたんだ。私がジャンプが見たいなんて頼んだから…）

亜耶は先程とは一転して暗い表情になってしまふ。

だが、海斗は何か感じ取ったのか直ぐに亜耶の考えを否定した。

「亜耶ちゃん、別に亜耶ちゃんの所為じゃないよ。俺がちゃんと伝えてれば良かっただ

けだしね。だから、そんな暗い顔しないでよ」

「海斗先輩……、はい！分かりました」

暗い表情は本当に一瞬で終わり、そこに笑顔の花が咲く。

その後、海斗は亜耶と一旦離れて着替えに行く。

「海斗先輩はまだでしようか……」

海斗が居なくなつて少し寂しいのか、しょんぼりモードの亜耶に一人の男性が近づく。

男性の足取りはおぼつかない、千鳥足のようだ。

それに加え、相当にお酒臭い。

だが、そこは亜耶だ。

男性に近づき、声を掛ける。

「あの、大丈夫でしょうか？ 具合が悪いんですか？ 係りの方を——」
その時、亜弥にナイフが向けられた。

「えっ!？」

彼女は勇者ではない、ただの巫女だ。

それ故に、戦闘能力を持たない。

「お譲ちゃんー！ お名前は〜！」

ねっとりとした声、全身を舐めまわす様な視線。

亜耶は初めて人に対して嫌悪感を感じた。

「い、国土…亜耶…です…」

恐怖で上手く声が出ない、息が詰まりそうだった。

周りは悲鳴を上げているばかりで何もしてくれない、警備員も来たが相手が亜耶に獲物を向けてるために手を出せない。

「あや…かあ。俺の娘もあやだったんだよ……」

「そ、そうなんですか…」

「でも、居なくなっちゃった！俺が会社をクビにされてから、嫁は出ていきあやも一緒に出て行った。」

理不尽な感情が自分に向けられているのが分かる、亜耶の思考は段々と恐怖に支配されていく。

ここで叫ばないあたりは、少しばかり精神が強いことが分かるが、あくまで一二歳の女の子にしたら、と言う意味だ。

「何で出て行ったんだ！何で俺の方に来てくれなかったんだ！なんでなんで」

明らかにオカシイ、精神が壊れているのか狂人に近い。

亜耶が叫んだ――

「助けて下さい！海斗先輩！」

海斗もまだ中学生なのに、けれど亜耶は叫んだ。

勇者として、頼れる背中を知っているから。

「おう！助ける！」

いつの間にか着替えた海斗がそこにいた。怒りの形相を浮かべて、男性の下に近づくと、

「来るな！来たらくいつを刺すぞ！」

「刺して見ろよ、その瞬間にお前は死刑確定だ」

濃密な殺気、戦闘の素人の亜耶でも分かるほど強大な殺気だ。

次の瞬間、男が亜耶を捨てて飛び出した。

ナイフを海斗に向けているが、彼はそんなこと気にしない。

近づいてくるナイフを持った右手を逸らし、鳩尾に一発入れる。動きを最小限まで抑えた受け流し、からの怒りを込めた正拳突き。ほんの数秒の間に、圧倒的な力の差が見えた。

海斗は倒れた男性を無視して、投げ捨てられた亜耶の方に向かう。

亜耶は相当怖かったのか、気絶していた。

でも、眠っているその顔はとても嬉しそうなものに見えた。

海斗は亜耶をおんぶしてその場を離れる、これ以上ここに居ると面倒ごとになりそうだったので潔く逃げた。

(暖かいな、後……懐かしい……)

亜耶は幼い頃から、大赦で巫女の修行をしていた。

そのためか、おんぶされた回数などたかがしれている。

片手で足りる程だろう。

「かいと……せん……ぱい……？」

「大丈夫か？ 亜耶ちゃん？」

「大丈夫です」

海斗からしたら少し元気がない、流石にあの事件は怖かっただろう。

運が悪ければトラウマものだ、それでも少し元気がないだけで済んでる亜耶は相当に精神が強かったのだろう。

それか、よほどのこと彼を信頼していたかだ。

「ゴメンな、ことになっちゃって」

「謝らないで下さい、……嬉しかったです。周りの人は刃物の所為で誰も動けなくて、でも海斗先輩だけは助けてくれた」

「……別に、亜耶ちゃんが名前を呼んでくれたから分かっただけだよ」

亜耶は海斗に感謝して、海斗は亜耶に罪悪感を抱いていた。

「海斗先輩！今日はありがとうございました！」

「……亜耶ちゃんがいいならそれでいいか、こちらこそ楽しかったよ。ありがとう！」

二人の間を静寂が包む、先に口を開いたのは亜耶だった。

「海斗先輩……」

「……何かな？」

「……もう少し、このままでもいいですか？」

「いいよ、ごゆっくりどうぞ」

亜耶をおんぶしたまま帰路を歩く。

背中に温もりをと亜耶の寝息を感じる。

海斗は幻視した、自分が兄で美森が妹だった可能性を。

亜耶は夢に見た、父の背中に乗ってはしゃぐ自分を。

帰路の中、その日の気温は寒かったのに二人の心はとても暖かった。

樹ツチンと好きな理由

一二月七日、樹の誕生日である。

海斗は、犬吠埼家のキッチンに立っていた。

「樹ちゃん！違う違う！ラー油なんて入れないから！あと何で炒めるだけなのにフライ返し持ってるの!？」

「す、スイマセン！」

風は椅子に座りながら、顔が表現しにくい感情を表していた。

妹が自分の為に料理をしてくれるのが嬉しい、でも妹の料理を食べて自分は生きていられるのが不安なのだろう。

樹の料理の腕は少しどころか大分残念な感じだ。

百人に試食を頼んだら、見た目がエグ過ぎて全員に断られる程の残念さである。

神樹の世界ではなく普通の世界の方でも、海斗は樹に料理を教えたことはあるが

少しマシになった程度で偶に紫色のうどんを食べさせられる。

「うくん、樹ちゃん。もう少し塩コシヨウ足してくれる？」

「了解です！……このくらいですか？」

「そんな感じそんな感じ！」

今作ってるのは定番料理でもある野菜炒めだ、簡単なので素人でも作れる一品。

何せ、野菜を適当な形に切って、塩コシヨウをして炒めれば形にはなる。

誰が作っても一定以上の味になるかわりに、作る人によつてはもうワンポイント入れてオリジナルの一品を作ることが可能だ。

今回はシンプルに塩コシヨウで味付けをしたので、海斗は安心してゐるが風はまだ安心してないのかさっきの顔のままだ。

「大丈夫ですよ、風先輩！今回は普通の味付けです、不味くなりようがありませんよ」

「そうよね、そうよ！自分の妹を信じないで何が姉よ！」

風は海斗の言葉で復活しいつもの明るいつもりの感じに戻った。

「お姉ちゃんできたよー！」

そう言つて樹が持つてきたのは、先程までとは違い何故かこの数分間の間に紫色になった野菜炒めだった。

「……………海斗……………どうしよう?」

「……………俺に聞かれても……………」

樹は犬を思わせるように、期待の眼差しで風を見つめる。

「褒めて褒めて！」と目が語っていた。

「えーい！ままよー！」

風が野菜炒めを食べ始める。

樹に見られる中、風の一口目の感想は――

「お、美味しい！美味しいよ樹！」

「や、やった！やりましたよ、海斗先輩！」

「良かったね、樹ちゃん！」

顔色は悪くないので嘘をついている訳ではないのだろう。

海斗が安心して使った料理道具を片付けようとした時、椅子がガタリと音お立てて倒れた。

「お、お姉ちゃん！」

「やっぱり、今回もダメだったか……」

海斗は少し物思いに耽った後、風をベツトまで運ぶのだった。

「はあく、今回もダメでした」

樹はテーブルに顔を伏せながら呟く。

「惜しかったんじゃない？結構イイ所までいけてたと思うよ」

「……そうでしょうか？」

「うん。次回からは消費期限とかちゃんと確認しようね？」

「はい！犬吠埼樹、日々精進です！」

今回の敗因は塩コショウの消費期限切れだ、減多にそんなことはないので確認しなかつた海斗のミスでもある。

そこら辺は反省しつつ次回の料理会に向けて、樹は闘志を燃やしていた。

なお、何故紫色になったのかは未だに判明していない。

反省会も終わり、今回の料理会はお開きにしようとしたとき。

海斗は思い出したように、プレゼントが入った包みを樹に渡す。

「危ない危ない、忘れるところだったよ。はい、Happy Birthday 樹ちゃん

「！」

「これって！私が好きな歌手のCD！どうやって手に入れたんですか？これ凄く高いし、人気ですぐ売り切れちゃったのに」

そこは海斗だ、春信に力を借りて極秘ルートで入手したのだ。

海斗は極秘のルート真相を春信に聞こうとしたが、春信の暗い顔を見て聞くのを止めた。

ちなみにだが、春信のことは夏凜の写真で買収した。

(優しいから、普通にやってくれそうだけど。そこら辺はケジメはつけないとだしな)

「ありがとうございます！大切に扱いますね」

「どういたしまして、何かそんな素直に喜んで貰えると嬉しいね」

その会話の後、少し間が空いた。

樹が何かを言い淀んでいて、海斗がそれを待っていた。

「私、最初のころは海斗先輩のこと苦手でした。何人もの女の人と付き合ったことがあるって噂を聞いて、元々男の人が得意じゃないのに何でそんな人が勇者部にいるんだろうって思いました」

少し胸に刺さる話だ、海斗自身もあの頃のこととはもう黒歴史でしかない。

付き合った女の子たちには、その後散々謝って何とか許してもらったが、未だにあの時のことは少し話しづらい。

「お姉ちゃんに聞いても、あいつの心は勇者だから大丈夫！としか言ってくれなくて」

「まあ、あの時はどうかしてたと俺も思ってるよ」

「でも」、と付け足すようにまた口を開く。

「出会ってから分かったんです！先輩がどれだけ凄いか。いつもみんなのことを考えていて、時には誰かの為に自分自身の命も懸けようとする。そんな先輩のことを、私は好きになりました！」

海斗はイイ後輩を持ったなあと思っていた、同時にこんなにも熱く語る樹は珍しいと

も思ってた。

「だから、これからも末永くよろしくお願いします！海斗先輩！」

「……ああ、こちらこそ樹ちゃん！」

この日、犬吠埼樹は誕生日を迎えた。

少しだけ、大人の意味が分かった。

彼女は後にそう語っている。

クリスマスに祝福を

今日は待ちに待ったクリスマス、勇者部のみんなもクリスマスに浮かれていた。

「まさか、全員サンタ服を着ることになるとは……」

「そうだな……にしても相変わらず、大赦の奴らは俺ら勇者に頭が上がらねえみたいだな」

このように、海斗と景夜もサンタ服で過ごしている。

先程からそこら中でどんちゃん騒ぎが起きている。

こうなったのは、昨日の園子ズの発言の所為だ。

「ねえねえふーみんな先輩、明日のクリスマス会は全員サンタ服着用ってのはどうですか？」

「私も園子先輩の意見に賛成です！やりましたよ風先輩！」

「アンタたちねえ、前日に言われてもそんなの用意出来るわけ……いやアンタたちだつたら出来るか」

最初は呆れたように言っていた風も、園子ズなら出来ることを思い出して投げやりになつてしまう。

海斗は飛びつくように風と園子ズの間に入る。

「納得しないで下さいよ風先輩！園子ズも言うんだつたら前日じゃなくてもつと前からだなく」

段々説教臭くなつてきた会話を、景夜が止めに入る。

「落ち着けよ海斗、それに説教臭いと嫌われるぞ」

「景夜……でもなあ、今から用意するとなると結構面倒だぞ」

海斗は景夜の言葉によりお説教を止めて、真剣にサンタ服をどうするか考え始める。

その時、園子（中）が思い出したように飛び跳ねた。

「ピツカーンと閃いた！」

「オオ！来たか、どんなのが閃いたんだ？」

「それわねそれわね——」

園子の案は突拍子もないことだが、意外に現実味もあるものだ。

その内容とは、大赦に頼んで至急サンタ服を用意してもらおうとのことだった。

「それって出来るのかにや〜？」

「そうだな……案外できるんじゃないか……？分からないが」

北海道民と沖縄民が何か言っている。

海斗からしたら、あんまり迷惑は掛けたくないのだが。

園子ズにお願いされてしまったら、断るに断れない。

「いいんじゃないかな？海斗君」

「友奈……それもそうか」

「カゲヤ君も手伝って上げなよ？園子ちゃんに悲しい顔させていいの？」

海斗は友奈（結）に景夜は友奈（高）に背中を押される。

「どうする景夜？」

「ここまで来たらやるしかないだろ、大赦に言っただけ準備してもらおう。足りなそうだったら、どこかから借りてくればいいしな」

これが、今回のクリスマス会全員サンタコスプレ事件の原因だ。

因みに、海斗が春信から聞いた話によると。

全て業者にオーダーメイドで作らせたらしい、今回のクリスマス会が終わったらプレゼントとして貰っていいだとか。

「海斗先輩、今日も凄い盛り上がりですね」

「樹ちゃんの言う通りね、今回はお疲れさま海斗」

「そうね、今回はアンタも頑張った方だと思うわ」

樹に美森に夏凜の言葉のお陰で海斗の苦労も報われるというものだ。

「それにしても……三人ともその服に合ってるね。後でみんなで写真撮らない？」

「良いですね！ひなたさんをお願いしてみましよう」

「こちらも中々に盛り上がってるようだ。」

「芽吹先輩！この衣装、似合ってるでしょうか？」

「ええ、似合ってると思うわよ亜耶ちゃん」

「メブの言う通り、可愛いと思うよあやや！」

「そ、そうでしょうか？」

芽吹と雀に褒められて照れているのか、少し顔を赤くする亜耶。

「大丈夫ですわ国土さん！もし似合っていないかったら、すぐに作り直させますわ！アルフレッド！」

「いや、妄想上の執事はこないから」

「……私も似合つてると……思うから良いと思う……」

防人メンバーも日常的に漫才をやりながら、今回のクリスマス会を楽しんでいるようだ。

西暦組も静かにだが盛り上がってるようだ。

「タマはこんな広い場所が当日に借りられたことにもタマげてるぞ」

「そうだねタマっち先輩、景夜さんどうやってやったんですか？」

杏たちの疑問はこの会場だろう、ここに来て一年が経った時に借りたパーティをした

場所と同じだ。

「色々ツテを辿って行き着いたのがここってだけだよ」

何も間違っていない、だって大赦にお願いしたらここでどうぞって言われたのだから。

「こう言うのも良いですね若葉ちゃん？」

「そうだな……」

時は進んで行く、騒がしかった時間も過ぎていく。

「小学生組は並べー、今からサンタさんがプレゼント配ってやる」

景夜が白い袋片手に小学生組の三人を呼ぶ。

須美は海斗に言われ恥ずかしながらもサンタ服を着ている、海斗に「可愛いね」と言われた所為で今日一日で何回もトリップしかけてた。

園子（小）と銀はノリノリで着ている。

「何ですか景夜さん？メツチャ楽しみです！」

「何だかドキドキします」

「お兄ちゃん早く〜」

三者三様の反応を見せる三人に包装されたプレゼントを配っていく。

「わあー!!!サンチヨの着ぐるみパジャマだ！ありがとうございますお兄ちゃん」

園子が貰ったのは、サンチヨを模して造られた特注パジャマである。

景夜が本気で作ったため、完璧な仕上がりになっている。

「私のは熊か〜、カワイイなく〜！ありがとうございます、景夜さん」

次に銀に送られたクマの着ぐるみパジャマだ。

こちらにも、銀の活発さを表して作られている。

だが、女の子らしさも気遣っており可愛さも忘れず醸し出されている。

「私のは兎ですか、凄くかわいいです！ありがとうございます、景夜さん」

最後に須美は渡されたのはウサギだ。

ウサギは寂し過ぎると死んでしまう、須美も寂しがりやの所があるのでこれが選ばれた。

「凄いな景夜、本当に手作りなのかあれ？業者とかが出してるレベルにしか見えないんだが」

「努力はしたからな、雪花の修行は辛かったけど。アイツらの笑顔が見れるなら安いもんだよ」

キザな台詞を吐く景夜はなんだか様になっていて、少し悔しい海斗だった。

ひなたはそれを見ながら、思った通りサンタ服が似合ってる景夜のことを写真に撮っていた。

「みんな外を見て下さい」

「ワンダフォーなことが起きてるわよ！」

歌野と水都の知らせで全員で外に出る。

そこには、――

「雪だ……」

「雪だな……」

吐いた息が白く見える、外では雪が降っていた。

ホワイトクリスマス、外には大きいイルミネーションの施されたクリスマスツリーが
良い雰囲気を出している。

「綺麗だね……」

誰が呟いたのだろうか、分からない。

けど、そこに居る誰もが無言で肯定しているように感じる。

二度目のクリスマス、防人組も加わり戦いは佳境に入りつつある。

でも、それでも。

今だけは、今日だけは。

何もかも忘れて、全員でこんな温かい時間を過ごしたい。

きつとみんなそう思っているのだろう。

これは、クリスマスの奇跡などではない。

これは、異常気象による偶然の雪でもない。

神樹の中に居る、名もなき神がくれたクリスマスプレゼント。

今の時間、家族と過ぐす者も居るだろう、友達と過ぐす者も居るだろう、恋人と過ぐす者も居るだろう。

もしかしたら、一人で過ぐす者が居るかもしれない。

でも海斗は、忘れないで欲しいと思った。

こんなにも綺麗な景色を、一緒に見上げる誰かがこの世界に居ることを。

一人じゃないとは言わない、けれどここに居るみんなのように。

会う筈の無かった人たちが一緒に戦って、一緒に楽しい時を過ぐしている。

「偶然だ」と言う人もいるだろう、「運が良いだけだ」と。

そんなことを言われても彼は……東郷海斗は信じている。

この出会いが必然だったと。

例え神の悪戯だったとしても、彼は信じている。

この出会いに意味はあつたんだと。

だから言うのだ、そう――

「ハッピーメリークリスマス！」

この、祝いの言葉を。

咲くは金糸梅、大晦日の昼に

今日は十二月三十一日、大晦日であり歌野の誕生日。

景夜は歌野の隠れた趣味などを知らないのです、直球でプレゼントに何が欲しいか聞いたところ。

「ベジタブルズの収穫を手伝って欲しいわ!」と言われて、歌野の畑に訪れていた。

「歌野く、大根抜き終わったぞ」

「オーケー景夜、じゃあ新聞紙が敷いてある場所に置いておいて」

時刻は午後一時過ぎ、八時頃から手伝っていたのもあつてか、景夜にも少し疲れが見える。

だが、今日の手伝いは終わりだ。

「ふう、農業ってやっぱり疲れるな。何だか鍛錬してるみたいだ」

「そうかしら？ 私はそうは思わないけど」

「農業をラブだから疲れないわ！」とか言い出しそうな雰囲気と言う歌野に、景夜は苦笑いを浮かべる。

「でも、こんなんで良かったのか？ 誕生日プレゼント」

「ノープログレムよ、だって今日は大晦日なのよ？ こんな大事な日を私の為に使ってくれたんだから、それで十分よ」

歌野も作業を終えたようで、景夜の隣に座って休憩する。

「……………これ」

景夜が何でもない風を装って、小さい紙袋に入ったプレゼントを渡す。

「？ 景夜これは何かしら？」

「誕生日プレゼントだよ。俺は形のある物でも渡したいんだ」

袋の中にはひまわりの髪飾りが入っている。

「髪飾り？ひまわりをチョイスした理由は何かあるの？」

「何となく、ただ……」

景夜が言葉を濁す、耳が赤くなっているのを見ると何か恥ずかしいものなのかもしれない。

「ひまわりの花言葉は『憧れ』、俺は昔お前に憧れに近い感情を持ってた。だから、それにした……これでいいか？」

「ええ、やっぱりあなたは最高スプリムね！」

歌野の言葉の所為で余計に顔を赤くした景夜は、顔を逸らしてしまう。

「そうか、ならいい……」

「サンキュー景夜、でも別に良かったのよ。あなたには返しきれない恩があるもの」
多分、諏訪を助けた時のことを言っているのだろう。

そう考えた景夜は歌野の言葉を否定する。

「お前らを助けられたのは運が良かったただけだ、感謝されるのはいいけど恩は感じなくてもいい」

「きつとあなたはそう言うと思ったわ、でもね景夜。それはダメよ、だってそんなことしたら勇者じゃないもの」

きつと景夜の考えは間違っていて、歌野の方が正しいように思える。

だからこそ、歌野は確信をもって話せる。

「景夜が来た時には諏訪の人口は徐々に減りつつあったわ、ご老人たちが小さい子たちに自分たちの食料をあげてないとやっていけない程にね」

飢饉、諏訪では起こっても可笑しくないことだ、何せ年々過ごせる土地は無くなっていき、終いにはその所為で食料を育てる場所もなくなっていくた。

「北海道の方達も来たから、これまでは大丈夫だったものが殆どダメになった。景夜た

ちが来るのが後少しでも遅れていたら、きつと人同士の争いで諏訪が減んでたかもしれない」

「それはないだろ、諏訪の人たちは善い人ばっかだったし……あつ……」
景夜が思い出したように口を塞いだ。

「まあ、色々なことも含めて。感謝してるし、恩を感じてるわ」

歌野の『太陽の輝き』にも似た笑顔が、景夜に諏訪が落ちなかつた理由を教えてください。た。

（歌野……お前の『悲しみをとめる』力が、諏訪を守ってたんだな）

「……今日さ、丸亀城のみんなで年越しパーティするんだけど、来る？」

「グッドな提案ね！みーちゃんと一緒でも良いかしら？」

「大丈夫だよ、こうなったら西暦組の雪花や棗さんも呼ぶか」

「そうね、それが良いわ」

いつの間にかトントン拍子で話は進んで行く。

「来年もよろしくな、歌野」

「こちらこそ、景夜のこと頼りにしてるわ」

二人の間には神世紀の仲間たちは入り込めないよう空間が出来上がっていた。

その日の夜、景夜の自室にて――

「流石に窮屈になっちゃったな……」

「そうですね、ですがこう言うのも良いものですよ」

部屋の中ではそこかしこでゲームやら、雑談で盛り上がっていた。

景夜はひなたと共に、ベッドの上で座りながらその光景を眺めていた。

「クソウ！千景に全然勝てないぞ」

「土居さんに負ける気はないわ、秋原さんと乃木さんは別だけど」

「ありやりや、何だか千景に目を付けられてるに〜」

「そうこなくて面白くない！とことんやるぞ千景」

球子と千景と雪花と若葉は、四人でトランプで大富豪をしていた。

他のメンバーは、

「分かりますか友奈さんに水都さん！あの物語の奥深さが」

「奥深さとかは良く分からないけど、凄く善いお話しだったと思うよ」

「うん、私は本の方を読ませて貰ったけど、凄く感動したかな。最後の方は涙が出で
きちゃったもん」

杏に友奈に水都は、ドラマの話をしているようで、小説の方が原作なのか杏が鼻息を荒くしながら質問している。

最後に歌野と棗は、

「へえ、サトウキビにそんな育て方が……」

「ああ、その作りの方が甘みが出て美味しくなる」

「今度詳しくレクチャーしてもらって良いかしら棗さん？」

「構わない……上手く出来たら少し分けて貰ってもいいか？」

「オフコース！」

二人は何だか農業？の話をしている、いつも通りな二人で景夜から安心できる光景だ。

十一時五十五分、あと少しで今年も終わる。

景夜はみんなの聞こえる声で、感謝を伝える。

「一年間ありがとう！来年も頑張ろう！」

『おおー！！！！』

この場に居る十一人の声が響く。

誰が言った訳でもないのに、重なった声が嬉しくて。

そこに居る全員が笑っていた。

来年もこんな風に過ごせればいいな、と全員が心から思った。

私が貰った世界一最高のプレゼント

一月十一日、今日は高嶋友奈の誕生日。

誕生日会は別の日に予定されている。

海斗と景夜の二人は形のあるプレゼントを渡す為に、二人で会議をしていた。

「海斗はもうプレゼント用意したんだよね？」

「まあな、俺のやつは二人プレイ専用ゲームだ。千景先輩と高嶋ちゃんが二人で遊べるように難易度も高めで、かつ千景先輩だけの力じゃクリア出来ないように作った」

「……待て、お前それを一人で作ったのか？」

景夜は訝しむような視線を海斗に送るが、海斗はそれを受け流して話を進める。

「シナリオは園子ズの力を借りて、残りは自分でどうにかした。シナリオ書くのって案外楽しいって分かったよ……」

「そ、そうか……」

海斗は遠い目をしながら語っているのを見ると、園子ズは妥協を許さなかったらしい。

今日も学校に隈を作ってやってきたので、昨日も徹夜だったのだろう。

「景夜の方はどうなんだ？ アクセサリ系にしたって言ってたけど」

「ああ、こっちはイヤリングだ。友奈は自分へのプレゼントは『気持ちだけで十分』みたいなこと言って、誕生日会だけで満足って感じだからな」

長い付き合いの景夜の話に、顔を縦に振る海斗。

「だから、お前と同じ考えでチカとペアで使えるイヤリングにした。両耳で色違いのやつを買って、お揃いのアクセサリとして使ってみてって言えばイチコロさ！」

「なるほど」

何だか、テンションが大変可笑しい方向に振り切れてる景夜は置いといて、海斗は彼

が述べた理由に納得していた。

「それじゃあ、渡しに行きますか！」

「おぉー！」

二人の少年が、寮の部屋でプレゼントの箱を掲げて叫ぶ。
何ともシユールな光景が出来上がっていた。

友奈（高）の部屋の前、時刻は十七時頃。

この後、十八時頃からは西暦組で誕生日会をやる予定なので、海斗からしたら早めに終わらせて邪魔しないようにしたい気持ちでいっぱいだ。

「友奈ー、入るぞー」

「ちよ、景夜！ノックかインターホン！」

昔からの仲間だからか、少しデリカシーが無いように感じる行動に驚きつつも海斗はツッコム。

玄関に上がり少し歩けば、もう部屋の中だ。

誕生日会の飾りつけなのか、全体的に可愛らしい装飾の施された部屋、中に友奈は居らず若葉やひなたと言った西暦組のメンバーが居た。

「あつ！景夜！お前、装飾の手伝いサボっただろー！罰として——」

「いや、俺の担当は料理なんだが。それに装飾はそんなに要らないって言ったのタマダろ」

「……スマン、そうだった」

景夜の言葉に精神的にライフを削られた球子を躲し、他に來ている者を確かめる。

（若葉ちゃんにひなたちゃん、球子ちゃんに杏ちゃん。……あれ？歌野ちゃんに水都ちゃん、後は雪花ちゃんに棗先輩が居ないしそれに——）

「何だか少ないね、他の西暦組メンバーは？」

「千景は友奈を指定の時間までここから引き離してもらってる、他の歌野や水都、雪花に棗さんは買い出し組だ。お菓子やらケーキやらを買ってきてもらってる」

「へえ、役割分担はバツチリだね。……それじゃあ、長居するのも悪いしこれだけ置いてくね。高嶋ちゃんに中にバースデーカード代わりの物があるから見てねって言うって」

海斗はそう言い残すと、風のように去っていった。

「何だか、今日の海斗君は少し変でしたね」

「そうか、私にはあまり変わらないように見えたが……」

「タマもあんまし分かんなかったぞ」

「私も何となくしか……」

四人がそれぞれ違う意見を出す中、景夜は苦笑していた。

誕生日会も終盤、海斗からの伝言を伝えてプレゼントの中を見る。

そこには、ゲームと付箋で書かれたUSBとメッセージと付箋で書かれたUSBがあった。

至急千景の部屋からノートパソコンを持ってきてメッセージのUSBを差し込む。中には、一本の動画。

「見ていいよね？」

「いいんじゃないか？そのためにアイツが作ってきたんだし」

友奈がカーソルを再生のマークに合わせてクリックする。

すると、動画が始まり瞬く間に神世紀組の面々が現れる。

「ちよつと、海斗！もう撮ってるの？だったらアンタも早く入りなさいヨ」

「はいはい。えーつと、ちゃんと写ってるかな？……ゴホンっ！高嶋ちゃん誕生日おめでとー！この動画は多分今から十分位あるはずだから、ちゃんと最後まで見てね！それ

じゃあ、はじめりはじまり〜」

海斗の少し緩い声から始まった動画。

最初は第一印象とやらなんやらの話をして、五分を切った頃からは、神世紀の中から小学生組や防人組と言ったグループからのお祝いメッセージになった。

「高嶋さんの勇氣にはいつも助けられています、いつまでも健やかに」

「高嶋先輩には助けられることも多いけど、これからは助けていけるようにがんばりま〜す〜！」

「高嶋さんが隣にいと頼もしく感じます！アタシもそう思ってもらえるようになりたいです〜！」

その後は一呼吸貯めて、

「誕生日おめでとうございます〜！」

友奈の頬に涙が伝う、それでも動画は終わらない。

次は、防人組。

「高嶋にはいつも驚かされるは、今後も良い付き合いをよろしく」

「高嶋さんには前衛で守られることもあるので、何卒今後も私を助けて下さいー」

「高嶋は、本当の勇者に見える。私は誰かを守るために戦う人より、誰かを笑顔に出来る人の方が善いと思うから」

「しずくの言う通りだ！俺もこう見えてアンタのことは慕ってるんだぜ」

「高嶋さん——」

ここからはもう、友奈には聞こえているが聞こえていない。

次々に流れ出る自分への感謝の言葉、称賛の言葉。

そして、最後に——

「高嶋ちゃん、君に会えてよかった。やつぱり、友奈って名前の人は強いね。精神的にも、肉体的にも、でもね辛いことや苦しいことがあつたら頼って欲しい。俺たちは友達だ、今までも、これからも」

また少し溜めを作り、

「誕生日おめでとう！君が生まれた今日が、君にとって世界一幸せな日になることを祈っています！」

これは、自分を多く語らない少女に向けられた祝福の言葉。

高嶋友奈

勇者に贈られた世界で二番目のプレゼント。

もちろん、一番は――

「ありがとう！みんなが友達になってくれたことが、私が貰った世界一最高のプレゼントだよ」

ともだち、彼女の最高のプレゼント。

何気ない日常を愛する者

北海道の勇者・秋原雪花、北海道と言う広大な土地で一人、孤独に戦った少女。幾億もある平行世界の中、彼女が救われる世界はほんの一握りだけ。

多くの結末は――

「景にゃん、そこは本返し縫いをお願い〜」

「はいはい……にしても、雪花ってホントにこういうの上手いよな」

一月一八日、雪花の誕生日。

景夜は彼女の部屋にて、衣装づくりを手伝っていた。

「そんなことないよ？景にゃんだって慣れれば簡単簡単、こうやって作業してると何だか心が落ち着くんだよね」

「そうか、今日はこの後の予定あるか？」

景夜の言葉に、雪花は頬を掻きながら苦笑して答える。

「それが、今日はこの後なんも予定ないんだよね。偶には、一人でゆっくり過ごすのもいいかなって」

「……もしかして俺、邪魔しちゃったか？」

「大丈夫大丈夫。どうせ来るだろうと思ってたから、この作業残してたし」

「雪花がいいならいいか……」

そう言った景夜は自分が任された作業に戻る。

慣れない景夜からしたらあまり上手く縫えてるか分からないが、縫い目は雪花が見ても満点を上げられるほどの綺麗さだ。

そこから数分、無言が続く。

景夜は真剣に縫っているし、雪花もそれを見てかあまり話しかけないようにしている。

「……………」

「……………」

「……………ねえ？」

「……………どした？」

しばしの間続いた無言を破ったのは、雪花だった。

「夜さ……………良かったらなんだけど、一緒にラーメンでも食べに行かない？」

「……………俺でいいのか？」

「うん、しずくから良い場所教えてもらったんだよね。だから……………さ」
何故だろうか、景夜は今の雪花を見ていると無性に不安になる。

「いいぞ。それより、なんかあったのか？少し変だぞ、今日の雪花は」

「そう？ 景夜にもそう見える？ ……実はさ、昨日夢見たんだ」

雪花が語ったのは夢の話、だが本当は数ある平行世界の自分の結末。

「段々と土地が減って行って、それで周りの人たちは私を責めたり、恩を着せる為に庇ったり。 ……人の醜い部分を嫌って程見せつけられた、天の神がバーテックスを寄越してきた理由が何となく分かった気がした」

「……………」

「まあ、夢じゃなくて本当^{あつ}の過去^ちでも、あんまり変わらなかつたけど。それで、最後には誰にも助けて貰えなくて ……死んじやった。酷い話だね、あんなに頑張ったのに終わりがあんなのなんて」

あまりにも救いが無い終わり。

その世界の彼女に、救いや幸せはあつたんだろうか。

「……………嫌な話だな」

「だよね……でき、私は思っちゃうんだ。あの世界の私には悪いけど、景夜たちに会えて良かったって。だって景夜たちに会えてなかったら、きっと私は死んでた」

「お前が居たから、諏訪は救えた。お前が悪く思う必要はない」

「おお！相変わらず、言いたいことはズバズバ言うよね。そういう所が好きなんだけど」
その後も雪花の話に付き合い、時折相槌をして時を過ぎす。

そんなこんなで二時間も経った頃には作業を終えて、二人とも向かい合ってお茶を飲んでいた。

「ありがとね、愚痴みたいのに付き合ってくれて。結構スッキリした」

「ん、まあ愚痴聞くのは慣れてるからな。師匠の愚痴はもつと凄かった」

「ああ、確かに紅葉さんは凄かったよね。景にやんに誘われて飲みに行ったら、紅葉さんの愚痴に三時間は付き合わされたもん。しかも、結構生々しくてさあ」

「誘って悪かったな、誰か道連れにしようと思つたら話を合わせてくれそうなのが雪花しかなくて」

あまり悪気がなさそうに謝る景夜に対して怒ることはなく、呼び方もいつも通りに戻っている。

「あつ、忘れないうちにこれ」

小さな箱を取り出す、そこには――

「ブレスレット？」

「そ、雪花はオシヤレだからな、選ぶのに結構苦労したぜ。着てる服の傾向をよく観察して、ひなたに選ぶのを手伝って貰ったりもした」

「へえ、私の為にそこまで。愛されてるにやゝ私って」

照れた顔を誤魔化すように、冗談交じりに言葉を返す。

それに対して景夜は、

「そうだな、お前は愛され上手だよ。だから、なんかあつたら俺に吐き出してくれない。別にそんなので嫌いになつたりしないからさ」

「やつぱり、景にゃんには敵わないな。……また今度、聞いてもらつてもいい?」

「勿論、遠慮なくどうぞ。なんせ俺たちは——なんだから」

雪花は景夜が言った単語を頭の中で反芻させる。

「仲間……いいね、こういうの」

「だろ?」

それからは外に出て、歩きながらなんでもない話に花を咲かせて夕暮れの道を歩く。雪花は一人も好きだが、こうやってなんでもない時を友達仲間と過ごすのも悪くないと感じている。

きつと昔、北海道で勇者をやっていた頃は、こんなこと思わなかっただろう。

彼らのお陰だ、今ならハッキリ分かる。

(ああ、本当にここのみんなに会えて良かった)

「ありがとね景にやん、良い誕生日だったよ」

「そりゃあ良かった。ついでにらーめん奢ってやるよ、何食う？」

「とんこつで！ゴチになりまゝす」

景夜にとっては、友達の誕生を祝う大切な一日。

雪花にとっては、大切な友達に祝われた最高の一日。

(帰りたくないなく、ずっとここに居られたら楽しいだろうな)

彼女は、元の世界に帰りたくないと思える程に、この温かい日常に染まっていた。

I swear for you

今日は二月三日、郡千景の誕生日である。

海斗は事前につけていた、千景専用のゲームアプリをプレゼントしていた。

一方、景夜は昨日見た夢を思い出していた。

雪花が見たような平行世界の夢。

その世界に景夜は居らず、勇者も若葉以外の全員が死んでしまっているというものだった。

その世界で千景は、精霊の穢れを貯め過ぎたことによる暴走で若葉を襲ってしまう。

愛されたくて、必要とされたくて、その所為で堕ちてしまった。

結果的には神樹に勇者としての資格を剥奪される。

その後は若葉に守って貰うが、敵の死角を突いた攻撃から若葉を守るために星屑に右肩辺りから腹の方までを噛まれてしまう。

そして、千景と若葉の最後の会話は――

「……乃木さん……私は……あなたのことが嫌いよ……」

「知っている……」

「でも……嫌いなと同じくらい……あなたに、憧れて……」

「……」

「あなたのことが、好きだったわ……」

景夜がこの言葉を聞いて思ったことは、とてつもない憎悪だ。

郡千景と言う存在をここまで追い詰めた人たちが憎くて、それでも自分たちはそういう人たちも守らなければいけない勇者で、混乱した頭で気付けば昼を迎えていた。

千景への誕生日プレゼントは前から決まっている、それは――

「チカ、準備出来たよ。そっちはどう？」

景夜は千景の部屋の座椅子に腰かけながら、コントローラを手で遊ばせる。

「こつちも準備オーケーよ。じゃあ、始めましょうか——」

千景も景夜の隣に座り、コントローラ持つ。

彼女からは、剣呑なオーラが滲み出ている。

「俺たちの戦争を！」^{デイト}

彼女たちの発言は、決して某有名ライトノベルのパクリではない。

魂からの言葉が、ポロツと出できたに過ぎない。

大切なことなので、二度言おう。

断じてパクリでは（ry

景夜のプレゼントは時間だ。

「今日のお昼から、一緒に協力プレイのゲームをしよう！」という企画だ。だが、これには致命的な欠点がある。

それは——

「景夜君！SW側に敵！」

「了解、俺が突貫するから援護お願い！」

「任せなさい」

二人がゲームに対して真剣になり過ぎると言う所だ。

二人の後ろには友奈（高）（途中参戦）が居て、ゲームを観戦しているが如何せん二人が強すぎて相手が弱く見える。

彼女も先程までプレイしていたが、早々にリタイア。

彼女の無念を晴らす為、二人は鬼になって敵チームを次々に撃破していつている。

既に、このやり取りを数回は繰り返しているため、友奈も慣れてきているので次回からは善戦できるだろう。

まあ、この試合が終わってからはまた別のゲームに移ったため、彼女が活躍することはなかった。

次のゲームはパーティ系でワイワイ盛り上がった、途中から若葉やひなた、球子にも参加して相当な人数でやることに。

そのお陰で、千景は退屈をしていなかったのので景夜は特に何も気に留めなかった。

夕日も隠れ、夜空に月が見えるようになった頃。

ポロリと、言葉が漏れだした。

「なあチカ？もし、もしの話だぞ。自分が死ぬってなったら誰に何を伝えたい？」

他のみんなが居る中で自分だけに向けられた問。

千景は、少し思考して答えを出す。

「そうね……高嶋さんやあなたに感謝を伝えるわ。後は……乃木さんに……素直な言葉を」

顔を少し俯かせて照れたような表情を見せる千景に対して、景夜は安堵した。

こういうことが言える限り、大抵のことは何とかなるだろうと悟ったのだ。

「そっか……」

「いきなりなんなの？こんな質問して」

「何でもないよ、ただ……チカが生まれて来てくれてよかった。そう思っただけ」

「変な景夜君ね……あなたのそういう所が好きなのだけど」

クスリと笑った彼女の笑顔が脳に焼き付く、この笑顔をもう一度守り抜くことを誓った。

「誕生日おめでとうチカ！」

「ええ、ありがとう……」

この後、若葉が千景の大切なゲームのセーブデータを消したのはまた別のお話し。

子犬のようなあなたと、猛獣のようなあの子

東郷海斗の朝は早い、五時には起きて景夜や若葉、夏凜などの鍛錬大好き組と朝練……なのだが、今日は朝練は休み。

そのため、朝は有意義に過ごそうとしていた。

だが……

「なあ、しずく。何で俺の腹の上に跨っているんだ？」

「海斗が……起きなかった……から」

「そうか……お前との約束は午後からだった気がするんだが？」

今日は二月四日、山伏しずくと山伏シズクの誕生日。

解離性同一性障害……所謂多重人格で、しずくは両親からの虐待から心を守るためにシズクを生み出した。

いや、生み出したと言う表現は正しくない。

正確には生まれたのだ、壊れかけた精神を防衛する機構として。

シズクはしずくを恨むこともできる、だが恨む気はない。

シズクにとってしずくは自分が守らなければいけない存在で。

しずくにとってシズクは大切な理解者兼家族のようなものだ。

「……うん、でも暇だったから」

「今日はやけに素直だな、まあ誕生日ぐらい自分に素直になってイイと思うけど」

「だろ！ほらなしずく、海斗は最初からこう言うって言っただろ！」

シズクだ。

男勝りな口調に好戦的な態度、体中に針でも仕込んでるんじゃないかと言うほどに棘がある少女だ。

「シズクか……ほら、さっさと退いてくれ。支度するから」

「分かった」

しずくに戻った。

海斗はしずくが退いたことをちゃんと確認して、着替えを漁り始める。

「しずく、着替えるから外で待っていてくれ」

「……………」

コクリと頷いて、しずくが出ていくのを見送る。

(胃が痛い、ここの会話も全部美森ちゃんに筒抜けだと思つと……考えないようにしよう)

海斗は静かに考えるのを止めた。

来たのはいつものデパート、イネス程ではないにしろ大抵のものは揃ってる。

「見るものは決まってるのか？」

「……これと、これ。楠たちに勧めてもらった所」

しずくが取り出した案内の地図を見て、そこがどこか確かめる。

「しずくさんや、俺の目に狂いが必要ならば女性用下着店って見える所がメモされてるんですけど。マジで行くの？」

「マジで……行く」

「そ、そうですか」

急に敬語口調になった海斗に疑問を抱きつつも、しずくは目的の場所を目指す。

その時……

聞きなれた警報が響き、世界の時間が止まる。

「樹海化……」

「へへ、敵ってわけか！上等、しずくの誕生日をぶち壊したお礼をしてやる！」
シズクに変わったのか、好戦的な目つきになり敵を今にも屠らんとしている。

「落ち着けシズク、お前一人じゃき——」

「うるせえ！海斗は引つ込んでろ」

彼女の言葉が響くと共に、世界が光に吞まれて切り替わる。

感情的になった者を止めるのは至難の業だ。

今日に限ってシズクは特に気性が荒い、海斗は少し面倒くささを感じつつもシズクを
追いかけた。

シズクは目の前にくる敵を銃剣で切り伏せ、遠くから迫る敵を銃弾で狙撃し、近遠攻
撃を可能としている。

(シズク、みんなと合流した方が……)

「しずくの誕生日を邪魔されたのに黙ってられるか！」

怒りは視野を狭くする、その所為で――

「くっ！退けよ！」

バリアのお陰で致命傷にはならなかったが、大勢の敵によって出来た死角からの奇襲によって体制を崩されてしまう。

こうなったら、意地でも止まらない。

そんな意志を見せるシズクの下に来たのは、芽吹たち防人メンバーではなく。

東郷海斗だった。

「たくっ、こんな危ない戦い方するなよ。視ててヒヤヒヤするぞ」

「海斗、お前なんで来た」

「そりゃ、仲間を助けんのは当たり前でしょ？シズクだって芽吹達が危険な状態だったら助けるでしょ？それと同じさ」

シズクにそう言いながらも、敵を殲滅させていく海斗を見た二人の感想は。

「やっぱ、海斗はチートだな。歴代最強勇者に認められるのも分かるぜ」
（うん、凄く強い。……強すぎて少し怖いけど）

「そんなか?!景夜に比べたらまだマシだろ!」

「比べる基準が可笑しいんだよ!」

結局、この後は応援も来てすぐに敵を倒すことに成功した。

樹海での戦いから数時間――

寮の方に帰宅してきた二人はしずくの部屋でお茶を飲んでいた。

「今日は……ありがとう海斗」

「いいえ、別にお安い御用だよ。……あ、後少し待ってくれる」

海斗は先程の店でこっそり買った袋から、一枚のパーカーを取り出す。

「ほい、プレゼント」

そのパーカーは外側は白いフワフワの毛で覆われていて、内側の生地も保温性が高いものだ。

まだまだ、寒さが続く季節ではあるので丁度いいかと思ひ購入していた。

「しずくもシズクもなんだか白が似合う気がしてな、一様来てみてくれ」

「……ありがとう」

しずくはすぐに着替えてパーカーを着た姿を見せてくれた。

パーカーを着たしずくは一言でいえば……

子犬だ、庇護欲をとてもそそらせる。

「どう？変じゃない？」

袖が少し長いのか、手がちよつとしか出で居ない所謂「萌え袖」で、フワフワの白い毛がしずくの綺麗な卵の花色の髪にベストマッチしている。

海斗の心を正直に伝えるなら、

「メツツツチャ！可愛い！撫でさせてつて言うか撫でさせる！」

「海斗だったらいいよ？」

その後は、心の赴くままにしずくの頭を撫でまくった。

特徴でもある癬毛がピコピコ動いている気がしたが、気のせいだろう。

途中で、シズクに変わったのは気付いていたが、それでも止められず。

最終的に、何故か窓から侵入してきた美森に拘束されて部屋から出ていった。

「今日は良い日だった、ありがとう海斗」

この眩きを聞いたものは誰も居ない、シズク以外は。

そして、この後は防人メンバーに誕生日を祝って貰い一日を終えたそうなの。

バレンタインは愛の日です

バレンタインデー、カップルや友人同士で親愛の証としてチョコを贈る行事。

今日がその日だ、二月十四日。

海斗はこの日、二つのチョコを持ながらため息を吐いていた。

「はあく〜」

「どうしたんだよ？そんなため息吐いて」

隣に居るのは、自分と同じ勇者にして歴代最強勇者とも言われている存在、終景夜だ。

「チョコを誰に贈るか悩んでてさ、良いよなく景夜は贈る相手が決まって」

「それでもないぞ、今回は前回以上にいい物を渡さないとヤバイことになる」

「……お前も意外と大変なのな」

「かもな……そう言えば海斗は去年誰に渡したんだ？」

景夜の言葉で海斗は去年のこの日、誰に渡したかを思い出す。

「美森ちゃんと園子だな……なんやかんやで二人とは色々あつたし。友奈にも後でこっそり渡したんだけど……」

海斗からしたら、本当は感謝の念を込めて全員に渡したいところだが、園子がそれを許さない為断念した。

「だったら、今回も同じでいいんじゃないか？」

景夜なりに考えてくれたのだが、如何せん海斗からしたらそれはダメな感じがして断った。

「じゃあ、どうするんだよ？早く渡さねえと本命に渡せねえぞ」

景夜の言葉が海斗の心に刺さる、まったくもってその通りだ。

早く何とかしなければいけない、そう考えるうちに次第に心はある人物を見つけた。

「……そうだ、亜弥ちゃんに渡そう！」

いつも癒しになってくれる後輩にして、心配をかけることが多い子。誕生日の時の詫びも兼ねねればより渡しやすい。

「いいのか、それで？」

「園子には後でちゃんとしたのを贈るし、友奈やみんなにもおやつつて名目で配るし大丈夫だよ」

これが海斗だ、善意が溢れ出る時が稀にある。

今回もそのいい例だ。

みんなに良い顔がしたい訳ではなく、純粹に日頃のお礼がしたいのだ。

今回渡すのが亜耶だったのは、誕生日の件や日頃心配を掛けているため、その返礼のようなものである。

それに亜耶のことは、妹のように思っただけで接してるのが海斗だ。

妹にチョコを贈るのは少し不思議な気分だが、それでも亜耶の喜ぶ顔が見られるのは海斗にとって嬉しいものに変わりはない。

「そうと決まれば即行動！じゃあ行ってくる！」

「おう、行つてら〜」

海斗が屋上の扉を閉めていくのを見てから、景夜も行動を開始した。

海斗が構内を探し周っていると、家庭科室付近で亜耶を発見した。

「亜耶ちゃん〜！こっちこっち」

亜耶を見つけた海斗は嬉しそうな笑顔で名前を呼ぶ。

「か、海斗先輩、どうかされましたか？」

言葉が少し詰まったように聞こえたが、ただの聞き間違いだろうと判断して海斗はチョココを渡す。

「はい、チョコレート。亜弥ちゃんには心配掛けることも多いからね、そのお礼ってこと

で」

海斗がチヨコを渡した瞬間、嬉しそうな顔を見せたのが一転。言葉を聞いた瞬間、亜弥の顔は悲しそうなものになっていく。

「そうですよね……何を期待してたんだろう、私。その、ありがとうございます」

海斗は、亜弥の小さな声を聞き逃さなかった。

自分の言葉が不適切だったことを反省し、急いで代わりの言葉を言う。

「ええと、お礼つてのもあるけど。でも、亜耶ちゃんのが大好きだから渡したんだよ。そこは忘れないで欲しいかな？」

出来るだけ優しい声で、出来るだけ明るい笑顔で、亜弥に想いを伝える。

その言葉を聞いた亜耶は表情を一変させ、輝く笑顔で海斗に可愛らしい包装がされたチヨコを渡す。

「その、ええっと、私も海斗先輩のことは大好きです！これ受け取って下さい！」

「何だか、告白のようになってしまったなあ」と、思いながらもしっかりと亜耶から

チョコを受け取る。

「ありがとう、ハッピーバレンタイン」

「はい！ハッピーバレンタイン！」

その言葉を最後に、亜弥と別れもう一人の下に向かう。

「ごめんね美森ちゃん待ったかな？」

「いいえ、海斗はちゃんとチョコを渡してきた？」

「もつちろん！……これ、美森ちゃんに」

美森に対しては素直に、言葉を言える。

これが互いを想い合ってきた年月の差なのだろう。

「『大好き』、これまた正直な言葉ね。海斗らしいと言えば海斗らしいのかしら？」

「そういうこと、チョコなのは我慢してよ？」

「そこら辺は去年から弁えてるわよ……私からはこれを」

海斗のチョコが大きいハート型なのに対し、美森は小さなハート型のチョコが沢山入った物を渡す。

「このチョコの意味はもしかして……」

美森が試すような視線を向ける中、海斗はチョコの意味を考える。

「海斗が思ってる回答が正解だと信じて言うけど、その意味は小さな好きを多く伝えた
いと言う意味よ？」

美森が思っていたのと同じ回答だったのか、海斗は嬉しそうに笑った。

「やった！正解したから、ここで一つ食べていい？」

「駄目よ、家に帰ってからにささい。お茶淹れる上げてるから」

息の合った会話をしながら、二人は学校を後にしていく。

時刻は放課後で、今日の部活はなしなので当たり前と言えば当たり前だ。

だが、校舎には未だ人影がちらほらと……

「二人とも今日はお疲れさま、ほれチョコレート」

景夜は、今日一日園子ズを見張っていた若葉とひなたにチョコを渡す。

「ありがとう景夜、寮に帰ったら食べさせてもらおう」

「ありがとうございます景夜君、私も寮に帰ったら食べさせてもらいますね」

二人からいい返事が貰えたので、景夜の機嫌は最高潮に達していた。

「そりゃあ良かった、食べたなら返事聞かせてくれ。何となく想像は付くが、お返しに期待しておく」

そう言って、景夜は部屋を出ようとするが……

「景夜、夜の十一時ごろお前の部屋に行く」

「鍵は開けておいて下さいね♪」

二人の言葉によって、自分が今日寝ることの出来ないことが確定した。

「オオ〜〜!!」先祖様たちが、ご先祖様たちが!」

「わかちゃんとはひなたん、そしてヒイラギンの濃厚な絡み合——」

園子はその先を言おうとした瞬間、頬の横を風が撫でた。

「園子……それ以上言ったら……分かるよな?」

「はい!もうしません」

こんな日でも、勇者たちは日常を謳歌していた。

約三名、一線を越えている者がいるが見なかつたことにして欲しい。

これが、勇者部の日常だ。

花を結つた勇者たち

河原にて、二人の少年が武器を構えて向かい合っていた。その周りには同じく武器を構えた少女たちが居る。

「……海斗、お前は何で帰ることを選択したんだ？俺はてつきり、お前がこつちに着くものだと思つてたんだが……」

景夜が海斗に問いかける。

景夜はこの世界に残ることを選択し、海斗は元の世界に戻ることを選択した。

例えばそれが、ここでの記憶を失つてしまうという代償があるものだとしても……
海斗は帰ることを選んだ、その理由は、

「俺さ、弟が居たんだよ……。まあ、話をしたのは三十分にも満たないんだけどさ。その話の中で約束したんだよ、本当の意味で世界を救つてみせるつて」

どこか懐かしむように、少し寂しげな表情で海斗は語る。

「弟なんて聞いた事なかったよ、海にやん……」

雪花や他のみんなも寂しげな視線を、海斗に向けていた。

「だって言わなかったしな……別に信用してなかった訳じゃないんだぞ？ただ、言う機会も言う理由もなかっただけだ。……話を戻すけど、俺たちは世界を取り戻した。でも、世界を本当の意味で救うつてのは取り戻すだけじゃダメなんだ。少なくとも、日本位は昔のようにどこにでも人が不自由なく過ごせるくらいにしないと」

海斗は夢を語る、実現できるかは分からない。

だが、果たさなくてはならない夢。

「お前の仲間の殆どがこっち側に居てもか？」

「ああ、美森ちゃんや友奈たちと戦うのはあんま好きじゃないけど。でも、あつちに帰らないと永遠に美森ちゃんとの約束を叶えられないんだよね」

笑顔で話す海斗に、美森は顔を赤くする。

沸騰にも近い反応なのだろう、頭が茹っているようにしか見えない。

「そうか」

短い言葉。

しかし、海斗にも聞かなければいけないことがある。

「そういう景夜こそ、なんでそっちなんだ？」

海斗は景夜がこっち側に着くものだと思っていたので、少しばかり驚いた。

「簡単だよ。銀コイツが生死の境を彷徨うって言われたからには、こっち着くしかない。もつと分かり易く言うのと、園子ニと須美人が泣いてたから。」

海斗は景夜らしい答えだと思った。

誰よりも仲間のことを考えている、彼らしい考え。

「……平行線だな」

「ああ」

これは試合、勝った方の意見を優先する。
恨みっこなしの真剣勝負。

景夜は何となく分かっている、自分が負けてしまうことが……

けれど、諦める訳にはいかない。

勇者としての誇りがそうさせるし、兄貴分としての想いが彼を突き動かす。
試合が始まった。

神世紀三〇一年、三月も末。

海斗は奇妙な体験をした。

朝を起きたら、自分の机の上に花束が置かれていたのだ。

一本一本が違う花でアンバランスにも見える色合いをしているが、何故か海斗にはそれが無性にしっくりきた。

「……イタズラ……なわけないか」

そんな可能性も考えたが、自分の周りでこんなことをしてくる奴など居ないと思いつき、しすぐに考えを投げ捨てる。

花束にあつた花は、グラジオラス・桔梗・彼岸花・姫百合・紫羅欄花・アネモモ・金糸梅・ヒヤシンス・ペチュニア・銀梅花の約十本。

グラジオラスの花言葉は『たゆまぬ努力』。

桔梗の花言葉は『誠実』。

彼岸花の花言葉は『思うあなたは一人』。

姫百合の花言葉は『誇り』。

紫羅欄花の花言葉は『思いやり』。

アネモモの花言葉は『あなたを信じて待つ』。

金糸梅の花言葉は『太陽の輝き』。

ヒヤシンスの花言葉は『あなたとなら幸せ』。

ペニチュアの花言葉は『ためらう気持ち』。

銀梅花の花言葉は『楽しい追憶』。

花束とは言えないが、海斗は少し物足りなさを感じた。そして、その時唐突に自室の襖が開けられた。

「かーくん！お花見に行こうぜ〜！」

「うわっ!?!いきなり入ってくんよ園子」

「えへへ、ごめんね〜」

何とも反省していない色が丸見えだが、海斗は諦めたような顔でため息を吐く。

……だが何故だろう、海斗も桜を見たいと思っていたのだ。

なにかが足りない気がして……。

「どうせだったら勇者部以外にも防人やクラスの奴も呼ぶか?」

「いいね〜、面白そうだよ!じゃあ、夜に桜を見るってことで!場所は取っておくから」

軽くステップをしながらいなくなる園子に苦笑しつつも、海斗は自分の部屋を出た。

神世紀元年、四月九日。

景夜は奇妙な体験をした。

朝を起きたら、自分の机の上に花束が置かれていたのだ。

一本一本が違う花でアンバランスにも見える色合いをしているが、何故か景夜にはそれが無性にしつくりきた。

「……センスが良いのか悪いのか……」

イタズラの可能性も考えたが、自分の周りでこんなことをしてくる奴など居ないと思出しすぐに考えを投げ捨てる。

花束にあった花は、昼顔・夕顔・朝顔・菊・睡蓮・青薔薇・牡丹・オザギリス・鳴子百合・サツキ・クローバー・カーネーション・ヒトリシズカ・ポーチュラカ・スイートアリッサムの約十五本。

昼顔の花言葉は『絆』。

夕顔の花言葉は『逆境を克服する力』。

朝顔の花言葉は『愛情の絆』。

菊の花言葉は『ろうたける想い』。

睡蓮の花言葉は『清純な心』。

青薔薇の花言葉は『神の祝福』。

牡丹の花言葉は『風格ある振る舞い』。

オザギリスの花言葉は『輝く心』。

鳴子百合の花言葉は『心の痛みを判る人』。

サツキの花言葉は『情熱』。

クローバーの花言葉は『約束』。

カーネーションの花言葉は『無垢で深い愛』。

ヒトリシズカの花言葉は『隠された美』。

ポーチュラカの花言葉は『いつも元気』。

スイートアリッサムの花言葉は『優美』。

花束とは言えないが、景夜は少し物足りなさを感じた。

そして、その時唐突に自室のドアが開けられた。

「カゲヤ君！お花見いかない！」

「いきなりだな……善いぞ。準備があるから、夜から夜桜でもみるか。勇者の皆や師匠や母さんも誘って」

「うんうん、行こう行こう！」

友奈は景夜の返事を聞いて、嬉しそうな足取りで部屋を出ていった。
景夜もそれを追うように、自室を後にした。

「美森ちゃん？花瓶ってあったっけ？」

「ええ、あるわよ」

「どんな時代でも……」

「ひなた、花瓶あったか？」

「ええ、ありますよ」

「勇者たちは……」

「花見の準備をするから、海斗も手伝って頂戴」

「りょーかい」

日常を謳歌する……

「景夜君もお弁当の準備を手伝ってください、お花見するんでしょう?」

「伝達が速いな……あいよ、何から手伝えばいい?」

辛いことも、苦しいこともあるけど……

「そう言えば海斗、あなた宛てに一通手紙が届いてたわよ」

「どれどれ?」

楽しいことも、嬉しいこともきつとあるから……

「景夜君、手紙が来てましたよ。あなた宛てに」

「ふくん、見せてくれ」

進んで行く、未来に。

二人は中に入っていた一枚のメモ用紙と、一枚の写真を取り出す。メモ用紙には、『幸福祈願』と書かれていた。少し戸惑いつつも二人は写真に眼を向ける。そこには、

「……善い笑顔だ」

「……百点満点だな」

満開の桜より綺麗な、笑顔な勇者たちが写っていた。

世界に二つしかない、最高の写真。

記憶はないけど、魂が覚えている。

あの世界での思い出を。

忘れる事なんてできない、だって一つ一つが最高の思い出だから。

「美森ちゃん、花瓶のついでに額縁ももらっていい？」

「悪いひなた、花瓶と一緒に額縁もくれ」

「別に良いわよ」

「構いませんよ」

二人の少女は笑顔になる、なぜなら……自分の愛する人も笑顔だったから。

世界に終わりはない、人の物語に終わりはない。

何故なら、

「あれ？東郷さんも海斗君も何してるの？」

「景夜にひなた？何をしているんだ？」

『何でもないよ』

どんな世界にも諦めない人間が居るのだから。

ホワイトデーに甘い声

三月一四日。

ホワイトデーと呼ばれる、バレンタインと対をなす行事。

学校の雰囲気もいつもより浮足立っている。

そんな中、海斗と景夜は二人して私服で学校に居た。

これにはとある事情がある。

それは一週間前の話。

これはホワイトデーの一週間前の日のこと。

いつも通り部活に顔を出そうとした海斗は、何故か部室の前で棒立ちしている景夜に遭遇した。

「……なにしてるんだ？」

「中を覗けば分かる」

景夜に言われた通りに、海斗は部室のドアを少しだけ開けて中を覗く。
そこには……

「イケメン5計画始動〜〜!」

「いえ〜〜い!!!!」

園子ズが盛り上がっていた。

イケメン5計画……明らかに面倒ごとの予感。

そつとドアを閉めようとしたが、時すでに遅し。

すぐに二人に捕まってしまった。

「ねえねえかーくんにご先祖様〜、一緒にやろうよ〜」

「そうだよお兄ちゃん！みんなでハッピーなことをしよう〜！」

恐らく、前回のバレンタインが不完全燃焼だったためこうなったのだろう。
景夜と海斗は露骨に嫌そうな顔をする。

「……やらなきやダメか？」

「俺も同感」

「やって損はないよ、ひなタンだつてきつと喜ぶよ！」

「そうそう、わっしー先輩もきつとかーくん先輩にメロメロに〜」

こう言われてしまったら、二人は断りづらくなる……

大切な人の為に一肌脱ぐのも悪くない。

そう思ってしまうからだ。

「分かったやるよやればいいんだろ！」

「やった。それでかーくんはどうする？」

「俺もやるよ。やらないと、仲間ハズレみたいで嫌だし」

「流石かーくん先輩！話が分かるんだぜ」

「それで、俺たちはどうすればいいんだ？」

「そうだな……。若ちゃんが和服でお武家様風でリトルわっしーは真面目な生徒会長風」

「棗先輩は寡黙な執事風で、千景先輩はワイルドな不良風だよ」

キャラ付の話のようで、海斗たちは会話に参加できない。

園子ズは少しづつ話を進めていき、やがて結論に至る。

「お兄ちゃんは、俺様幼馴染風で〜」

「かーくんは、病弱な弟風で〜」

「いや、それいつもと殆ど変わらなないか?」

景夜の意見はもつとも、実際に景夜は俺様程ではないが結構ガツガツだ。
海斗は正反対も良い所なのだが……

「いつもの景やんとはぜんっぜん違うんよ!」

「そうそう、俺様系の話し方もマスターしないとね〜。後、かーくん先輩は一人称は僕で
お願いします」

「ああ、何となく分かった」

これが、今回のあらましだ。
それでは、時間を元に戻そう。

海斗たちが部屋に着くと、既に相手役が来ていた。
景夜はひなたの方へ行き、海斗も美森の方へ赴く。

「あつ！景夜君、ちょうどいいところに！若葉ちゃんの写真を撮るの手伝って——」

「俺の前で、俺以外の奴の話をするな。お前は俺だけを見とけばいいんだよ」

いつもより、キザな服装で。

いつもより、強引な話し方。

ひなたの心は瞬く間に、奪われていく。

「か、景夜君?!ど、どうしたんですか、その服に話し方。これも今回の催しの中に——」

「だから、俺だけを見ろって言うてんだよ。これ以上眼を逸らしたりしたら……俺のこ
としか考えられないようにするぞ」

「は、はううう……」

興奮しすぎて顔を逸らそうとしたひなたに対し、景夜は顎を指で軽くクイツと持ち上
げてひなたの眼を見つめる。

「分かったか？」

「はい……分かりました……」

景夜は、今夜寝ることが出来ないことを確信した。

そして、海斗の方はと言うと……

「あ、あのね……僕、美森お姉ちゃんのこと大好きだよ♪」

海斗の服装はいつものカジュアルなものではなく、少し落ち着きがあるゆつたりとしたものになっている。

それに加えて、上目遣いからのこの言葉。

以外にも、海斗の上目遣いは効果が強く。

美森は一瞬でスマホを取り出し撮影に入る。

「海斗！最高よ、最高だわ！もつともつと良い笑顔で！そう、そうよ」

……少しやり過ぎた部分もあるが、海斗は概ね満足だ。

しかし、後ちよつとイタズラしてもいいだろうと思いきそれを実行していく。

「……美森お姉ちゃん、お写真撮るのもいいけど。僕、一緒に遊びたいな……ダメかな？」

「良いわよ良いわよ！さて、何をして遊びましょうか！」

若干所か、もの凄いキャラ崩壊が起きているが……国防芸人だから仕方なし。その後、バーテックスの襲撃もあったが放課後は遊んで過ごした。

三月十四日、夜。

景夜の部屋にて……

「今日の景夜君と若葉ちゃんはカッコよかったですね。増々惚れてしまいました」

「そりゃあ良かったよ。俺と若葉も頑張ったかいがあるってもんだ」

「景夜の言う通り。しかし……今後はあまりやりたくないな……」

「俺もそう思った」

くだらない話に花を咲かせて夜を過ごす。

本番はここからなので、ひなたは嬉しそうだ。

「さあて、今日は寝ますかね。……そんな目で見られても」

「言わなくても分かるでしょう？今日は寝かせませんよ？」

「嫌だ〜〜!!！」

その日、本当に景夜は寝られたとか、寝られなかったとか……
真相は闇の中である。

『偶然』と『必然』、『運命』と『奇跡』

三月中旬の某日。

海斗は一人机に向かいながら、あーでもないこーでもないと唸っていた。そんな海斗の部屋に、美森は何でもないように入ってくる。

「海斗？もう遅いわよ、早く寝なさい」

「分かってる……、あともう少しだけ」

時刻は午前一時を周っている。

美森が注意するのも無理ないだろう。

海斗は普段なら、日付が変わる前にはベットに入っているのだから。

彼は注意を聞いてはいるが、机に向かい作業を続ける。

……数日後は友奈の誕生日。

机の上には、綺麗な字でしたためられている便箋が置いてあった。まだ途中なのだろう、文は便箋の半分ほどで終わっている。

「……あなたらしいわね」

「……でもないさ、なんやかんやアイツには結構世話になったから。ただ、お礼がしたいだけ」

そう言つて、彼はペンを持つ。

流れるように文字を書き、五分もしない内に全てを書き終えた。

(……美森ちゃんが隣に居たからかな……素直に想いを書ききれた)

大層嬉しいのか、海斗はクシヤリと笑う。

それを見た美森も微笑む。

数日後が待ち遠しい。

(笑顔の君へ、この想いが届きますように)

願いは届く。

未来は希望に満ちているから。

数日後、三月二一日。

友奈の誕生日である。

その日は、ピクニックを行い盛大に彼女が生まれてきたことが祝われた。

そして帰路にて、

「友奈。これ」

「これは……お手紙？」

「……プレゼント替わりだ。お前には物を送るより、そういうヤツの方が良いと思ってな。あんまり言えてない、日頃の感謝を詰めといた」

「ありがとう、海斗君。すっごく、すーっごく！嬉しいよ」

「どういたしまして」

友奈の心からの笑顔に、海斗は少し照れてしまい顔を逸らす。

この二人の関係は、昔と同じだ。

恋人以上で、恋人未満。

美森と同じくらい大切な存在で、同じくらい護りたい人。

例え、この身を賭してでも。

海斗がそんな事を考えている間に時は過ぎ、あつという間に二人の家の前についた。

「お休み海斗君」

「お休み友奈」

美森は居ない。

先に帰ってもらい、友奈と二人になれる時間を作ったのだ。

友奈は家に入り、階段を上がっていく。

自室のドアを開けて、すぐさま机に座って手紙の封を開けた。

『拝啓 おバカな幼馴染へ』

いつもありがとう。

感謝の言葉から入るのはどうかと思うが、ゆっくりと見て欲しい。

美森ちゃんを抜けば、俺の中で一番付き合いが長いのは友奈だ。

お前には色々世話になったし、迷惑を掛けられた』

少女はクスリと笑う。

やっぱり、海斗は手紙の中でも海斗だ。

『美森ちゃんの事があって、落ち込んでいた時にお前が傍に居てくれたお陰で立ち直ることが出来たんだ。』

ありがとう。

勇者部に入るって言った時は、少し怒ってしまったこと。

本当にごめん。

お前や美森ちゃんに傷ついてほしくなくて、キツイ言い方になっていたと思う』

「そんなことないよ、海斗君は何時も優しいもん。何となく分かってたよ」

『戦いになってからは、お前たちを守ることと頭がいっぱいいっぱいだった。

でも、友奈。

お前やみんなが思い出させてくれたんだ、本当の自分を。

だから、ありがとう。

そんな友奈が大好きです』

「……私もだよ……本当に不器用なんだから」

友奈の頬に涙が伝う。

嬉しいのに、涙が止まらない。

『最後に。

友奈、生まれて来てくれて本当にありがとう。

俺に出会ってくれてありがとう。

俺と絆を結んでくれてありがとう。

敬具　もう一度手紙の中身を見てごらん』

友奈は書かれている通り、手紙の中身を除く。

そこには、

「……桜の押し花……」

まだ、殆ど咲いてない筈なのに……どうやって。

そんな疑問が湧いたが、少女はその疑問を即座に捨てた。

「海斗君は……やっぱり、私たちの勇者ヒーローだよ」

押し花を持って家を飛び出し、東郷家の前に行く。

そこには、二人の心友が居た。

一人は少し寒いのか、半纏を羽織っている海斗。

もう一人は、今にも友奈に飛びつきそうな体制を取っている美森。

幼馴染と無二の親友、心通じ合う最高の友。

「どうして……?」

「ここに居るかって?」

「友奈ちゃんを待つてたのよ。私たちが友奈ちゃんの行動パターンを予測できない訳ないでしょ?」

「そういうこと。それで、美森ちゃんが友奈ちゃんを冷やしたらいけないって言うもんだから、こうして待つてたわけさ。まあ、春は春でもまだ夜は肌寒いしな」

ドヤ顔で言う二人に、友奈も顔を緩ませ笑った。

(やつぱり、なんだかんだ言っても姉弟なんだな……そういう所ちよつと羨ましい)

「もお、今日は三人で寝よう!!お泊り会だよ!」

「偶にはいいかもな……、どうする美森ちゃん?」

「海斗の部屋にしましょうか、布団を敷いてみんなで寝ましょう♪」

美森は軽やかな足取りで家に戻っていく。

恐らく、準備を片付けに行ったのだろう。

しかも、友奈の親にもしつかり連絡を入れる気だ。

「唐突だけど……こういうのも良いよな」

「うん！」

海斗は喜んでいる友奈の姿を見て、言うことを決めた。

「友奈、手紙にも書いてあったと思うけど。生まれて来てくれて本当にありがとう」

「うん……今の私だったらハッキリ言えるよ。きっと私が生まれてきた意味ってここにあったんだ。こんな素敵な場所でみんなに会ったこと、それが『運命』じゃなくてた

だの『奇跡』……『偶然』だったら素敵だと思わない？」

「らしくないな、お前がそんな台詞口に出すなんて……」

「もう！真面目に言ったのに！」

頬を膨らませて怒ったような口調で喋る友奈の頭を撫でて、海斗も齒の浮くような言葉
葉を口にする。

『奇跡』や『偶然』と言う言葉が嫌いな頃の海斗だったら、言わなかったような言葉。

「……友奈の言う通り、それが本当だったら素敵だな。俺やお前が会えたのは『偶然』で、
でも俺とお前が起こした『奇跡』は『必然』だった」

「うん、そうだね」

「『偶然』と『必然』、『運命』と『奇跡』。この二つが混ざり合って今がある。こんなに素
敵なことは、他にはないのかもな」

「きつとそうだよ。ううん、絶対にそうに決まってる」

この会話を最後に、二人は家の中に入っていった。

「その日はとても暖かい夜を過ごせた」と、後日友奈は語っている。

やくそくと縁と愛

晴れ渡る空、澄んだ空気、輝く太陽。

まるで今日と言う日を祝福しているようだと、海斗は言った。

学校へ向かう足取りは軽く、傍から見ても機嫌良いのは丸分かり。

なにせ今日は、四月八日。

鷺尾須美にして東郷美森の誕生日。

この一大イベントに浮つかない海斗は居ない。

一週間前から綿密に計画を立てて、今日と言う日を迎えた。

特大の誕生日ケーキは、春信に頼み放課後に間に合うように送ってもらおう予定だ。

海斗が手間暇かけて作った特製ケーキ。

大赦に場所を借りてもらい、時間とお金を惜しみなく使った。

「ふ〜んふ〜んふ〜ん♪」

スクールバックの中には二つの小箱が入っており、時々バックを開けては確認して微笑む。

慣れない人からしたら、流石に驚く光景だ。

現に、亜耶は若干引いていた。

「か、海斗先輩！おはようございませう」

「うん、おはよう」

亜耶が囁んだことも気にせず、学校まで何でもない話をする。

いつもなら隣に美森か友奈、園子辺りが居るのだが……

どうにも今日は居ないらしい、海斗曰く「俺の方から今日は一人で登校したい」と伝えたららしい。

亜耶は申し訳なさそうに顔を俯かせたが、海斗は気にしていないと笑った。

無垢な少女は思う。

今日のこの人は何かが可笑しいと……

予定通り、盛大に誕生日会が行われた。

今の時代の銀も呼ぼうとしたが、如何せん少し不味い状況になりそうだったので呼ばず。

誕生日会終了後に、別の場所で祝う予定なのだ。

そして、誕生日会も終盤。

海斗が代表としてプレゼントを渡すことになっていた。

ここで送ったものは元の世界に持って帰ることは出来ないが、送ることに意味がある。

「二人にはこれ」

「ゆ、指輪!?!」

「まあ、綺麗ね」

パカツと開いた二つの小箱から、特に装飾はされていないシンプルな指輪が出てくる。

それを、須美↓美森の順に嵌めていく。

嵌める場所は……左手の薬指。

「びゅおー！！！！創作意欲が漲るー！！！！」

園子ズは相当にテンションが高く、今にも天元突破しそうな勢いだ。

須美に美森も、頬を赤く染めている。

だが、顔はまんざらでもなさそうで、照れているだけだろう。

意を決したのか、二人は少し内緒話をした後に海斗の方に向き直った。

まだ少し赤い顔のまま、二人は海斗に詰め寄っていく。

「海斗、少し屈んでちょうだい？」

「海斗……先輩、少し屈んで下さい」

「えっ？いいけど……」

海斗は一も二もなく、腰を曲げて少し屈んだ姿勢になる。

しかし、海斗が屈み終わった瞬間に、両頬に柔らかくて少し暖かい感触が当たった。

それが唇だと気付くまで、海斗は数秒の時を要して……。

理解した瞬間、興奮度や照れ度が限界地を突破して頭が真っ赤に染まった。

「へ……？あああああああ——！！！！」

奇声をあげたと思ったら、そのまま後ろに倒れていった。

興奮度や照れ度が限界点を突破し、感情が制御できなくなっただろう。

それを脳は危険と判断し、強制シャットダウンをかけた。

この後も、楽しく誕生日会は続けられていったが、海斗が起きることはなかったらしい。

天の神から世界を取り戻して、早数年。

今日は美森の誕生日にして、二人の結婚式。

勿論、海斗と美森のだ。

今、海斗が居るのは控室。

落ち着きなくソワソワしている。

それを、長年の親友である陸斗が背中を叩いて止めさせた。

「おい、大丈夫か？滅茶苦茶緊張してるじゃねえか」

「…違う、これは今すぐにでも化粧やらなんやらが終わった美森ちゃんの姿が視たくて震えてんだよ！」

「お、おう。何となく分かったよ」

「それに、お前だって梓との結婚式の時こんな感じだっただろう？」

「それもそうだな…、お互い何も言えない訳だ」

陸斗と喋りながら、海斗はその時を待った。

すると、控室の扉が叩かれ父である森雄が入ってくる。

「海斗、美森の準備が終わったぞ。見に来なさい」

「うん、今行く。陸斗はもう行っていいよ、付き合ってくれてありがとうな」

「どういたしまして、先に式場で待ってる」

海斗は陸斗を送り出して、美森が居るであろう新婦側の控室に向かった。

緊張してるのだろうか、手汗が出てくる。

何とかタキシードを使わず、森雄からハンカチを借りて汗を拭く。

息を整えてから、思い切って扉を開けた。

そこに居たのは、勇者部の面々。

それと、化粧をしていたであろう場所で椅子に座っている美森。

白無垢かウエディングドレスかで相当揉めていたが、結局ウエディングドレスになっ

た。

因みに、ウエディングドレスを提案したのは美森である。

「おう、海斗！中々良いじゃない！似合ってるわよ」

「そうですね、海斗さん。似合ってます」

「まあまあって所かしら？」

「良い感じだぞ海斗！」

「いいよかーくん！カッコいいよ！」

「うん、園ちゃんの言う通りカッコいいよ」

「ああ、ありがとう……」

みんなの言葉は聞こえているが、上手く頭に入って来ない。何故なら、海斗の意識は美森に吸い寄せられていたからだ。

綺麗に流された濡羽色の髪、何もかもを吸い込むような翡翠色の目、潤いとハリのある赤い唇、最後に美しいドレス。

海斗が今まで見てきた美森の中で、歴代最高級に美しく愛らしい姿。見惚れている、思考が上手く回らない程に。

「海斗?どうかしら?」

美森の言葉に、何か良い例えや言い回しを探そうとするが中々思い浮かばない。悩む海斗の姿を見て、美森はクスリと笑った。

「別に深く考えなくていいわ。海斗の言葉で教えて欲しいの」

「俺の言葉?……俺からしたら、今の美森ちゃんは文句なしで世界で一番綺麗だと思う」

「今の私は？ 違うでしょ？」

揶揄うように言う美森に戸惑いながらも、海斗は迷うことなく言葉を重ねた。

「ごめん、訂正する。いつも、世界で一番綺麗だよ」

「ありがとう」

周りのことなど気にせず、二人は想いを伝えあう。

本当の想いを伝えるのは、少し気恥ずかしいし勇気が居るが、二人はとづくに持つている。

愛や絆と言う、勇気と変わらない程の大きなモノを。

誓いの言葉。

「新郎海斗、あなたはここにいる新婦美森を、健やかなるときも病めるときも、富めるときも貧しいときも、妻として愛し、敬い、いつくしむことを誓いますか？」

「誓います」

「新婦美森、あなたはここにいる新郎海斗を、健やかなるときも病めるときも、富めるときも貧しいときも、妻として愛し、敬い、いつくしむことを誓いますか？」

「誓います」

「それでは、ベールを上げて誓いのキスを」

ゆつくりと、ベールを上げる。

少しづつ見えてくる愛おしい人の顔に、出そうになった涙を抑えながら顔を近づけていく海斗。

「やっと、叶ったねやくそく」

「そうね、私を日守美森にしてくれてありがとう♪」

そう言つて笑顔で誓いの口づけをした。

今日と言う日は、二人の中で忘れられない思い出になることだろう。

愛する人と結ばれる、これほどの幸せ他にないのだから。

こうして、決して切れることのない縁が結ばれた。

二人がお互いを誰よりも愛しているからこそ、この縁は決して切れることはないし終わることはない。

何よりも固く、何よりも熱い。

これこそが、二人の愛だ。

お嬢様と執事君

四月二七日。

春風も温かくなってきた今日この頃。

海斗は何故か、執事服を着ながら弥勒夕海子ゆみこに対して給仕をしていた。

何でも、今日の誕生日のして欲しいことや欲しいプレゼントを聞いたら「今日一日、私のアルフレッドになってくれませんか？」と言われたのだ。

アルフレッド、夕海子曰く専属執事（笑）らしいので、その為に態々服を着替えてま
でやっているのである。

「お嬢様、何かご用はございませんか？」

「そうですわねえ、お紅茶とそれに合うクッキーでも出して頂戴」

「かしこまりました」

周りに居るみんなには結構な視線で見られているが、もう慣れたのか気にしなくなってきた。

テキパキと紅茶をティーカップに淹れて、用意していたクッキーを紙皿に出す。

その後は、流れるような動作で夕海子の前に持つて行く。

中々に骨の折れる作業ではあるが、意外に楽しい。

海斗は満面の笑みで、夕海子にそれを差し出した。

「どうぞで」

「ありがとう海斗。もう下がっていいですわ」

「それでは、失礼いたします」

少し疲れのある体と、何故か充足感のある心。

案外、自分は誰かに仕えるのに向いているのかもしれない。

そう思う海斗だったが、その考えは即座に投げ捨てた。

(違うか、誰かに仕えるのが向いてるんじゃないやなくて、誰かを支えるのに向いてるだけなんだ…)

案外、今回の体験で自分のまだ浮き出ていない一面が知れたことに笑みが零れるが、それを良しとしない者が居た。

何を隠そう美森である。

先程までハイライトが完全に消えた瞳で、海斗と夕海子の事を見ていた。

今もなお、先程と同様の目で海斗のことを見続ける。

流石に海斗も気付いたらしく、慌ててフォローに入った。

「ええつと…美森ちゃん?」

「どうかしたの海斗?夕海子さんへの給仕がそんなに楽しいのなら、本当に専属執事になってもいいのよ?私を捨てて…」

「いやいや!そんなこと絶対しないから!やくそくは守るから!」

「ならいいけど……」

何とか美森の誤解を上手く説くことが出来たが、気に掛けることが増えた海斗だった。

日も暮れた放課後、海斗は夕海子の部屋にお邪魔して料理を振る舞っていた。

夕海子が高知出身でカツオ好きなのは知っていたので、カツオの揚げ物を主菜にした夕食。

「まあ、とても美味しそうなこと」

「すいませんね、こんな庶民的なもので」

「良いんですよ、それにカツオは至高ですので問題ありません！」

口調を戻したのは夕海子が戻して欲しいと言ったからだ。

なので、いつも通りの口調で夕海子に喋りかける。

「案外、執事も面白いかもですね」

「そうでしょう♪このまま永久就職してくれても良いんですよ？」

「いいえ、職の方は間に合ってるんで」

「そうですよの……、あなたのような有能で気の利く者が居れば弥勒家復興も夢物語ではなくなるかもしれないのですが」

弥勒家、神世紀七二年に起こったテロを赤嶺家やその他数家と協力して鎮圧してみせた由緒正しき家柄。

その時の当主、弥勒音羽おとはは世紀の天才と言われており、弥勒家が相応の地位に就くのは勿論、下手すれば勇者七家にも近づけた筈だが、テロ鎮圧の際に仲間を守って右腕を失くしたため上に上がることはなく、弥勒家の次代当主にして音羽の妹である蓮華が情に厚い人柄の為か廃れていった。

これが、弥勒家の歴史。

「……夕海子先輩だったら、出来るんじゃないんですか？きつと先輩の将来はバリバリ働くやり手のキャリアアウーマンですよ」

「そうですわね！何を落ち込んでいるのでしょうか！私が居る限り弥勒家を没落させたままではいさせませんわ！」

「その意気ですよ、もしなにかあったら頼ってください。出来る限りお手伝いしますから」

「海斗さんは流石ですわね！これからもお互い頑張っていきましょうではありませんか」

因みに、二人は知らないだろうが、日守家もテロ鎮圧に貢献していたらしい。
またこれも、別の話である。

東郷海斗の章
くエガオノキミへく

prologue 「昔と今」

幼き日の夢、大切な人とのかけがえのないオモイデ、もう叶わないやくそく。

「海斗君！大きくなったら私を娶ってね！」

「うん、わかったよ！美森ちゃん！」

昔はこの言葉の意味が良く分からなかった。でも、美森ちゃんが俺と一緒に居たいと言う事は何となく分かっていた。

「やくそくだよ！」

「やくそくー！」

そのまま笑顔で指切りをしたのを覚えている。忘れられないやくそく。

これは、少年の過去の夢であり思い出であり、そしてやくそくだ。

美森の朝は早い、家の誰よりも早く起き調理の支度をすませる。

少女は中学二年生、この歳から朝早く家事をするのは将来有望だ。

周りの子に比べれば少し変わっているが、それでも居たつて普通の少女。

ある一点を除けば、そう少女が足が動かず車いすに乗っていること。

だが、少女はそんなことも気にせず黙々と調理を進める。

「そろそろ、かしら」

料理を完成させて、数分待つと縁側を歩く音が聞こえる。

「おはよう、美森。今日も美味しそうだな」

「おはよう、美森ちゃん。朝ごはん任せてごめんね」

「ううん、大丈夫。私が好きでやってるんだから。…海斗は？」
寝坊しがちな、海斗義弟のことを聞く。

「まだ、起きてないみたい。起こしに行つてあげてくれる？」

「分かつたわ。先にご飯を」

「ああ、先に頂いてる」

両親にそう伝え縁側に出る。奥にある私の部屋の隣、そこが海斗の部屋だ。

「海斗！そろそろ起きなさい。もう朝食出来てるわよ」

「もう起きてるよ、うるさいなあ」

私が襖を開けて中に入ると、海斗が制服姿で机に向かい勉強しているのが分かつた。

「起きてるなら、早く来なさい。父さんと母さんはもう来てるわよ」

「分かってるよ、姉貴は一々うるさいなあ」

見て分かる通り、私の弟は反抗期なのか少し態度が悪い。昔は違ったのに如何してこうなってしまったのか、理由は分からない。

こんなになつたのは、約1年前からだ。

私は交通事故に遭い、足が不自由になつた。

足が今後動かないかも知れない、ということを知つて私は少し弱気になつていた。

そんな時、友奈ちゃんに支えられて何とか今の状態まで戻すことが出来た。

海斗は病院に見舞い来た時や家に帰つて来た最初の方は、もう少し柔らかい感じだつた。

それから少し経つた頃から、海斗が私に対してあんな態度を取り始めた。

最初は直ぐ終わつて、昔の様に笑つて喋る事が出来ると、信じていた。

約1年の時が経つても、海斗の態度は直らず。

私も姉として接しようとするせいで、私たちの溝は深まつた。

戻れるなら幼馴染だったあの頃に戻りたい。

幼馴染であり、姉弟でもある。これは、姉弟の物語。恋と勇気の冒険譚。

第一話 「望みのない恋と知りながら」

姉である美森が家を出た後、ようやく海斗も居間に現れる。

「おはよう、母さん」

父はもう仕事に出たのだろうか、姿は見えず。居たのは専業主婦である、母だけだ。

「おはよう！もう柳橋君来てるわよ」

「分かったよ、菓子パン取ってくよ」

そう言い残し居間を出る。玄関に着くと、母さんに入れて貰ったのか柳橋が寛いでいた。

「おはようさん、遅かったな。まーた東郷さんとケンカか？」

「違う、ただ勉強してただけ」

朝から少しウザイのがご愛敬。

やなぎはしりくと
柳橋 陸斗、海斗や美森と同じ讃州中学の二年生。

イケメンでおちやられたりしながらも、みんなを纏めるムードメーカーの様なやつだ。

クラスの中心にいる奴なのだが、ある事をきっかけに親しくなった海斗の親友的存在。

趣味は友達とのお喋りだと彼は言っている。

海斗と陸斗は学校に軽く雑談をしながらゆっくり向かっていた。

もちろん、遅刻をしない程度にだが。そんな時、海斗がある話を切り出した。

「なあ、柳橋。大赦のことって、どう思ってる？」

陸斗は質問にあまり迷う素振りも見せず、直ぐに返答した。

「うーん、あんまり良くは思えないな。だって変な仮面付けてて、口調も何か変な感じするし。海斗だって大赦のこと嫌いだろ？」

いかにもな理由だ。陸斗が言った通り、大赦に良い感情を抱いていない人多い。俺もその一人だ。

「まあな、俺は大赦が嫌いだし。憎いとすら思ってる。つて、悪い。朝から暗い話しちまって」

「別にいいよ。あんまり親友に気を遣うじゃないぞ」

その後も、話題を変えながら学校への道を歩いて行つた。

その日の放課後、屋上にて。

「ごめんなさい、あなたとはもう付き合えません」

彼女であつた子に、フラれていた。

海斗の自業自得なのだが、彼も少し心苦しそうにしていた。

「ううん、こちらこそゴメンね」

6 回目にもなる典型文を申し訳なそうに返していた。

(こんなクズに突き合わせて本当にゴメンね。)

そんな言葉を心の中で呟いていた。

一言で海斗を表すなら、それはちよつと顔が良いだけのクズ野郎だ。

自分の感情を紛らわすために恋仲になり、結局は本心知られてこうしてフラれてしま
う。

彼はクズだ、自分のために他人の感情を良いように使う。

「相変わらず、長続きしないねえ」

陸斗が海斗を気遣って、フツた女の子が出て行ってから茶化しにきた。

本当に気遣いが上手いなと思いつつ陸斗と話す。

「お前こそどうなんだ？彼女できたのか？」

「ぐつ！痛い所突きやがる。縁がねえんだよ、お前と違ってモテねえんだよ！」

(嫌、それは嘘だろ。クラスの中に一人か二人はお前のこと好きなやつがいるぞ。)

海斗はそんなことを思っても口にはしない、無粋だと思うしそれに。

「てか、柔道部入ってるんだからそんな暇ないだろ」

「グハッ！正論いいやがって」

海斗の正論に、またもや効果抜群の一撃を食らっている陸斗。現に陸斗は屋上に柔道着で来ている。

「じゃあ、海斗。勇者部はいいのかよ」

「別にー、俺は元々席を置いてるけの幽霊部員だし」

その後も陸斗が部活の休憩時間の間は二人で話し合っていた。

「まあた、海斗はさぼりってわけネ。全く、もー！」

海斗の名を呼び叫んでいるのは犬吠埼いぬぼうせき風ふう。

勇者部の部長にして部の看板。趣味は散歩。

性格はサバサバした姉御肌な感じ。学年は3年

「海斗先輩、今日も来ないんですか」

海斗が来ないことに、少しほっとしてるのは犬吠埼樹。

風の妹でもあり、姉のことをとても尊敬している。

年下のため勇者部の中でも妹的な立ち位置だ。趣味は占い。

性格はひかえめだが、芯の強さがある。学年は1年

「まあまあ、風先輩。そんなに言わないであげて下さいよ」

風を落ち着かせ、海斗の事もフォローしているのは結城友奈。

美森の親友にして、海斗の幼馴染でもある少女。

勇者部のムードメーカーだ。

趣味は押し花。性格は明るくて快活。

能天気に見えて案外、肝が据わっている。

学年は美森や海斗と同じ2年

「すいません、家の海斗が」

「東郷が謝る必要のないのよ、次海斗が部活に来たら取っちめてやる！」

そんな声が響く中、4人は帰路に着いていた。

「でも、昨日の幼稚園での人形劇大成功でしたよね」

「ええー、て言うかなにもかもギリギリだったわよ」

歓談に声を弾ませつつ分かれ道で、風達と分かれていた。

先程うどん屋の「かめや」で出された宿題、文化祭の出し物について美森と友奈は考えていた。

端末が震える、NARUKOと言うトークアプリに通知が入っていた。

「k a i t o : 今日は何でもなくてすいません。明日から部活にです」

一様は美森の義弟だ。おとうじ

トークアプリの中でも少し礼儀的な言い方をしている。

【Fu：今度無断でサボったら、承知しないわよ】

【yuna：明日からガンバローー！】

【ituki：よろしくお願ひします！】

【東郷：帰ったら話があります】

それぞれが思い思いの返信をするなかで、一人だけ浮かない顔の少女が居た。言うまでもなく、美森である。

海斗はある少女に呼ばれて大赦系列の病院に来ていた。

海斗は少女に会う前に違う少女の病室に来ていた。

「久しぶり、銀。1ヶ月ぶり位だな」

花瓶に入っている花を入れ替え新し水に、置き換える。

銀と呼ばれた少女は右腕が無く、体の至る所に包帯が巻かれている。

生命維持装置で何とか持ちこたえているが、何時亡くなってもおかしくない状態である。

彼女はもう約1年も眠ったままだ。

「何で、こうなつたんだろうな。お前は何も…ゴメン。これから園子の所に行くから、またな」

スクールバック片手に立ち上がり、その場を去る。

視ていられなかった、あんなにも傷ついでしまった友達の姿。

銀の居た病室を出て数分、園子の病室の前にたどり着く。

扉の前には門番の様に大赦の神官が立っている。神官に話しかけ中に入れて貰う。

「中に入れて貰っていい？園子に呼ばれたんだ」

「分かりました。日守様」

「その名前で、呼ばないで。今は東郷だ」

神官を海斗が睨むと、「失礼しました」と言い道を開けた。

中に入る、そこには一つの大きなベットがあり。

ベットの上にある少女が居た。

左目や口後左手以外が包帯でグルグル巻きにされている。

海斗は知っているから分かるが、これは怪我ではない。

別のナニカだ。

「久しぶり、園子。今日は何の用なんだ？」

「久しぶり、かーくん。用事が無きや呼んじやだめなの。」

いつものふざけている様なおどけた口調、久しぶりに聞くと心地よく感じる。

海斗は銀や園子が勇者になる前からの友達、海斗も神樹館の出身だ。

美森が鷲尾家に行つてから、東郷家の父と母が海斗を神樹館に行かせてくれた。

「今日はねえ、お知らせと忠告の為に呼んだんよ」

「お知らせと忠告ねえ。何のだ？」

海斗は分かっている、だが園子に尋ねる。自分の予想が外れることを祈つて。

「お知らせは、勇者としてのお役目がもうすぐ始まるつてこと」

やっぱりか、と言う顔をする海斗。

海斗にも勇者適性がある、男に適性があることは滅多にない。

前例が殆ど無い為資料もすくない、だが噂によれば初代勇者の中にも男が居たらしい。

あくまで噂だが、勇者部に席をおいてるのもそのためだ。

「それで、忠告つて言うのは――満開の事だろ？」そうだよ

海斗と園子の中に重苦しい雰囲気の流れる。

「知ってるんだ、満開の事」

「まあな、あれから色々あつて調べた。日守の名前は凄^ひいよ、改めて思い知った」

「日守」、海斗が東郷家に養子として引き取られる前の名前。

海斗は5歳の時に事故で親を亡くした、その後お隣さんで付き合いも深かった東郷家に養子として迎えられた。

日守家は上里家直系の家系だ、そのため地位が高く、特殊なお役目もある。

それは、勇者の護衛のようなものだ。

ひのもり
日守と言う名前も元は四国の「日」である、「勇者を守る」という意志で付けられた名前だ。

あともう一つルールがある、日守家の長男として生まれたものは「海斗」と名付けなければならぬ。

真名は別に用意すること、10歳になったら子供に真名を教える。

20歳になったら、やっと表立って真名を使えると言うことだ。海斗の様な場合もあるので、手紙にして真名を記す掟があるとか。

真名を隠すのは天の神の祟りや呪いを受けない為である。

「まだ、真名は分かってないの？」

「うん、春信さんにも聞いたんだけど時期じゃないって言われた」

時期じゃないとはどういうことなのか、海斗は知る由もない。

「そつかく、それはしょうがないね！今日の用事はこれで終わりだよ。そろそろ帰らないとわっしーに怒られちゃうよ」

「つて!?!もうこんな時間か！春信さんの所にも行かなきゃ行けないのに。じゃあな園子！」

海斗は急いでバックを持ち上げて足早に病室を去った。

「もう少し、お話したかったな……。我が儘……。かな」

彼女以外誰も居ない病室。

その病室に一人の少女の懇願が混じった声が響いていた。

「コンコンコン」とノックの音が響く。

中から「どうぞ」と声が聞こえ、海斗はドアを開けて中に入る。

「失礼します、春信さん」

部屋の中には奥に大きなデスクが一つ、そこにはデスクトップ型パソコンや書類の山があり、辛うじて部屋の主である三好^{みよし}春信^{はるのぶ}の顔が隙間から見えている。

他にも部屋の真ん中には、テーブルがありそれを挟む様に2つの高そうなソファがある。

「ごめんね、海斗君。わざわざ来てもらって、そのテーブルの上に君の勇者としての武器の特性とかを纏めた書類があるから、ざっと目を通しておいてくれ。勿論アプリの方にも説明はあるけど、それの方が詳しく書いてあるからね」

春信が笑顔で説明を終える。

海斗は書類を手に取りミスプリントが無いか確認する。

完璧超人である春信に、そんな単純ミスはないのだが。

ミスが無いのを確認し終わると鞆にプリントの束をしまう。

「(こちら)そスイマセン、色々準備してもらって」

「ううん、大丈夫だよ。それに僕にはこれ位の事でしか君たち勇者を支えることが出来ないから」

春信と海斗の関係は約1年前から、美森の事があり海斗は「日守」の名を使い大赦に殴り込んだ。

結局は子供なので大人の神官達に抑えられた、そんな時に春信に出会った。

春信は取り押さえるのやめさせ、海斗の怒りをその身をもって聞き受けた。

罵倒罵声、怒号、嘆き、全てを聞いてくれた。

その後からは互いに上手く付き合うことが出来た。

「もう直ぐに帰るだろう？ だったら訓練場に寄つて夏凜が居るか見てくれないかな？ 居たらもう遅いから帰りなさいと伝えてくれ。僕が行きたいんだが、僕が言つても逆効果になりそうだし、それにこの通り仕事が山積みでね」

こんなことを言いながらも仕事をやっている手は休めていない、海斗は感嘆しつつ了解の返事をする。

「分かりました、任せといてください！」

春信に頼られたことが嬉しいのか、海斗は少しはにかんでいた。

海斗は春信に言われた通り、訓練場に寄っていた。扉から漏れる光で中に誰か人が居ることに気付く、時刻は6時半だ。

まだ春なので辺りはもう暗くなっている。海斗は扉をそつと静かに開き中に入る。

「失礼しまゝす」

中に入った先で見たのは、余にも綺麗な剣舞。

しばしの間見とれていると、こちらに気付いたのか夏凜が小走り気味に近寄って来た。

「どうしたのよ？海斗。あんたのこと久しぶりに見たけど」

「久しぶりって、確か2日前も俺と一緒にトレーニングしただろ」
海斗は夏凜の言葉に若干戸惑いつつも、何とか返す。

「そろそろ、帰った方がいいんじゃないか？ 辺りも結構暗くなってるし」

「そうね、そうしようかしら。ちょっと待ってて、着替えてくる」

夏凜は着替えるために奥の更衣室へと下がっていった。

（ヤバイな、門限バリバリ過ぎてる。美森ちゃんに連絡しとくか。）

夏凜が着替えてる間に電話を済ませようと、端末をポケットから出す。
慣れた手つきで番号を打ち込むと2回か3回のコールで電話が繋がる。

『もしもし、海斗ね？ 今どこ？』

『友達の家だよ。今から帰る』

『門限は守りなさいと何度も言ったはずよ！』

『分かったよ、帰ったら話があるんでしょ?』

『そうよ、気を付けて帰って来なさい』

『ありがと、姉貴。じゃあね』

『ええ、またあとで』

こんな自分を心配してくれるなんて、やっぱり昔と変わらず優しいなと海斗は思った。

それが嬉しくて少し泣きそうだった。

「待たせたはね! さあ、早いところ帰りましょ」

「了解。じゃあ行くか」

夏凜をマンションまで自転車をにけつして送った。

二人乗りなど初めてではない、何回もこうして夏凜を送っているし友奈や美森ともやつ

ている。

「今日はありがと、お休み」

「ああ、お休み」

まだ少し早いが二人とも同じ挨拶をしていた。

海斗はまだ帰ってこないのか、そう思いながら美森は玄関で義弟の帰りを待っていた。

すると、玄関の戸の前に影が映る。ガラガラと戸が音を鳴らして開く。

「ただいまー。って！何で玄関前にいるの姉貴は」

「あなたを待つてたのよ！心配かけて。話があるから私の部屋に来て」
有無を言わせない義姉の視線を感じ取った海斗は、無言で頷いた。

「あなた、また思い人にフラれたのでしょうか？」

「そうだけど、それがなに？」

美森の質問で思いを踏みにじってしまった女の子のことを思い出し、顔をしかめた。

「もう、誰かと付き合のを辞めなさい。自己満足の為にあなたに対して本気の好意で向き合った子たちが可哀そうよ」

美森の言葉が海斗の胸に突き刺さる。海斗の心は罪悪感で少し暗くなる。

「分かってるよ、こんなのは意味がないってこと。もう辞めようと思ってたから、流石にもう自分のせいで誰かに泣いて欲しくないし。話はそれだけでしょ、ならもう行くねお腹減ったし。後、俺明日から本格的に勇者部に参加するから」

そう言い残して海斗は美森の部屋を出た。

海斗が出て行った少し経った頃。

(何故、あんなこと言ったのかしら。いえでも、あれは姉として当然の行為だったはず。)
先程言いたかった話は思い人の話じゃないのだ。

(本当は、ちゃんと部活に出なさい。と言う話をするつもりだった。)

美森は嫌だったのだ、彼の隣海斗に居るのが自分ではないことが、たまらなく嫌だったのだ。

(何で、まだこの気持ちを持っているのだろう。海斗が義弟になると知った日、捨てた思っ
いだったのに。)

思い出してしまう、叶わないやくそくを。もう実らなくなってしまった恋を。

(この感情は捨てなければいけないのに。でも…)

もし叶うのならと願ってしまう。あの日のやくそくを。

そして、溢れ出す心の叫び。

海斗のことが好きと。

心が叫んでいた。

海斗も布団の中で悶々としていた。ご飯もお風呂も済ませたので後は寝るだけだ、
なの…。

「あんな顔されたら断るなんて出来ないだろ。」

義姉のフットた子を可哀そうと言いなながらも、俺のことも気遣っていた。

「やっぱり、好きだよ美森ちゃん。」

似たもの同士なのか、二人が言った言葉は誰に届くこともなく霧散した。だが、ある一人には届いていた。

「頑張りなさい、お母さんは何も言わないから。」

母にだけは届いていた、思い人には届かないのに。

朝は友奈と美森と海斗が並んで歩いていた。海斗が車いすを押していた。

「姉貴は大丈夫か？座りにくくない？」

「いいえ、大丈夫よ。朝からごめんなさいね、疲れたら友奈ちゃんと交代してもいいのよ」

美森が心配をして声を掛けるが、海斗は大丈夫だといって車いすを押し続ける。

友奈はその様子を微笑ましく見ていた。

国語の授業中に端末が鳴った。アラームの様な感じの音だ。

「結城さん、授業中は電源を切っておきなさい」

「あつ、はい。スイマセン」

友奈が鞆から出すと端末の画面にはこう映っていた。

《樹海化警報》

これを知っているのは、風と海斗の二人だけだ。

自分達だけが、世界から拒絶されたのかの様に。

全てが停止していた、先生がクラスメイトが、風で舞い上がった木の葉ですら。その自由運動を停止させていた。海斗は動いた、世界が塗り替えられる前に。

「友奈！姉貴！携帯持ったままこっちに来て」

戸惑う美森と友奈。足が上手く動かないのだろう、美森は手も固まってしまってい

た。

「俺の方に走れ！」

そう言うことやつと動き出した、友奈が美森の車いすを押しして俺の方に来る。

そして、ちょうど美森たちが来た瞬間、世界が塗り替えられる。目を開けるとそこは神樹の根が這いずる異界に変わっていた。

大赦はこれを樹海化と言っていた。

「これが…樹海化。」

風は走っていた、たった一人の家族である樹の下に。一年生の階に来ると樹はもう教室から出てきていた。

「お姉ちゃん！」

「樹！」

「良かった、お姉ちゃん無事だった、あのねみんな様子が変で」

いつもは、落ち着いた姉である風が慌てていたそれだけで樹は少し混乱してしまいうになる。

「樹、聞いて。私たちが当たりだった」

樹は余計に混乱する、何が当たりだったのか。この不可解な一連のことは何なのか。

樹は何も分からないまま、樹海と言う異界に身を下していた。

第二話「困難に打ち克つ心」

西暦2015年7月30日、この日天の神の尖兵・バーテックスが襲来。

全人類の大半が犠牲となる、これギリギリの所で留まらせてくれたのが神樹様であり、初代勇者たちでもある。

断じて死のウィルスの所為などではない。

その他、諸々の事も話した。

「これが、世界の真実。俺たち勇者は世界を壊す存在であるバーテックスから、神樹様を守る事がお役目だ。ザックリとした説明だったけどこんな感じだ」

海斗は説明が終わると、携帯にある勇者アプリを開く。

その中にある地図を見て、風や樹が近づいていることを確認する。

(そろそろか…)

ガサガサと音が聞こえた方向に振り向くと、草木で隠れた根の部分から風や樹が出て

きた。

「友奈！東郷！海斗！無事だったのね。よかつ「風先輩ー！」うっ！大丈夫みたいね」
友奈は心配だったのか、風に向かって抱き着いた。

「そう言えば、風先輩はどうやってここに？」

「このアプリを使ったのよ。三人がスマホをちゃんと持ってたのが不幸中の幸いだったワ」

風は安堵したのか、溜息をついていた。

「この世界のことや、お役目のこと海斗から聞きました。どうして黙ってたんですか！
「ごめんね。でも、他にも同じようなグループはいくつもあつて当たる確率の方が凄く低くて……」

「で、でも、それって勇者部の活動目的通りじゃないですか！風先輩は悪くない」

暗い顔になってしまった風を、友奈は何とか励ましていた。

「もう来たぞ」

みんなが海斗の声に反応し前方を見る。そこには、巨大な怪物パーテックスが居た。

「遅いやつで助かったワ。戦う意志を示せば、アプリがアンロックされるの」

風がみんなに向けて説明をするが、美森だけは…。

「あんなの戦えるわけない……」

美森は自分の震える体を抱きしめるのが精いっぱいだ。

誰もが押し黙る中、海斗が携帯の画面に映る夕顔の花のマークをタップした。

その瞬間、彼の周りに花が舞い始める。

勇者への変身は2〜3秒で終わった。夕顔の花の様な白を基調とし、青に近い紫のラインが入った勇者装束に変わる。

「友奈、姉貴を連れて逃げろ！ここはどうかにかする」

「嫌だ！私も海斗君と一緒に……」

「姉貴を守ってくれ。任せられるのが友奈だけなんだ！」

「っ！うん！分かった！気を付けてね」

海斗の指示に従い友奈が美森の車いすを押して逃げ始める。

「樹アンタも、逃げなさい！」

「嫌だよ。何があっても着いて行くから」

樹の言葉からは、いつもの控えめな性格からは考えられない、芯の通った思いを感じる。

「じゃあ、アタシに続いて」

「うん」

風が勇者に変身する。

風のイメージ花はオザギリス、黄色を基調としたものになる。

武器は身長の倍近くある大剣だ。

風を見習って樹が変身する。

樹のイメージ花は鳴子百合、緑色を基調としたもので武器はワイヤーだ。

三人の変身が終わる、海斗は慣れた手順で武器を出す。

右手に太刀、左手に火縄銃を出す。

「海斗……あんた」

「一応、俺も大赦の人間ですから。まあ、あんな変な仮面付けませんし、それに俺は私利私欲で大赦を利用してただけなので」

海斗はそう言いながら、目の前に迫りつつある敵：ヴァルゴ・バーテックスを見据える。

そんな海斗に風が問いかける。

「ねえ、海斗。アンタは何で戦うの？」

海斗は少し考える素振りを見せると笑顔でこう答えた。

「大切な人と明日を生きたいからです」

まるで、それ以外の理由など無いとでも言いたげな表情で。

「そお、じゃあ。とことんまで付き合ってもらおうわよ。勇者部ファイター！」

「オ、オー！」

そして、海斗たちの戦いが始まった。

「こ、これなにー？な、何か可愛い」

「この世界を守ってきた、精霊よ。神樹様の導きでアタシたちに力を貸してくれる」

精霊とは、神樹の中にあるリソースから出された存在で、バリアや攻撃の補助などを担当している。

因みに樹の精霊は木霊と言うマリモの様なやつだ。
風のは犬の様な見た目に狐の尻尾がある犬神だ。

そして海斗のは……。

「ほら小僧、ちやつちやつと走れ。あいつを片付けるんだろ！」

「分かつてるよ！」

見ての通り海斗の精霊は喋る。戦国武将の様に鎧兜を被り、その上から羽織を着ている。

後ろには大きく「天下統一」と書かれている。

この精霊の名前は第六天魔王こと、織田信長だ。

「行くわよ！樹、海斗」

その場から、足に力を入れてジャンプをする。

勇者になったお陰で、人外並みのジャンプ力を発揮し空中を飛ぶ。

「ジェットコースター!!」

樹の比喩通りで、まるでジェットコースターに乗ってる気分になれる。

最もその比ではないが。

ヴァルゴが下腹部から小型爆弾を発射する。

海斗は左手にある火縄銃で、風は虚空から現れた大剣を振るって、爆弾を払いのける。

「手をかざして戦う意志を示して!」

風が叫ぶと樹が手を後ろに回して、武器であるワイヤーを出現させる。出現させたワイヤーで自分に向かって来た爆弾を切る。

「な、なんかでたよ」

少しふらつきながらも何とか着地して距離を測る。

一方、美森と友奈はというと。

「あつ!電話だ!東郷さんちよつと待ってて」

「ええ、分かったわ」

突然鳴りだした電話に驚くも、それ以上に海斗たちのことが心配なのか急いで電話を取る。

『風先輩！』

『よし！繋がった』

友奈も怖いのだろう、誰かに頼りたいと無意識に思いそして、声に如実に表れている。

『風先輩、大丈夫ですか？今戦ってるんですか？』

『こつちの心配より、そつちこそ大丈夫！』

『はい！』

友奈も落ち着いていたのか、少し落ち着いていた口調になってきた。

「数多すぎだよ〜！」

「クソ！手数が足りない」

あちらの声が届いてくる。

樹も海斗も奮闘しているが爆弾の数が多すぎるのだろう。

『友奈、東郷。黙っててゴメン』

『さつきも言ったじゃないですか！気にしてません！寧ろ先輩に任せきりでこちらこそごめんなさい！』

『友奈…』

風の安堵の声が電話から響く。

だが、それは直後の巨大な爆発音で消し飛んだ。

「お姉ちゃん！」

「風先輩！」

友奈たちの方からでも見える、樹にも爆弾が命中したのが。

「樹ちゃん！退け！邪魔なんだよ！」

海斗も奮闘しているが流石に一人では、完全に抑え込むことなど出来ず。段々と友奈や美森の方に迫ってくる。

風や樹は精霊バリアで無事だがまだ完全には動けない。

「こっち見てる」

ヴァルゴの下腹部が熱を帯びて膨らんでいく、明らかに小型爆弾を放つきだ。

「友奈ちゃん！私を置いて今すぐ逃げて」

親友の悲痛な叫び、自分を連れて行ったら間違いないヤラレル、だから。

「何言ってるの、友達を！」

そこで言葉が止まる。目尻に溜まっていた涙を拭き、眩き始める。

「そうだよ！友達を置いてなんてそんなこと絶対にしない！」

「ダメ逃げて！友奈ちゃんが死んじゃう！」

美森の叫びが友奈は聞こえている、それでも……。

「嫌だ！ここで友達を置いて見捨てるような奴は……」

「友奈ちゃん！」

ヴァルゴの攻撃が今にも放たれる。けれど友奈は、走るのを止めない。敵に向かって走り続ける。

「勇者じゃない！」

そして、爆弾が放たれる。どこからどう見ても、命中してるように見える。だが結果は違う。爆風で煙が吹き荒れる。

「きゃあ！友奈ちゃん」

「姉貴！大丈夫か！」

すぐ近くまで駆け寄って来た海斗が、美森の無事を確認する。

「海斗！私より、友奈ちゃんを！友奈ちゃんが！」

呼吸は乱れてるし、言葉は上手く発せていない。

それでも美森は、自分より友奈を優先させようとした。

（そういう所は、変わってないな。）

「大丈夫だよ、姉貴。ほら見て見ろ」

煙が晴れていく、そこには左腕だけが勇者装束に変わっている友奈がいた。

「嫌なんだ。誰かが傷つくこと、辛い思いをすること。みんながそんな思いをしてくらいなら」

そう言いながら2発目に来た爆弾を右足を使った回し蹴りで、次の爆弾を回し蹴りの

遠心力をフルに活用し今度は左足で回し蹴りを決める。

蹴る直前に勇者衣装が装着されてダメージは無い。

そして、4発目の爆弾を跳躍で躲す。

「私が、ガンバル！」

空中で来た爆弾を右腕で殴り飛ばす。

「友奈！」

「友奈先輩！」

「友奈ちゃん！」

「行けー！友奈ー！」

みんな声が響く中、友奈は跳躍のお陰でヴァルゴの真上に行くことに成功する。

「うおおおおお！勇者パアーンチ!!」

友奈の上空からの攻撃が見事に当たる。

体積の3割程を拳で持つていくとは、何とも凄い事である。

精霊である牛鬼のお陰でもあるが……。

「勇者部の活動は、みんなの為になることを勇んでやること、私は讃州中学勇者部、結城友奈！私は勇者になる」

この日、東郷海斗や結城友奈たちの日常は一旦終わりを告げた。
そして、5人に新たなる日常が舞い降りる。

第三話 「勝利の喜び」

友奈が攻撃をして無くなった部分は、たった数分足らずで治りかけていた。

これには、友奈も驚きを隠し切れない。

「そんな、治ってる…？どうやってこの怪物をやつければいいんですか？風先輩、海斗君」

友奈の質問に対して風が素早く返す。

「バーテックスはダメージを受けても回復するの、封印の儀式つて言う特別な儀式を手順を踏まないと絶対に倒せない」

「て、手順つて何お姉ちゃん？」

海斗はバーテックスが動き出したのを確認する。

風がすぐさま全員に指示を出す。

「樹ちゃん！今は無理だ」

「攻撃を避けながら説明するから、攻撃を避けながら聞いて！」

次の瞬間には、ヴァルゴ・バーテックスが爆弾をこちらに向かつて発射してきた。

「何それ！ハードだよ！」

樹はこんなことを言いながらも、風に着いて行きながら何とか避けている。

友奈と海斗も、爆弾を避けたり時には撃ち落としたりしながら風の説明を聞く。

美森は恐怖に震えながらも、みんなの無事を祈っていた。

「みんな……友奈ちゃん……海斗。ハッ!?」

離れている、美森の位置からでも見える、そのオゾマシイ巨体。

見ているだけで、動悸が激しくなる。体に寒気が走り、先程の様に体を腕で抱きしめていた。

「ダメ……。私、戦うなんて出来ない。」

怯え続けるだけでは駄目なのに、美森の心はあの怪物パニッテックスのせいで恐怖に染まっていた。

風の説明を聞き終わった友奈たちは、封印の儀の準備に取り掛かっていた。

（封印をするために手順1、まず敵を囲む！）

友奈はヴァルゴの帯で叩くような攻撃を間一髪で躲した。

「位置に着きました！」

「お姉ちゃん、私も位置に着いたよ！」

全員が位置に着いたのを見計らい、風が合図を出す。

「よし！封印の儀いくわよ、教えた通りに」

風と海斗が二人でヴァルゴの気を引く。

「了解！」

先程、友奈にもやっていた帯で叩くような攻撃を繰り返しているが、風も上手く大剣でいなしている。

「ホラっ！今の内」

友奈や樹は携帯を見ながら、海斗は覚えているため携帯は見ずに行う

「えっと……手順2は……」

「敵を抑える為の祝詞を唱えるんだ」

「えっ！これ全部唱えるんですか！」

友奈と樹は動揺しながらも唱え始める。

「えつ、えつと、かくりよのおわかみ幽世大神。あわれみたま隣給」

樹が祝詞を唱え始めると、隣に木霊が現れる。

「めぐみたま恵給、さきみたま幸魂、くしみたま奇魂……「大人しくしろお！」」

友奈が祝詞を唱えてる途中で風が割って入った。
友奈にも風にも隣にも牛鬼と犬神が現れていた。

「ええ！それでいいのお!？」

友奈たちが叫ぶ中、海斗が解説を挟む。

「要は魂が籠ってりやあ、言葉は問わないんだよ」

「早く言つて、下さいよ〜！」

樹がまたもや叫んでるが、海斗は苦笑をしながら上を向く。
ヴァルゴの周りで花の様なもの舞う。

ヴァルゴの中からナニカが出で来る。

「何か、ベロンと出てきた！」

「封印すれば、御霊が剥き出しになる。あれは云わば心臓、壊せばこっちの勝ち」

「ねえ、お姉ちゃん。何か数字減ってるんだけど。これなに？」

樹の言う通り、下に魔法陣のようなものがあり、そこには数字が書かれていた。

「ああ、それ私たちのパワー残量。0になるとこいつ押さえつけることが出来なくなつて、こいつを倒す事が出来なくなるの」

「ええ！つて言うこと。」

「こいつが神樹様にたどり着き、世界が終わる！」

風の話の聞き終わった友奈が跳ぶ準備に入る。

「それなら、私が。「いや、俺が行く！」」

友奈が跳躍をして、ヴァルゴに近付く前に海斗が先に跳んだ。

「信長、行くぞ！」

「おう、任せとけ小僧！」

海斗の短い問いに、信長も二つ返事で返す。

海斗の周りに白い光が集まり、発光するような錯覚が見える中、信長の恩恵で強化された力で思いっきり御霊を刀で切り裂く。

だが御霊も固く一撃では壊れてくれない、すこし切れ目が入った程度だ。

「だったら、もう一発！」

ヴァルゴの頭部らしき場所に跳び、そこを踏み台にしてもう一度御霊に切りかかる。上段から振り下ろすような攻撃をもろに喰らった御霊は、切れ目が広がっていく。それを海斗は見逃さず、止めを刺す。

「これで！詰みだ！」

甲高い銃声が響き渡り、御霊が壊れる。

その瞬間ヴァルゴ・バーテックスも砂になって消えていく。

「枯れてる！」

友奈の声で風や海斗が気付く。

「少し遅かったか」

「長い時間封印していると、神樹様が枯れて現実世界に悪い影響が出るの。今回は説明に時間を掛け過ぎちゃったから、次回からは気を付けましょう」

風がそんな話をする間に、樹海化が解け現実世界に戻る。

「あれ？（ここ）学校の屋上？」

気が付くと、何故か学校の屋上に居た。

「神樹様が戻して下さったのよ」

友奈と海斗は辺りを少し見渡す。

美森を見つけた二人は、駆け出して彼女の下に行く。

「あ、東郷さん！」

「姉貴！」

「友奈ちゃん、海斗」

「大丈夫？怪我はない？」

「大丈夫よ、それより二人は大丈夫なの」

美森はあまり大丈夫とは言えない、だが親友と義弟を心配させまいと少し強がっていた。

「うん！もう安全なんだよね、海斗君」

「ああ、そうだな。1日2度は攻めてこないはずだ」

友奈と海斗がもう安全だということを伝えると、美森は見ても分かるくらいにホツとしていた。

そんな中風と樹が集まってくる。

「ほら見て！」

屋上から見渡す街の景色は日常そのものだ、まるでさっきの戦いが何でもないかのよう
うに。

「みんな、今回の出来事気付いてないんだね？」

「そっ！他の人からすれば今日は普通の木曜日。アタシたちで守ったんだよみんなの日常を」

少し誇らしそうに、風が話し出す。

「よかった」

「ちなみに世界の時間は止まったままだったから、今はもう授業中だと思う」
友奈が安堵の声を漏らしたと思っただけの瞬間、風の口からヤバイ言葉が聞こえていた。

「えええ！」

友奈と樹は驚くが、海斗と美森は驚かない。

海斗は事前知ってるからだし、美森も持ち前の回転の速い頭で薄々分かっていたの
だろう。

「まっ！後で大赦の方からフォロー入れてもらいましょう。」

フォローの声が聞こえて驚いていた二人も、少し顔色が柔らかくなる。

「怪我は無いわね、樹」

「うん、お姉ちゃんは何ともない？」

「平気平気！」

樹の質問に笑いながら何でもないように返す。事実なんともないのだろう。

「ふえええ！怖かったよ〜お姉ちゃん。もう訳分かんないよ〜」

泣きながら抱き着いてくる、妹を撫でながら優しく包み込んでいく。
理想の姉妹像と言うのは、こういうものなんだろう。

「よしよし、よくやったわネ。冷蔵庫のプリン半分食べていいから」

「あれ元々、私のだよ〜」

泣きながらもツツコム姿は案外シユールだった。

姉妹が抱きしめ合う中、美森はどこか、浮かない顔をしていた。

その日は部活がお開きとなり、家に帰っていた。海斗は自室である人に電話を掛け

ている。

『春信さん、今回の戦闘データはどうでした？参考になりましたか？』

『ああ！大分参考になったよ。夏凜もあと一ヶ月もあれば戦線入りすると思うから、それまでは頑張ってほしい』

『あの、春信さんはいいんですか！夏凜を勇者にするなんて！』

(春信さんは最高にシスコンだ、妹が世界で一番大切だと言っていた……なのに……)

『嫌だよ、でもね。僕は夏凜にも死んで欲しくないように、君たちにも死んで欲しくないんだ。だから、夏凜を万全の状態にしてそちらに送りたい。みんなが生きてお役目を終えられるように』

『そうですか、分かりました。これからもよろしくお願いします！』

『ああ、それじゃあ切るね』

電話が切れたのを確認すると、海斗は春信さんに尊敬の念を送りながらも園子にメールを送った。

差出人：東郷海斗

宛先：乃木さん家の園子

件名：ありがとう

今回の件は事前に教えてくれてありがとう。お陰で、上手く対処することが出来た。

メールを送って3分程しか経っていないのに、返信が来た。

「早すぎだろ、園子の奴。」

差出人：乃木さん家の園子

宛先：東郷海斗

件名：どうもなんだぜ

別にお礼はいいのにく。メールするなら直接会って話したいぞ！

P. S. 今度来るときは焼き鶏か唐揚げ持ってきて！

(相変わらずだな、まあ良いか。)

海斗は今日、1日を振り返って。

色々な反省点を見つけ出し、パソコンのWordで纏める。

それが彼の日課だ、日記と言っても良い。

そんなことをしている内に夜の11時を回っていた。

「今日は、疲れたしもう寝るかな」

誰に言ったでもない独り言を呟くきながら、海斗は布団に入ろうとした。

その時、突然襖が開いた。そこに居たのは美森だった。

「あの、海斗」

「こんな遅くにどうしたんだよ、姉貴は」

美森は遅い時もあるが、この時間には何時も寝ているのだ。

「少し眠れなくて、一緒に寝てもいいかしら？」

「べ、別にいいけど」

「ありがとう」

美森はベッドの近くに車いすを寄せて、腕の力を使って体をベッドに移していた。

海斗は見ているだけで、助けはしない。

これは美森が今後生きていく為に必要な技術だと知っているからだ。

「海斗も早くきて、寝ないと明日起きれないわよ」

姉に言われた弟は従うしかなく、渋々ベッドに入った。

「少し狭かったかしら？」

「そりやまあ、シングルベッドだからね」

ベッドに入って数分話をしたら海斗は電気を消した。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言い終わると、美森が海斗に抱き着いて来た。

海斗は反応はしない、表向きにはだが。

（当たってる、当たってるから。美森ちゃんの大きすぎるお胸が、これ大丈夫、絶対心音聞こえてるよ。）

（凄い心音、バクバク言ってる。ちゃんと女の子として意識してくれてるんだ。はっ！
私はなんてことを、でも…暖かいな海斗の背中。）

こうして美森は深い眠りに落ちた。

海斗が悶々として眠れなかったのは言うまでもない。

第四話 「あなたを守ると言う思い」

(結局、一睡もすることが出来なかった。)

海斗は学校での授業を真面目に受けつつ、開いた時間に睡眠時間を補っていた。

お昼休み、みんなが机をくっ付けながらご飯を食べ始めているが、彼は一人机に突っ伏していた。

そんな所に陸斗と友奈と美森が寄ってくる。

「おーい、海斗。生きてるかー?」

「生きてるよ、眠いから昼飯はパス」

海斗のぶつきらぼうな返しにビクともしない。

陸斗は海斗の前の自分の机をくっ付ける。

友奈と美森も近くのクラスメイトに机や椅子を借りて海斗の席に付ける。

「いや…、何で要らないって言ったのに机を合わせるんだよ」

「海斗、母さんの作った料理をダメにするの？」

美森の刺し殺す様な視線のお陰で、海斗は完全に目を覚ます。

「分かったよ！…本当は部活前に食べる気だったのに」

海斗の眩く様な囁きを無視しつつ、ご飯を食べる。

「わあー！東郷さんちのお弁当美味しそー！」

友奈が目を少し輝かせながら、海斗と美森の弁当を椅子から腰を浮かせて覗き込む。

「あー！ごめん！食べ辛いよね」

「別にいいのよ、友奈ちゃん。そうだ、私のおかず少しあげるわ」

「ワイー！ありがとう、東郷さん！」

友奈と美森が楽しそうにしてるのを尻目に、海斗は黙々と弁当を口に運んでいた。

「女子はいいね。そうだ！海斗、俺にも何かおかずくれよ」

陸斗がその言葉を言った途端、顔をしかめて明らかに不機嫌そうになる。

「嫌だ。何で柳橋に母さんの作った弁当をやらなきやいけないんだよ」

「ケチだなく、海斗は。もうちょつと東郷さんの様な慈愛の心をもつてだな……」

「ハイハイ、ワカリマシタヨ」

陸斗の声を聞き流し、弁当を食べるのを再開する。

（何で、美森ちゃんはあんな嘘言ったんだ。）

嘘とは、今日の弁当のことだ。

今日の弁当を作ったのは美森なのだ、それなのに何故嘘を着いたのか海斗には皆目見当がつかなかった。

本当は美森はこう思っていた。

（私が作っているのを知っているのに……何で？やっぱり私のことが嫌いなのかしら……）

だから、美森は嘘をついてしまったのだ。

時刻は変わり、放課後。海斗は掃除当番だったため、少し遅れて部活に来ていた。

廊下を小走り気味に來た海斗の横を美森が通り過ぎて行く、その光景に困惑する彼の下に友奈が現れた。

「あー海斗君、先に部室に行つてて」

「お、おう、分かつた。友奈はどうするんだ？」

「今、出て行つた東郷さんのこと連れ戻してくる」

そう言つて、彼女は足早に駆けて行つた。

海斗はそれを見送りつつも、勇者部の部室である家庭科準備室にスライド式のドアを開けて中に入る。

「東郷海斗入ります。」

部室内は、備品が色々あるが纏まっている。

入った手前には大きなテーブルがあり、その奥には連絡黒板がある。

シンプルな部室だ。

黒板の近くには学校でよく見るようなデスクトップパソコンがあり、勇者部のホームページやらをそれでやっている。

基本的に弄るのは海斗や美森だけだが。

いつもなら、そんな光景が広がっているが今は少しシユールな感じだ。

「如何にして、東郷先輩とお姉ちゃんが仲直りするか……」

樹がテーブルの上でタロットカードを並べて、占いを。風と言えば。

「えつと、説明足りなくてごめんね！ 軽すぎてもつと怒っちゃうかな。本当にごめんなさい！……低姿勢過ぎるな」

どうやら美森を怒らせてしまったらしく、犬神に向かつて仲直りの練習をしていた。

「何か、大変そうですね。犬神とか見えない人からしたら、超シユールな光景でしたよ。」

海斗はバツクを椅子に置き、風に話しかける。

樹ちゃんは集中してるのか、まだ海斗の存在に気付いていない。

「そうなのヨ、東郷のこと少し怒られちゃったみたいでさ。樹、どうするべきか占えた？」

「か、海斗先輩、こんにちわ。待ってて今、結果出るよ」

やっと海斗の存在に気付いた樹が少し驚きながらも、挨拶をする。

そして占いの結果がでる。

「何これ！女子力高そうな絵ネ。」

そんなことを言ってる風を見ながら、海斗は少し考え事をしていた。

（風先輩が言ったのは多分お役目のことだな。）

海斗たちのお役目である、勇者は神樹様の力を借りて12体いる星座の名を冠したバーテックスを倒す事。

その際に、神樹様を守りつつ戦うことが大事なのだ。

神樹様は四国の恵みであり、壁を作りバーテックスから四国を守っている。

だが、防衛に力を入れすぎでは他の事が疎かになってしまうため。

壁に入りやすい場所を作り、勇者たちが撃退しているのだ。バーテックスは基本的に周期的に訪れる、だが少なからず例外はある。

多分こんな感じの話をしたのだろうと思ひ、考えをやめて風達の方を見た。

そこには、不思議な事にタロットカードが宙に浮いていたのだ。

海斗や風達は知っているこの現象の名前を。

「樹海化！」

「まさかの連日？」

世界が塗り替えられていく、花卉が舞うような光景が見えた思えば、すでに樹海の中

に居た。

「三体同時に来たか、モテすぎでしょ」

「モテますね〜」

「何かツツコミ入れて下さい！」

3人とも変身を終えて、相手の出方を伺う。

今回のバーテックスはサジタリウス、スコープオン、キャンサーだ。

海斗は大赦の資料にあった3体の攻撃方法を思い出す。

（キャンサーは反射板を多数持ち、スコープオンは長い尻尾の毒針での攻撃を得意とする。たしかそんな感じだったはず、サジタリウスは円状の中心から大きい矢を口から大量の小さい矢を繰り出すんだ。ヤバイ！どうりで後方に居る訳だ。）

だが、友奈が来たのを見てそれを知らない風はもう指示を出していた。

「遠くの奴は放っておいて、まずは近くの2体纏めて封印の儀行くわヨ！」

「風先輩ちよつと待つて下さい、後方の敵は。」

海斗が言い終える前に、サジタリウスの大きな口の様な部分から大きな一本の矢が放たれる。

「はっ!?!」

大剣に当たったお陰で、吹っ飛ぶだけで済んだが直撃したら確実に意識を持っていかれるだろう。

風が着地に成功すると、それから間髪入れず小さい口から無数の針を吐き出して攻撃してくる。

「いっぱい来たー!!」

雨の様に降ってくる無数の矢を前方にいるスコープオンとキャンサーを避けて跳ぶことで全員が回避に成功する。

回避に成功すると友奈がサジタリウスに目がけて飛び出した。

「撃ってくる奴を何とかしないと。」

友奈の行動に反応して、スコープオンとキャンサーが振り返る。

キャンサーの反射板でサジタリウスから放たれた針が反射されて友奈を狙う。

「不味い！」

「友奈さん危ない！後ろです。」

「針が反射されてくるぞ、気を付けろ。」

海斗達の言葉に気付き、持ち前の動体視力と反射神経の良さで迫ってくる矢を何とか払いのける。

「あわわわわ！」

海斗は何とか落ち着きを取り戻し、冷静に戦略を練り始める。

だが、考えようと思ったその時に友奈がスコーピオンの尻尾の針で、上空に押し上げられてる様子を見て思わず叫んだ。

「友奈！」

牛鬼が精霊バリアを張つてることが分かるが、それでも海斗は叫んでいた。

友奈は上空に押し上げられた後、スコープイオンの尻尾の上を転がり落ちそのまま尻尾で吹き飛ばされてしまった。

友奈の事も心配だが、目の前に居る敵も危険だと判断しもう一度思考回路を切り替える。

またもサジタリウスの針をキャンサーが反射させて、範囲攻撃を行う。

海斗達は逃げるばかりで中々反撃の隙が出来ない。

(クソ！こんなもたもたしてたら美森ちゃんの方に敵が！)

「いつちに」

美森は怯えていた、じりじりとこちらに近づいてくるバーテックスに。

だが、それは一瞬にして怯えではなく本当の恐怖に変わる。

友奈がスコープイオンの尻尾攻撃によって美森の近くに落ちてきたからだ。

「友奈ちゃん！」

目の前で友達が化け物に襲われている、精霊がバリアで守ってくれているがそれでももしかしたら死ぬかもしれない。

そんな考えが脳裏に過った。

友奈が死ぬかもしれないと思った瞬間思い出したのは、初めて友奈と会った日のこと。

「あれ！はじめてましてかな？もしかして海斗君のお姉さんだったり？」

「あつ、はい。そうですが。でも義理なんです」

初対面の人に言うのはどうかと思ったが、美森は友奈が海斗の友達だと分かりすんなりと話すことが出来た。

「それ！海斗君から聞いてます。同い年のお姉さんが居るって。歳が同じなら、同じ中学になるよね。」

美森にとって彼女は少し眩しく見えた。

「私は結城友奈！よろしくね！」

それは多分彼女の笑顔がとても綺麗だったからなのだろう。

「そうだ、この辺よく分からないでしょ？何だったら、案内するよ任せて！」
彼女の優しさを美森は忘れることはないだろう。

思い出したことで沸き上がった感情、それは……

(やめろ……)

「やめろ……」

怒りだ。

「友奈ちゃんを虐めるなー!!」

叫ぶと共に、スコーピオンの尻尾が美森に向かって突き刺さる。

「姉貴ー！」

近くにやって来てきている海斗の叫ぶ声が木霊する中、美森の精霊である青坊主のバリアによって守られていた。

彼女はまだ勇者システムを使用していないのに運が良い。

「私、いつも友奈ちゃんに守ってもらってた」

スコープピオンは美森のバリアを簡単には破れないと判断したのか攻撃を中断する。

「東郷さん」

友奈が何とか起き上がる。

「だから、次は私が勇者になって友奈ちゃんを守る」

美森の周りに朝顔の花弁が舞い始める。

花卉が舞い終わるころには変身は、終了して不自由な足の代わりにリボンを使って立っている。

美森が変身した姿は、とても美しい。友奈と海斗が口を揃えてそう言った。

「綺麗……」

「綺麗だ」

(でも、美森ちゃんが戦いに参加したからには絶対に守らないと！)

決意を固める海斗の傍で美森はハンドガンの様な銃を持って佇んでいた。

第五話「姉弟のコンビネーション」

変身を終えた後の美森の心は安定していた。

(どうしてだろう？変身したら落ち着いた。武器を持っているから？)

疑問を残したままではあるが、美森は攻撃を始めていた。

彼女の隣には精霊である刑部狸が浮かんでいる。

武器はハンドガンなのだろう、放った弾丸は的確にスコープオンの尻尾を破壊していた。

「もう、友奈ちゃんには手出しさせない」

言い終えた、美森の手からハンドガンと刑部狸が消える。

次の瞬間にはまた別の精霊である、不知火とショットガンのような散弾銃が二丁現れる。

スコープオンの額ともいべき部分に散弾銃特有の広がるような、小さい弾が当たっていく。

二丁の銃を何の迷いもなく撃つていく、撃つごとにコッキングという銃身を回転させて銃弾をリロードする動作を入れて、出来るだけ間を入れず銃を撃つ。

「凄い東郷さん、これなら……」

「何で、コッキングなんて動作をさも当然のように出来るんだよ……」

友奈からは羨望の眼差しが美森に送られる。

対して海斗からは呆れと諦め交じりの視線が送られてくる。

こんなことを言っている海斗も大赦の訓練施設で、火縄銃を片手で扱うために訓練をしていたので人の事はあまり言えないのだが……

一方でサジタリウスとキャンサーに苦しめられていた。

それもこれも、キャンサーの反射板を中々攻略出来ないのが問題なのだが。

バーテックス二匹の猛攻の中、何とか二匹の攻撃を躲しつつ樹海特有の太い幹に逃れる。

「ああ、もう！しつこい男は嫌いなものヨ」

「モテる人っぽいこと言っていないで、何とかしようよお姉ちゃん」

犬吠埼姉妹が敵の攻撃を隠れてやり過ごす中、明後日の方向から物凄い音を立てながらキャンサーの反射板にスコープピオンが落下してくる。

大方、誰かに吹っ飛ばされたか投げられたか、こんな事するのはこの部に少くない。

「そのエビ運んで来たよー！」

「サソリでしょ！」

「どっちでもいいから」

友奈の発言に風がツツコム、そんなアクションを挟んで間もなく美森と海斗が友奈に追いつく。

「東郷先輩！」

樹の声が樹海に響く、その声はいつもより少し高く「嬉しいんだろぅなあ」なんて感情を海斗でも読み取ることが出来た。

「遠くの敵は、私が狙撃します」

美森の声には覚悟が満ちている、戦って守るという覚悟が。

「東郷……、戦ってくれるの?」

風の問いに確かな頷きをもって返す美森、部室で言い争っていた時のような暗い空気はもうない。

「援護は任せて下さい!」

その言葉の通り、美森は3体の精霊を従えてスナイパーライフルをもち狙撃の体制に入る。

「わかった。手前の二匹纏めてやるわよ。散開!」

「オーケー!」

「了解！」

風の号令に反応して海斗、友奈、樹が返事をする。

「不意の攻撃には気を付けて！」

「はい！」

美森の警告に風以外の三人が返す。

「アタシのより返事が良い」

風に嘆きはみんなには聞こえていなかった。

美森が見据えるの後方に陣取る、サジタリウス。

少しの間見つめ合うとサジタリウスが大きな口の部分から大きな矢を射出する、美森もそれに合わせて引き金を引く。

銃弾と矢が衝突した瞬間激しい爆発が起こる。美森はそれに動揺せず次弾を打ち込む準備をする。

(あいつがみんなを苦しめた。……大人しくしてて——)

美森が冷静にサジタリウスに対処する中で海斗たちは封印の儀に入っていた。

「出たー!」

「こつちも」

封印の儀が始まり、スコーピオンとキャンサーが大人しくなり、御霊が外に吐き出される。

いつみても変な形だ、何故か決まって逆四角錐の形で現れる。

「私、行きます」

友奈がキャンサーが出した御霊に向かって突っ込む、だが——
「あれ?」

紙一重な感じで、すいすいと避けていく。

「せいー……やあー……このー！」

「絶妙に避けるな、あの御霊」

海斗も銃で援護しようとするが、絶妙に避ける御霊に上手く標準を定められない。

「躲して、友奈ー！」

風の声を聞き、友奈が少し後方で支援をしていた海斗の方まで退いてくる。

風は大きく大剣を振りかぶりそのまま振り下ろす。

だが、その攻撃もヒラリと躲してしまふ。

「点の攻撃をヒラリと躲すなら、面の攻撃で押し潰ーす！」

風は犬神の力を借り、大剣を更に巨大化させる。

巨大にした大剣の刃ではなく腹の部分で吹っ飛ばし、吹っ飛ばした御霊をそのまま力任せに押し潰した。

御霊を破壊した風は嬉しそうに呟く。

「ひとーっ！」

御霊を潰されたキャンサーは砂になって消える。

もう一方の、スコープピオンは御霊を分身？させることで攪乱を狙いに来た。

「何か増えたー！」

「数が多いなら、まとめてー！」

木霊の力を借り、ワイヤーを最大限増やして多くなつた御霊を全部捕縛する。

「えーい！」と可愛い掛け声を掛けてワイヤーで増えた御霊を切り裂き、最後に残つた御霊も腕の上に引っ張るようにしてワイヤー引き切り裂いた。

スコープピオンも御霊を破壊されて、形が崩れ砂に変わっていく。

「ナイス！樹！あと、ひとーっ！」

（樹ちゃんの攻撃方法って、案外エグイな……）

妹を褒める風と、内心樹の攻撃方法が一番エグイんじゃないかと思う海斗が居た。

「風先輩、部室では言い過ぎましたごめんなさい」

「東郷…」

美森の心からの謝罪だった、それを受け止める風。

「精一杯、援護します！」

「心強いは東郷…。アタシの方こそ…えっと、ホントゴメンナサイ、はい」

美森の余りの銃の腕と実力に困惑していた。

最後が情けなくなければ、完璧だったのと思わずにはいられないシーンであった。

「封印開始だ！」

海斗が力強く叫ぶ。花吹雪がサジタリウスの周りを舞う。

そして大きな口の部分から、御霊が出て来る。出てきた御霊はバーテックスの周りを回り始める。

「この御霊！」

「早い！」

「くっ!?」

「姉貴、合わせて！」

「ぶちかませ、小僧！」

海斗が信長の力を借りる。

動体視力、情報処理能力、五感や腕力や脚力。身体に関する全てが飛躍的に上昇する。そのお陰で、海斗には本来なら高速で動き回っている御霊がまるで止まっているように見える。

そこから、自分の銃弾の速さと御霊が動き回る速さを計算し、タイミングと予測する。

(∴ 1、2、3 —— 今だ！)

「イツケエ！」

海斗の銃弾が御霊に当たり、その攻撃で隙が出来る。

美森はこの隙を見逃すはずもなく正確に銃弾を当てた。

「海斗先輩！」

「撃ちぬいた！」

御霊は徐々に動きが遅くなり、バーテックスの体は砂に変わっていく。

「状況終了。みんな無事で良かった……」

樹海化が解け、世界は下に戻っていく。

「海斗君も東郷さんもカッコよかったなあ。ドキッとしちゃった。」

友奈は美森に抱き着きながら、先程の戦いを思い出していた。

高速で動く御霊に対して海斗が足止めし、美森がフィニッシュ。中々のコンビネーションだった。

「でも、本当に助かった。東郷、それで——」

「覚悟は出来ました、私も勇者として頑張ります。」

風の言葉の先が分かっていた美森は、その言葉を遮り自分の決意を口にする。

「東郷…ありがとう。一緒に国防に励もう！」

「国防…はい！」

美森に国防と言う言葉は響く。

護国思想の強い美森からすれば、国防に励むと言うのはパワーワードに近い。

「そう言えば、友奈ちゃん課題は？」

この言葉が一気に、友奈を現実へと巻き戻す。

「課題明日までだった！アプリの説明テキストばっかり読んで」

「抜けてんな、友奈は」

「そこは守らないから頑張つてね！」

「そんなあ〜！」

「勇者も勉強も両立。」

そんなこんなで、今回の戦闘も終わりその日はお開きになった。

その日の夕方ごろ、海斗の部屋で。

海斗はパソコンで今日あったことをWordに纏めていた。

ベットの近くのテーブルで友奈と美森が話しながら課題に取り掛かっている。

「海斗君また、日記書いてるの？」

「そうだよ。一樣今回の戦闘での不安点とかかな？」

「大赦に送っているの？」

美森の声が少し下がったのが分かる。

「まあね、後は少しだけ勇者システムの違法アップデート」

「違法なのを堂々と宣言していいの?!」

「いいんだよ別に、弄るのは些細な部分だし。」

(ホントは、全然些細じゃないけど…まあいいでしょ)

ノリが軽い、そんなこんなで時間は過ぎていく。7時を過ぎるころには、友奈の課題も終わり三人とも駄弁っていた。

「本当に今日の二人のコンビネーションはカッコよかったよ!」

「別に…あんなのは普通だ。」

「いきなり、合わせてと言われた時は驚いたけど。案外何とかなるものなのね。」
いきなりカッコイイと言われると、流石に照れてしまう。

海斗もまだまだ子供なのだった。

「そう言えば、海斗君の信長ってどんなサポートしてくれるの?」

「補助か? 簡単に言うとなんか身体強化かな。細かくすると、動体視力だったり情報処理速度、五感とか脚力や腕力を全般的に強化するんだ」

「勇者になるだけでも、十分に強化されてると思うけど?」

美森の言葉は正解だ。勇者になるだけで、超人なんてなんのそのみたいな化け物じみた身体能力になる。

「それじゃあ、足りない時もある。今回だって、あの状態の御霊を撃ち落とすのは至難の業だ」

「私は出来たわ」

「だろうね、何となく分かってた。でも、協力できるときは協力すべきだろ。姉貴もみんなも」

今回の戦いでも改善点は残っている、それを減らせるようにしよう。彼は奮起した。

第六話 「不思議な出会い」

前回の襲撃から一週間、今日も今日とて勇者部は活動中。
海斗は一人、生徒会室に呼ばれていた。

「で！今回の依頼なんだが」

「おお」

生徒会室の奥に座るのは、海斗の親友でもある陸斗だ。

彼は、生徒会長である。去年の生徒会選挙に、ノリで参加し見事に生徒会長に選ばれた。

ここだけ聞くと、ちゃらぼらんにか見ええない。

だが、本人の成績は非常に高く海斗や美森とそう大差ない点数をいつも叩き出している。

「神樹館の中等部の生徒会との、対談に付き合っただけだ」

「神樹館？……まあ、良いけど。それで、こっちに呼んだのか？」

「バツカ言え！あの学校はお嬢様やお坊ちやまが行ってるんだぞ、気軽に呼べる訳ないだろ」

神樹館は海斗も行ってたことがある、確かにあそこはお嬢様やお坊ちやまのような子たちが行く学校だ。

「俺たちがあつちにも行けないから、中間地点にあるファミレスでやるんだよ」

「はっ?!そつちの方が大丈夫なのか？」

「お相手さんが、それでいいって言ってくれたんだ。大丈夫だろう……多分」

海斗は諦め交じりのため息を吐き出し、この親友の頼み事を聞いたのは間違いかもしれないと思い始めていた。

「そう言えば、海斗はどこ行ったのヨ？」

「ああ！海斗君ならさつき、個人依頼が来たから今日はそっちに行くって言ってました」

「個人依頼ですか…。誰からなんですか？」

「私と友奈ちゃんのクラスの柳橋君ね」

美森から陸斗の名前を聞き、風が思い出したように声を出す。

「あく、確か生徒会長もやってる子だったわよね」

「あ！私も聞いたことあります。何でも、一年生から生徒会長をやって色々改革をしてるとか」

「そうね、彼は凄いわ。去年は、体育祭でやる組体操の危険な項目を全部取っ払ったとか」

「何か、教室にいる時とは違ってピシッ!としているよね」
こんなことを言われてる彼だが、今の現状はというと。

結構堅かった。

「よろしくお願いします、讃州中学生徒会の会長。柳橋陸斗と言います」

「ご丁寧にも、同学年だからもつと砕けた感じでいいよ。神樹館中学二年、生徒会長の高嶋優希たかしまゆうきです」

あちらの生徒会は全員女の子だ。

だが、それよりも海斗には耳を疑う言葉が聞こえた。

「えっと、今日は補佐として来ました。讃州中学勇者部二年、東郷海斗です」

「ご丁寧にも、じゃあ座って話しましょうか」

優希がそう言って、座るのを促す。

海斗と陸斗はおずおずと座る。座った後に、他の役員も紹介された。副会長の土居球音どいたまね（二年）、書記の伊予島梓いよしまあずさ（二年）、会計の郡千夏こおりちか（三年）、この四人が生徒会メンバーである。

戦慄した、四人とも初代勇者の七家の一つだ。身震いがする。一步言葉を間違えれば死ぬ、そんな予感がした。

だが、そんなことは起こらない。着々と時は進み、五時半頃には会議は終わっていた。海斗も補佐はしていたのだが、正直陸斗一人でも十分な気がして少し不機嫌になつてしまう。

（この会議、絶対俺要らなかつただろ。……今度、何か奢らせてやる。）
そんなことを考えている間に、陸斗が帰る準備を済ませていく。海斗もそれに合わせて、帰る準備をし始めるが……

「ごめん！海斗君！もうちよつとお話したいんだけどいいかな？」

「え!?わ、分かった。スマン柳橋、先帰っててくれ」

「お、おう、じゃあまた明日」

陸斗は足早に外に出る、この一時間程で分かったことがある。

多分、陸斗は梓のことが好きかもしれないということだ。

まあ、海斗にとってそれはどうでも良いので考えを捨てて話に入る。

「話って何なんだ？」

「それはね……、あなたのお役目のこと」

背筋に嫌な汗が流れる、取りあえず長くなりそうなので美森にNARUKOで一報を入れておく。

そこからは、長い長い話し合いが始まった。

分かったのは、優希も球音も梓も千夏もお役目を担う勇者候補だったということ。
「タマたちが知ってるのは、こんなところだ」

「何か、不備がありましたか？東郷さん」

「いや、俺が大赦で調べやお役目の内容や、実際に見たことも一致してる」

「……そう、東郷君も……その……気を付けなさい」

「そうだねぐんちゃん言う通り」

四人とも、格式の高い家の生まれの為か所作が日々綺麗だ。球音は除くが。

四人には事前に、神樹様の状態や勇者のことを伝えていたらしい。

全くもって、理不尽だと思った。

友奈たち視点から見れば、今回のお役目はいきなり巻き込まれたもので事前の情報など一切なかった。

それでも、この四人を嫌えないのはこの子たちがイイ人だからだろう。

優希は社交性に溢れているし、球音は女子と男子の壁を感じさせず楽しく会話が出来る。梓も大人しいが、海斗の話を聞くときは真摯に受け止めてくれていた。千夏はあまり会話に参加しなかったが、それでも言う言葉の節々から優しさが感じ取れる。

この人たちが海斗は嫌うことなど出来ず、最終的に連絡先まで交換して何かあったら

相談して欲しいと言われてしまった。

勇者に選ばれる人には、それなりに理由がある。

海斗はそれを今日知ることが出来た。

それは心であり、勇者になる者はその心が勇者だということが分かった。

海斗が少しウキウキ気分で家に帰ると、玄関の前には美森がいた。

「姉貴？なにやってんの？」

「なんやってんの？じゃないわよ！ちゃんと電話に出なさい、今日は父さんも母さんも出かけてて家に居ないからご飯を私が作ると言ったじゃない。…もう」

「ご、ごめん！会議中から通知切つててそのまま、まさか電話くれてたなんて」
海斗の謝罪に美森は笑顔で、こう返した。

「じゃあ、いっしょにご飯作りましょうか」

「りょーかい！じゃあ、中入ろうか」

恐らく、先程までは演技だったのだろう。美森が大好きな人との二人きりの時間を嫌うなんて、ありえないのだから

その後は、姉弟水入らずで健やかな時間を過ごした。

「こんな日が、毎日続けばいいのに」、と二人とも思ったが言葉にはしない。

この時間がとても大切だと、分かっていたから。

第七話 「偶然の再会」

先日の対談から一週間、姉弟の仲も自然と昔のようになってきた。いつも通りの日常。

学校に行き、友達と喋り、授業を受け、部活をする。

そんな当たり前のような日常。

けれど、今日だけは何か違った。

「神樹館学校からの依頼？」

「そうなのヨ、何か飼育小屋で飼ってたウサギが脱走しちゃったらしくってさ」

「そうなんだよ、でね私たちの所に依頼が着たんだ」

「でも、それだったらあっちの奴らに任せればいいじゃないか。何でうちなんか？」

「それには理由がちゃんと書いてあったわ」

美森が全員にパソコンに届いた依頼書の内容を見せる。

そこには、依頼主である中等部生徒会長の優希の名前が見えた。

「依頼主は優希なのか…はあ、分かったその依頼を受けよう」

依頼の理由は、校舎が広すぎて人手が足りないことからの救援要請のようなものだ。

(運が良かったら…アイツに会えるかもしれないしな)

「そうと決まれば早速準備をして行きましょう！」

何だかとても乗り気の樹を見て、少し驚く海斗なのだった。

電車に揺られること数十分、歩くこと数分ようやく校門が見えて来た。

校門の前には、懐かしい顔を見る。

銀色の髪に碧色の瞳、茶目つ気のある笑顔が特徴的な美少女。

名前を柊^{ひいらぎあかり}明^{あかり}と言う。

「久しぶりー！海斗ー！すm——」

「よう！明！久しぶりだな！」

海斗は会った瞬間、不味い事を口走りそうになった明の声を自分の声で掻き消した。

海斗は明に近づき耳打ちをする。

（おい！明、美森ちゃんのことをその名前で呼ぶな！今は美森で良い）

（了解、了解！それにしても海斗背へ伸びた？）

こんな感じで昔のような会話をしつつみんなの所に戻った。

「お待たせしました！神樹館学校中等部二年！生徒会副会長の柊明です！どうぞよろしく」

「ご丁寧にも、讚州中学勇者部部长。犬吠埼風よ！こちらこそよろしくネ！」
風と明の挨拶が終わり、その後に明が美森に声を掛ける。

「久しぶりだね、ミモリン」

「久しぶりね、アカリン」

二人ともあだ名で、呼び合う。久しぶりの再会に花を咲かせていた。

「あのお、海斗先輩？あの柘さんって言う人と東郷先輩や海斗先輩ってお知り合い何ですか？」

「うん、俺が昔神樹館に行ってたことは知ってる？その頃の知り合いなんだ、アイツはあんな性格だけど柘家は一応七家の一つだからね、中々友達が出来なくてさ」

「それで、最初に仲良くなったのが海斗先輩と東郷先輩な訳ですね！」

「まあ、そんな感じかな？」

疑問形なのは明自身、友達がいらないことを何とも思っただけなく偶然最初に声を掛けて遊ぶようになったのが海斗や美森だったというだけなのだ。

今まで会話に入って来なかった友奈が、いきなり会話のなかに入る。

「何か、そういうのつていいよね！」

「だな、俺もそう思うよ」

あまり言葉がなくても、心は通じ会っているのが分かるそんな会話だった。

「友奈！海斗！樹ー！早くしないと置いてくわヨ」

風の声を聞き、三人は校門を跨ぎ神樹館学校の中に入った。

移動はしたものの、時刻はまだ四時前。

外にはまだ太陽がいて、「まだ仕事は終わってない！」と言わんばかりに輝いている。

海斗たちは一度、生徒会室に荷物を置いてから搜索に掛かるということで、明に生徒会室まで案内されていた。

出会う生徒が口を揃えて「御機嫌よう」だの「こんちやー！」だの個性の強い挨拶を受けて、埃一つ落ちてない綺麗な廊下を歩いていった。

廊下に飾ってある、生け花や絵巻はそれだけでも相当の価値がありそうなものばかり

だ。

神樹館に通っていた海斗と美森は落ち着いているが、初めて来た風、樹、友奈は辺りを不自然な位キョロキョロ見渡していた。

それも好奇心によるものなので、しようがないといえましょうが、流石にやりすぎだと海斗は思っていた。

「着きました、ここが生徒会室です」

扉を開くと、そこにはまるで都会にあるオフィスのような空間だった。

一人一人が自分のスペースをちゃんと確保できるようなデスク、事務仕事用に揃えられたであろう最新式のデスクトップパソコン、更に更に給湯機やティーカップに茶菓子などの物があり、最終的には書類が入ったタンスの横に薄型テレビと家庭用ゲーム機という明らかに私物の物まである。

はつきり言おう、明らかに生徒会室と呼べる代物ではない。

だが、そこにはつい一週間前に顔を合わせたメンバーがいることを認識し、海斗はこ

こが生徒会室だと実感した。

「よお！久しぶりだな海斗！」

「久しぶりですね、海斗さん」

「久し…ぶりね、東郷君」

「久しぶりだね！海斗君！」

「…ああ、久しぶり」

（ヤバイ！美森ちゃんの視線が痛い！何かもうその視線だけで俺のこと殺せそうなんだけど！）

その後は、自己紹介をして一通り依頼内容の確認もした。

美森は生徒会室に残り書類整理の手伝いをする、ということとで検索メンバーは友奈・海斗・風・樹・明の五人となった。

球音も行きたいと駄々を捏ねたが、優希から捌ききれない量の書類を渡され「それが

終わったら行ってもいいよ」と言われ奮闘している。

海斗は、この学校のことはそこそこには詳しいので一人で搜索していた。

「脱走したのは昨日って言ってたし、ここの土地の広さ的にまだ出てないと思うんだけどな……」

神樹館学校の敷地は兎に角広い。

ここの生徒でもあまり敷地に関して詳しく知ってないと、最悪学校内で行方不明者が出る。

歩き回ること五分程だろうか、突然電話が鳴った。

海斗は急いで電話を取る。

『海斗君！今どこ？』

『友奈か…今は中等部校舎の一階にいる。正面玄関の辺りに居るぞ』

『今ね、ウサギちゃんを追いかけて正面玄関の方に向かって廊下を走ってるの！そっちに行ったら——』

『捕まえて、だろ？分かったよ！任せとけ』

『うん！』

友奈との電話が切れた後、海斗は持ち前の視力の良さを生かし友奈が来る方向を見極めどつしりと腰を下ろし構える。

「海斗！そつちにいったよー！」

（友奈と一緒に搜索してた明の声も聞こえた、こつちの方向で間違いねえな！）
「任せとけ！」

目前まで迫って来たウサギは、海斗のことを飛び越えようとして跳躍した。だが、海斗もそうなることは予測済みだ、タイミングを合わせて跳躍する。

そして――

「痛ってー！姉貴！染みる、傷に染みてるから！」

「男の子でしょ！これくらい我慢しなさい」

結局の所ウサギを捕まえるのには成功したが、運ぶ時に盛大に顔をや腕を引つ掻かれてしまったのだ。

運び終わった今は、美森に手当てを受けている。

「相変わらず仲イイね！ミモリンと海斗は」

「まあ、最近はな」

「そうね、やっと少しづつだけ戻れてきたのよ」

「うんうん！何か最近の二人は息ピッタリだよね！」

そんな話をしてるちに、依頼完了の報告を風と優希が職員室に行った。

「にしても、昔の三人ってどんな感じだったんだ？」

球音の問いに明が答える。

「ただの親友だよ、本当に大切な私の親友」

「…何か、そう言われると素直に照れるな…」

「そうね、アカリンにそう言ってもらえて嬉しいわ」

この後も少しこの話が続いた。

二〇分程で話は終わったのか、職員室に行った二人が帰った来た。

「今日はもう撤収するわヨ！」

「もうそんな時間なんだ、もう少し梓ちゃんとお話したかったのに…」

「じゃあ、連絡先交換しよ！樹ちゃん」

このやり取りを見守る風は「家の妹もこんなに遅しくなって」と呟いていたがみんなは聞かなかったことにして流していた。

家に帰って来たら、海斗は速攻で美森の部屋に連行された。

「で！何で私が怒っているか分かるかしら？」

「……えっと、女の子の知り合いが増えたのと言ってなかったから？」

「それもあるけど。私に何か隠していることがあるんじゃない？」

「っ!?!……どうしてそんなことを？」

「勘よ」

それだけで、ここまで分かってしまう美森がおかしいのか。

それとも、分かりやすい海斗が悪いのか。

恐らく、両方の可能性が高いが。

「何にもないよ」

「本当に？」

「ああ」

「そう、ならいいわ」

美森の許しが出たので、夕飯までは自室で寛ぐことにした。

「なあ、坊主？」

「どうしたんだよ、急に出てくるなんて珍しいな信長」

急に出て来た信長に、少し驚きつつもキッチンと対応をする。

「話さないのか？」

「今話した所で意味がないよ、もっと後にならないと」

「お前が話さないなら、別にいい。だが、どんな選択も後悔はするなよ」
信長の言葉が胸に刺さる。

ふと、海斗は窓から空を見上げた。

「月が綺麗だな、坊主」

「そうだな」

変な意味はありはしない、ただ月を見た感想を言ったただけだ。

時刻は午後七時過ぎ、見えた月は三日月。

海斗にはその月が何故か悲しんでいるように見えた。

第八話 「ツバキの勇者」

神樹の勇者になってから一ヶ月半経った。

海斗や美森の同級生や、友達に会ってから少し。

バーテックスによる三度目の襲撃。

基本的にバーテックスの数は十二体で、全て倒せばお役目は終了となっている。

今回は一匹で、カプリコーン・バーテックスだ。

友奈がバーテックスの全容を捉える。

いつ見ても、オカシイ容姿をしているがそれは問題ではない。

「来た……」

少し離れた場所で狙撃の構えをしている美森がスコープを覗き、敵を観察する。

「……あれが、五体目」

風も音頭を取り始める。

「落ち着いて。ここで迎撃するわよ」

風の言葉にみんなが頷く。

「一か月ぶりだから、ちゃんと出来るかな？」

友奈が少し不安げな声を出す、樹がフオローを入れる。

「え、えっと、ですね……ここを、こうこう」

「ほう、ほう」

友奈と樹のやり取りを見つめる海斗、今日はちよつと様子がオカシイ。

「ええーい！成せば大抵何とかなる！四の五の言わず、ビシツとやるわよ！」

「は、はい！」

風が声を掛ける中、海斗だけが上の空だ。

「勇者部ファイトー!!」

「おおー!!」

何かオカシイ、先程から海斗だけが反応しない。

友奈が一早くに気付き、声を掛ける。

「海斗君?大丈夫……?」

海斗は友奈の呼びかけでやっと気付き、敵に視線を向ける。

「悪い、ボーっとしてただだよ。心配な——」

その時、海斗の声が爆発音に掻き消された。

全員が驚く、友奈と海斗が同時に美森に叫ぶ。

「東郷さん?!」

「姉貴か?!」

友奈と海斗の問いに、美森は静かに答える。

「私じゃない……」

空から、赤い勇者装束を着た女の子が落ちて来た。

「チヨロい!!!」

その女の子を、海斗は知っている。

(やっとな来たか……夏凜)

だが、それ以上に海斗はこう思った。

「本当に、空から女の子が降って来た……」

「海斗! バカ言ってる場合じゃないでしょ!」

風がツツコミが聞こえるが無視して、夏凜の戦い方を見る。

基本的には海斗の戦い方と似ている。

二刀の駆使して戦うのが夏凜の戦い方だ、海斗は何度か組手をしたことがあるので知っている。

刀は何本も召喚することが可能であり、投擲した刀を爆発させて攻撃することも可能だ。

海斗の刀や火縄銃も何本も召喚することが可能だが、夏凜のように爆発させることは出来ない。

先程の爆発もおそらくそれだろう。

だが、驚くのはそこではない。

彼女は一人で封印の儀をすることが可能だ、本当なら勇者が数人掛かりでやることを一人で出来る。

それに、加えて勇者としての訓練も行っているため、実力はピカ一だろう。だからこそその完成型なのだ。

「封印開始！」

夏凜が一人叫ぶ。手に握られた刀を投げて、それを媒介に封印の儀を開始する。

「思い知れ！私の力！」

夏凜の声に反応するように、精霊『義輝』が赤く光り出す。

「あの子！一人でやるき……！」

そう言っている間に、御霊が飛び出す。

飛び出た御霊は、紫のガスを放出し目くらましにしようとした。

「ガス……」

「けむい……」

「何これ、見えない」

だが、
――

「そんな目くらまし、気配で見えてんのよ！」

そんな叫びと共に、御霊がXの字に斬り裂かれる。

「殲・滅」

「諸行無常」

夏凜と義輝の声が重なる、その後カプリコーン・バーテックスは砂になって消えていく。

戦いが終わりまだ樹海の中、夏凜に最初に声を掛けたのは友奈だった。

「えーつと、誰？」

「揃いも揃ってボーつとした顔してんのね。こんな連中が神樹様選ばれた勇者ですつて？」

夏凜が全員を敵にまわすような発言をする中。

「あの一……」

「何よ、ちんちくりん」

「ちん?!」

ようやく夏凜が自己紹介を始める。

「私は三好夏凜^{みよしかりん}。大赦から派遣された真正正銘、正式な勇者。つまりあなたたちは用済み。はい、お疲れさまでした」

「『え〜!』」

海斗以外の全員の叫び声が樹海に響いた。

戦いが終わった後、海斗と夏凜だけが違う場所に飛ばされた。

「お前なあ、あの自己紹介はないだろ」

「しょうがないじゃない！私はアンタと違ってアイツらと話すのは初めてなのよ」
神樹が氣遣つてくれたのだろう、海斗はその氣遣いに感謝をしつつ夏凜に向かい合
う。

「二様、俺も大赦側の勇者なんだがな……」

「アンタは兄貴か安芸さん？だっけ、その二人の頼み事しか聞かないじゃない？」
それもそうだな、と納得しつつ話を戻す。

「それにしても、本当に一ヶ月で間に合わすなんて。春信さんは凄いな、まあ俺も協力し
たからか」

基本的には、海斗の端末から戦闘中のデータを貰い、それを基に夏凜の端末は調整さ
れている。

「そうそう、私もあんたたちの居る讚州中学に行くから」

「了解、そこらへんは春信さんから聞いて知ってる。アイツらは驚くかもしれんが……」

二人の会話はそこで途切れる、どちらが言ったわけでもないのに大赦の訓練室に来ていた。

「久しぶりに、組手付き合いなさいよ」

投げ飛ばしてきた木刀をキャッチし構える。

「いいぞ、手加減はしないからな？」

「抜かしなさい！コテンパンにしてやるわ！」

今日、この日も夏凜は海斗に一勝もできなかった。

担任の教師が、黒板に名前を書く中で海斗は眠りこけていた。

「はい、いいですか？今日から皆さんとクラスメイトになる、三好夏凜さんです」

担任の説明を真面目に聞く、友奈や美森に陸斗。

それに、対して昨日遅くまで大赦への報告書や日記をつけていた為に、寝不足で眠り

こけている海斗。

これで、学年トップに近い頭の良さなのは何故なのか。
甚だ疑問だ。

「三好さんは、御両親の都合でこちらに引っ越してきたのよね？」

「はい」

「編入試験も、ほぼ満点だったんですよ」

「いえ」

担任の説明でクラス内がザワつく、だが海斗は起きる気配がない。
前にいる陸斗や近くに居る友奈や美森に、呆れた目で見られる中。
説明は続く。

「さ、三好さんから皆さんに挨拶を」

担任の言葉に夏凜が反応して、挨拶を始める――

「三好夏凜です、よろしくお願ひします」

数秒で終わつたが。

時刻はお昼休み、海斗は陸斗と昼食を取っていた。

「にしても、三好さん。可愛かつたな、梓さんには及ばないけど……」

「ホント、一途だな。お前」

陸斗に転校生のことでも知りたいことがあると聞かれて、海斗は陸斗の質問に答えてい
る。

「今の時期に転校生ね、少し匂うが海斗が何も無いって言ってるなら何もないのか」

「お前なあ、ちよつと俺のこと信頼し過ぎじゃないか？」

「いいんだよ、信頼し過ぎなぐらいが丁度いい！」

陸斗のこういう熱いところが好きなために、海斗は陸斗の親友をやめられないでいる。

「まあ、お前もお役目やらなんやらで困ったら頼ってくれ。親友なんだからな」

「分かったよ、色々とありがとな……お前のそういう所にはいつも助けられる」

陸斗が分かったように声に出して「ニシシ」と笑う中、夏凜がこちらを見ているような気がした。

「そうきたか」

放課後、勇者部に夏凜が来た。風や樹に説明をし、夏凜が五人の前に立つ。

「編入生の振りなんてめんどくさい。でもま、私が来たからには安心ね！完全勝利よ！」
そんなことを言う夏凜に、美森が単純な疑問をぶつける。

「何故今このタイミングで？どうして最初から来てくれなかったんですか？」

美森の疑問に、夏凜が少しだけバツが悪そうに答える。

「私だつてすぐに出撃しなかったわよ。でも、大赦は二重三重に万全を期しているの。最強の勇者を完成させるためにね！」

得意げに夏凜が説明する中、海斗は半分夢の中に意識が飛んでいる。

「最強の勇者？」

またしても聞き慣れぬ単語に耳を傾げる勇者たち。

「そう。あなたたち先遣隊の戦闘データを得て、完璧に完成された完成型勇者。それが私。私の勇者システムは対バーテックス用に最新の改良を施されているわ。その上、あなたたちトーシローとは違って戦闘の為の訓練を長年受けてきている」

夏凜が自信満々に言い終わり黒板に箒をぶつけていると、海斗が突然目を覚ましマジレスし始める。

「戦闘データを纏めたのは俺で、実施訓練やテストに付き合ったのも俺。勇者システムなら俺も日々違法アップデートを重ねてるし、俺も訓練はお前と同じ年数かそれ以上

やっている」

そんなマジレスを風達は（夏凜以外）華麗に無視して話を進める。

「箒、黒板に当たってますよ」

「躰がいのありそうな子ね」

海斗のマジレスに気後れしてた夏凜も、風の言葉には即座に噛みつく。

「何ですって!」

「まあまあ、ケンカしないで?!」

樹が二人の間を取り持つ。

「ふん、まあいいわ。兎に角大船に乗ったつもりでいなさい」

友奈は今までの話を聞きつつ、夏凜に歩み寄った。

「そっか、よろしくね夏凜ちゃん」

いきなりの名前呼びに、少し頬を赤くする夏凜。

「いきなり下の名前」

「嫌だった？」

夏凜の言葉に、残念そうな声を出す友奈。

夏凜はすぐに顔を逸らしてしまう。

「ふん、どうでもいい。名前なんて好きに呼べばいいわ！」

「ようこそ、勇者部へ」

友奈の声に夏凜が呆気にとられる。

「は？誰が？」

「夏凜ちゃん」

夏凜の問いに対して、全く意味の分かっていない友奈。

「部員になるなんて話、一回もしてないわよ」

「違うの？」

友奈の勘違いを正すべく夏凜が話始める。

「違うわ、私はあなたたちを監視するためにここに来ただけよ」

「えっ？もう来ないの？」

何故か絶妙なラインで話が噛み合っていない気がする。

「また来るわよ、お役目だからね」

「じゃあ、部員になっちゃった方が話が早いよね！」

「確かに」

友奈の意見に美森が同意して、話が何故かまた少し飛ぶ。

「まあ、いいわ。そういうことにしときましようか。その方があなたたちを監視しやすいででしょうかね」

夏凜のその言い草に流石の風も待ったを掛ける。

「監視監視ってあんたね、見張ってないとアタシたちがサボるみたいない方止めてくれない」

風の意見はごもつともだ。

「偶然適当に選ばれたトーチローが、大きな顔するんじゃないわよ」

その言葉を聞いた海斗の雰囲気が変わる。

「もう一度、その言葉を言ってみろ。お前でも許さないぞ、夏凜」

海斗の威圧感に部室内が鎮まる中、夏凜の悲鳴が響き渡る。

何故なら、友奈の精霊である牛鬼が夏凜の義輝をムツシヤムツシヤと齧られているか

らである。

「ぎゃあああ!!!!何してんのよ!この腐れ畜生!」

「外道メ」

この二人は、中々に息が合っていた。

「外道じゃないよ、牛鬼だよ。ちよつと食いしん坊君なんだよね」

この二人のマイペースさも中々に合っている。

「自分の精霊の躰も出来ないようじゃ、やっぱりトローシローね!」

「信長以外みんな齧られてしまうから、みんな精霊を出しておけないの」
何とも不思議、海斗の精霊である信長だけは牛鬼に齧られないのだ。

海斗的には、精霊七不思議の一つでもある。まだ七つもないが。

「じゃあ、そいつを引つ込めなさいよ!」

夏凜のもつともな意見に友奈が申し訳なきように答える。

「この子、勝手に出てきちゃうんだ」

「はあ！アンタのシステム壊れてんじゃないの!？」

「外道メ」

「残念ながら、調べたけど壊れてないよ」

海斗の声がまた聞こえる、寝ているようで要所要所で起きているのは何なのか。

「そう言えば、この子喋れるんだね！」

「ええ！あたしの能力に相応しい、強力な精霊よ」

夏凜がまたも自身満々に言い放つ。

「でも、東郷さんには三匹いるよ」

友奈の言葉を受けて美森が少し端末を操作する。すると三匹の精霊が出て来た。

「えっと、できました」

夏凜の顔が固まる。

だが、負けるもんかと言い放つ。

「私の精霊は一体で最強なのよ、言っつてやんなさい」

「諸行無常」

「達観してますね」

「そこがいいのよ」

美森の言葉に乗せられる夏凜。

「でも、海斗君の信長も喋るよ」

「嘘よー！」

「それが、嘘じゃねえんだよな」

海斗が端末を操作すること数秒。

「どうした、小僧。何か用か？ん……そこにいるのは義輝か、へへえ良い精霊持つてるな嬢ちゃん！」

夏凜の開いた口が塞がらない、規格外過ぎる精霊だった。

「どうしよう、夏凜さん」

樹から呼ばれてなんとか冷静な意識、ではないが意識を取り戻す。

「今度は何よー！」

「夏凜さん死神のカード」

樹の占いは、夏凜が不吉ななにからしいと予言していた。

「勝手に占って、勝手に不吉なレッテル張らないでくれる！」

「不吉だ」

「不吉ですね」

「不吉だな」

「不吉じゃない！」

風、美森、海斗の三人に「不吉」呼ばわりされて叫ぶ夏凜。

「ともかく、これからのバーテックス討伐は私の監視の下励むのよ！」

「いや、結局の所。俺が報告書出すんだが……」

海斗の発言は無視して、友奈が疑問を口に出す。

「部長が居るのに？」

「部長よりも偉いのよ」

「ややこしいなあ」

「ややこしくないわよ!」

夏凜のツツコミ大会も終わり、風が真面目な話をし始める。

「事情は分かったけど、上級生の言葉を聞くものよ。事情を隠すのも、任務の中にあるでしよう?」

「ふ、ふん、まあいいわ。残りのパーテックスを殲滅したら、お役目は終わりなんだし。それまでの我慢ね」

夏凜は強がるように言ってみせる。

「うん!一緒にがんばろうね!」

「頑張るのは当然！私の足を引っ張るんじゃないわよ！」

夏凜は高圧的な態度を取るのに、友奈はいつも通り笑顔で寄り道に誘う。

「ねえ、一緒にうどん屋さん行かない？」

「必要ない、行かないわよ」

夏凜はさながら、クラスに理解者が居なかったらボッチコースまっしぐらの奴だ。

「もう帰るの？」

「……………」

夏凜はその言葉に答えることなく、部室を去っていった。

みんなが呆然とする中、海斗だけはため息を零していた。

（もっと素直になればいいのに。あいつも不器用だな……）

放課後、海斗は大赦本部に顔を出していた。

「夏凜はどんな感じだい？」

「うーん、まだ若干堅いですね。俺と一緒にの時はもう少しフランクに話せてると思うんですけど……」

春信に近況報告に来ていた。というのは建前で、夏凜の学校での様子を報告していた。

「やっぱり、少しずつ行かないとだめかな」

「友奈が居ますから、多分何とかかなりですよ」

こんな感じで世間話をするこゝと数分、春信の雰囲気が変わり真面目な話が始まる。

「六月十一日、君にはある場所に神託受け取りに行つて貰いたい」

「神託……ですか。でも、男である俺はそんなの」

「違う違う、君には上里のお屋敷に行つてもらいたいんだ」

上里、その名前を聞いた瞬間に海斗の脳はフリーズした。

「う、う、上里ですか……？お、俺、本家には一度も顔出したことは無いんですけど」

「いや、それがあるんだなあ。君が生後まだ間もない時に、本家の方々に挨拶で親御さんと一緒に」

春信の説明を聞きようやく納得した海斗は、その仕事を引き受けた。

だが、海斗にも疑問があったのでそれを春信に投げかける。

「何で俺なんですか？他にいくらでも神官の人は居るのに」

「上里の家は、あまり格式の低い人を屋敷に招きたがらないんだ。それで君さ、君は日守家の次期当主で今は勇者のお役目をしている。これ以上の適任はいなかったからね！」

（上里は、そんな家だったのか。ヤバイなあ、何か会う前から緊張してきた）

海斗が緊張しているのに気付いたのか、春信が肩を叩く。

「大丈夫だよ、海斗君。自信を持って、君は善い子だから上里の人も何も言わないだろう」

「そうですかねえ、ならいいんですが……。あ?!そろそろ行かないと!春信さん、今日は失礼します!」

海斗はスクールバック片手に急いで部屋を出る。

「忙しそうだなあ、海斗君。さあて、僕の方もお仕事しますか」

春信は、デスクに戻り戦闘データの編集に入る。

海斗が渡してきたデータも幾らか編集の跡があるが、流石に中学生にその作業をやるのは不味いので春信が手を入れる。

海斗に忙しそうと言っているが、彼の方が数倍忙しいということを知っている。

銀の病室に入る。彼女は今も眠ったままだ。

夏凜の端末は元々銀の物だ。

今日、海斗は夏凜の「偶然・適当」に選ばれたトリーシローが、大きな顔するんじゃないわよ」という言葉にキレてしまった。

その原因は海斗の過去にある、このことを話すには少し早いが。

銀も園子も先代勇者だった、だったら何故こんなことになっているのか。

海斗は知っている、だが話さない。

話してもきつと意味はないから。

だから、話さない。

ただ一つ言えるのは、『偶然』この一言は海斗の地雷に等しい。

『偶然』勇者に選ばれたから、その所為で友達があんなことになったすれば、海斗は怒り狂うだろう。

運が良ければ、園子はベットに寝たきりにならずに済んだのか？

運が良ければ、銀は右腕を失わずに済んだのか？

海斗は『偶然』など信じない、自分が勇者に選ばれたのも何が意味があることだと信じてる。

もし銀や園子が、勇者に選ばれたのが偶然だったなら。

何もあなるのは、彼女たちではなくても良かったのではないか？

海斗はそう思わずにはいられないだろう。

『偶然』ではないのなら、彼女たちの頑張りが無駄ではないと証明されると信じてる。

だってそうだろう？

もし『偶然』だったなら、彼女たちの頑張りは無駄だったことになる。

なんせ、誰でも良かったのだから。

だから、海斗は偶然など信じない。

夏凜が銀の端末を引き継いだのも『必然』だと信じている。

「今日さ、お前の端末を継いだ奴がうちに来たよ。それでさ——」

今日のことを銀に話した、領きや返事などされることはないのに。

だが、奇跡は起きた。海斗から言わせれば『必然』だ。

「頑張った人が報われないなんてオカシイ」と思ってる彼からしたら、この出来事は『必然』なのだ。

「……………」

握っていた左手が、軽くだが握り返されたのだ。

海斗はそれが嬉しくって、少し涙が出た。

バックを背負い急いで部屋を出る、今すぐにも先程のことを教えたい人がいる。

病院の中を早歩きで歩き、目的の場所に着く。

いつもの神官はいないので、ノックもせずに中に入る。

「園子ー！」

「あー、おひささーかーくん！」

彼女特有の、間延びした声が病室内に響く。

「さつきな、さつきなー！」

「はいはい、どうぞ。落ち着いて、深呼吸ー」

園子に言われるがまま深呼吸をして、落ち着きを取り戻す。
そして、先程起きたことを話した。

「そっか……、そんなことがあつたんだ〜」

間延びした声が続いているが、彼女の左目からは涙が出ている。

その日は、門限になるまで二人は話し耽った。

海斗も、今日は少しだけ昔にすんなりと戻れた気がした。

第九話 「最悪の神託で終着点を知る」

夏凜が部活に顔を出した翌日、六月初旬ともなれば気温も高い。

なので、体育はプールだ。

半分を男子が使い、もう半分を女子が使う。

プールと言えば水着、シスコンが酷い海斗は美森の胸に視線を送っている奴がいたら即刻排除する気でいた。

「誰も居ない……か。まあ、それもそうか」

今、男子の視線は夏凜に向いている。

女子のレーンの一つを使い泳ぐ夏凜、速さはプロも顔負けだ。

フォームも綺麗で、文句の付けようがない。

水泳部の女子が驚いていた。

「すつ……い……三好さん……これ、水泳選手並みじゃない！」

「鍛えてるから……」

水泳部からの称賛の言葉を、当然だと言わんばかりに素っ気なく言い放つ。

「ね！ね！三好さん！うちの水泳部に入らない？」

「興味ない」

部活勧誘の言葉も静かに切って捨てる。

そんな彼女に臆せず話しかけるられる者がいるとしたら、底抜けのバカかポジティブな天然のどちらかだろう。

因みに、海斗の知り合いには思い当たる者がいた。

「凄いな夏凜ちゃん！」

結城友奈である。底抜けのバカでもあり、ポジティブな天然でもある。

「みんなビックリしてるよー、すっごいねーって！」

「結城友奈……。いい勇者はね、すつごくないと世界を救えないのよ。勇者の戦闘能力は本人の運動能力に、大きく左右されるの！あんたも勇者なら、自覚を持ちなさい！」
褒めただけなのに、何故か怒られる友奈。

バカっぽいことを言った友奈が悪いのか、はたまた夏凜が堅すぎるだけなのか。

「先月勇者になったばかりだから……えへへ」

「あんた、よくバカだつて言われるでしょ？」

「実はそうなんだよね」

海斗からしたら、見ていて面白い光景だった。

「アンタ、よくそれで勇者に選ばれたわね……」

偶然などない、全ては必然の基に起こるのだ。

「今頃、夏凜が煮干しのことやらバーテックスの出現周期について話してるんだろう

なく」と思いながらも、海斗は生徒会室で呑気にお茶を啜っていた。

「お前さあ、ここに一樣生徒会室なんだけど？」

「まあまあ、俺と柳橋の仲じゃないか。生徒会の活動ブログの更新やってやってんだから、文句言わないでくれよ」

「だけどさあ。はあ、しょうがねえな俺が部活に行く時には出てけよ？」

「了解了解！」

当たり前だが、こんな会話をしている二人だが。

動かしている手は休むことを知らず、世話しなく働き続けている。

陸斗の方は四時にはここを出る為、その前には行こうと決めて仕事に集中する。

この時間の居心地の良さを、海斗は嬉しく感じていた。

（満開……みんなも聞いたんだらうか。言っても無駄だらうから、何も言わないがきつと風先輩は、後悔するんだらうな……）

夏凜が説明するであろう情報は、当然海斗も知っている。バーテックスの出現周期は基本的に、二〇日に一体らしい。そんなことを海斗は春信から聞き、資料でも見ていた。

最悪の事態が起こるまで、そう時間は掛からないだろう。

「と、ゆーわけで、今週末は子供会のレクリエーションをお手伝いします」

「具体的には？」

美森の自然な質問が樹に飛ぶ。

「えーっと、折り紙の折り方を教えたり、一緒に絵を描いたり。やることはたくさんあります！」

「それは随分と楽しそうだな」
何故か窓から海斗が現れた。

「海斗！どこから入って来てるの！」

「ごめん、姉貴！いやあ、緊急事態でさあ。今、追われてたんだよね〜」

「何をしてたんですか？」

誰かに追われるほどの緊急事態など、一体何をすればいいのか。

「三又も掛けてたやつスマホにウイルス仕込んで、遠隔操作で浮気をバラした」

「何かとんでもないことしてますね、海斗先輩！」

海斗は、別に三又の彼に興味があつた訳じゃないのだ。

ただ、三又野郎の彼女に最近浮気してるかもしれないので、個人的に調べて欲しいと言われたからやつたまで。

携帯を授業中に使った罰として没収された時に、こつそりウイルスと言うかアプリを入れて遠隔操作をして浮気の証拠を掴み、又を掛けられていた女子たちにそのことをバラしたのだ。

依頼された女の子にだけ言えば良かったのだが、ムシヤクシヤしてやったらしい。何とも言えない空間が出来ていた。

「俺も、ああなる前に気付けてよかったなあ〜」

「海斗先輩のことはスルーして、依頼の方を進めましょう」

無視である、何故か最近は何から何までがキツイと感じているのは海斗だけではないだろう。

「夏凜にはそうねえ——暴れたりない子のドッチボールの的になってもらいましようか？」

「はあ！て言うか、私もなの？」

風が夏凜に向かって入部届を見せる。

「昨日、入部したでしょう？」

「け、形式上」

夏凜の顔には少し戸惑いの色が見られる。

「ここにいる以上、部の方針に従ってもらいますからねえ」

「そ、それも形式上でしょう！私のスケジュールを勝手に決めないで！」

風の飄々とした態度に、夏凜が食って掛かる。

それを友奈が諫めるように、話しかける。

「夏凜ちゃん日曜日用事あるの？」

「いや……」

「じゃあ、親睦会も兼ねてやった方がいいよ！楽しいよ！」

「何で私が子供の相手なんかを！」

「嫌あ?」

友奈の訴え掛けるような上目遣いにより、夏凜の心の壁ATワールドと言う名の砂の城壁は簡単に崩れ落ちた。

「分かったわよ、日曜日ね。丁度その日だけ開いてるわ」

「よかったあ」

「よし!みんな揃ったあ!」

友奈と風の嬉しそうな声が響く中、夏凜は一人だけ気難しそうな顔をしていた。

六月十一日土曜日、午前一〇時ごろ――

「ここが、上里本家……。で、デカすぎないか」

園子の家に行ったことがある海斗からしても、上里本家はそれと同等かそれ以上に感じていた。

私服で良いと言われたので私服で来ているが、自分が場違いに見える。
まあ、実際場違いなのだが。

「あなたが、日守家の？」

「は、はい！日守家の次期当主で、現在は勇者のお役目に着かせて頂いてます。日守海斗です。真名のことに関しては、申し訳ありませんがお答えできません。何分、両親が真名を授ける前に他界したものでして」

「はい、そのことは聞いています。面をあげなさい、ふむふむ中々にカッコいい顔をしてますね」

最初の少し堅かった声が途端に柔らかい声になる。

（え!?!上里の今の当主様って、俺とあんまり歳が変わらない気が……）

「あなたのことは、優希さんから聞いています。とても頼りになる方だと。」

「優希から!?!……はっ!?!そうか、優希も七家の子孫の一人だもん……」

「それは、あなたも似たようなものですよ？あなたは、上里の血筋の一人なのですから」
あつけからんと言う彼女は、メガロポリスな胸を持ち、綺麗な黒髪で毛先はメツシユのように少しだけ金色が混じっている。顔は幼さが残りつつも柔和な笑みが似合う年上の女性に見える。

だが、それでもパツと見は同世代か一個上位にしか見えない。

「そう言えば、まだ名乗っていませんでしたね。上里陽奈うえさと はるなといいます、歳は海斗君と同じ一三です。気軽にハルナとお呼び下さい！」

何とも明るい人だ、多分同じ学校に居たら必ず友達になれるタイプだ。
その明るさも、今の状況がなければ最高なのだが。

「あなたたちは下がっていいですよ？」

「ですが、陽奈様……」

「私の言葉が聞こえなかったんですか？」

意識を向けられていない海斗でさえも、背中に冷や汗が流れる。

(これが、一三歳で上里家をまとめ上げている人か……。ヤバイ、変な汗かいてる！)

少しして、神官たちが去った後ようやく話が始まった。

「あなたを呼んだ理由は、私が授かった大切な神託を伝える為です」

「分かってます、それでハ、ハルナさん……。神託というのは……。？」

海斗は緊張している、この神託一つで何かが変わるわけではないかもしれないが——
恐ろしい、神樹からの神託は予言に等しい、これが外れることは先ずないだろう。
それを十分に理解しているからこそ、海斗は緊張している。

「落ち着いて聞いてくださいいね」

「はい」

少し大げさに呼吸をして、心を落ち着ける。

海斗は知る、最悪の地獄を。

「この次の戦いで六人中五人が満開」

「っ!?!」

重たすぎる真実、重たすぎる未来。でも、まだ希望はあると思った。

そして――

「日守海斗、いえ。東郷海斗が――」

少し間が空く、言うのを躊躇うように。

(ここで未来を知れたんだ、何とかして軌道修正すれば――)

だが、甘い見通しは呆気なく潰えた。

「死にます」

この日、彼の人生は終着点を示した。

死と言う、逃れようのない終着点を。

第十話 「夏凜ちゃんの誕生日と精霊会議」

海斗は陽奈の言葉を聞いた。

だからだろう、頭がそれを理解する。

そして、心が死にたくないと呼んでいた。

脳裏に映るのは大切な人たちの顔。

(神樹様の神託は絶対だ、死は逃れられない)

これもまた運命なのだろうか、海斗が死ぬことは必然なのだろうか？

違うと心が強く否定する、まだやり残したことが数えきれない程ある。

「ああ、間違えました。死ぬのは記憶です」

「記憶が、死ぬ……？」

陽奈の言葉に戸惑う海斗、少し考えると何となくだが理解できた。

「記憶を失うことでいいですか？」

「そうそう、海斗君が散華で失うのは自分の記憶」

「自分の……記憶」

散華、満開の裏に隠れた機能。

満開を経て発動される、勇者システムの隠された機能。強大な神の力である満開を使用する対価として、身体の機能の一部を神樹に捧げる。

基本的に捧げられるのは身体の機能の一部であり、手足を失うような肉体的な欠損はないが、記憶や感情も例外ではない。身体のどこの機能を捧げるかは、勇者には決められない。

「花一つ咲けば一つ散る、花二つ咲けば二つ散る。」

この言葉の通り、満開するごとに何かを失っていくもの。

失ったものは戻ってこない、神に捧げたものが戻ってくるなどありえないのだ。

「君が失う記憶は、東郷海斗がどういう人物で誰にどういう風に接していたかと言うものです」

「そうですか、分かりました。失うものが分かっていたら大丈夫です、記憶の分は日記やらなんやらで補填します」

「頑張ってください。私は巫女であなただは勇者、共に戦うことは出来ませんがあなたの無事を祈っています」

彼女にも、彼女なりの不安があるのだろう。

皮膚に爪が食い込み少し血が出ている、海斗は過去の自分を思い出した。

銀がお役目の最中瀕死の重体負った時、自分もああして悔やんでいたことを。

「神託の件、教えて下さりありがとうございます。俺はこれで」

「ええ、お気お付けて」

荷物を持って、外に出る。

長い廊下を抜けて玄關を通り、外にある門を潜る。

当分はここに来ることはないだろうと思ひ、門の前で一礼をして去つていった。

「——以上が神託の内容です」

「そうか……」

大赦本部の一室にて、海斗は春信に今回受け取りに行つた神託の内容を話していた。

「五人中六人が満開……海斗君は落ち着いてるかい？」

「何とか、失う内容さえ分かれば対策のしようがありますからね」

春信が何か言い淀むように、顔を俯かせる。

「そろそろ、君に真名を教えようと思つただけだね。もう少し待つた方が良いか」

「そうですね、今聞いても忘れちゃいますし。何より、多分まだ時期じゃない気がするん

です」

春信がよく言っていた言葉を言い、春信がクスリと笑う。

「かもね。一樣、君の家の御両親には手紙を渡しとくから」

「春信さんが、ここだ！と思ったタイミングで俺に伝えるようにしといて下さい」

海斗は少し考えた。

（散華で記憶を失ったら、こういう楽しかった小さな思い出も忘れちゃうのか。……少し、嫌だな）

少し嫌だったのだ、春信と兄弟の様に笑い合うこの時間が自分の中から消えてしまうことが。

「海斗君？門限の時間が近いよ？」

「……はっ!? スイマセン、そろそろ帰らなくちゃ。それじゃあ、失礼します」

海斗が足早に部屋を出る、春信はそれを少し見送ってまた椅子に戻る。

「……すまないね、海斗君。何もしてあげられなくて」
彼は戦う力を持たない、故に助けることは叶わない。
この世界は、力なき者に理不尽にできていた。

翌日、六月一二日午前一〇時頃。

「夏凜ちゃん、来ないね……」

「そうだな」

「海斗！アンタは何でそんな呑気なのよ！」

風の言葉を華麗にスルーして、スマホを弄る海斗。

「ムキー！！海斗！今日と言う今日は先輩の威厳の為に——」

「風先輩、夏凜の場所分かったんで少し行ってきます」

「え、分かったんですか？海斗先輩」

樹が少し驚いたような顔を見せる、だって樹から見たら海斗はただ単にスマホを弄っていただけなのだから。

「アイツのスマホにはGPS付けといたからな、これならすぐに分かる」

ドヤ顔で言う海斗に対して、友奈以外の全員が引き気味だ。

「海斗君すごい！いつ付けたの？」

「結構昔からかな……まあ、今はそんなことどうでもいい。風先輩、夏凜のことを探してきますけどいいですよね？」

「別にいいわよ、好きにしなさい。こっちからも電話で連絡してみるわ」

風は基本的に海斗のことは放任主義だ。

実際の所、海斗はちよくちよく自分で依頼を拾ってきたりするので、好きにさせたい方がいい。

風の許可を貰った海斗が自転車に跨る、こっそり美森にNARUKOでメッセージを送る。

〔kaito：多分帰れそうにないから、部活終わったらそのまま夏凜の家に来て〕

〔東郷：分かったわ、風先輩には私から話しておくわね〕
ありがとうとスタンプを送り、自転車をこぎ始める。

（夏凜のやつ学校集合って間違えたんだな。とりあえず、いつもの所に向かいますか）
海斗は何故か学校ではなく、いつもの浜辺に向かっていた。

少女は二つの木刀を使い、鍛錬をしていた。

（アイツらは所詮試験部隊私は違う、私は世界の未来を背負わされている。期待されているのよ、だから普通じゃなくていい）

そんな彼女に声を掛ける奴がいた。

「おーい夏凜！」

「海斗……何しに来たの？」

「いや、お前が指定された時間になっても来ないもんだから、探してたんだよ」

「そう……」

素つ気なく返す夏凜に海斗は近づいていく、夏凜の持っていた木刀の一本を奪い取り構える。

「どうだ？一本やらないか？」

「いいわよ、丁度相手が欲しかったところだもの！」

合図も無しに、動き始める。

夏凜の動きは基本を押さえつつも自分なりに吸収して昇華させた我流。

対して海斗は、本当の我流。誰かに教えを乞うことはなく、何を参考にしたでもない。ただひたすらに自分自身に向き合って鍛錬した結果の剣。

夏凜の上段から振り下ろす攻撃を、海斗は剣先を使い軽く払うだけで受け流す。

「何で来なかつたんだ？」

木刀を水平に振り抜きながら尋ねる。

「……別にどうでもいいでしょ！」

海斗の問いに夏凜は、木刀を下段から弾きあげるようにしながら答える。

「まあ、何となく分かってるけど……なあ、アイツらといるのそんな悪くないと思うぞ？」

弾きあげられた木刀を瞬時に構え直し、つばぜり合いに持っていく。

「悪いわよ！アイツらといると、決意が揺らぎそうで怖い。私は勇者に選ばれた、だから兄貴をギャフンと言わせるまでは青春とかそんなのはどうでも良い！」

力では負けているが、体制や重心の置き方を利用して均衡を保つ。

「多分友奈はお前のことをもう友達だと思ってる……それでもか？」

「それでもよ、私は友達なんてアンタ一人がいい。アンタがいれば、仲間も友達もいらない」

「案外信頼されているんだな」と心の中で思いつつ、つばぜり合いを止めて距離をとる。

「……そう言ってくれるのは素直にうれしいな。お前がそう思ってたんなら、それでいいんじゃないか？俺は別にお前の友達止めたりしないし。」

夏凜は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている、海斗からしたら疑問しかない。

「友達になれとか、もう言わないの？」

「嫌がっている奴に無理強いする事わねえだろ？」

海斗は当たり前前のことを言ったつもりだったが、夏凜はため息を吐き木刀を下す。

「どうしたんだよ？もうやらないのか？」

「何か冷めたわ、今日はもう帰って鍛錬する」

夏凜からさっきの素っ気なさはなくなり、呆れ交じりの声が聞こえる。

その声は、どこか嬉しそうだった。

「で、何でアンタが家に来んのよ!」

「何でっってお前、コンビニ弁当しか食ってねえんだろ? 夕飯作ってやるよ」

「材料は?」

「さっき買ってきた」

時刻は三時過ぎ、先程の砂浜でのやり取りからおよそ四時間弱。

海斗は家に帰って荷物を取りに行った、勿論パーティ用の物だ。

夕飯を作ると言うのは建前、夏凜が鍛錬で時間を使っている間にパーティの飾りつけや食事の準備をする。

「もう、勝手にしなさいよ。私は隣の部屋にいるから、何かあったら呼びなさい」
そう言い残し、夏凜は隣の部屋に消えていく。

「よし！こっからは腕の見せ所だな」

勇者部のみんなが来るまでの時間は分からない、できる限り力を尽くそう。

海斗は一人、奮起していた。

インターホンが鳴る、時刻は六時過ぎだろう。

辺りも暗くなっていて、街灯が歩く人々を照らしている。

「夏凜ちゃん、って！海斗君！どうしてここに」

「姉貴から聞いてないのか、先にこっちに来て飾りつけとかしてたんだよ」

「海斗、内装は大丈夫なの？」

「そこら辺はもう大丈夫だし、つまめる料理も作ってある」

勇者部の皆が来たので、海斗は中に入れる。

「海斗ー、インターホン鳴ってたけど誰が来て……あ、アンタたち」

「アンタねー、何で何度も電話したのに何で電源オフにしてんのよー！」

いきなり来た勇者部のメンツに驚く夏凜と、電話に出なかったことを注意する風。

「そ、そんなことより何ー！」

「何、じゃないわよ。心配になって見に来たのよ」

「し、心配……」

風の言葉に少し申し訳なさそうな顔をする夏凜。

(そんな顔するんだったら、最初から遅刻してでも行けばよかったのに……)

バカだなあ、と考える海斗を尻目に会話は続く。

「よかったあ、寝込んでたりしたんじゃないんだねえ」

本当に心配してたのか、少し肩に入っていた力が抜け安心した顔を見せる友奈。

「上がらしてもらおうよ〜」

「何勝手に上がってんのよ！意味わかんない！」

夏凜の声を無視して風は奥に進んで行く。

「おお、ちゃんと飾りつけ出来てるじゃない！やるわね海斗！」

「いえいえ、それほどでも」

「な、何よこれ！」

自分の部屋の豹変ぶりに驚く夏凜。

何も無理はない、何せ殆ど何も置いてない部屋だったのが、紙で作ったりボンが飾られて風船などが転がり、テーブルの上には色々とりどりの料理が置かれていたらそれは誰でも驚くだろう。

「か、海斗！アンタ、晩御飯作るだけって言ったじゃない！」

「いや、晩飯作るとは言ったが飾りつけをしないなんて言っていないぞ」
夏凜が怒り気味になり訳を言う。

「あのね、夏凜ちゃん」

友奈が箱に入ったケーキを取り出す。

「ハッピーバースデー！夏凜ちゃん、誕生日おめでとう！」

「おめでとう」

友奈に続き美森がおめでとうと言葉にする。

だが、夏凜は余計に混乱していた。

何で自分の誕生日を知っているのか分からないからだ。

「ど、どうして……」

「アンタ、今日誕生日でしょう？」

「海斗が教えてくれたの、それで……」

風の言葉に驚き、美森の言葉に更に驚く。

「あ！って思っちゃった、だったら誕生日会やらなきゃって！」

「歓迎会も一緒に出来るねー！って」

友奈と樹の話の話を聞いて、夏凜はなんだか少しだけ嬉しくなった。

「本当は児童館で子供たちと一緒にやろうと思ったんだけどな」

「当日の驚かせようと思って黙ってたんだけど」

「でも、当のアンタが来ないんだもん焦るじゃない！」

みんなの言葉を聞いてると、夏凜の心は温かくなっていく。

「海斗が言っていた悪くないとは、こういう意味だったのか。」と改めて再確認させられる。

「家に迎えに行こうとも思ったんだけど、子供たちも激しく盛り上がりつつあって」

「結局、この時間まで解放されなかったのよ。ごめんね」

（ここまで考えて来てくれて、その上遅れたから謝るなんて。ホント、甘いやつら）
今までの様にバカにしたわけではなく、温かみが籠った言葉だった。

「どうしたー？」

「夏凜ちゃん？」

「あれ、ひよつとして自分の誕生日も忘れてた？」

「……アホ……バカ……ボケ……おたんこなす……」

夏凜の口から自然に言葉が漏れる、打ち解けていつてる証拠だろう。

「ちよ、何よそれえ！」

「誕生会なんてやったことないから、何て言っているのか分かんないのよ……」
頬を赤く染めて明後日の方向を向く夏凜、相当恥ずかしいのだろう。

その後は話が弾み、みんなで楽しく遊んだ。

友奈の言葉で文化祭の出し物が演劇になったりして色々あったが、とても楽しい一日だったと海斗は自負している。

家に帰り、日課の日記を書いて海斗はベットに入る。

昨日のことがあってから、細かい事まで日記に書くようにしたので幾らか時間が掛かってしまっていた。

「ん、通知か？」

トークアプリであるNARUKOからだ。

【Fu：アンタも登録しておいてね。今日みたいに連絡の行き違いがないように】

【ituki：これから仲良くしてくださいね。よろしくお願いします】

【東郷：次こそはぼた餅食べて下さいね有無は言わせない】

何だか、美森の危ない発言が見えたがその辺はいつものことなのでスルーをしていく
海斗。

【yuna：ハッピーバースデイ夏凜ちゃん！学校のことや部活のことので分からないことがあつたら何でも聞いてね】

【Krinn：了解】

（おお、返信早いな）

そんな関心をしつつ、海斗もメッセージを送る。

【kaito：返信早いな、さてはみんなのこと好きなんだろう】

【yuna：わーい！返信が返ってきた】

【Fu：フッフ、レスポンスいいわね】

【yuna：わーい】

【ituki：わーい】

【東郷：ぼた餅】

（おい、何か一人変なの混じってたぞ）

【Krin：うっさい！】

【Fu：ぶはははは】

【東郷：ぼた餅】

やっぱり何か、変な人混ざっているな。まあ、どうでもいいだろう。

この際、夏凜を弄ることに集中した方がいいのは一目瞭然だ。

【yuna：これからは全部が楽しくなるよ！】

その言葉と共に、一枚の写真が送られてくる。

みんなが写った一枚だ、夏凜は少し照れているのか顔が赤いがそれがまたいい味を出している。

「楽しくなりそうで良かったよ、夏凜」

海斗は小さく呟いて、眠りにつく。

時間は動き続ける、ある結末に向かって。

神樹の中にて。

「小僧たちの運命を知ったからにやあ、俺たちも動かないとな」

「そうするか、それにしてもどうする」

「そうだぞ、外に干渉できんのはそつちの二人しかないんだぞ」

信長が誰かと話している、一人？一羽は八咫鳥と言う精霊だ。

もう一人は、シルエットで分からないが身長は百四十後半といった所だろう。

「そうよ、デンジヤラスなことになったらどうしようもないわ」

「そうね、しっかりと時期を見て動かないといけないは。ゲームと違ってやり直しが出来る訳じゃないんだから」

「そうだよ、頑張つて結城ちゃんたちを助けないと」

「ですが、まだ時期じゃありません。せめて世界の本当の姿実を知ってからじゃないと」
「またメンド臭いことになりそうだにや〜」

時折英語を混ぜる人影と、何故かゲームで例える人影と、どこか友奈に似ている人影と、論理的に考える人影と、語尾が特徴的な人影。

夜中になってから、ひっそりと会議が始まる。

シルエットのこの者たちは何なのか？

会議は続く、運命に抗おうとする彼らの手助けをするために。

第十一話「未来に向けた布石」

「この写真はー、ここで！うんうん、バッチリだー！」

友奈の嬉しそうな声が響く中、海斗は美森と一緒にパソコンを使い勇者部のホームページを見ていた。

総合アクセス数 299841

今日のアクセス数 10532

美森と海斗で運営しているホームページは、相も変わらずとてつもないPV数を叩き出していた。

「わお！今日も閲覧者数すごい！」

「後は、子猫の写真と学校の連絡先を乗せて……こんなところかな？」

「良いと思うよ、姉貴」

「完璧！」

海斗と友奈の称賛の声を美森が浴びる中。

「ああん！もう！ストリーが思いつかん！」

風は劇のシナリオ作成が上手くいかず頭を抱えていた。

みんなが何かしら作業をする中、夏凜はドアに寄りかかり煮干しを食べていた。

女子中学生が部室内で煮干しを食べる光景、何かとシユールなものだ。

「何食べてるの？」

「ニゴシ」

夏凜の中では日常なので、「何でそんなこと言うの？」とでも言いたげな顔をしている。

「学校でニゴシを食り食う中学生は夏凜位だな」

話を聞いてたのか、海斗も会話に入ってきて来る。

「アンタも、学校で柿ピー食べてんじゃない」

「イイんだよ、柿ピーは」

「それなら、ニボシは健康に良いのよ」

そんな会話をしていると、風が悪戯を思いついた子供のような顔を始める。

「じゃあ、これから夏凜のことにぼっしーって呼ぶわね！」

「ゆるキャラに居そうなあだ名付けるなー！」

この通り、今日も勇者部は平和である。

「そう言えば、にぼっしーちゃん……」

「待つて、そのあだ名定着させる気？」

「それより飼い主探しのポスターは？」

友奈にも弄られる夏凜を若干スルーして、美森が夏凜に任せていたポスターがどうなったかを聞く。

その問いに、夏凜は得意げな顔をして答える。

「そんなのもう作ってあるわ！」

そう言つて夏凜が出したポスターをみんなが見る。

「イイ出来だ」、みんながそう思った。

この絵さえなければ……

「えつと……妖怪？」

「猫よー！」

絵心が無くてももう少しマシに見えるだろうと思える絵の出来栄だった。

その時、小さく誰かのため息が聞こえた。

「はあ〜」

「樹？」

「な、何？」

どうやら樹のようだ。愛用のタロットカードを見つめて少し苦い顔をしている。

「どうしたの？ため息なんかついて？」

「あ、うん。あのね、もうすぐ音楽で歌のテストがあつてね。上手く歌えるか占つてたんだけど……」

手に持っているカードは、「死神の正位置」だ。

「死神の正位置、意味は破滅・終局……」

風は少し悩んだと思つたら、すぐさま樹をフォローした。

「当たるも八卦当たらぬも八卦つて言うし、気にすることないでしょ」

「そうだよ、こういうのってまた占ったら全く違う結果がでるもんだよ！」
友奈も加勢してフォローに加わる。

だが――

三回やっても結果は変わらなかった。

「だ、大丈夫だ樹ちゃん！フォローカード、これはいい役だ！」

「死神のフォローカード……」

「はっ!?!」

海斗の渾身のフォローも虚しく、樹の雰囲気は更に暗いものに。

結局、

「アタシたち勇者部は、困ってる人を助ける。もちろんそれは、部員だって同じよ」
風によって部活動として、樹の歌の試験の為に手助けをすることになった。

「歌が上手くなる方法か〜」

友奈が真剣に考える中、美森は全力でポケに回る。

「歌声でアルファ波を出せるようになれば、勝ったも同然ね」

決してふざけている訳じゃない、これがデフォルトなのだ。

「アルファ波……？」

「良い音楽や歌と言うのは、大抵アルファ波で説明がつくの！
変な手の動きも交えつつ説明する美森。

「そ、そうなんですか！」

「なわけないでしょ！」

「なわけないだろ！」

そこに、海斗と夏凜によるダブルツッコミが飛ぶ。

「樹、一人で歌うのは上手いのね。人前で歌うのは緊張するってだけじゃないかな？」
姉からの何ともありそうな意見を貰う。

「だったら！習うより慣れろだろ」

左手を盆の様にして右手を握って置く動作をする、「閃いた！」と言わんばかりの様子だ。

カラオケや『MANEKI』にて、

「みんな、聞いてくれてありがとう！」

風の熱唱が終わり席に着く。

風の前に海斗も歌っている。

因みに曲名は「君にできるなにか」である、ちなみに点数は九十七点という高得点をマークしていた。

「お姉ちゃん上手！」

「へへ！ありがとう」

姉妹のやり取りを見守る中、海斗に電話が入る。

「ワリイ、電話だわ」

みんなに断りを入れて外に出る。

『もしもし、日守です』

掛かって来たのは大赦用の電話だったので「日守」の名を使って電話に出る。

『私です』

短い言葉で返事が返ってくる。

感情を出さないまるでロボットのような話し方をしているこの声の主は、海斗の元先生であり大赦に中で二人しかいない海斗に頼み事を聞いて貰える人物。

『何かありましたか？安芸先生』

安芸、それが彼女の名前だ。

『最悪の事態を想定せよとのことです、くれぐれも油断なきように』

『分かりました……スイマセン、この後会えますか？』

少しの間、間が開く。

返答に困っているらしい。

『分かりました、今いる場所に車で向かいますのでしばしの間お待ちを』
了承と受け取つていい言葉が聞こえ安堵した。

『お願いします、それじゃあ……』

プツリと電話が切れると、みんなに先に帰ることを伝えるために中に戻る。
扉の前には夏凜が居た。

「今のが、アンタの言う安芸先生ね……」

「そうだよ、どうした？何か気になることでもあったか？」

夏凜が海斗に詰め寄る。

「アンタ、何するつもり？」

「別に、ただの相談事だよ」

「違法アップデートのだけだな」と最後に呟いた。

その不穏な言葉を抜きにしても、まだ話がある。

「樹が頑張っているのに帰るの？それってどうかと思うわよ？」

「アイツらを死なせない為に行くんだよ……良かったは、夏凜もそんなこと言うようになっただんな」

「べ、別に、そういうわけじゃあ」

夏凜が照れてる間に、ドアを開けて中に入る。

「海斗遅かったわね？友奈ちゃんと夏凜ちゃんのデュエット凄かったのよ」

「そうだったのから、それは聞きたかったな」

美森の言葉に驚きつつも、海斗は手短に帰宅することを伝える。

「ゴメン、みんな。用事で先に帰らなくちゃいけなくなったから先に帰るね、樹ちゃんは歌の練習頑張ってるね」

海斗がバックを持ち帰ろうとすると、樹が海斗の袖口を引っ張った。

「あの、用事って何ですか？」

海斗は笑顔で答える。

「みんなが笑顔でお役目を終えられるために必要な用事……かな？」

「そう、ですか」

「大丈夫、歌のテストまで時間あるし。今日出来なかつた分は明日にでも付き合うからや」

海斗は昔、母にされたように樹の頭を撫でる。

優しく、けど強く、壊れないように。

「は、恥ずかしいですよ〜！」

「ゴメンゴメン！つい、ね」

最近、海斗も素の自分を出すようになってきた。

と言うより、元の自分に戻りつつあるのだ、あと何か一つ切っ掛けがあれば戻れるだろう。

「海斗、あまり女の子にそういうことはダメよ。もっとデリカシーを持って行動しなくちゃ」

「了解、多分帰るのは少し遅くなるかもしれないから、そこら辺はよろしくね姉貴」

海斗は美森にそう言い残すと足早に部屋を出て行った。

「ねえ、東郷。アイツに弟か妹いたとかつて聞いている?」

「海斗に兄妹ですか? いいえ、義姉位私しかいないはずですけど。それがどうか?」

風が首を傾げて、美森の質問に答える。

「何て言うかさ、撫でる時の手つきが慣れてたように見えたのよね。まあ、気の所為かも
しんないけど」

風の言葉で何か思い出せそうになつた美森だが、何故か霞がかつたように記憶が曖昧
だ。

「これも失つた記憶の中に答えがあるのだろうか?」、そう考えたが深く考えすぎるの
は良くないと思考を切り替えた。

その後、美森が歌つてる時にみんなが立つて敬礼してるのに夏凜が驚いたり、牛鬼が
みんなのお菓子を食べちゃつたりと色々あつたが、美森は心の底から楽しむことが出来
てないような気がした。

「それで、要件は何ですか?」

「嫌ですね、恩師に会うのに理由が必要ですか？」

海斗の発言にまたも押し黙る安芸、この二人は教師と生徒と言う関係から上司と部下のような関係になっている。

もちろん、上司は海斗だが。

立場が逆転して見るように見えるが、実際には変わっていない。

海斗は今でも安芸のことを「安芸先生」と呼んでいる。

安芸は「海斗様」と呼んでいるが。

「まあ、話はそんなに長くないですよ……精霊降ろし実装の許可を下さい」

「……何とも古い所から情報を持つてきましたね、ですがそれは許可しかねます。それに、私の独断で許可するようなことは出来ません」

機械のような無機質な声に僅かに怒気が混ざる、少し怒っているのだろう。

それでも、海斗は引かない。

「実装の準備は済んでいます、後は許可さえ貰えば」

これまでの、違法にも近いアップデートは春信にお願いして組み込んでもらっていた。

春信は、勇者システムにバグが発生しないレベルの物だったので許してくれていたが、今回は訳が違う。

システム上の問題はない、何せ西暦時代の初代勇者たちは全員これを使っていたのだから。

海斗はそのことを、大赦が大社を名乗っていたころの機密書類から偶然発見した。システムの凍結されてるだけで、システム内には残っている。

海斗はそのプロテクトを突破し、プログラムを発見した。

そこからは改良を加えて、負担を出来るだけカットできるように細工した。

だが、負担が減らせたのは精神面だけだ肉体面の負担は一切変わってない、それどころか精神面の負担を肉体面に押し付けているだけでプラスマイナスで言えばプラマイ零なのだ。

こんな欠陥だらけのシステムが安芸から許可など貰えるわけ訳はない。だから、少しだけ嫌な作戦を考えた。

「安芸先生、また前みたいな結果にたくないんです！結界真の外の世界実を知りました、だからこそ精霊降ろしが必要なんです。あれなら体の機能の損失はないでしょう？」

「……ですが……いいのですか？精霊降ろしを行使している間はバリアは張られませんが、なぜなら自分の持ち精霊を体に直接宿してるのですから。下手を打てば死んでしまうのですよ？」

「それでも構いません、効率は悪いですが体の機能の損失が無ければ俺一人で戦っていてもバレませんから」

海斗の覚悟の籠った言葉を聞き、安芸も諦めがついたように息を吐く。

「分かりました、こちらでも準備を進めておきます。ちなみに今の会話は録音してありますので、それを散華後のあなたに聞かせるということでもいいかしら？」

「ありがとうございます、手際が良くて助かります」

最後の方は昔の口調に戻っていた、海斗の心はそれだけで何だか嬉しくてハシヤイで

しまう。

「では、私はこれで……武運を」

帰り際に一言言って去ってしまう。

時は着々と進む、人は成長し続けなければいけない勇者怪物バーテックスに殺されない為に。

第十二話「その時、終わりの音（満開）がした」

放課後の部室にて、

「この大量のサプリは何だ？」

夏凜がテーブルの上に大量のサプリ等を持ってきていた。

「何かたくさんある〜」

海斗や友奈からしたら、何故かいきなりテーブルの上に置いてあったので驚くのは当たり前だ。

「そう！喉に良い食べ物とサプリよ。マグネシウムやリンゴ酢は肺に良いから声が出やすくなる、ビタミンは血行を良くして喉の荒れを防ぐ、コエンザイムは喉の筋肉の活動を助け、オリーブオイルと蜂蜜も喉に良い」

「詳しい……」

「流石です！」

「夏凜ちゃんは健康食品の女王だね！」

「夏凜は健康の為に死んでも良いって言いそうなタイプね」

何やかんやで、夏凜も樹の為に頑張ってくれたのだろう。

全くもってお人好しである。

「言わないわよ、そんなこと。さあ、樹、これ全種類飲んでみて。グイッと！」

「へっ!?ぜ、全種類！」

「多すぎだろそれは、夏凜と違って樹ちゃんは初心者なんだぞ。それに、この量は流石の夏凜でも無理だろ」

「無理ですって！」

海斗の言葉に反応して火が付いたのか、危ないことを言い始めた。

「良いわよ、お手本を見せて上げるわ！」

火のついた夏凜を止められるものは居らず、そのまま持ってきた物を片っ端飲み始めた。

絶対に用量を守っていない服用の仕方に呆れる者が一名。

それ以外の部員たちは「オー！」と言って感心した様子を見せている。

だが――

「ど、どう」

全部飲み終わった夏凜は段々と顔が青ざめていく。

「うう~~~~！」

言葉にならない声を残して手洗い場に走っていった。

「夏凜ちゃん！大丈夫ー！」

友奈が心配そうに叫んだが、当の夏凜は気付いていないのか振り向かないまま去っていった。

その後、帰って来た夏凜が言った言葉は、

「樹はまだ初心者だし、サプリは一つか二つで十分よ！」

そう笑顔で言っていた。

くれぐれも普通の人間が真似してはいけない、訓練して飲み慣れている夏凜だから手洗いの場に行くだけで済んだのだ。

最悪の場合、樹はテストの日を病院で迎えることになる。

「少しサプリを飲んで歌を歌うやはりと言うべきか、樹の声は緊張の所為か震えてしま
いあまり上手く歌えていない。」

「やっぱり、緊張するのがいけないんだから。喉よりリラックスの問題じゃない？」
風の的確な意見が冴える、その通りである。

（もう少し、何かできればいいんだけどな）

「それもそうね、次は緊張を和らげるサプリメントを持つてくるわ」

「やっぱり、サプリなんですわ」

残りの時間も歌の練習をしたが、中々上達はせず一日は終わってしまった。

時が進むのは早く、樹の歌のテストまで数日を切ってしまった。

今日は部活に居る海斗、いつもなら個人の依頼で部を開けることが多々ある。

今部室に居るのは、海斗と友奈だけだ。

「今日は個人依頼来てないんだね」

「まあな、最近はお樹ちゃんの為に家で出来る依頼しか受けてないんだ。そのせいで、柳橋に薄情者呼ばわりされたよ。全く」

怒った風と言ってるが、その実凄く嬉しそうな顔をしている。

「そうだ！海斗君、これ書いて欲しいんだけど」

友奈から渡されたのは一枚の紙。

「なるほど、この紙に応援メッセージを書くことだな。任せとけ！」

友奈から紙を受け取り素早く文字を書く。

書く内容は、勇者部五箇条の一つ「なせば大抵なんとかなる」と「自信もって行こう！」だ。

「海斗君らしいね！」

「そうか？まあいいや……上手くいくとイイな」

二人の部活はすぐに終わり、樹が来たのだが。

それまでは、二人の間にはぬるま湯のような空間が広がっていた。

あの手紙のお陰なのか、樹は無事に合格を果たしたらしい。

そんな話を聞いた放課後、海斗と樹は二人屋上に来ていた。

もうそろそろ下校時間、赤い夕焼けが二人を照らす。

「海斗先輩、手紙のやつありがとうございます！」

「それは、もう聞いたよ。それにあのテストを合格できたのは樹ちゃんの実力だ、君自身
が頑張ったからこそその結果じゃないか」

海斗は自分たちのお陰だとは思わない。

手紙程度では人間が格段に成長するなど有り得ない。

彼女には元々力があつたのだ、それを十全に發揮できていなかっただけ。
今回はあくまで緊張と言う枷を取って上げる手伝いをしたにすぎないのである。

「それでも、ありがとうございます！後……ですね、夢が出来たんです！」

恥ずかしそうに言う彼女に自分まで恥ずかしくなりそうになる海斗。

「夢って言うのは何なのかな？言いたくなかったら別に良いんだけどさ」

「か、歌手になることです！私……いつもお姉ちゃんの背中に隠れてました。でも、もう
隠れてるだけは嫌なんです。だからお姉ちゃんの隣に立てるような立派な妹に成るた

めに、歌手になりたいんです！」

まだ少し恥ずかしさが抜けてないのか、顔が赤いがそれでもはつきりと胸を張って夢を語っていた。

「そっか、なれるといいね歌手に。もしなれたらファン二号にしてくれる？」

「二号？ 一号じゃないんですか？」

「だって一号は風先輩でしょ？ だったら二号だよ、樹ちゃんが歌手になるの待ってるから」

「は、はい頑張ります！ それで……もし私が歌手になったらもう一度、頭を撫でて貰っていいですか？」

（上目遣いはズルいでしょ、こんなん断れないじゃん。断るつもりなんてないけど）
海斗はゆっくりと手を上げて、優しく樹の頭を撫でた。

「やって欲しくなったらいつでも言いな、いつでもやってあげるから」

「ありがとうございます！でも……癖になってしまっそうなので、控えめにします」

こんな当たり前の日常は終わらないと思っていた。

海斗は分かっている、いつか終わることだと。

でも、終わって欲しくなかった。

終焉が音を立てて近づいていた。

樹のテストから間もなく、樹海化の発生。

「残り七体、全部来てんじゃないのこれ……」

「総攻撃か、最悪の襲撃パターンだな」

「やりがいあり過ぎて、サプリも増し増しね」

「お前は何時でも常人より、サプリ増し増しだろ！」とツツコミたい気持ちを、海斗は静かに押し込めた。

「樹もキメとく?」

「その表現はちよつと……」

「言い方を考えろよ! 覚? い剤やつてる奴みたいない言い方だぞ!」

結局ツツコンでしまった。

ちよつとした寸劇をしている海斗たちに、友奈が素朴な疑問を投げかけた。

「あれ、何ですぐ攻めてこないんだろう?」

「さあ? どの道、神樹様の加護が届かない壁の外に出ては行けないって教えがある以上、私たちからは攻め込めないけどね」

本当は違う、出て行けない理由はもつと他にある。

それを、彼女たちは知らないのだ。

ある一人を除いては……

「敵さん、壁ギリギリの位置から攻めてくるみたい。決戦ね、皆もそろそろ準備を」

風の言葉を聞いた樹が緊張しているのか顔が強張る。
そんな顔をしていた樹に友奈が悪戯をした。

「あははははは！何ですか友奈さん」

くすぐるといふのは、案外人の緊張や心配と言った感情を吹き飛ばしてくれる。
それを友奈がやると、更に効果が上がる気がするのは海斗だけではないだろう。

「緊張しなくて大丈夫！みんないるんだから！」

「はい！」

友奈のお陰で緊張は吹っ飛んだのか、樹の気持ちのいい声が響いた。

「それじゃあ！勇者部一同変身！」

「「「「はい！」」」」

（みんなにとつては、これが最後の変身になる。……そうであつて欲しい）

海斗は複雑な感情を抱きながら、夕顔の花が写るボタンをタップする。

数瞬の間に変身は終わり、いつもの勇者装束に着替え終わる。

夕顔の花言葉は「はかない恋」、「夜」、「夜の思い出」、「魅惑の人」、「罪」、「罪深い人」、「逆境を克服する力」。

彼は「はかない恋」をしている、彼は「夜の思い出」がある。

彼は「魅惑の人」でもあり、彼は「罪」を作り「罪深い人」になろうとしている。そして彼は「逆境を克服する力」を持っている。

本当に神樹は人のことを良く見ている。

他の誰が見ても「似合ってる」程度にしか思わない。

だが、彼の場合は違う、最初から知っていてようやく本当の意味に気付いた。

(ホント、つくづく合ってるな夕顔は……)

「敵ながら圧巻ですね」

一体一体だけでも迫力があるのに、今回は七体も出て来た。

流石に、前までとは比べものにならない。

「でもさ、こいつら殲滅すれば戦いは終わったようなもんでしょ」

「それは違う」、そう言いたいが言えない。

大赦だからではない、言いたくないのだ。

海斗にしてみればこれから自分が背負うことなのだから。

勇者部は優しいからきつと助けてくれる、それでも海斗は話す気にはなれなかった。

「ここは、あれいつときましよう」

「あれ？どれ？」

風がそう言うのと、夏凜以外の全員が肩を組み円形に並ぶ

「円陣？それ必要？」

「決戦には気合が必要なんでしょ？」

風の言葉に若干惑う夏凜、それも友奈によって絆される。

「夏凜ちゃん！」

「しょうがないわね……」

少し顔を赤くしながら、渋々と言った感じで円に入る。

「アンタたち、勝ったら好きな物奢ってあげるから。絶対死ぬんじゃないわよ！」

「よーし！美味しい物いっぱい食べよつと、肉ぶつかけうどんとか！」

「言われなくても殲滅してやるわ」

「わ、私も、叶えたい夢があるから」

「頑張つて、みんなを、国を護りましょう！」

「俺だつて、まだやりたいことがいっぱいある！」

みんながみんな、同じ思いがあるわけじゃない。

だが、心の方向はしつかり未来に向いていた。

「よーし!!勇者部ファイトー!」

「「「「おおー!」」」」

声と心の足並みを揃えて、敵を向かい討つ。

最初は順調だった、アリエス・バーテックスの高速自転する御霊を友奈と東郷が連携して破壊。

問題はその後だった。

頭上の鐘の音で攻撃するタウラス・バーテックスに翻弄される。

「くっ!動けねえ……!」

「これ位勇者なら!」

「何よこの気持ち悪い音!」

タウラスの音の攻撃により、前衛五人の動きが止まってしまふ。

「あのベルか！」

美森は気付くものの、自分の背後に迫って来たピスケス・バーテックスに援護の邪魔をされてしまふ。

「狙撃が……」

美森の援護は期待できない状況に追い込まれる。

「このままじゃ……」

「不味い……」

五人が動きを封じられてる中、樹が動き出す。

「音は、音はみんなを幸せにするもの。こんな音……こんな音はー！！！！」

樹のワイヤーによるベルの拘束、そのお陰で生理的嫌悪感を生み出す音が消える。

「樹ー！」

樹の行動を見た風は、大好きな妹のことを抱きしめたくなるがその気持ちを抑え跳躍する。

「まずは、お前らー！」

武器である大剣を、高層ビルも圧倒するような大きさにして、後ろに居たライブラ・バーテックスとアクエリアス・バーテックスを横一線に斬る。

「お姉ちゃんー！」

「頼りになりますー！」

「ナイスです風先輩！」

後輩と妹たちの称賛の声を聞きながらも、指示を忘れない。

「よし！三体纏めて——」

「わああああ！な、何!？」

「樹ちゃん」

先程まで大人しくなっていたタウラスが動き出した、樹のワイヤーをもともせず力づくで引つ張つて行く。

「樹！ワイヤー解いて！」

風の助言により、樹が引つ張られて行くことは阻止できた。

だが、少し様子がオカシイ。

「ごんのー！」

「待って、様子がオカシイ！」

追い掛けようとした友奈を夏凜が止める。

夏凜も気付いたのだろう、何故かさつきまで居た三体のバーテックスが後退し始めたのだ。

「後退……？」

風も不思議に思ったのか、三体を後ろに下がらせてしまう。

そこには、

「レオ・バーテックス……」

レオが太陽にも似た球体が変わっていく。

余にも大きい、先程の三体のバーテックスを飲み込むほどに。

三体のバーテックスが、太陽のようなものの中に取り込まれていく。

一方で美森は、ピスケスの対処に追われていた。

先程から何発も撃ち込んでいるが、致命傷になるようなものはない。

早く済ませてみんなの援護をしたいと思っているが、中々に手応えのある感じはしない。

何を思ったのか、ピスケスが地面の中を潜り始めた。

「潜った、今の内に援護を……」

美森がスコープを除くと、そこには先程とは違う形に変化したレオが居た。

「あれは……合体している!」

そして、レオの近くにいる友奈たちはと言うと。

「ちよつと、あんなの聞いた事ないわよ!」

「俺も聞いた事ない、ヤバイな。危険个体かもしれない!」

「でも、三体纏めて倒せるよ!」

「ええ〜!」

三者三様の声が聞こえるが、風は全員に届くように声を出す。

「友奈の言う通り、纏めて封印開始よ!」

全員が動き出す。

動きしたその時、レオが円の形に小さな火球を作る。
小さいと言っても、一つ一つが勇者の身長程あるものだ。
それが、放たれると次々に勇者を狙い始める。

「これ、追尾すんのー！」

追尾火球、海斗が春信に貰った資料の中にそんなものはない。

一人、また一人と堕ちていく。

あれは、もう正確にはレオではない。

星崩し、レオ・スターク星崩しラストしとでも呼ぶべきだろう。

残ったのは二人、海斗と美森。

しかし、美森も

「おのれ……」

ライフルによる狙撃、並大抵のバーテックスだただそれなりにダメージが入る。

それではダメだ、並大抵程度ではスタークラスタ^星の足元にも及ばない。
美森の攻撃は、新生レオに掠り傷さえ与えられなかった。

「なっ!?効かない……!」

そして、レオの気を引いた所為で直系十メートルはあるだろう火球を喰らってしまった。
う。

美森の機動性は今代勇者の中で一番下だ、何せ足が動かず足代わりのリボンも機動性があるとは言い難い。

「姉貴!」

「小僧!今は戦いに集中しろ、全員死ぬぞ!」

海斗は信長の声により、冷静な感覚を何とか取り戻す。

(満開しないと殺される!)

いくらバリアがあると言っても、死ぬときは一瞬だ。

運が良いのか悪いのか、すでに満開ゲージは溜まつてる。

「こうなりややるしかねえ！模倣満開、サツキ！」

海斗がそう叫んだ瞬間、神樹の根から枝のようなものが伸び海斗を包む。

そして、一輪の花が咲いた。

大きな夕顔が咲き、その後ろにサツキが咲く。

神官が着るような白い着物を羽織り、背後には四本のマシンアームが現れる。

上にある両手が巨大な火縄銃を持ち、下にある両手が刀を持つ。

本来、満開は固有のものであり、一人一人の個性を生かしたものになる。

だが、海斗は男の勇者。

それもあつてか彼には固有の満開は存在せず、誰かの満開を模倣コピーする模倣満開と言うものが備わっている。

しかし、模倣は模倣、扱いが難しく常人には扱うことなど出来ない。

けれど、海斗は初見でそれをやって見せた。

「みんなを傷つけた分、しっかり返させてもらおうぞ！」

海斗の怒涛の攻撃が始まる。

満開によって得た空中浮遊の能力で火球を避け、時には刀で叩き斬る。

近づいたら、刀による間髪入れない連撃と火縄銃による銃撃で火球を生成させる暇を与えない。

強かったレオと対等以上の力。

だが、強き力は時に慢心に繋がる。

「しまったー！」

前面に集中し過ぎて、後方で生成されていた水球に気付けなかった。

その水球は立ち上がろうとしていた風を取り込み、空に上がっていく。

直系五メートルはある水球が風を取り込む。

出ようとして大剣を振り回すが、意味がない。

でも、諦めない。

(ダメーダメだ、樹を置いて、皆を巻き込んでおいてさっさとくたばるなんて、出来る訳

がないでしょうー!!」

諦められない理由が幾らでもあるのだから。

そして、大きなオザキリスが咲いた。

海斗と同じ白い着物を羽織り、大剣を構える。

違うのは、背中に輪つかのようなものがあるということ。

「ため込んだ力を開放する、勇者の切り札」

風はそのまま、突っ込みレオに蹴りを喰らわせる。

レオはその衝撃で倒されてしまう。

「これなら……いける！海斗、時間稼いでくれてありがとうね」

「いえいえ、風先輩こそ無事で何よりです」

そんな会話をしている内に、後方で朝顔が咲く。

「もう……許さない」

「東郷さん、あれって——」

美森が満開をした、その事実が海斗の上に重くのしかかる。

風先輩の時は実感がなかった、それより無事で良かったとしか思わなかった。

だが、美森の満開が、させないと誓った筈の海斗の心を蝕んでいく。

神託で分かっていたとは言え、もしかしたら変えられるのではないか？

そう思ってしまった自分を憎んだ。

「我、敵軍ニ総攻撃ヲ実施ス！」

美森の満開は戦艦、大量の砲台を使った面的攻撃を得意とする。

それ以外にも、元的美森の攻撃方法故か精密な攻撃も難なくこなす。

それもあつてか、向かって来たピスケスを瞬殺。

封印の儀なしで、御霊を破壊してみせた。

「この程度の敵なら、封印の必要もないみたいね」

攻めて来たバーテックスは七体、レオで四体分、ピスケスとアリエスで二体。合計で六体なのだ。

「風先輩、レオをお願いします！ジエミニ・バーテックスが神樹様の方に！」

「分かったわ、アンタは早く行きなさい」

美森が迎撃しているが、ジエミニの特徴は早さと小ささにある。

小さいということは、美森のような戦艦型の場合大きすぎる為迎撃がし辛いのだ。

（クソ！間に合わないか……）

そう考えた時、目の前に鳴子百合が咲いた。

「い、樹ちゃん！」

「私たちの日常を壊させない」

樹の背後の輪っかから、武器であるワイヤーが比喻ではなく無数に飛び出す。

「そつちに行くなー！！！！」

美森と同じ圧倒的とも言える、面制圧攻撃。

ものの数秒で美森が手間取っていた相手を捕まえてしまった。

「お仕置きー！」

その言葉と共に、ジエミニがワイヤーによって細切れにされる。

出て来た御霊を破壊したのも束の間。

レオがその名に相応しく、星をも崩しかねない巨大な火球を作り始める。

「何？このヤバそうな元気っぽい球？」

「いけない！」

「風先輩！」

「お姉ちゃん！」

満開中の為、頑張れば追いつけないこともない。

その思考は、風の一言で掻き消された。

「勇者部一同！封印開始！私がこいつの相手してる内に早く！」

風が大剣を使い火球を受け止める、だがその強さはまさに格が違う。

風も後数分もしたら押し込まれてしまうだろう。

その前までに決着を付けなければいけない。

「うん！」

「分かりました！」

「了解！」

「何とか踏ん張って下さいよ！」

「私にも良いところ残しておきなさいよね！」

五人が封印の儀を開始する。

レオもこちらの作戦に気付いたのか、火球を爆発させ風の満開を散らした。

「風先輩」

「お姉ちゃん！」

「そいつを、そいつを倒せー!!」

封印の儀は成功したが……

「嘘だろ……」

「何から何まで規格外過ぎるわ」

「何より、あの御霊出ている場所は宇宙……」

「大きす……過ぎるよ。あんなのどうやって……」

あまりにも壮大過ぎる、全員が呆然とする中。

「大丈夫！御霊なんだから、今までと同じようにすればいいんだよ。どんなに敵が大き
くたって、あきらめるもんか。勇者ってそう言うものだよね」
（ホント、お前には助けられてばっかだな）

「その通りだ友奈！諦めんな！」

海斗の言葉もあつてか、みんなの士気が戻り始める。

「姉貴、俺の残りの満開の力を渡す。それで何とか持つはずだ、後は頼んだ」

海斗は美森の胸にある朝顔の形をした満開ゲージに、自分の右手の手の平にある満開
ゲージをかざす。

ゲージに残ってた残量が全部、美森のゲージに送られる。

送り終わった瞬間、体を信じられない程の虚脱感と睡魔が襲う。海斗は、後のことを仲間に託した。

(出来るなら、みんなの欠損する箇所は日常生活に支障が出ないところが良いな)
出来る事なら、そう思った彼の願いは誰も聞いてはいなかった。

目が覚めると見知らぬ天井が見える。

ここが何処なのか分からない、と言うより自分がどういう人間なのか分からないし思
い出せない。

急いでベットの近くを漁る、するとテーブルの上にスマホが置いてあった。

スマホのカバーには付箋が貼られている。

書かれていた内容は「写真の記憶と言う名前のフォルダを見ろ」その一言だけ。

過去の海斗が書いたものだ、春信に今回の戦いが終わったらこの付箋が貼ってあるスマホを病院に届けて欲しいと頼んでいた。

そのスマホは、海斗が書いたWordで書いた日記のデータや昔の写真が入っている。
る。

と言っても、今の海斗には分からないが。

「記憶……記憶……あつた！」

急いで読み始める、自分の記憶はないのに何故かそれを美森たちに知られるのは不味いというこは覚えていた。

Wordで書かれた文書の中には、子供の頃から今に至るまでの話、知り合いの名前の呼び方から接し方。

事細かに書かれている、そして今後にある自分のお役目についても。

「よしよし、何となく俺っていう奴の人となりは分かってきた」

そんな時、人が入って来た。

「海斗、来たわよ。あら、もう起きてたのね大丈夫だった？」

「か、母さん、うん全然平気だよ！ほら、こんなに動けるし」

「そう、ならよかったわ。美森ちゃんの所に行くけど、海斗も来る？」

「え!?!部屋から出て良いの?」

「起きて間もないのだが、外に出るのはいいのだろうか」、そんな考えもあつたが海斗はそれよりみんなの無事を確認したかつた。

「もちろん、どうせ起きてても暇になっちゃうかもしれないし。外に出てお友達に会えた方が良いでしょう?」

「それもそうだね、じゃあ付いてくよ」

母である東郷美冬^{みふゆ}は知っている。

記憶を失つてない海斗だったら気付けただろう、振り返つた美冬の瞳から涙が零れ落ちたことに。

海斗は知る由もない、日常がもう壊れかけているということ。

閑話「勉強会とお風呂タイム」

期末テストが迫って来た今日この頃、部活動は中止になり日守の家で勉強会が開かれていた。

日守の家は東郷の家の隣にある、所有者は一樣海斗となっているが諸々のことは東郷家の人たちがやっている。

「にしても、広いわね。東郷の家と大差ないわよ」

「そうね、海斗くアンタ案外良い家持つてんじやない。何でこっちで暮らさないの？」
風の言葉に海斗が一瞬言葉を詰まらせる、だが何でもないように笑って返す。

「いや、こんな大きい家に一人はキツイですよ。それに、今の俺は日守じゃなくて東郷ですからね。日守に戻る日が来たら、帰って来ますよ」

「ま、そうよね」

「でも、海斗先輩。あんまり来てない割には凄く綺麗ですけど、定期的にお掃除なさってるんですか？」

今度は樹から質問が飛んでくる、さつきから質問の嵐だ。

「大赦の方からお手伝いさんが来てくれて偶にやってるよ、今回は昨日の内に姉貴と友奈に手伝って貰って掃除したんだ」

「そうなんですね、呼んでくれればお手伝いに来ましたよ？」

「大丈夫だよ、別に。昨日は少し掃除して買い物しただけだから」

みんなからの質問の嵐を避けきり、リビングに入る。

懐かしい匂いがした、まだ家族が三人だったころにここで両親と過ごした記憶がフラッシュバックする。

なんてことのない日常だった、きつと終わらないと信じていた。

これからもこの二人に愛されて育っていくんだと海斗は疑わなかった。

海斗は知っている、日常と言うものは簡単に壊れてしまうということ。

「海斗、大丈夫かしら？」

「つ!?!……ああ、大丈夫だよ。ほらほら、早く座ってみんな。今お茶出すから」

みんなを座らせた後、昨日の内に冷蔵庫に入れて置いた麦茶とビニール袋から紙コップを取り出す。

「紙コップしかないけど、我慢してね」

「別に大丈夫だよ海斗君、気なんて遣わなくても」

「そうよ、別に昨日今日知り合った訳じゃないんだから」

友奈と夏凜の考えを聞きながらも、呆れた顔をしていた。

「あのなあ、親しき中にも礼儀ありつて言うだろ。そういうところだぞ」

「そうよ、友奈ちゃん」

美森の加勢もあり、海斗の言葉に信憑性が増す。

これが、勉強会の入りだった。

今日は平日と言うこともあり、放課後の五時頃から勉強会を始めた。

最初の一時間はみんな集中していた、樹ちゃんは最年少なので質問を多くしていたし、友奈もあまり勉強が得意ではないので美森や海斗や夏凜に聞きながら勉強をする。

二時間が過ぎた頃だろうか、友奈がうずうずし始めた。

「もうダメく、疲れちゃったよ〜」

「友奈、こんな所で躓いてたら後々苦勞するぞ。今の内に覚えちゃった方が良いから頑張ろう、な?」

「でも、難しいんだもん!」

友奈が手間取ってるのは連立方程式だ、簡単に言うと少し難しくなった筆算だと思えばいい。

「友奈、こういうのはな無理に理解しようとしなくていいんだ。何で掛けないといけなの？とか考えてたら何時まで経っても分からない」

「う、うん」

「だからな、友奈。型を覚えろ」

「か、型？」

困惑する友奈、大抵の人がこんなこと言われたら最初は困惑する。でも、海斗が言いたいのは結構当たり前なことだ。

「数学はパズルだと思え、公式って言う型に問題の数をピースのようにはめていく。そうすれば簡単だ、何たって型覚えればいいんだからな」

「な、なるほど！流石海斗君、何だか急に簡単に感じてきたよ！」

「よし！その意気で頑張れ」

海斗は友奈の問題を解決すると、自分の作業に戻っていく。

彼は一人黙々と国語の勉強をしている、苦手ではないが一番点数が低いのが国語らしい。

「海斗は頭良い方なのね、意外だわ。てつきり脳筋で頭悪いイメージあったわ」

「おい！酷い言われようだな、そんなに頭悪くないぞ俺は！」

折角集中して勉強出来そうだったのに、今度は夏凜に妨害されてしまう。

そうやって、少しお喋りもしつつ時を過ごしていく。

時計が八時を回った頃だろうか、海斗が立ち上がり台所に立つ。

「みんなご飯食べてって、昨日の内に色々終わらせといたから」

そう言うとき景夜は、炊飯器から何時の間にか炊いていたご飯をよそう。

「因みにカレーです」

「カレーね、海斗の腕が分かる良い料理ね」

美森から強烈な視線を受けているが、海斗は気にしないようにした。

人数分よそいテーブルに持っていく。

「海斗、何故カレーにしたの？」

「え、だって作りやすいし。それに、毎日うどんじゃかわり映えしないかな〜と思って」

「そう……今度からは和食にして欲しいわ」

美森の眩しが怖い、海斗は久しぶりに美森に恐怖を感じた。

料理は大好評だった、風は三杯はおかわりしていただろう。

「今日はありがとね、海斗色々助かったわ」

「海斗先輩のお陰でテストは大丈夫そうです！」

風と樹を見送る、海斗は「送ります」言ったが「大丈夫ヨ」と言われあえなく退散。
夏凜は既に帰宅している。

「友奈も早く帰れよ、おばさんたち心配するだろ？」

「大丈夫だよ、今日はこっちに泊まるって言ってるし」

（え!?今こいつ何て言った?）

友奈の発言に驚きを隠せない海斗、美森の方は全く驚いていないのを見ると彼女には知らせていたらしい。

「姉貴は知ってたの?泊まるってこと」

「知ってたわよ、友奈ちゃんのお泊りを楽しみにしてたわ」

（クソっ!だから友奈は鞆やらなんやら荷物が多かったわけだ）

海斗は諦めたような顔をした後、二人と一緒に家の中に戻る。

風呂掃除昨日の内に済ませてある、後はシャワーで少し水を流せばすぐにお湯が沸く。

海斗はその作業をさっさと片付けてリビングに戻る。

「二人とも、お風呂の方お湯沸かしてるから、先に入っちゃって」

「ありがとうね海斗、一番風呂じゃなくていいの？」

美森の優しさは嬉しい海斗だが、流石に中学生だ。

男女の関係は弁えているつもりなので、潔く二人に先を譲った。

「レディファーストって言うだろ、それに二人とも男が入った後のお湯何て嫌でしょ？」

「私は別に良いのに……そうだ！海斗君も東郷さんと私と一緒に入ればいいんだよ」

(こ・い・つ・は・何・を・言・つ・て・る・ん・だ！)

今、海斗が究極の選択を迫られている。

友奈からしたら「小学校の時までは一緒に入っていたから大丈夫」、この考えがあるの
だろう。

だが、海斗からしたら昔から現在進行形で好きな人と最近女子らしさが出て来た幼馴染と入るのはレベルが高すぎる。

「ゆ、友奈、それは流石に不味い気がするんだけど……」

「海斗君は……嫌なの？」

少し目を潤ませてからの上目遣い、友奈は分かっているのだこうすれば海斗は断れないと。

「ああもう！分かったよ入れればいいんだろ！姉貴もそれでいいんだよな？」

「え、ええ、大丈夫よ！」

美森からしても、友奈の提案は予想外だったのだろう動揺して声が上がっている。

「先に入ってて」の一言から数分、美森の着替えを待つてるのか中々入って来ない。

海斗は安心して体を洗っている。

日守家のお風呂はデカイ、大きさは二?程度で底の深さは六十cm程になっている。

普通の家のお風呂は長方形だが、日守家は財力があるため何故か正方形のお風呂だ。

バスルーム自体も広いため、快適なお風呂タイムが確約されるだろう。

今回のような事案が無ければ。

「さ、流石に、タオル位は巻いてくるよな……」

「海斗君お待たせー!」

「は、入るわよ海斗」

海斗の目の前に写るのは一糸纏わぬ二人の少女。

美森のことを友奈が抱えて入って来る、普通なら海斗がやらなければいけないことだが、如何せん刺激が強すぎる為NGだ。

友奈がそつと美森のことを風呂椅子に座らせる。

「ありがとう、友奈ちゃん助かるわ」

「ううん、どういたしまして。そうだ海斗君、背中まだみたいだから洗って上げようか？」

友奈の誘惑お断ち切りしつかりと断る。

答だった。

(どうしてこうなった……)

今海斗は、電車の様に縦一列に並び背中洗いっこをしていた。

友奈が海斗の背中を洗い、海斗が美森の背中を洗う。

終わったら向きを交代してもう一回、その後は髪洗いも待っている。

友奈の方は大丈夫なのだ、海斗にとってはまだ安心できるレベルに収まっている。

友奈の女の子らしい小さい手に、少しドキツとしたが何とか耐えられる。

問題は……

(意識するな、意識するな、意識するな！)

美森の方だ、きめ細かく透き通るように白い肌、しかもすべすべなのだ。

海斗からしたら、手触りが心地よ過ぎて今にも鼻血が噴き出すレベルだ。

(頼む、早く終わってくれ！)

その願いが通じたのか、

「じゃあ、交代しよっか！」

友奈の一言に救われる。

(友奈！お前天使か！いや、最初にこれ提案してきた悪魔お前だったわ……)

交代して友奈の背中を洗う、美森と違い少し筋肉質に感じるが、それでも赤ちゃんの
ようにツルツルな肌でこっちもこっちで危険性が出てくる。

「海斗、背中失礼するわよ」

「う、うん」

友奈の手慣れた感じの手ではないが、優しさが伝わってくる手で和むことが出来た。

それも束の間、いきなり背中の方に明らかに手ではない柔らかい感触を感じた。

「ご、ごめんなさい！海斗、重心が傾いてしまつて！」

(じゃあ、もしかして。今俺の背中に当たつてるのは……)

海斗は少しだけ目線を後ろに送る、そこには顔を真っ赤に染めた美森の姿と、自分に押し付けられた年に不釣り合いなほど成長した双丘が見えた。

海斗の思考はそこでショートし、目の前が真っ暗になった。

「えっ!?か、海斗、大丈夫！」

「海斗君！」

二人の声は届いていない、彼の意識は既に闇の中に沈んでいた。

海斗が目覚めると、目の前に美森の顔があつた。

「あ、姉貴！そう言えば、風呂に入つててそれで……」

「起きたのね、あなたお風呂で上せてしまったのよ」

「そうだったんだ」

美森の言葉に納得して、起き上がる。

この後の展開としては、普通に少し駄弁って寝ただけなのだ。

因みにだが、美森が「重心が傾いてしまつて」と言ったが。

美森はもう一年以上車いすなのだ、体幹が常人よりあるはずなのである。

まあ、言わずもがなだろう。

勿論、美森はワザとやりました。

二人がそのことに思い出して、悶絶するのはまた別の話。

第十三話 「力の代償とこれからのお役目」

数分も歩けば美森が居る病室に着いた、彼女の部屋には友奈も居た。

「美森ちゃんに友奈ちゃんまで、元気そうでしたわ」

「はい、元気です！」

「母さん、心配掛けてごめんなさい」

美森は申し訳なさそうな顔をして謝り、友奈は元気に返事をする。

二人らしい返答の仕方に、美冬は少し笑ってしまふ。

「友奈に姉貴も元気そうでした、風先輩と樹ちゃんは？」

「あの二人なら、まだ検診中よ」

海斗の問いに答えたのは友奈でも美森でもなく夏凜だった。

何処からともなく現れた夏凜にたじろぐ海斗だったが、別段変わった様子のない夏凜を見て安堵の息を漏らす。

「美森ちゃんも大丈夫そうだし、私は帰るわね。後は任せたわよ海斗」

美冬はそう言い残すと、すぐに去ってしまう。

本当に顔を見に來ただけなようだ。

「それにしても、海斗部屋を出て良かったの？あなたが一番長く眠ってたのよ」

「へっ!? そうなの?」

「そうだよ、海斗君のことみんな心配してたんだよ?」

言われてみれば、犬吠埼姉妹は検診中だし、友奈は美森の部屋に居た。

夏凜は分からないが、それでも今さつき起きた感じは無いように見える。

「身体に問題はないよ、至って健康体だし。それだったら姉貴や友奈や夏凜こそ大丈夫なのか?」

海斗は遠回しに散華の影響が何処に出たか聞こうとした。だが、虚しくもその作戦は失敗に終わる。

「私は特にないわよ、アンタたちと違って鍛えてるし」

夏凜は何故かドヤ顔で言ってくるので、海斗はスルーして友奈と美森に向き合う。

「で、二人は？」

「私も特にないわよ、海斗君と同じで健康体！」

「私の方も大丈夫よ、それより海斗……一つ聞いていいかしら？」

美森が何でもない風に話を切り替えた、海斗はみんなの散華の影響が分からないことが不安なのか、美森の不自然な話の切り替えも気にならなかった。

「どうかした？」

（目に見えるものじゃないのかな？でも、あの日記の通りなら俺を含めてあと四人満開してる筈なのに……）

他の物事を考え始めて、美森たちの方に気が回せていない。

「あなたさつきから態度が変よ？何を隠してるの？」

「はっ？い、いやいや、何も隠してないよ。第一隠す事なんて……」

海斗は満開の真実である散華のことが脳裏に過った。

「何かあんのね？話さない、聞いてあげるから」

「海斗君？お願い全部話して」

夏凜や友奈にも疑われているらしい、海斗はつくづく嘘が下手な奴だった。

「別に何でもないって、そんな疑うなよ」

「じゃあ海斗、私の質問に答えて頂戴。昔、私たちが小さい頃にしたやくそく覚えてるか

し……」

（確か、美森ちゃんを娶るだっけ？これで合ってるはずだ）

海斗は心底感謝した、記憶補填用のフォルダを作った過去の自分に。

「確か、大きくなったら姉貴を娶るってやくそくだろ？忘れてないよ」

「そうね、合ってるわ。でも……やっぱり昔から嘘が下手ね海斗、あなたは私がこの話をするって決まって話を逸らしていたのよ？」

嵌められた、海斗は確実に美森の掌で転がされていただけだった。

「騙すなんて酷いと思うんだけど？」

「嘘をついたのはあなたでしよう？」

（クツソ、結構細かい所まで書いてあった所為で少し見逃したか）

フォルダの中には細かいところまで書いてあったのだが、如何せん細か過ぎて見逃したらしい。

何とも運が悪い、海斗からしたら一番バレたくなかった秘密は守れたがいいが、「少し面倒なことになった」と心の中で愚痴を吐いた。

結局、大きなテレビの置いてある談話室で、みんなに記憶を失ったことを話した。

「――、こんな感じで今の所は日記で補填してる。日記を書いておいて正解だったよ」

「そうネ、まあ良いわ。みんな一様は無事ってことで、今は楽しみましょう」

そう言う風は、左目に眼帯をしている。

断じて中二病などではない、左目の視力が落ちているらしく療養すれば治るらしい。樹も、勇者システムの長時間使用による疲労で声がでないらしい。

海斗は先程からチラチラと樹の喉や風の左目を見ている。

（風先輩は左目で、樹ちゃんは声……か。クソが！何で声なんだよ、もつと違う場所でもよかっただろ）

海斗は一人、神樹に対して怒りを燃やしていた。

その後は、みんなでお菓子を食べながら駄弁って自分たちの病室に戻った。

帰る途中、美森の指摘で友奈に味覚が無いことが分かり、海斗は知らず知らずの内に

自分に重圧を掛けていた。

みんなには、新しく端末が配られた。

その端末にはもう勇者アプリやNARUKOといったアプリは登録できない仕様になっていて、友奈が牛鬼に会えなくなるのを少し残念がっていた。

ある一人を除いては、

「はあ、俺の新しいお役目は日守家のお役目である勇者の保護か」

勇者の保護、護衛と言ってもいい。

元々日守の家は勇者の少女たちを陰ながら護衛することや彼女たちの援助になっている。

しかし、今回のお役目は特殊で、海斗が勇者に成れることを利用して、今代の勇者の少女たちにもう戦わせないことがお役目の内容だ。

フォルダの中にあつた資料の中には、バーテックスの種類や攻撃方法を書き記したのもや、神樹の寿命が残り少ないと言う大赦の上層部しか知らない事実まで書いてあつ

た。

神樹の寿命が短い所為か、今後は完成体ではなく星屑や進化体が多く出てくるらしい。

資料にはそう書いてあった。

「……どん位いんのかなあ、信長はどう思う？」

「俺が知るか……少ないことを祈ってる小僧」

何やかんやで会話してくれるのが信長の優しさなのだろう、その優しさに少し甘えつつも自分の部屋に戻った。

だが、ベッドに入り休もうとした瞬間。

耳障りな音がスマホから鳴り響く。

「うっそだろ、まだ前回の戦いから一日しか経ってないぞ！」

「来るぞ小僧！構えろ！」

辺りが光に包まれる、数秒で光は消えて海斗の視界には――

今の海斗からしたら初めて見る樹海が広がっていた。

張り巡らされた巨大な神樹の根、草が生い茂っている所も見える。

「ここが樹海、何だか異世界みたいだな」

「似てるかもな、これは結界に似ている。けど、この樹海化は神樹の力を使っている。ここいつにダメージが入ると神樹の方にもダメージが入るし、現実世界にも影響を及ぼす。気引き締めろ小僧」

視界の先には、目算で一万を優に超える程の数が見える。

そのどれもが、資料で見た星屑と呼ばれるものたちだが、完成型より一回り小さく御霊がない進化体も僅かに確認できた

「あれ、ヤバくないか？」

「ヤバイな、最初から全開だ！俺を使え」

「了解！降りろ、第六天魔王・織田信長！」

海斗が精霊としての信長の名前を叫ぶ、すると先程まで隣に居たマスコットのような容姿した信長はピンク色の粒子になって消える。

そのピンク色の粒子は海斗を包み、海斗の勇者装束を少し変化させる。

いつもの勇者装束の上に信長が着ていた、「天下統一」と言う言葉の書いてある羽織を着ている。

「何かあんま変わってないな」

『しょうがねえだろ、ほら小僧敵来てるぞ』

「やっべ」

目の前に来ていた星屑を適当に蹴り飛ばす。

蹴られた星屑は内部から爆発したかのように飛び散った。

その光景はあまりにも凄惨で、SANNチエックが入る予感がした。

「お前ホント強いいな」

『まあな。小僧、あれいくぞ！』

「よし来た！」

海斗は自分の後ろに敵が居ないのを確認し、詠唱に入る。

「これは天下分け目の大決戦、さあ鉄砲火縄銃を構えろ！ここからは何でもありの合戦だ！」
詠唱を一度句切り、片手に持っていた火縄銃を空中に放り投げた。

「喰らいやがれ！鉄砲十段撃ち！」

「長篠の戦い」、この戦いの中で信長は「鉄砲三段撃ち」と言う戦法を使つて戦いました。

鉄砲三千丁を用意して兵に配布して絶え間なく撃ち続けると言う、余にも斬新な戦い

方により勝利を納めたという。

海斗の「鉄砲十段撃ち」で使用する鉄砲火縄銃の数は一万丁。

桁が可笑しいが、今回のような集団戦にはうってつけた。

事前に信長に詠唱の内容を聞かされていて正解だったと、海斗は一人安堵した。

銃弾が絶え間なく撃ち続けられる、一分もしない頃には全ての敵を倒し終わっていた。

「信長、これ強すぎない？」

『気にすんな、この技は結構疲労が溜まるから数が少ない時はやるなよ』

戦いが終わると、信長が海斗から出ていく。

ピンクの粒子から実態を象つていき、すぐに元のマスコットののような姿に戻る。

そして、次の瞬間には樹海化が解けて元の世界に戻る。

送られた場所は病院の屋上だ。

海斗も変身を解き、何故か思い出したように手を叩く。

「あつ!? まだ新しい精霊出してなかった、出てこい鳳凰ほうおう」

海斗が呼ぶと端末から、体が神々しい炎に包まれた赤い孔雀が出てくる。

容姿はいつもの通りマスコットチックだ。

伝承上では中国の四霊に類される霊鳥である。

稀に不死鳥フエニックスと同一視されることがあり、その所為か精霊としての能力は「癒し」と「移

動速度上昇」といった所だ。

「私を呼んだのは君かい、人の子」

「えっと、そうです。これからの挨拶みたいな感じで呼んだんだ、よろしく鳳凰」

「よろしく頼む人の子よ。どれ、少し体力が消耗しているな癒して見せよう」

鳳凰が自身に纏っていた火を、海斗に纏わせる。

最初は暑がっていた海斗も段々と慣れて、数分間に体の疲れが吹っ飛んだ。

「凄い！ありがとうございます鳳凰、これからは世話になりそうだ」

「任せておくと良い。信長と言ったか、そちらの方もよろしく頼む」

「ああ、こちらこそな」

挨拶が済んだ所で、信長と鳳凰を端末に戻す。

屋上を後にし、ある病室に向かう。

「かーくん来てくれてありがとうございます」

「どういたしまして、銀の部屋を見て来た。バリアがあるのが本当に幸運に思えるよ」

先代勇者乃木園子らの時代、精霊バリアや満開はない。

それどころか封印の儀すらない状態があった、その所為でバーテックスは追い返すことしか出来ず、倒すことなどは出来なかった。

それも、三ノ輪銀の事があり見直されて今の状態になっている。

「初めてのお役目お疲れさま、どうだった？」

「うーん、特にはないかな。少し疲れるけど、これで勇者部のみんなやお前が戦わなくて済むんだつたらそれで良い」

これは紛れもない本心だ、日記を見てどれほど過去の自分が家族や友達や仲間を大切に思ってるか知った。

それ以前に、東郷海斗と言う人間は基本的な心の在り方は勇者のそれだ。

だからどれほど傷つこうと、それで大切な人が傷つかないならその方が善いと考えている。

「そう言うことを本気で言ってくれるかーくんのが大好きなんよー」

「ありがとな園子、もし何か俺に可笑しい所があつたら言ってくれ。今の状態じゃ良く分かんないからさ」

大好きと言う園子の言葉に頬が緩むが、それではダメだと思いき締め。

「りよーかい！任せて欲しいんだぜ。後、偶にここに遊びに来てね」

「あいよ、分かりましたよお嬢様」

そんな軽いやり取りをしながら病室を出る。

自分の部屋に帰る途中、何か心の中にドロリとした黒い感情が湧き出てくる。

海斗はそれを特に気に留めなかった。

信長は最上位に位置する精霊だ、その辺の精霊とは格が違うのだ。

海斗は知っている筈だ、精霊降ろしのデメリットは肉体的な面だけでなく、精神面にも負荷が掛かるということ。

記憶を奪われた海斗には分からない感情、憎悪や憤怒と言った不の感情のことを。

彼はまだ気付けずにいた。

第十四話 「変わりゆく季節の中で」

美森以外の勇者部員は先に退院し、普通に登校が再開された。

一日の授業を終えた教室は騒がしく、たむろつてお喋りする者も多い。

海斗と友奈は手早く荷物を纏めて教室を出る。

「今日からは普通に部活だね」

「前までが可笑しかっただけさ、これからはいつも通りだよ。ただただ青春を部活に捧げて、学生生活を謳歌する」

「こんなことを言っている張本人が、未だに勇者として戦っているのだから救いようがない話である。」

「結城友奈来ましたー!」

「同じく、東郷海斗来ました」

扇風機にで涼んでいた風も、海斗たちが来たことに気付き、ドアの方に顔を向ける。

「おう、お疲れ〜」

気の抜けたような風の挨拶が響く中、彼女の目にある黒い眼帯に二人が気付く。

「風先輩眼帯が……」

「変わりましたね」

「どうよこれ？」

風がドヤ顔で二人に尋ねると、友奈がやたら高いテンションで返答する。

「ちよーカツコいいですー！」

「いいんじゃないんですか」

一方海斗は、冷静な態度を保ちつつ返答する。

「えへへ、私もイケてると思ってたんだー!とところで、夏凜は?」

「あれ?来てないんですか?」

「むむ、サボりか?後で罰として腕立て伏せ千回とかやらせよう」

「夏凜だったら平気でやりそうですけどね」

みんなが容易に想像できる光景に、樹がスケッチブックを開きながら笑みを浮かべる。

「否定できない……サプリをキメながら朝飯前よ!てっ言つて——」

風が何か言葉を続けようとしたが、樹の行動を見て言葉を止める。

『かりんさん何か用事があつたんでしようか?』

先程の行為はスケッチブックに言葉を書こうとしたものらしい、筆談というやつだろ
う。

「そうかもね」

「そのスケッチブックは？」

友奈の質問に答える為、スケッチブックに文字を書き始める。

『これで話せます。お姉ちゃんの提案です』

「声が治るまでの応急処置、少し我慢ね」

「筆談みたいなもんだよ、友奈」

「なるほど」

そんな会話をしていると、風が今日の活動について話し出す。

「さて、今日の活動だけ……四人しかいないのよね、衣装のこと話したかったんだけど」

「衣装？」

友奈は何のことか把握できていないのか、疑問形で返してしまう。

「文化祭の衣装のことだよ、お前が言い出しつぺだろ？」

「ああ、そうでした！」

「勇者の活動が一大事だったから忘れてたでしょう？」

「あはは……」

友奈が苦しい笑い声を出す中で、風は落ち着いて今日の予定を立てていく。

「まあ、でも、三人だけじゃ話し合いもあんまり意味ないし……他の事だと」

『他の部の手伝いは？』

「そうそう、剣道部から練習に付き合って欲しいって依頼メールが来てたのよね。てそ

れ、夏凜を^ご指名か。夏凜は居ないから今日は無理つと」
風は改めて他の依頼を探し始める。

「えーつと、他には？あつそうだ、ホームページの更新は」

「私たちが入院してる間、更新が止まってましたからね……あつ、でも」
友奈がオロオロし始める。

「どうしたの」

「東郷さんが居ないと更新のやり方が分からないです」

「いや、俺出来るけど」

友奈と風が揃って海斗のことを見つめる。

「でもアンタは記憶が……」

「大丈夫です、舐めないで下さい！学校復帰までに、持っていた知恵や技能は再習得しました。不肖ながら、この東郷海斗がホームページの更新を任せてもらいます」

『海斗先輩、凄いです！』

キメ顔で言う海斗に対して、樹は文字で、風と友奈は感嘆の声を漏らす。

「でも、それが終わってからはどうしましょう」

「そうね、猫の飼い主になれる人はまだ見つかってないし……」

『できる仕事ないね』

「だね〜」

樹の一言？一文により、部活の雰囲気はだらけモードに入りつつある。

「仕方ない！だらだらしよ〜」

「そうですね〜」

二人の息が合い、部活は完全にだらけモードに入っていた。

海斗が手早くホームページの更新を進めていると後ろから声が、

「東郷のお菓子が足りない！」

『まず食べ物なの？』

「俺、クッキーだったら作って来ましたけど。……食べます？」

「食べるー！」

『私も食べたいです』

海斗の言葉に全員が飛びつくように反応する。

「にしても海斗、アンタは料理上手いわよね。やっぱりハイスペックだわ、そういう男は

モテるわヨ」

「別に姉貴ほどじゃないですし、本当に作れる程度ですよ」

そう言つて海斗は、バックの中からタッパーに入れてきたクッキーを取り出す。開けた瞬間、バターの良い香りが部室中に広がつていく。

『とても良い匂いですね』

「だね、海斗君はやっぱり手先が器用」

その後も、だらだらと過ごして今日の部活を終えていった。

部活後、友奈と海斗は美森のお見舞いにやつて来ていた。

美森の散華は左耳、これで満開した勇者の散華した部位が全員分分かった。

海斗は二人が話す姿をただ見守るのみで、何もしようとしなない。

記憶が無くなり、記録で補填しているもの的小手を打つとボロが出る。

その為か、二人の会話に上手く入れずにいた。

友奈相手だったらどうにでもなる。

察しが良い彼女だが、海斗が嫌そうな素振りを見せれば深く聞こうとしない。美森は違う、優れた観察眼と洞察力で海斗のことを揺さぶる。付き合いが長いこともあり、勘で相手の考えを的中させたりする。

「じゃあ、東郷さん。また来るね」

「ええ、楽しみにしてるわ……海斗は話があるから少し残って頂戴」

「……友奈先に帰っててくれ、すぐに追いつく」

「うん」

友奈の足音が聞こえなくなった頃に、二人の会話は始まった。

「海斗……満開の後遺症。あなたは何か聞いていない？」

「聞いてるって言ったら、どうするの？」

「問いたですわ」

美森の突き刺すような視線を受けながらも、海斗は微塵も動揺した様子を見せない。

「……知ってる、けど言えない」

「何故？何か特別な理由があるの？」

美森の質問に海斗は臆さず本音を出す。

「その結果を知って、死ぬほど後悔をする人がいるから。……それに、戦いはもう終わった。この後はバーテックスのことなんか忘れて、普通に日常を生きていればいい」

「あなたの答えはそれなのね。分かったは、無理に問いただそうとは思わない。……早く帰りなさい、友奈ちゃんを一人で帰らせる気？」

「了解、すぐに帰りますよ」

そうして、病室を後にする。

帰り道、海斗には夕暮れの空が妙に赤黒く見えた。

あれから数日、四人だけの部活が続いたある日。

「悪い友奈、今日は部活に行くの遅れる」

「分かった、風先輩に伝えとくね。……それで、何かあるの？」

「夏凜を連れ戻しに行くんだよ、もし遅くなったら友奈も助っ人に来てくれ」

海斗の言葉に笑顔で頷く友奈、頼りになる笑顔を見た海斗は部活のことを友奈に任せて夏凜を捜索しに行った。

どれほど時間が経っただろうか、スマホに入っている記録を見ればヒントが見つかるかもしれないが、それを使わずに探したかったのである。

時刻を見れば四時過ぎ、説得や帰りの時間も考えるとそろそろ見つけないと不味い時間だ。

そんな考えを浮かべる中、気付けば砂浜の方まで来ていた。

「潮風が気持ちいい……って違う違う！夏凜探しの続きを」

だが、何故か自然と足は砂浜に向かっていった。

記憶なんてないのに、それでも魂が覚えていた。

砂浜に居た人影は一人、一心不乱に二つの木刀を振る少女がいる。

その動きはとても洗練されている、我流になんて見えない。

剣舞は美しく、夕日も相まってかその光景は、まるで幻想のように見える。

息をするのも忘れそうな綺麗な剣舞。

少年は見惚れていた、吸い込まれるように見入っていた。

やがて、剣舞が終わったのか砂浜に尻餅をついて座る。

やっと正気に戻った海斗は、歩いて夏凜の下に近づいた。

「よっ、夏凜。さっきの型、凄く綺麗だったぞ。正直見惚れてた」

「はあっ?!いい、いきなり会いに来て、開口一番それってアンタはどんな神経してんのよ

！」

いきなりツツコミを喰らったが海斗はそんなのどうでも良い、今日会いにいらたのはそんなことが言いたくて来た訳ではない。

「ねえ夏凜？」

「何よ」

「部活来ないの？」

「……もう私には行く意味はないわ。お役目は終わったしあの部活に居たのも連携をする為だし。お役目が無くなった今、私は学校に行き続けることが出来るかすら分からない」

これは本音ではない、海斗には分かる。

ここでも、魂こころがそう言ってる気がしたから。

「それは夏凜自身の言葉じゃない、ただ単に事実を言ってるだけ。……なあ、夏凜はどう

したいんだ？」

「私は……私は……分かんない。友達とか仲間とか、まだ良く分かんない。アンタと友達になつて、アイツらとも友達や仲間になった。でも、私にはまだ上手く分かんない」

「だったら、あそこで学ばばいい。友達や仲間がどういふものか、そうすれば勇者部にも入れて一石二鳥だ。お前はもう大赦の勇者じゃない、ただの三好夏凜としてこれからを歩んで行けばいい」

海斗なりのアドバイス、記憶を失った者の言葉など薄っぺらく感じるが、この少年の言葉はどこか厚みがある。

どこなのかは分からないが、夏凜はそう感じていた。

「勇者部あそこ、答えが分かるように学ぶ……か。アンタも良い事言うじゃない。海斗今から行きましょう、何か手土産持つて」

「よし来た……この近くに良い店がさ——」

海斗が言葉を止める。

その瞬間、世界が切り替わった。

「またここか、いい加減慣れて来たな」

「良い事だ、小僧。敵が来てる早く変身済ませろ」

「落ち着けば何ともないようであん心した。手早く済ませてしまおう」

変身を済ませて辺りを見渡す。

新しいお役目に着いてから三回目の襲撃、襲撃のスパンが短いので下手に精霊降ろしが出来ない。

「数は少ないな、進化体が二体……げっ！スコープオンにレオ系の奴か。その他は、星屑が千ちよいつてところだな」

「結構少ねえが、油断すんじゃないぞ」

「心して掛かれ、でないとやられるのは私たちだ」

「了解！信長に鳳凰、行くぞ！」

地面を蹴って空を駆ける、少年は戦う。

大切な人たちが平穩を過ごせるように。

また日が開いて数日、あの後はしつかりとお役目を終えて夏凜と部活に帰った。

美森も退院して、勇者部は一様の復活を果たした。

完全ではないが……

そして、その状況を観察する者が一人？いや一羽の方が正しいか。

(……このまま平穩を、とは行きそうにないな)

また会議を開くべきだろうかと考えながら空を飛ぶ。

少しづつ移り行く季節の中、変わろうとしているのは季節だけではなく他の大切ななにかも変わっていく。

日常が非日常という毒に完全に汚染されてしまう日も近いのかもしれない。

第十五話 「最高の日で最悪の日」

夏休み、それは学生たちにとって魅惑の言葉。

海斗はあまりそうは思わないが、友奈たちにとっては違うようである。

「海だー!」

「綺麗ね」

「海だな……」

大赦がバーテックスを全て倒したご褒美として合宿を用意してくれたのだ。

勿論、そんなのは建前だ。

いつの時代も人身提供に優しくしない者などいない。

海斗の事情を知らない勇者部一行は、この旅行を存分に楽しもうとしていた。

「人は結構いるわね、ナンパされたら困っちゃうわ」

「自信ありげに言ってるけど、ナンパされたところで付き合わないでしょ」

『女子力のせいで?』

「うるさい！兎に角、樹の言う通り女子力があれば交際なんてお茶の子さいさいよ！」
騒がしいが、それすらも心地いい。

最近、お役目の所為で疲れ気味の海斗には、勇者部のみんなと居るこの時間が唯一の癒しに近かった。

荷物は既に送っており、女子組はパラソルやらシートやらを海斗に任せて着替えに行った。

海斗も直ぐに着替えを済ませて、外でシートやらパラソルの準備をして待つ。

数分もしない内に夏凜がやって来た。

「早かったな」

「アンタ一人だと大変そうだと思ったから、手伝いに来たのよ」

「サンキュな、じゃあそこにあるワニの浮輪に空気入れといてくれ。空気入れは一緒に置いてあるから」

「そ、……………あのさ……………海斗から見てこの水着変じやない？」

スポーツタイプのビキニだろうか、全体的に白と赤で構成されていて夏凜に似合っている。

海斗は思ったままのことを伝える。

「カワイイと思うぞ？てか、友奈たちと買ってきたんだから似合っていない訳ないだろ」

「か、カワイイ!?ば、バカ！いきなり何言うのよ!」

「だって、お前が変じゃないって聞くから……………思ったことを言ったんだが」

「~~~~~!!!!」

恥ずかしいのか、勢い余って浮輪をパンクするほど大きく膨らまされている。

「お、おい夏凜! やり過ぎやり過ぎ!」

「へっ? ああああ! こ、これどうすれば」

「ああもう!」

慌てながらも何とか空気を抜き、通常の大きさにする。

海斗はこんな展開が今日何度もあるのかと思うと気が重くなるが、心魂はそれが良いんだと微笑んでいるような気がした。

いつの間にか、全員が揃いみんな海に入っている。

「みんな楽しそうでいいな……俺も行きたいけど行ったらこの荷物見てる人いなくなるしな」

「行けよ相棒、ここは俺らが見といてやる」

「そうだ、海斗よ。ここには私たちが居る、もし悪人が来たなら聖火で炙ってやる」

「結構えげつないこと言うな鳳凰、まあお前たちがそう言うなら……」

海斗もシートから腰を上げて、友奈たちが居る方に走る。

「おい、俺も混ぜてくれ！」

「いいよ、海斗君も一緒に潜りっこしよう。東郷さんが喜ぶもの拾って来た人の方が勝ち」

「いいで」

ワニの浮輪に乗っていた友奈も海面に降りて、準備をする。

美森はどこかで借りて来たのか、特殊な車いすに乗っている。

後ろにはライフセイバーの方が立って、車いすを操作している。

近くに樹も居たのか、準備オーケーと言う意味で親指を立てている。

「あまり無理はしちやダメよ？」

「了解！」

「あいよ」

美森の注意に樹も頷いて返す。

その後は合図をスタートに、全員が潜って目当ての物を探し始める。
海斗はすぐに目当ての物を見つけた。

(綺麗な碧色の石だな……真珠?……なわけないか)

すぐさま拾って息が辛くなる前に海面に浮上する。

「プハア!……友奈に樹ちゃんも早いな、そんなに良いのあったのか？」

「ふっふっふ!これだよ!」

友奈が見せて来たのは、あまり大きくないサンゴ礁だ。赤く綺麗な色合いをしており、彼女に良く似合っている。

……だが、

「友奈、ちよつと大きすぎないか」

「フルフル！」

海斗の意見に樹も賛同するかのように首を振る。

先程あまり大きくないと言ったが、それは平均的なサンゴ礁から見ての話だ。

三十cmほどあるため、流石に持ち帰りづらい。

「良いじゃない海斗、友奈ちゃんが折角持って来てくれたんだもの」

「あのなあ……で、樹ちゃんはどんなの？」

樹は勝ち誇ったような笑顔で握っていた手を開く。

中には、色鮮やかな貝殻が。

「綺麗ね……ありがとう樹ちゃん♪」

美森の言葉に嬉しそうに微笑む樹、それを眺めながら海斗は思う。

(何か、俺の探してきた物……浮いてるな)

一人だけガチでやっているようで気まづくなりながらも、美森の取って来た物を渡す。

「はい、これ」

「……とても綺麗、ありがとうね海斗」

とても優しい笑顔で感謝をする美森に一瞬見惚れてしまい、すぐさま顔を逸らす。

「……どういたしまして」

その後は、スイカ割りをしたり砂でお城を作ったりと夕方頃まで遊び倒した。

「はぁ〜いい湯だ」

旅館の温泉に浸かりながら、遊び疲れた体を癒す。

「相棒の言う通り、いい湯だよ。鳳凰もそう思うだろ？」

「そうだな、とてもいい気分だ。湯浴みをするのもいいものだな」

精霊の二人？いや、一人と一羽も温泉を楽しんでいる。

「そりゃ良かったよ、お前たちには荷物番してもらったしな。そのお礼だと思ってくれ」
海斗の近くには、ジップロックのような防水用の袋に入ったスマホが見える。

「ありがたいな相棒、タマにはこういうのがないとつまらないしな」

「ああ、海斗には感謝している。わざわざそんな物まで使わせて」

そんな物とは、恐らく防水用の袋のことだろう。

だが、海斗からしたらあれは元々海に入っていると時でもお役目を果たせるようにに配慮に近い。

「別に、気にしなくていいのに」

前回の役目は二日前だ。

海斗からしたら、最近はお役目の回数が多すぎて数えるのも嫌になってきている。

酷い時は、一日二回もお役目の為に樹海に駆り出される。

後何回、この身を削って戦えば戦いが終わるのだろうか。

いつしか、暇になればそんな事ばかり考えてしまう。

精霊降ろしがあるお陰で大分楽になっている、鳳凰のお陰で傷や疲れは直すこともできるので海斗はまだバレていないと思っている。

実際の所は、勇者部の殆どが海斗の可笑しな点に気付きつつある。

「……相棒？大丈夫か？何か悩みがあるなら聞いてやるぞ、これでも人生の先輩だから」

「悩み事……それがさ——」

海斗は打ち明ける、それを聞いた信長は静かに優しく話し出す。

「悪く言ったら代理戦争に近いこの戦いは、天の神を倒さないと終わらない。だが諦め

るな、お前が勇者になつた意味は必ずある」

「信長……」

「それに俺と鳳凰が付いてる、もしもの時はお前の為に命を懸けてやる」

その言葉が温かくて、その言葉が嬉しくて、自然と流れそうになつた涙を拭いて風呂を出ようと腰を上げる。

「信長に鳳凰、お前らが俺の精霊で良かった……」

「へへ」

「ははは、海斗も素直になると可愛いものだ」

「うっせー！」

海斗はスマホを取って風呂を出る。

タオルで体を拭き、部屋着用に貸し出された浴衣を着て、ドライヤーで髪を乾かす。

その工程をさっさと済ませて、みんなが待っているであろう部屋に戻る。

「ただいま。つて！もう飯食ってるのかよ」

友奈が美味しそうに食べてるのを見て、味覚がないなりに食事を楽しもうとしてるのが分かり、海斗は嬉しい反面辛くもあつた。

「遅かつたね海斗君」

『お風呂はどうでしたか?』

「気持ちよかつたよ。俺は夏凜の隣に座ればいいのか?」

友奈たちはご飯を食べてから温泉に行く為、海斗を待っていたのだ。
まあ、既に食べ始めているが。

御櫃おひつのある方は、美森・友奈・樹の順で、その反対側に夏凜・風が座っている。

美森の反対側の席が空いており、そこに座るらしい。

「そうヨ、アンタ男の子なんだしいっぱい食べるでしょ？ 私たちなりの配慮よ」

「ほら、早く座りなさい。ご飯よそつて上げるから」

「となると、場所的に姉貴がお母さんか」

お母さんは分かりやすく言うと、ご飯の近くに居ておかわりの時によそつてもらい
人のことだ。

昔、母親が炊飯器を近くに置いて、家族の為におかわりをよそつていたことから言わ
れてるらしい。

この時代の海斗達からしたら分かることではないのだが。

「東郷が母親か厳しそう」

「門限を破る子は柱に貼り付けます」

「ひっ」

海斗から小さな悲鳴が漏れる、度々門限破りをしている海斗からしたら恐ろしい言葉だ。

「まあまあお前、そこまでしなくても」

「あなたが甘やかすから」

「おいおい夫婦か？」

海斗のことを庇ってるのか、それともただオフザケでやっているのか、友奈の行動は時たま分からない。

「時々言ってるけどさ、こういうのを日常的食べられる身分になりたいわよね。自分で稼ぐなり、イイ男見つけるなりで」

『後者は女子力が足りませぬ』

樹の言葉は最もものだが、風はそれでもうくと顔を悩ませる。

「そうかな？この浴衣姿から匂い立ってこない？」

横に居る夏凜はそれを華麗にスルーして、食事を続ける。

「ちよつと夏凜、刺身は人数分しかないんだから二つ取ったらダメよ」

「ブツブツ言ってるのが悪いのよ。て言うか、女子力言うなら東郷姉弟の所作を見習いなさいよ」

二人の所作は美しい、海斗もやろうと思えばこれくらい出来るのだ。

美森と海斗の所作は完璧で、それに加えて殆ど同じタイミングで同じ物に手を付けている。

「おおく！ただ普通に食べてるだけなのに」

『うつくしい！』

友奈も樹も関心してるが、二人にとってはちゃんとした食べ方と言うのはこういうものだ。

「さつすがお嬢様にお坊ちやま、やるわね」

「そんなに見られたら、食べ辛いです」

美森は気にしてるが、海斗は全く気にせず食べ進めていく。

「ま、私もそこそこマナーには五月蠅いけど、ね！」

『それがすでにアウトです』

「え、嘘！」

「姉貴おかわりくれ。それと夏凜、樹ちゃんの言ってることは本当だ。迷い箸に刺し箸、調べたら出てくるぞ」

樹と海斗に指摘され、自分の食べ方がアウトなことに気付く。

「まあ、あんまり細かい事は気にしなくても」

「そう、食事は楽しむのが一番！」

「最低限のマナーさえ守ってれば善いのよ！」

友奈のフォローのお陰か調子付く風と夏凜。

「おおー！そうだそうだ！」

結局友奈もそれに乗っているので、怒り用もない。

『こういう時は団結するんだ』

そして、時は過ぎ女子組はお風呂に行った。

海斗はその間、持ってきたノートパソコンにUSBを刺してW o r ?で日記を書き始める。

これは、前の自分がやっていたことなので継続している。

もしかしたら、今後同じ症状が出るかもしれない。

いつ自分がまた満開するか分からない。

そこまで追い詰められないことを祈るが、希望的観測はし過ぎない方が良い。

日記を書き終わった後は、布団を敷きみんなの帰りを待つ。

二十数分程でみんなが帰ってきて、海斗にお礼を言いながら布団に入っていく。場所は襖の手前側から、樹・風・夏凜でその反対側に海斗・美森・友奈の順だ。

「ホントに俺が一緒の部屋でいいの？」

「なーに言ってるのよ、アンタも勇者部員でしょうが。当然よと・う・ぜ・ん」

風の言葉に押し切られ、布団に入る。

本当は、みんなが帰ってくるまで海斗は押し入れて寝ようとしてたのだ。

話は変わり、話題はコイバナに。

「で、では誰かに恋をしている人々？」

「『『『………』』』」

無言、誰も手を上げないと思った最中。

海斗が手を上げる。

「!?」

全員が反応する、だが美森だけは何故が納得したような表情をしていた。

海斗の交際の記憶、彼女の推測が正しければ彼は自分の想いを秘め続ける為にそんなことをしていたのだ。

(記憶をなくしても、それでも想い続ける人)

何故想いを秘め続けるのか、恐らくだがその相手は本当ならそんな想いを抱いていない人。

美森はそこまで予想していた、だからこう思うのだ。

(もし、もしその相手が私だったなら、どれほど嬉しいことか)

美森も段々と自分の想いを隠し切れなくなっていた、少しづつ心の壁は無くなっている昔に戻りつつあった。

海斗の記憶が一部ではあるが無くなってしまい、彼との距離がまた少し開いてしま

そのこともあつてか、好意が少しづつ暴走し始めている。

「記憶が無くなつても魂が叫んでる気がして、その人のことを思うと少し胸が痛いかな」
「海斗を落とすなんて中々やり手ね、こんなに可愛い子揃いの部活に居るのに」

「そうですね……」

記憶が無くなつても海斗は海斗。

海斗が想う相手はただ一人、東郷美森だけだ。

(記憶をなくしてからもあつたこの想いは、きつと偽物なんかじゃない)

自分に関する記憶、その全てを失つた海斗だが、他者のちよつとしたものだったら覚えていてる。

本当に些細なもの程度だが、昔のことも自分が何をしたのかは覚えてないが他者が何をしたのかは覚えていたりする。

その後は、特に盛り上がることはなく。

夏凜が寝たのを皮切りに、電気を消した。

美森の怪談が炸裂したが、夏凜の寝言によりあえなく粉碎。
みんな就寝についた。

海斗の安眠を打ち破ったのは、他でもないバーテックスたちだった。

「……おいおい、こんな時間に普通来るか？」

「まあしようがねえだろ、相手が安心した時を狙うつてのは案外悪くない作戦だ」

「まあ、下種の極みに近い考えだがな。行くぞ海斗、少女の平穩を守る時だ」

何とか体を起こし樹海化に備える、周囲の時間は止まっており誰も気づかない。

数瞬の間に世界は変わり、見慣れた戦場が目に映る。

勇者装束に着替えて辺りを見渡す、敵の数は星屑が千程度、もつと来てもいいはずだが海斗にとっては嬉しい誤算だ。

「案外数が少ない、これならすぐに終わりそうだな」

「ああ、相棒もちやんと寝ないと身体に不調をきたすからな」

「眠くなったら言ってくれ、熱いのをやろう」

「遠慮しとく……さて、今回もお役目を果たしますか」

いつもの刀と火縄銃を構えて、敵を待つ。

慣れてきたが、流石に真夜中は辛い。

時間的には三時過ぎ、最高に眠いタイミング起こされた為少し怒り気味の海斗が星屑を駆逐していく。

十数分もしない内に戦いは終わり、浴衣姿で布団の上に立っていた。

結局、この後は一睡もすることが出来ず。

美森が起きるまで一人で悲しく海を眺めていた。

神世紀三〇〇の夏、人が成長し進化するように天の神も変わりつつあった。

悪い方向に……だが。

第十六話 「俺のお役目」

八月の中ごろ、事件は起こった。

「……クソっ！ 少しかったけど浸食された、あまり広くはなかったけど」

「希望的観測はし過ぎるなよ、相棒」

「信長の言う通りだ、覚悟はしておくど善い」

「分かった」

先程あつたお役目の最中、敵の侵攻を許してしまった。

その所為で、バーテックスによる浸食が進み、狭い範囲ではあるが現実世界に被害が出てしまった。

樹海での浸食や傷は、現実世界にフィードバックする。

大赦によって情報規制がされてる為事故として流されてしまうが、海斗にとっては一大事だ。

一般人にもしものことがあつたら、海斗はお役目を一人で続けることが出来ず、勇者部のみんなや園子を戦わせることになる。

それだけは、なんとしても回避したい。

それに加えて、もしも今回の件で見知らぬ他人が死んだとしても海斗の心にダメージを残す。

最近のお役目は夜中に来ることも多々あり、その疲労もあつてか今回の件は必然に近い。

家に帰るまでの足取りが重い、海斗の心はそれ相応に追い詰められていた。

時刻は夕方頃、部活終わりなのかジャージ姿の中学生がやけに目に付く。

海斗の心にさざ波が立っていて、一刻も早く家に帰る為に重い足を必死に動かした。

数分も経たずに家に着き、玄関を開き靴を確かめる。

(母さんと美森ちゃんの靴はある……、父さんの靴は流石にないか……)

自分の心に大丈夫と言い聞かせ、恐る恐る廊下を渡り居間に入る。

「ただいま……」

「あら、お帰りなさい海斗」

「……姉貴は？」

「美森ちゃんなら部屋よ、それが？」

二人とも無事らしい、安堵のため息をついたのも束の間。
付いているテレビからニュースが流れる。

「それでは、次のニュースです。先程、讃州中学付近の交差点でトラックによる交通事故が起きました」

「あら、大変ね。海斗は大丈夫だったの？」

「あ、ああ、問題ないよ」

女性のニュースキャスターが事故の原因を解説していく。

「事故の原因としては、地面に突然出来たクレーターののような段差によるものとされていて今も調査が行われています。事故に遭ったのは部活帰りの中学生、柳橋陸斗君一三歳。救急車で病院に搬送されましたが、意識不明の重体です」

その言葉を聞いた瞬間、海斗の心に修復不可能に近い傷が入った。

「待ちなさい海斗！」

美冬の静止の声も聞かず、海斗は走り出した。

ポケットに入っていたスマホを取り出し、急いである番号に電話を掛ける。

コール音が三回も鳴らない内にその人物は電話に応じる。

『……海斗様、何の御用でしょうか？』

『今すぐ、柳橋陸斗が入院してる病院の情報と面会許可をとって下さい！』

『少々お待ちを………柳橋陸斗様が入院してる病院は、先日日守様が入院していた所

でございます。今手術中だと思われれますので、中に入れるように手配しておきます』

『ありがとうございます、では』

電話を一方的に切り、勇者の力を使い病院に急ぐ。

一分も掛からずに到着し変身を解き、受付を無視して手術室に走る。

途中、何度も止まるよう指示されていたが、今の海斗の耳には届かない。

走っていた所為で少々道に迷いかけたが、何とか手術室を見つけて中に入る。

「……………君が東郷海斗君だね？」

「はい……………柳橋の容体は？」

「何とか一命は取りとめているが……………足は絶望的だ。完璧に治ったとしても、下半身に麻痺が残ってまともに運動することは出来ないだろう」

「……………皆さんは外に、俺がどうかします」

医者たちは訝しむような視線を向けるが、海斗の気迫に押されて外に出る。

勇者に変身した海斗は、陸斗の隣に立って申し訳なさそうに彼を見つめた。

「悪いな柳橋、今治してやるから……鳳凰」

鳳凰を降ろして、癒しの聖炎で陸斗の身体を覆う。

たった数瞬の内に癒しの効果は完了し、終わったことを鳳凰が伝える。

「海斗、治療は終わった。後は細かい所を、医者に任せるしかあるまい」

「了解、柳橋が目覚めない内に退散しよう」

変身を解いたその時、海斗は喉にむず痒い感覚が走り咳が出る。

あまり気にしなかった海斗だが、口を押えた掌にある生暖かい感触で自分の体の限界を知る。

「……血反吐……まさかここまで追い詰められるとは」

「私で回復させるのも危険だな、体への負担がより大きいものになる可能性がある」
鳳凰のアドバイスを基に、その日はなにもせず家に帰った。

翌日、やかましいほど元気になった陸斗の声を聞いて海斗が安堵したのは言うまでもない。

先日の件から一週間が経った、陸斗は未だに入院中である。

病院で陸斗の怪我を治した後、春信から連絡があった。

「最悪の事態を想定して欲しい」とのこと。

おおよそ、勇者部のメンツが復帰するということだろう。

嫌ではあるが、これ以上は自分の身が持たないと分かっているので諦めるしかない。

それに、戦いになったらみんなにはサポートに徹してもらい自分が戦えばいい。

海斗はそう考えて春信の言葉に頷いた。

結局、あの後からお役目はなく、存分に体を休めることが出来た。

そして、今に至る。

「姉貴と一緒に依頼なんて、珍しいな」

「そうね、でも私と海斗は得意不得意が似てるし、珍しくはないんじゃない？」

「それもそうか……」

現在、神樹館学校に來ている海斗と美森。

珍しく、二人を指名した依頼だったので内容を聞くと、「学校のホームページ作成を手伝ってほしい」ということらしい。

久しぶりに明や優希たちに会いたくなつた二人は、その依頼を受けてはるばる神樹館にやつて來ていた。

時刻は午後一時頃、真夏なので日差しが熱いために日傘を差しながらの移動だ。駅から徒歩で数分、校門が見えてくる。

そこには真夏なのに相も変わらず、元気ハツラツな明が待っていた。

「お久々二人とも、今日は暑い中呼んでゴメンね！」

「別にいいわよ、アカリンの頼みだもの」

「右に同じ、気にすることないぞ」

三人で話しながら校舎の中に入る、今日は球音と梓は陸斗の見舞いに行っているらしく欠席、居るのは千夏と優希に明だけだ。

途中で何故か分かれて、海斗と明は小等部の校舎を歩いていった。

「なあ、俺もあっち手伝はなくていいのか？」

「イイのイイの！スミリンが居れば何とかなるし。それよりなにより、今は海斗の方が大事！」

「俺の方が大事？どういうことだ？」

「実はさ、知ってるんだよね。海斗のお役目の話」

明が放った一言で、海斗の心臓は飛び跳ねたのかと錯覚するほど高鳴った。

「な、なんでお前が……」

「まあ、そんなことはどうでも良いの。今は話して、苦しいこととか辛いこととか。他のみんなには言えなくても私になら言えるでしょ?」

明の言葉に甘えそうになる心を必死で止める。

そして、心をすり潰しながら声をだす。

「大丈夫、お前が思ってるほど俺は弱くない。結構成長したんだぞ、これでも」

「……………そう、海斗がそう言うならそうなんだね。お役目も大変かもしれないけど気を付けてね」

「おう」

ここで一度会話が終わり、静かに廊下を歩く。

海斗はここで学んでいた時の記憶はほぼない、だが魂が懐かしさを喜んでいるのを感じた。

隣に居る明も、目に懐かしさを見せる海斗を氣遣つて話掛けずにただ隣を歩いた。

夕暮れ、讃州の方に戻つて来た二人は帰路に着いていた。

「海斗はアカリンとなにをしていたの？」

「別に、特にこれと言って何かしたわけじゃないよ」

「そう」

海斗が車いすを押して、美森は命を海斗に預ける。

足の悪い美森にとって、車いすを押してもらうのは命を預けるのと同義だ。

海斗はそれを分かつたうえで押している。

「姉貴、今から言う話をよく聞いてくれ」

「……なにかしら」

「勇者システムには、樹海緊急脱出システムなるものがあるらしい。それを使えば、自己指定した相手と樹海から脱出することが出来る。今は精霊バリアがあるから重傷者はあまり出ないけど、昔はバリアなんて無かったから重傷者が偶に出たんだ。だから、そういう時の為に脱出システムが作られた」

海斗は、説明口調になるのを分かったうえで話している、あまりこういう話は得意ではないのだが背に腹は代えられない。

「何故、今それを教えるの？ 戦いは終わった筈でしょ」

「……戦いはまだ終わってない。あの後も続いていて、俺がお役目を引き続きやってる。だが、色々失敗したせいで次回のお役目からはまたみんなに復帰してもらおう形になる」

「あなたが最近変だったのは、こういうことだったのね」

顔を逸らす、卑しいことをしたわけじゃない。
ただ、気まぐずいだけなのだ。

「姉貴はさ、アリとキリギリスの話って知ってるか？」

「ええ、多少わね。確か、アリが夏の間に冬の食料の為に働き続けて、キリギリスは夏の間はバイオリンを弾いて歌を歌って過ごしていた。そしたら、キリギリスは冬になって食料が無くて、アリに食料を分けて貰うように頼んだけど断られてしまって、冬を越せずに死んでしまうの」

「そう、教訓としてはアリのように将来の危機の事を常に考え、行動し、準備をしておくのが良いってこと。それで、ここからは俺の考え」

海斗は真面目な顔つきになり、自分の考えを話し出す。

「俺はアリのことを大人、キリギリスのことを子供だと考えてる。姉貴はそれがなんでも分かる？」

「アリは将来のことを考えていて、キリギリスは今のことしか考えてないからかしら」

「そ、アリは^{大人}将来を考えて危機に対する迅速な行動を心がける。それに対して、^子キリギリスは今を全力で楽しむことに力を注いでいる」

海斗からしたら、アリが大人でキリギリスが子供と言うのはバツチりな配役だと思っ
ている。

「姉貴は知ってるか？西暦って呼ばれる時代には、働き過ぎて死んでしまう過労死つてのがあつたらしい。極端な例になるけど、これがアリの末路に一番近い。アリは働き者だ、だけど働き過ぎるのは身体に必ず不調を来たす。でも、キリギリスはどうだ？子供は今を楽しむ、生活に最低限必要なものは親が揃えてくれる。最高じゃない！」

「……結局、海斗はなにが言いたいの？」

「姉貴たちはまだキリギリスで善い、アリになるのは俺だけで善い。もし俺を脱出させようとしてくれるなら無駄になる、俺のシステムに細工して適用できなくした」

海斗はなにが何でもお役目を果たす気なのだ。

だからこそ、システムに細工を施した。

「あなたは、そこまでしてなにを……」

「ただ、姉貴たちに平穏な日常を過ごしてもらいたいだけさ。それ以外のなにものでもない」

「その姉貴たちにあなたは入ってないじゃない！」

「俺は俺のお役目を果たす。勇者を守るのが俺のお役目だから」

海斗のその一言を持って、その場は流れた。

だが、美森も微かに気付いていた。

海斗の心に善くないモノが混ざり始めたことに。

第十七話 「思いと想い」

「バーテックスに生き残りがいて、戦いが延長戦に突入した。纏めるとそういうこと、だからみんなにそれが帰って来た」

トランクケースに収められている勇者専用端末を、みんなに見せながら風が話を通す。

「ホント、何時もいきなりでゴメン……」

「先輩もさつき知ったことじゃないですか、仕方ないですよ」

今はまだ夏休み、今日も勇者部に宛てられた依頼をこなす為に部室に訪れたのだ。

海斗は苦虫を噛み潰したような顔でスマホを見つめる、「前回の件さえなければこうなることはなかった筈だ」と。

どうしても、自分を責めてしまう。

そんな海斗を尻目に、友奈も少し不安そうな顔でスマホを見つめていた。

だが、そこは友奈だ。

美森に続いて、風のフォローに回る。

「東郷さんの言う通りですよ、先輩」

「まつ、そいつを倒せば済む話でしょ。私たちは敵の一斉攻撃も殲滅したんだから、生き残りの一体や二体どんと来いよ！」

夏凜もニボシを口に放りながら、余裕の表情で言う。

『勇者部五箇条、なせば大抵何とかなる!!』

樹も真剣な表情で頷き、姉を励ます。

全員が結束を固めるように励まし合う中、ただ一人。

少年は自分の手を見つめていた。

「バーテックス全然来ないね、もう二学期始まっちゃったよ」

「敵を気にしないのもダメだけど、気にしすぎるのも良くないわ友奈ちゃん」

「……………」

友奈が美森の車いすを押す、その最中海斗はまたしても上の空だった。

その後も、部室に行くまで一悶着あったが海斗はそれすらも気付いていないように見えた。

「結城友奈入ります！」

「こんにちは！」

「ウィーツス！」

何故か決めポーズを取りながら挨拶する風、それに乗ってか樹もスケッチブックに挨拶を書き始める。

「すっかりそのキャラ定着しましたね」

『ウィーツス』

最近の海斗は、あからさまに可笑しい。

今も、部室の中がプチ百鬼夜行のような状態になつてゐるのにツツコミすらしない。疲れているのか、はたまた……

「ようやっと、端末に戻つたはね」

十数分は掛かったが、あまり気にしない方向で会話を続ける。

海斗とは違う意味で、夏凜は複雑な顔をしていた。

(それにしても私だけ新たな精霊なしとか、どういふことなのよ?)

『敵……いつくるのかな?ドキドキ』

「そうね!私の勘では来週辺りが危ないわね」

「実は敵の襲来は気のせい!だったらいいんだけどネエ。あの諸葛孔明だつて負け戦

はあるのよ、弘法も筆の誤り。神樹様も予知のミスくらい——」

風がそんなことを言った瞬間、ミスなんてしてないぞと言わんばかりに樹海化警報が鳴る。

「噂をすればつてやつかな？」

「風が変なこと言うから、神樹様からの的確なツツコミね。これは」

夏凜の言葉の次の瞬間には樹海化が始まり、世界が光に包まれる。

海斗はすぐさま動き出し、友奈と夏凜のスマホを掏る。

「ちよつと海斗！アンタ何すんのよ！」

「いきなりどうしたの海斗君!？」

二人とも海斗の行動に驚く、いつもの彼らしからぬ行為に美森や風に樹も目を見張っていた。

「悪いな、二人には変身させない。姉貴と樹ちゃんは援護を頼む、風先輩は二人の護衛を」

何の説明もしないまま、海斗は少し命令口調になつてゐるのを自覚しながら指示を出す。

「海斗いい加減にしなさい、全員で戦えばいいでしょ！」

風の怒声が聞こえるが無視をする。

敵の数は完成型のジエミニ・バーテックスが一体と星屑二百体。

この量だったら捌き斬れると判断し、すぐに行動を開始する。

変身をを終えて、美森と樹に目配せをしてジエミニの方に飛び出した。

友奈と夏凜は海斗の行動を理解できないのか、そのまま立ち尽くしている。

樹と美森に風は変身し、樹はワイヤーで美森ライフルで海斗の援護、風は夏凜と友奈を守るために大剣を構える。

「信長！」

「任せろ！行くぞ相棒！」

二人が拳を合わせると信長はピンク色の粒子になって海斗の身体に入っていく。

全てが入り終わった頃には、いつもの羽織を身に着けた海斗の姿が。

「あれが精霊降ろし、アイツ。あんなのどうやって」

夏凜も大赦に所属してるだけあって精霊降ろしの話を聞いたことがあるが、随分前にそのシステムは凍結されたと聞いていた。

だから、疑問に思う。

海斗はどうやって精霊降ろしを行使出来るようにしたのか。

だが、その疑問の答えは見つからず、ただただ海斗を眺めるしかなかった。

「まずは足！」

信長によって底上げされた身体能力の全てを行使して、絶対に外さない偏差射撃をやってみせる。

そしたら、足の止まったジェミニに向かって刀を振り下ろす。

高所から飛び降りたので、膨大な位置エネルギーを全て運動エネルギーに変えて今までのどの攻撃よりも強く速い一撃を叩きこむ。

すると、ジエミニは御霊ごと一刀両断されてしまい砂になって消えていく。

「嘘でしょ、封印の儀なしに御霊ごと破壊するなんて満開でもしないかぎり」

風も先程より混乱してしまっている、頭を振って何とか元の状態に戻ったがそれでもまだ違和感が残る。

（なんなの、この違和感。あれって満開と同じで相当体に負担を掛けるんじゃないか……）

そんな風の思考をよそに、美森と樹は星屑の数を減らしていく。

残り百を切った辺りだろう。

海斗も残党刈りに参加する。

海斗の戦い方はデタラメもいいところだ。

敵の巨体の上に乗って刀で斬るか銃で撃つかしてから、亡骸を踏み台にして他の星屑に飛び移る。

これだったら、スピード型の夏凜だったらやれないことはない。

しかし、デタラメなのはその速さだ。

まるでスーパーボールのように飛び跳ねている、その三次元的動きは幾らスピード特化で修行を積んだ夏凜にも出来ない芸当だ。

海斗が加わってから数分の内に、全ての敵が殲滅されて樹海化が終わる。

だが、日常の崩壊はもう目の前に来ていた。

「アハハ、どこ」。屋上じゃないし、みんなもいない」

友奈に海斗に美森は、樹海化が解けた後に知らない場所に飛ばされていた。

「あつ、大橋」

美森が大橋の存在に気付く。

「じゃあ、結構遠くまで飛ばされちゃったね。あつ！海斗君スマホ返してよ」

「ん、ほら。もう用はないしな」

友奈は海斗からスマホを返してもらいスマホを開こうとする、だが……

「あれ、開かない？電波入ってない」

「私の改造版でもダメ」

「そりやそうさ、一樣ここは祀り処だからな。園子来たぞー」

海斗が園子の名前を呼ぶ、するとそれに反応して甘く伸びきった声が聞こえてくる。

「はいはい、わっしーにかーくん待ってたよ」

三人は声の聞こえた祠の裏手に回っていく。

そこには、何故か不自然にベットが置かれていた。

そのベッドの上には体中に包帯を巻きつけられた少女が居る。

多少、包帯が巻かれていない所があるがその部分は片手で数えられるほどだ。

包帯の所為もあつてか身体も不健康的に見えるくらい痩せている。

「あなたが戦ってるのを感じてずくと呼んでたんだよ」

「驚？えくつと、東郷さんと海斗君の知り合い？」

「友達だよ、ちよつと個性的な」

「いいえ、初対面だわ」

二人で意見が分かれる、園子は小さなため息を出して言葉を紡ぐ。

「わっしーって言うのはね、私の大切なお友達の名前なんだ。何時もその子のことを考えていてね、つい口に出ちゃうんだよ。ゴメンね」

「園子、まきで頼む。アイツらが来る前に答えを話さない」と

海斗は焦っているのか、少し声が震えている。

海斗は呼ばれた理由について何か知ってるらしい。

「はいはい、私は乃木園子。美森ちゃんに友奈ちゃんで合ってる？」

「はい、讃州中学二年勇者部所属。結城友奈です」

「同じく、東郷美森です」

二人とも、緊張の為か声が震えている。

「二人は満開したんだよね？わーって咲いてわーって強くなるやつ」

園子の質問に少し違和感を覚えながらも、二人は答えた。

「はい、わーって強くなりました」

「私もしました」

二人が静かに肯定する中、海斗は意識を辺りに向けて警戒していた。

この会話を良く思わない連中は相当数存在する。

彼らの行動が友奈たちに向くことがないよう、最大限に気を研ぎ澄ませる。

「そっか。咲き誇った花はその後どうなると思う？満開の後に散華と言う隠された機能があるんだよ」

「散華、花が散ることを意味する散華だ。二人も何となく想像つくだろう？」

「満開の後、体のどこかが不自由になったはずだよ？」

美森が左耳に、友奈が口に手を当てる。

どんなバカでも、ここまできれば真実に辿り着く。

特に美森のような、聡い少女は。

「力を振るった満開の代償。花一つ咲けば一つ散る、花二つ咲けば二つ散る。その代り、決して勇者が死ぬことはないんだよ」

「死ねない……」

「でも、死なないならいいことだよ……ね？」

そんなことはない、不死それは呪いだ。

死ねないことがどれほど苦しいか、彼女はまだ知らない。

「それで、戦い続けてこうなっちゃったんだ。元々ボーっとするのが得意でよかったよ、何もできないのは結構辛いからね」

「痛むんですか？」

友奈の質問は意味をなしていない、散華の部位によつては痛みを感じる事が出来なくなる可能性がある。

「ううん、敵にやられた訳じゃないからね。満開して戦い続けてこうなったの」

「じゃあ、その体は全部代償で……」

「うん」

当たって欲しくなかった、もしかしたら治るんじゃないかと期待していた。けれど、その期待は虚しくも砕け散る。

供物は戻ってこない、新しく作りでもしない限りは。

神に見初められるのはいつも無垢な少女。

穢れなき身だからこそ、大いなる力を宿すことが出来る。

そして、力を振るつた代償として体を供物にして捧げていく。

「園子、その辺で止めとけ。もう来た」

「そうだね」

神官に友奈と美森のことを任せる、任せた相手は春信の部下なので海斗も安心するこ
とが出来た。

園子と海斗、その場に残ったのは二人だけだった。

「……お前に全部任せて悪い」

「大丈夫」

「園子、今だけは何もかも吐き出していい。思ったこと全部を俺にぶつけていい」

園子は静かに泣いた、すすり泣く声が海斗以外に届くことはなかった。

園子と会って風に真実を告げてから、早数日。

「姉貴何の用だ？」

「そうよ、東郷。家に呼ぶなんてなにかあったの？」

今、美森の部屋に居るのは海斗と友奈と風の三人。

「三人に見て貰いたいものがあって」

そう言うと美森は、机に向かう。

その上にあつたのは短刀、華美な装飾はなくシンプルなデザインだ。

彼女はそれを取っ手海斗たちの方に向き直る。

短刀を水平に持ちながら胸の高さにまで上げて、ゆっくりと鞘から短刀を抜く。
そして、

「ふっー」

短刀で首を切ろうとした。

後少しで当たるといところで青坊主が現れ、その動きを止める。

「何やってんのよ、アンタ！もし精霊が止めなかったら！」

風の怒声が部屋に響く中、海斗は無言で美森を見つめていた。

友奈も突然の美森の行動に驚いている。

「止めますよ、精霊は確実に。この数日で、私は十回以上自害を試みました。切腹、首つり、飛び降り、一酸化炭素中毒、服毒、焼身。全て精霊に止められました」

「ここもでする執念も、あまり普通とは言えない。

誰もが追い詰められていた。

「何が言いたいの？」

「今私は、勇者システムを起動させていませんでしたよね？」

「そういえばそうだね」

友奈が返事を返す、海斗は美森を見つめる。

「それにも関わらず、精霊は勝手に動き私を守った。精霊は勝手に」

大事なことは繰り返す、そういうものだ。

「だから、何が言いたいのよ東郷！」

「精霊は私たちの意志とは関係なく動いている、ということですよ。私は今まで、精霊は勇者の戦うという意志に従ってるのだと思っていました。でも違う、精霊に勇者の意志は関係ない。それに気付いたら、精霊が違う意志を持っているように思えたのです。精霊は勇者のお役目を助けるものなんかじゃなく、勇者をお役目に縛り付けるものじゃないかって、死なせず戦はせ続ける装置なんじゃないかって」

そして、ついに海斗がキレた。

「いい加減にしろよ！東郷美森！こいつがどんな気持ちでお前たちを守ってるかも知らないで、そんな危険な真似をして。挙句の果てに俺や鳳凰をバカにするとはどういう見だ！！！！」

海斗の髪の毛が銀色に染まった。

その声も、いつもの海斗とは少し違うものになっている。

「あなたね、海斗の中にいるのは」

「つち!!勝手にしろ」

「ちよつと待つて海斗!満開の後遺症は?治るの?!

「……それは治りません、一生」

一瞬の内に元に戻り、真実を伝える。

終わった、海斗が必死にしがみ付いていた日常は終わりを告げた。

「悪い相棒、俺の所為だ」

「いいや、お前は悪くないよ」

あの後、友奈と風は帰った。
いつの間にか美森も出かけている。

そして、園子からの電話が掛かって来た。

『もしもし』

『もっしもし、かーくん？今いいかな？』

『大丈夫だ、何かあったか？』

園子が少し間を作りゆっくりと伝える。

『……昨日ね、わっしーが来たよ。それでね……全部教えちゃったんよ、
世界の本当の姿も』

『そうか……頼みがある』

海斗の言葉を聞くまでもなく、園子は頼みの内容を分かっていた。

『止めないで欲しい、でしょ。分かってるよ、私もカーくんやわっしーとは戦いたくないしね』

『助かる。今のお前と俺じゃ、どっちが勝っても満身創痍になりそうだからな』

『だね、要件はこれでおわりだよ、頑張ってね』

『了解、任せとけ』

園子の頑張ってるねにどれだけの想いがあるかは今の海斗でも分かる、だからこそ失敗は出来ない。

海斗が玄関に行こうとしたら、廊下には美冬と父である森雄が居た。

「父さんに母さん、どうしたの？」

「いや、外に出るんだったら渡したいものがあってね」

「これを持って行きなさい、きっと役に立つわ」

美冬が渡したのは、小さい箱と封筒だ。

「中に海斗の真名に関する手紙が入っている、今の君に最も必要な物だろう」

「あなたが辛いことも苦しいことも知っている、それがなんでなのかも。だけどあたしたちにはどうすることも出来ない」

美冬の目に涙が見える。

いつも、いつも美冬を強い人だと思っていた海斗だったが、その考えは砕けちった。今ここに居るのは、純粹に我が子を心配するただの母親だ。

だったら、海斗がここでいう言葉は一つだけだ。

「必ず帰ってくる、美森ちゃんも連れて。……だから帰ってきたらパーツとなんか食べに行こうよ！ 偶には外食もしないと、それとカラオケなんかもいいかもね」
やりたいことはまだ沢山ある、それを諦めるわけにはいかない。

「行ってきますー！」

「行つてらっしやい」

二人の声が聞こえた瞬間、スマホから特別な警報が鳴る。特別警報発令、おそらく美森が壁を壊したのだろう。

ここからが……

「本当の戦いだ」

海斗は一旦立ち止まり、丁寧に手紙を読む。

本当なら、こんなことしてる時間などないが、今は緊急事態なので例外だろう。

「手紙の内容は……」

拜啓 自慢の息子へ

あなたがこれを読んでいるということは、きっと私たちは近くに居ないでしょう。

本当なら、愛する息子が育つていく姿をずっとそばで見えていたかっただけど仕方がありません。

おっと、話が逸れちゃったわね。

手短かに、あなたの真名を教えます。

私もあなたのお父さんもあまりお手紙上手じゃないから、許してね。

あなたの真名は陽向^{ひなた}、日守陽向。

日守のお役目は、四国の日である勇者を守ること。

知ってるかもしれないけど、日守のお役目は危険で神に嫌われる者も少なくはないです。

一生を勇者の為に捧げ、日陰で生きてくことになります。

でも、私たちはあなたに陽向で勇者の子たちを支えて欲しい。

後ろから支えるでもなく、下に立って踏ん張るでもない。

隣に立って、支え合って励まし合って生きていつて欲しい。

それが、私たち親があなたに願う。

最初で最後の我が儘、聞いてくれると嬉しいです。

それでは、最後に一言。

私たちは息子であるあなたの事を世界一愛しています！

p. s.

箱の中をのぞいてごらん？

手紙はこれで終わっていた、途中から涙で良く見えなかったがしつかりと最後まで読んだ。

「……………これは」

箱の中に入っていたのはロケット、中には写真が一枚。

左側には、幼い美森と今の両親。

右側には、幼い海斗と昔の両親。

海斗と美森は内側の手を握り、外側の手で敬礼をしていた。

その顔はとても良い笑顔で、祝福したくなる。

手紙を見て、分かったこと。

それは、愛されていたということ。

今の両親はまだしも昔の両親に愛されていたかなど、記録を見ても分からない。怖かったのだ、本当は愛されてなどいなかったのではないかと。

だが、答えは得た。

両親の想いも伝わった。

だったら、今度は自分が想いを伝える番なのだ。

東郷海斗ではなく、日守陽向で。

本当の自分で。

「救ってみせる、この想いで。魂に刻み込まれた絆で！」

少年は走り出す、また新たな日常を作り直す為。

最終話「世界を救うは勇者（ヒーロー）の役目」

樹海の中を走る、前方には倒してきたはずのパーテックスたちが居た。

「流石に復活してるか……」

「相棒、どうする？ あいつらを倒してから東郷美森の所に行くか？」

「……いや、それだと間に合わない。他のみんなにやつてもらおうしかない。今ここで美森を止められなければ、きつと決定的なまでの崩壊が起こる。そうならない為にも、今の状況ではあちらの救援に向かうことは出来ない。」

海斗は信長と会話をしながらも、美森の居場所を目指す。

その途中で、夏凜に会った。

「海斗！ 満開の後遺症のこと……何で黙ってたの？」

これは確認である。

友奈は言った、「きつと私たちは満開の後遺症のことを知らされていても使ってた筈です！世界を……友達を守るために」と。

だから、これは確認。

海斗が何を言うかで、今後彼に対する彼女の対応は変わってくるだろう。

「……言わなかった理由は簡単だよ。だって俺が何か言ってもお前らはきつと満開を使っていただろう？それが、世界や友達を守ることに繋がるんだったら」
夏凜が望んでいた言葉、少し涙目になるのを我慢して海斗に向き合う。

「そう、ならいい。……東郷をお願い、私や友奈じゃ説得出来なかった」
刀を持つ手が震えている、それほどに衝撃的なものだったのだろう。

「美森ちゃんのごことは任せてくれ。お前はパーテックスの足止めを頼む」

「任せときなさい！完成型勇者の意地を見せてやる！……それと——」

一拍開けて、彼女は言葉を呟いた。

「私、大赦の勇者辞めて勇者部の勇者になったから。そこんところろしくね」
彼女はそう言葉を残して、バーテックスに向かって行った。

夏凜の満開ゲージは溜まっていた、恐らく使うのだろう。

出来る事なら、使わせたくない。

でも、そんな理想論を語っていられるほど状況は甘くない。

少年は少しの後悔を胸に、また動き出した。

大切なあの子を、苦しみから救うために。

美森も満開したのでろう、大きな戦艦が目に入った。

相変わらずの迫力に気後れしそうになるが、それでも足を止めずに進み続ける。

邪魔になる星屑を斬り伏せて、三次元的移動を繰り返す。

少しでも足を止めた瞬間に、周りに居る星屑に囲まれてしまうため少し辛い、海斗は疲れたような素振りを見せない。

信長を降ろした状態の戦いに慣れ過ぎていた為、こんな戦法でも疲れが来ないらし

い。

そして、ようやく――

「来たのね、海斗」

「久しぶり？　って言った方がいいかな美森ちゃん」

「あなたがその名前で私を呼ばないで！」

銃弾が頬を掠る、今のは牽制に過ぎないが少し殺気が混じっていた。

「何で？　今の俺は東郷海斗じゃない、日守陽向としてここに来たんだよ。昔の俺で、本当の俺で君を助けに来た」

「助ける？　何を言っているの？……この世界は間違ってる、子供の犠牲を承知で存在し続けるこの世界は歪んでいると思わない？」

美森の考えを海斗は否定が出来ない、子供の犠牲の上に成り立つ世界なんて歪んでい

る。

「犠牲になるのが私だけだったら許せた、でも海斗や友奈ちゃん。他のみんなを犠牲にすることは許せないの！」

これが、彼女の本音だろう。

「ねえ、海斗。教えてよ、私はなにを忘れてしまったの？ 私は自分の涙の意味が分からない、このリボンをじっと見るとどうしても胸が苦しくて泣きたい気分になる」

散華によつて捧げられて失くなってしまった、大切な記憶。

「もう、こんな気持ち味わいたくない。きつとこの後もみんなは満開を使ってなにか大切なものを失い続けながら、生きてかなければいけない。そんなのは嫌！」

大粒の涙と共に吐き出されていく本当の想い。

「俺は忘れないよ、絶対に」

「嘘よ！ 私たちだって、きつとそう強く思ってた！ でも今は、何も思い出せない。楽し

かった記憶も辛かった記憶も何も残ってない。嫌だよ、みんなの思い出を失いたくない、みんなに忘れられたくない！」

「それでも、俺は絶対に忘れないよ」

魂が籠っていない、薄っぺらな言葉に聞こえるかもしれない。

でも、この想いだけは本物だ。

「どうして、そう言えるの？あなたは自分の記憶を失くしてしまったのに」

少年は記憶を失くしている。

一部とはいえ、散華で失ったのは言うまでもない。

しかし、少年は訴え続ける。

彼女の心に、彼女の魂に。

「確かに俺は記憶を失った、けど魂に刻み込まれた絆までは失ってない。美森ちゃんだってそのリボンを見て涙を流したんでしょ？胸が苦しくて泣きたい気持ちになったんでしょ？それは、魂が絆を失くしてないからさ」

「そんなの、希望論よ！」

「そう聞こえても可笑しくない、だけど俺の想いは失くなってなかった！」

「止めて！海斗の声で、海斗の身体で、それ以上言わないで！」

美森は耳を塞いで、戦艦の砲塔を海斗に合わせる。

次の瞬間には砲撃が開始されるが、いつものような冷静な撃ち方ではない為に彼が当たることはない。

避けて、避けて、避けて。

少しづつ、距離を縮めていく。

（後少し、もうちよつと！）

既に戦艦に乗った海斗、美森は砲撃することが出来ず。

海斗が手を伸ばす、その手が彼女に……

届いた。

そつと、耳を覆っていた手を退かす。

目から止めどなく涙を流す美森をしつかりと見つめて、海斗は想いを伝えた。

「美森ちゃん、君のことが好きだ。記憶を失くしても、この想いを忘れた日は無い。この想いは偽物なんかじゃない、そう断言できる」

「……本当に？ 本当にそうなの？……私も本当の想いを言っているの？」

「うん、美森ちゃんの返事が聞きたい。鷺尾須美じゃない、東郷美森の想いを」

美森は深く深呼吸をして、海斗を見据える。

「私も、あなたのことが好き。姉弟になつてからずっと隠して偽り続けてきたけど、あなたのことを嫌いになった日なんか無い」

想いを聞いた海斗は、ゆっくりと美森を自分の方に引き寄せ優しくキスをする。

「……接吻なんて、まだ早いわ」

「ごめん。……美森ちゃんはこれからどうする？世界を壊して友達を殺すか、世界を救って友達を守るか」

「決まってるじゃない、世界を救うは……みんなは許してくれるかしら？」
自分がした罪の重さを今実感したのだろう。

「大丈夫、みんなは優しいからきつと許してくれるよ。ありきたりな言葉だけど、もし誰も許してくれなくても、俺だけは美森ちゃんの事を許すよ。世界を敵に回したって君の味方であり続ける」

東郷海斗……日守陽向は、東郷美森の味方だ。

世界を敵に回したとしても、彼女の事を守り続ける。

それに意味なんてない、守りたいから守る。

彼が勇者になった理由は、美森を守るためだ。

友達を守るのは当たり前、仲間を守るのは当たり前、世界を守るのは当たり前。

東郷美森を守ることは……

「だって、俺は東郷海斗で日守陽向だから」

その言葉を聞いたら、もう戻れない。

「図々しいことを言ってるのは分かってる、お願い一緒に世界を救って！」

「了解」

戦艦が動き出す、夏凜も風も樹もレオと戦っている。

だが、レオの姿は少し違う。

レオ・スタークラスターとも似ているが違う。

「あのレオ、前に友奈ちゃんが倒した奴に似てるけど……」

美森も気付いたのだろう、向かう先にいるレオが自分の知る形とは違うことに。

「だね、多分強さはレオ・スタークラスター以上だよ」

二人の会話に突如、聞きなれた声が響く。

「察しが良いな、流石俺のオリジナル。まあ、それぐらい出来なきや俺が作られた意味がねえけどな」

「う……そ……、海斗とそっくり」

「お前が資料の中にあつた天使か。初代勇者・柊景夜が戦つたと言われている」
天使、その容姿は美森の言つた通り海斗に瓜二つだ。

身体的特徴や声色、似ていない所を探すのが難しいほどに。
言動が少し違う程度、それ以外は海斗そのものだ。

そして、その強さは……

「あそこに居るレオと変わらない位……いやそれ以上にヤバイな」

「理解が速くて助かるよ、俺の名前はアベル。人間の原罪を象徴する名だ」

アベルは、旧約聖書『創世記』第四章に登場する兄弟のこと。アダムとイヴの息子たちで兄がカイン、弟がアベルである。人類最初の殺人の加害者・被害者とされている。

「アベル、お前の名前は旧約聖書に出てくるアベルから取った考えていいんだよな？」

「当たり前だ。さあて、早速お前ら全員を殺して世界を終わらせるか」

殺気が漏れ始める、明らかに格が違う。

後ずさりしそうな足を奮い立たせ、美森の一步前が出る。

「美森ちゃん、先にみんなの方に行つて。あっちも結構キツイと思うから」

海斗の言葉を聞いた美森は、静かに頷く。

自分が敵う相手ではないと察したのだろう。

海斗は壁の端に立つアベルの下へ跳ぶ。

アベルは、何をするでもなく美森が立ち去るのを待った。

「なんで見逃したんだ？全員殺すんだろ？」

素直に疑問を投げかけると、アベルは顎に手を当てて少し考える素振りを見せながら答えた。

「オリジナルと、本気の勝負をしたかった。そんなところだ」

「分かったよ！だったら本気で戦ってやる！」

精霊降ろしで信長を纏い、正面に居るアベルに向かって火縄銃を向ける。

ここから、地の神代表対天の神代表の世界の行く先を左右する戦いが始まった。

刀と刀が舞い、銃弾が飛ぶ。

どちらの武器も同じで、総合力で見れば海斗が上だ。

だが、アベルも負けていない。

剣技は海斗の数段上に行く技術力で、力の差をその技術でカバーしている。

戦い始めて五分、最初に攻撃を喰らったのは海斗だった。

「ぐっ!!……クソっ! 剣術の上手さだけで見ればあっちが上か」

「当たり前だ、俺はお前や他の勇者を殺す為にこの剣術を磨いてきた。剣術でお前に負けることは……ない!!!」

突進による重さを載せた一撃を何とか刀の腹で受け流し、反対の手に持った火縄銃で近距離で撃ち込む。

アベルはそれをなに事もないかのようにヒラリと跳んで躲す。

跳んだことで上を取ったアベルは上空から銃弾の雨を降らす。

精霊バリアがないので、海斗は先程の一撃を喰らったことであの銃弾を喰らうのはマズイと判断し即座に横に飛び回避する。

「おいおい! 逃げてたら勝てないぞ!」

「避けなかったら気絶するだろ!」

このように軽口を叩きながらも、お互いの行動から目を離さない。

一進一退の攻防が続く。

刀を交える内に、言葉を重ねる内に、アベルと言う少年の心が見えてくる。勇者を殺す使命の為に生み出された兵器。

悲しい生命であること、そのことが刀を交えた僅かな時間で分かった。

誰にも愛されず、ただ使命の為に己を鍛え続けた少年。

（もしかしたら、アイツが俺になっていた可能性もあったのか？）

そんなことは有り得ない筈なのに考えてしまう。

彼の心が勇者だからこそ、そういう方向に思考が動く。

「戦いの最中に考え事とは余裕そうだな！！！！」

「っ!？」

先程受け流した時よりも重い攻撃が海斗を襲う、受け止めたはいいが……

（馬鹿力が過ぎるぞ！ヤバイ、腕の骨にひび入ったかも……）

考えるのは、こいつを倒した後にはしようと決めて。

また、覚悟して刀を振るう。

時が過ぎる程に、段々と海斗が不利になっていく。

信長の身体への負担は限界に達しつつあった。

十分は続いた戦いの中で、海斗がアベルに与えた攻撃の数は零。

逆に、アベルが海斗に与えた攻撃は十を超えている。

海斗が肩で息をし始めた頃、アベルがある提案を持ちかける。

「このままやっても埒があかない、どうだお互いに今出せる最高の一撃で白黒つけるつてのは？」

アベルの提案に、海斗は乗る以外の選択肢はない。

「いいぞ、それで。お前こそそれでいいのか？」

「ああ、構わない。剣術の腕で行けば、お前より上だしな」

余裕そうな笑みを浮かべるアベルに対して、海斗の顔色はあまりいい物ではない。

（どうする？今の俺にアイツに勝てる技は……）

（あるぜ、一個だけな。賭けになるけどどうする？）

心の中で思ったことに返事が聞こえた。

海斗は少し驚きながらも会話を続ける。

（やる、やり方を教えてくれ！）

（よしきたー！）

数秒の時間が過ぎ、お互いが構に入る。

アベルは八相の構と言う、上段の構にも似た振りかぶるような姿勢を取る。

海斗はと言うと……腰を落として、鞘がない代わりを手で代用し刀を納刀したかのような構だ。

（居合、抜刀術か……面白いな）

「行くぞ！！！！」

「来い！！！！」

そして、

「抜刀緋那汰！」

海斗が技名のように言葉を叫んだ瞬間、勝敗は決した。

「グハアア！」

アベルの横つ腹から血が噴き出す、海斗も信長を纏ったことでバリアが無い為か満身創痍に見える。

だが、アベルの方が重傷なことは確かだろう。

「お前の負けだ、アベル」

海斗がアベルに向ける目は、同情の目ではあるが見下してる訳ではない。

「……みたいだな、痛え。お前浅く切り過ぎだボケ、もつと深く斬んなきゃ早く死ねねえだろうが」

恨みがましい視線を向けるアベルに対し、海斗が放った言葉はこうだった。

「お疲れさま、お前はよく頑張ったなアベル」

相手を称えるかのような言葉、相手によつては煽っているようなものだアベルも同じ。

「俺が……頑張った？何言ってるんだ、お前？俺はお前たちを殺す為に鍛えたんだぞ！何故情けを掛ける」

「お前、誰にも褒められたことなかっただろ？愛されたこともなかっただろ？だから……最後位はいいんじゃないかと思ってるな」

アベルからしたら訳が分からない、先程まで殺し合いをしていた相手にこんなこと言う奴は頭が可笑しいとしか想えなかった。

「なあ、アベル。最後位は自分に素直になっていいんじゃないか？」

「言われなくてもそうするよ、もう寝ろ。……疲れただろ？」

瞼が閉じ掛けているアベルに、優しく語り掛ける。

「ああ、誰かに優しくされるって……誰かに愛されるって……本当にいいもんだな……」
そして、アベルは悠久の眠りについた。

良い顔をしている、さぞかしい夢を見ているのだろう。

「……その夢が覚めた時、また会えたら良いなアベル」

海斗は徐々に消えていくアベルの身体に別れを告げて、その場を去った。

「信長、精霊の二重降ろしは出来るか？」

「可能だ……だが、命の保証は出来んぞ。それでもやるか相棒？」

信長の問いに海斗は呆気からんと言いつ放つ。

「やるに決まってるだろ！みんなが折角御霊を引きずり出してくれたんだ。行くぞ鳳凰！」

「共に行こう、海斗。世界を救うのは何時だって人なのだから！」

「天下統一」と書かれた羽織の上に、炎で形成された翼が付く。

それ以外にも、体中に炎が巻きつき鎧のような形になる。

「言っておくぞ海斗、この炎はいつもの癒しの炎ではない。戦う為の炎で体の傷は治せない、それを重々承知の上に戦ってくれ」

「了解！」

炎で形成された翼を使い飛び立つ。

向かっている途中、倒れている友奈を見つける。

足が動かないのを見ると、散華で両足の機能を持っていかれたのだろう。

海斗は友奈の居る場所に着地して、友奈に手を伸ばす。

「友奈、悪いけどさもう少しだけ力を貸してくれないか？俺だけが行っても勝てない、でも俺とお前なら勝てる。そんな気がするんだ」

友奈は海斗の手を取る。

「うん！海斗君とだったらどこまでもいけそう！行こう、私たちは勇者なんだから！！！！」
その瞬間、友奈の周りに神樹の根が集まった。

「満開……か、やっぱ凄いな友奈」

先程確認したが、友奈の満開ゲージは空だった。

なのに、彼女は満開した。

これが何を指しているか分からない海斗ではないが、今はただ単純にこの奇跡が最高に嬉しい。

『偶然』や『奇跡』と言った言葉が嫌いな海斗からしたら、こう思わせてくれる友奈はやはり特別なのだろう。

「友奈、お前のお陰で俺は『奇跡』って言葉が好きになれそうだよ」

「そっか、だったら起こしに行こう！『奇跡』を！」

二人は飛び立った、段々と御霊に近づいていく。

まるで太陽のような姿をした御霊だが、中にきつと本当の御霊があるのだろう。外から見える太陽のような姿は言わば皮みたいなものだ。他の勇者たちが海斗と友奈の姿を捉える。

「友奈、海斗！」

「友奈先輩に海斗先輩！」

「行けー友奈！海斗ー！」

「友奈ちゃん！海斗！」

みんなの声が聞こえた。

ここまで来たら、負けて終わりのバットエンド何て有り得ないだろう。

「二人で行くぞ友奈！」

「うん」

そのまま二人で御霊に突っ込んだ。

「ダブル勇者。パアアーンチ!!!」

二人の声が響くと同時に、辺りを眩し過ぎる程の閃光が包み込んだ。

そして、海斗と友奈の意識はここで途切れた。

目が覚めると海斗は、見知らぬ空間に居た。

何故かその場所は、親の温もりのような温かさに満ちていて、とても居心地がいい空間だと海斗は思った。

他に人が居ないのか見渡すと、自分とあまり歳の変わらなそうな少年を見つけた。

綺麗な銀髪が目立つ美少年、自分とは居る次元が違うんじゃないかと感じながらも声を掛けた。

「あのお、少し聞いてもいい？ここって何処なのかな？目が覚めたらここに居て、何処か

分かんなくてさ」

海斗は言葉を発しながらも、僅かに銀髪の少年の容姿と雰囲気に妙な違和感を覚えた。

(何処かで見たとがあるような容姿に……慣れ親しんだ雰囲気。この人……)

「おお、目が覚めたか。この姿で会うのは初めましてだな。柊景夜、一応お前の精霊の織田信長でもある」

景夜と名乗った少年の言葉に海斗の脳がフリーズする。

「はあああー！？」

海斗の叫びが、その神秘的な空間に響き渡っていた。

epilogue 「エガオデアスへ」

謎の空間で、柗景夜を名乗る銀髪の少年に会った海斗。

数分の間、フリーズしていた海斗だったがなんとか正気を取り戻し会話に戻る。

「ええ〜つと、景夜でいいか？」

「どうとでも、好きなように呼べばいい」

まだ、驚きの感情が抜けていないのか少し変な喋り方になっている海斗。
そんな海斗を見ながらも、景夜はなんでもないような表情で返事をする。

「質問の続きなんだが、ここは一体どこなんだ？」

海斗の質問に、景夜は間髪を入れず答える。

「ここは神樹の中だ、やけに温かく感じるのも神が近くに居るからだな」

質問していない部分まで答える景夜に引きながらも、質問を続ける。

「じゃあ、二つ目だ。何で俺はここに居るんだ？」

この質問も、景夜は待つてましたと言わんばかりの表情で話し始める。

「実はだな——」

景夜によると、海斗の心身は精霊降ろしによる負荷でボロボロになってしまっただけだ。
い。

体は現実世界にあり、神樹の神々による加護で疲労や怪我を回復。

心……魂はこの世界にいることで自然に回復するらしい。

因みに、あつちに居る体は魂が抜けた空っぽな状態らしく抜け殻に近いようだ。

景夜が海斗にした説明はこの程度の簡単なものだが、本当はもっと複雑な事態である。

「——、てなわけだ。簡単にまとめて話したが、どうだ？理解は出来たか？」

海斗は話を聞きながらも、顎に手を当てて考え込んでいた。

「……美森ちゃんや友奈たちはどうなったんだ？」

「ああ、あいつらの身体は次期に治る……いや治るわけではないんだがな」

景夜の言葉に引つ掛かりを覚える。

（治るのに……治らない？ どういうことだ……）

「うーくん、何て言えばいいのか分からんが。何でも神樹が散華で供物にした部分を、新しく作り直して返してくれるらしい」

「ほ、本当なのか!? だったら、園子の身体やみんなの身体も……」

「ああ、すっかり元通りになるはずだ。……だけど、忘れるなよ。作り直した部分が完璧に馴染むまで時間がかかる、記憶の場合だと少しづつ回復していく感じだ思ってくれ」
喜びをあらわにする海斗に対して、景夜は努めて冷静に話を進める。

「最後に二つ伝えなきやいけないことがある。一つはお前の身体について」

「俺の身体？」

景夜の話し方は穏やかなものではない、相当不味いことなのだろう。

「お前の身体は今、神の加護によって回復している。それは教えたな？」

「ああ、けどそれに何かあるのか？」

段々と深刻化していく空気を感じて海斗は固唾を飲んだ。

次の言葉が恐ろしく感じる。

「加護による影響の所為なのか、お前の神樹との親和性が跳ね上がった。要は、勇者としてのレベルが飛躍的に上昇したってことだ」

「な、なんだ。別にそれだったら良い事じゃないか？」

少し拍子抜けな顔をする海斗に対して、景夜は真剣な顔を変えずに話を続ける。

「馬鹿、話を最後まで聞け。二つ目は神樹の寿命だ、これが厄介になってくる」

拍子抜けさせてからの、特大級の爆弾を放り込む景夜。

海斗はもう、頭の中の情報が大渋滞を引き起こしていた。

「神樹様の寿命？それとさっきの話に何の関係性が……」

恐る恐る尋ねる海斗に、景夜はゆっくり深呼吸をしてから話し始めた。

「これは、三百年前の話だ。まだ、俺が生きていた頃の話」

景夜が語り出したのは、大社が大赦になってすぐの話だ。

神世紀一年の秋、大赦本部にて――

「……今、何と仰いましたか？」

ひなたの表情は努めて笑顔だ、だがその笑顔から出るオーラは尋常ではない。

「ですから！次世代の勇者候補で一番適性の高い者を、供物として神樹様に捧げればいいのかと言ったのです。壁の結界補強にも繋がりますし、神樹様の寿命問題も改善――

ある大赦職員が言葉を続けようとした瞬間、ひなたの横に居た華恵が声を荒げた。

「そんなこと！許されると思ってるのですか?!人柱なんてものは——」
そして、声を荒げた華恵をひなたが制する。

「華恵さん、落ち着いて下さい。……あなたは確か、三ノ輪さんでしたか。今すぐこの場から立ち去りなさい、二度は言いません」

ひなたの言葉に込められた怒気凄まじいもので、その場にいる全員が冷や汗をかいていた。

「か、勝手にしてください!!俺はやりますからね、いずれこの大赦を変えてみせます」
その後、三ノ輪という男を見たものは居なかった。

だが百数十年後に、三ノ輪が言っていた作戦は実現される。

変わってしまった大赦の手によって……

「つう訳だ。こんな感じで、もしかしたら大赦の一部はお前の事を狙ってくるかもしれない。気を付けろ」

景夜の話の話を聞いて、まだ半分ほどにししか理解できていない海斗だったが、自分の身や周りに今後危険が訪れるかもしれないということは理解した。

「何となくは分かった……でこの後はどうするんだ？ 話すことは終わったんだろ？」

海斗の言葉に景夜は少し考えて、渋々と言った表情で言葉を吐く。

「お前の身体が治るまで暇だしな、俺が体験した昔の話でもするか……。どうだ、聞きたいか？」

「聞きたい！」

景夜の言葉に、海斗は目を輝かせながら返事をする。

資料は腐るほど読んで来た海斗だが、実際に話を聞くのは今までなかった（有り得ない）ので鼻息を荒くしている。

「お、おう。なんだか、そういう所はひなたに似てるな……。さあて、何処から話すか——」

少しだけ昔のことを思い出した景夜だが、今は取りあえず目の前に居る自分の子孫で

もある少年の為に時間を使おうと思ひ、長い長い昔話を語り出した。

友奈が目覚めた、まだ車イスで行動しているが順調に回復している。

海斗は……

「海斗……ごめんなさい。私たちはあなたにとっても酷いことを」

「母さん……もういいの、きつと海斗だって許してくれるわ。それより仕事に戻らないと不味いんでしょう？任せて、この後は友奈ちゃんや勇者部のみんなも来るし」

泣いている美雪を慰めながら、出来るだけ明るい声と笑顔で彼女を見送る。

「…そうね、私は先に出るけど美森ちゃんも早く帰ってくるのよ？」

「うん、早めに帰るようにする」

病室には海斗しかいない、ここは個室なので広いが少し物寂しく感じる。

「ねえ、海斗。友奈ちゃんね、もう起きて歩けるようになったのよ。文化祭も何とかかなり

それで、早く帰ってこないとあなたのやるべき仕事がなくなってしまうわよ……」

海斗はなんの反応もしない、目に生氣がなく。

ただただ、吸い込まれるような深淵が瞳に映っていた。

「……それとね、みんなの身体ももう完璧に治つたの。神樹様が供物を返してくださいってさつたんですって、記憶も戻ってそのつちや銀に会って来たわ。銀はまだ目が覚めてないけど段々回復の方向に向かつてるらしいの」

必死に声を作つて、必死に笑顔を作つて、心をすり潰すように言葉を紡ぐ。

「……何で、あなただけ目覚めないのよ！罰を受けるなら私じゃない！なんで………どうして………」

耐えきれなくなった美森の感情が、涙になって瞳から零れ落ちた。

怖い、大切な人が遠くに行ってしまったかのような感覚。

辛い、愛する人をこんな状態にしてしまった原因が自分にあることが。

苦しい、こんなにも近くに居るのに、心が全然触れ合うことの出来ない状況が。

「私の味方で居てくれるって言ったじゃない！例え世界を敵に回しても、私の味方であり続けるって言ったじゃない！だったら、だったらずっとそばに居てよ。もう、私を置いてかないでよ！」

自分でも何を言っているのか分からない、でも言わずには居られなかった。それほどまでに、彼のことを想っていたから。

「もう、私を置いてかないでよ！」

声が聞こえた、忘れてはいけない人の声が。

「行かないきゃ！」

「さて、海斗！まだ早いっての、もう少し時間を」

「これ以上は無理だ、これ以上ここに居たらまた美森ちゃんを傷つる！それだけは御免だ」

焦っているのだろう、この場所からの出方など分かりもしないのに飛び出そうとしているのだから。

「だ〜か〜ら、少し待て〜。……若葉〜！来てくれ、帰りたい〜てさ」

景夜が若葉と呼ぶと、青い一羽のカラス……いや八咫鳥がどこからか飛んできた。

「そこに居る者だな？」

「そういうこと、誘導頼んだ」

「任された」

景夜が八咫鳥を喋ってる光景を見ても驚かない、海斗も景夜の昔話を聞いてある程度耐性は付いたらしい。

「こいつが誘導してくれる、後は勝手にしろ」

「ありがとう景夜、お前の話凄く楽しかった。機会があつたらまたして欲しいよ」
二カつと笑う海斗に景夜は苦笑しながら答える。

「まあ、また今度な……ほら早く行け」

景夜がそう言うと、若葉が飛んでいき海斗は急いでそれを追いかけた。

そして、眩い光が辺りを包むと海斗と若葉の姿は無くなっていた。

「……また、今度か。この世界でお前に会うのは、まだ機会がありそうだな」

景夜の眩きが誰かに聞かれることはなく、ただ静かにその空間に響いていた。

「東郷さん！大丈夫？やっぱり今日は一回帰った方は」

あの後、少しして来た勇者部の人みんなに涙を見られた美森は心配を受けていた。

「大丈夫よ友奈ちゃん。なんでもないわ」

本人はこう言っているが、その目は赤く泣き腫らした痕もある。

「ダメよ東郷、今日ばかりは流石に帰りな——」

風の言葉を遮るように、その人物は声を上げた。

「それはちよつと困るかなうなんて……どうも！東郷海斗、ただいま帰還しました！」

驚きのあまり、みんなの動きが完全に停止した。

夏凜に至っては、ニボシと柿ピーが入ったスーパールの袋を落としている。

「おっ！柿ピーじゃん、流つ石夏凜。略してきすかり！」

こんな馬鹿みたいなことを言っても、誰も反応しない。

海斗は少し不安に思っ、みんなに問かける。

「あ、あれ、俺まだ起きてない？もしかしてこれ夢？」

やはり、誰も反応しない。

自分の頬を抓ってみるが普通に痛い。

「ほ、本当に海斗なの？」

美森が混乱したような顔で尋ねてくる。

「そうだよ、美森ちゃんのこと大好きな東郷海斗で日守陽向ですよ！」

飄々とした言葉遣いで、美森の質問に答える。

「……少し開けた態度になり過ぎだけど海斗ね、間違いないわ」
美森の声を聞いたみんなが、一斉に海斗に話しかける。

「海斗君！良かったら本当にもうダメかと思つたよ」
友奈が泣いてるような笑つてるような表情で言う。

「そうですよ、ホントに心配したんですから！」
樹も嬉しそうに涙を流しながら、海斗の目覚めを祝福する。

「もうくく!!何なのよアンタは、起きてそんな経つてないのにそんな態度取つて!今度という今度は許さない、先輩からのキツイお説教をくれてやる!」
怒つてるようで喜んでゐる風からの言葉。

「たくつ!海斗はまだまだ修行不足なのよ、これからリハビリがたらミツチリ鍛錬よ」
照れを隠しながらも、それでも心配していたことは隠さない夏凜からの言葉。

「……お帰りなさい、海斗。ずっと待っていたわ」

家族からもらう、お帰りなさい。

それがとても嬉しくて、少年の心ははしゃいでしまう。

「うん、ただいま美森ちゃん！」

少年の物語は、ここで一つ区切りを迎えた。

日守家にて、

「銀の治療、上手くいきそうだって。お前の方も治ってきたみたいで良かったよ」

海斗は自分の目の前に座る園子の様子を見て、笑顔で語り出す。

「かーくんのお陰だよ、あれから精霊の負担が軽くなったんだって？」

「うん、そのお陰で銀の回復も上手くいった。そろそろ目が覚める頃らしい、まずは義手の訓練からだな。まあ、アイツ運動神経良いから簡単にどうにか出来そうだけど」

笑いながら、今後のことを語り合う二人。

以前は出来なかったが、今なら出来る。

未来を思い描くことが出来る、それが園子にとってどれだけ嬉しいことか。

「ねえ、ねえ、わっしーとはどうなの？進展あった？」

園子の言葉に、海斗は笑顔で答える。

「それがさ、人目に付かない所だったらいちゃついても良いって言ってくれたんだ！
まあ、そういうことはやくそくが果たされる日まで禁止だけど……」

「あーそれには辛いね、良かったら私の方に逃げて来てもいいんよ」

「止めとく、美森ちゃんの信頼は裏切りたくないし。……そう言えば、転校してくるんだ
ろ讃州中学に」

海斗は話題を変えて、なんとか園子の興味を移す。

「うん、ミノさんが回復したら一緒にね」

彼女の声はいつも緩く感じてしまうが、それでも嬉しい気持ちは海斗にもヒシヒシと

伝わってくる。

「そっか……、やべえそろそろ夕飯食いに行く時間だ！園子今日の所はここまでだ、またここで秘密のお茶会しような！」

海斗は急ぎの用事を思い出したのか、お喋りを切り上げて園子に帰るよう促す。

「りよ〜かい♪またね〜」

園子は表に止めていた車に颯爽と乗り込み、すぐさま家に帰っていった。

海斗も自分の家に戻った。

ご飯を食べ終わった後、海斗はカラオケに行く前に行く場所があると言い大赦が所有している霊園に向かった。

「確か……四列目の……在った在った」

「……は……そういうことね」

降りて来たのは美森と海斗だけで、両親は車で待っている。

「久しぶり、父さんに母さん」

海斗が手を合わせる、その目の前には「日守家」と書かれた墓があった。

「お久しぶりです、おじさんにおばさん。美森です」

二人して手を合わせることに数秒、海斗は少しづつ話し始めた。
今までであったことを断片的にだが伝えていく。

悲しかった話も、嬉しかった話も、苦しかった話も、楽しかった話も。

十分ほど経った頃に、話を止めて立ち上がった。

「二人に願われたことちゃんと出来たよ！それと、俺彼女が出来ました！これからも、俺たちを見守ってくれろと嬉しいですよ」

大切な報告、やつとやくそくが果たせるかもしれないことと二人の願いを叶えられたという報告。

そのことを伝えかけた。

「お二人とも、不束者ですがよろしくお願いします」
美森も丁寧に頭を下げる。

「……さて、行こっか美森ちゃん。父さんと母さんを待たせるのも悪いし」

「そうね、行きましようか」

ゆつくりと車の下に歩いて行く。

強く手を繋ぎながら、二人は歩く。

もう二度、この手を離さないように。

絆の章

prologue 「物語は終わらない」

「春信さん、俺は何時までここに居なきやいけないんですか？」

大赦本部のとある一室、薄暗い部屋の中で海斗が仏頂面で春信に問いかける。

「もう少しかな、そろそろ園子様が来る頃だからね」

春信は海斗の方を見ながら申し訳なそうな顔で答えた。

「……ホント、神道と呼ばれた天才は一味違いますね」

嫌味がましく言う海斗に、春信も苦笑いで対応する。

海斗が何故こんな場所に居るのか、それは少し時を遡って話す必要がある。

二学期も半分が過ぎたある日の通学途中。

校門の前で、海斗は見知った車が一台止まっていることに気付く。

誰もが素通りしていく中、海斗・美森・友奈の三人も車の前を通り過ぎようとした瞬

間。

唐突に車のドアが開き、中からクルリとターンをしながら一人の少女が飛び出した。

「じゃじゃじゃ〜ん！乃木さん家の園子だよ、驚いた〜」

「え、あ、ええと、あの？」

「よっ園子……それに銀」

「流石にバレてるよな〜」

もう一人、車から出てきたのは体の重心が少しズレている少女。

義手の所為ではあるが、彼女はそんなことは気にしてない様子だ。

「今日から同じクラスだよ、よろしくね〜」

「よろしくな」

ドツキりに近い二人の友人の登場に、美森は半ば固まってしまっている。

「そのつち……銀……」

「ハイハイわっしー、園子だよ」

「久しぶり須美」

「そのつち、銀」

「驚いてる驚いてる」

「サプライズ大成功だな！」

二人がハイタッチをしようとした時、美森が二人に抱き着いた。

「そのつち！銀！」

感動の再会、そんなところだろう。

海斗はそっと三人から離れて校舎に向かう。

「海斗君はいいの？三人といなくて？」

「良いんだよ、今はアイツらだけで」

眼から零れ落ちそうになった涙を少し耐えて、海斗は校舎の中に入っていった。

そして放課後、

「勇者部入部希望の乃木園子だぜー！」

「同じく三ノ輪銀です！よろしくつす！」

満面の笑みで勇者部部室のドアを潜る園子とそれに続く銀。

「ええ!?!乃木園子に三ノ輪銀」

「二年前大橋の方で勇者やってたんだぜ。改めてよろしくお願いしまーす」

「色々と教えてくれるとありがたいよ」

「またそのつちや銀と勉強できるなんて」

懐かしむような視線を向ける美森に銀と園子も笑顔で答える。

「授業中に居眠りしたら注意してね〜?」

「アタシも、アタシも〜!」

「しないように気お付けないとダメよ、二人とも」

まるで母親のようだと思っただが、海斗は口に出すことはせず成り行きを見守った。

「なんか東郷がお母さんみたい」

「あつ!それ俺も思ってたと言わないようにしてたのに」

海斗達による雑談中、樹はタロットで園子たちの運勢を占っていた。

「運命の輪……」

樹がそのカードを見て、笑みを浮かべた。

「おお、何かカッコようさそうだな。何て意味なんだ？」

銀の問いに樹が何故か胸を張って答える。

「運命的な出会い」

「「おお」」

三人の声ハモる、少し間延びした声が響く中園子が斜めうえな言葉を出す。

「私、運命の子」

「そうなる、アタシもアタシも」

「ふ、福德円満」

手を取り合いながら年相応な笑顔を見せる少女たちを見て、海斗も自然と笑顔になつていく。

そして、その日は自然とお開きになってみんなで一緒に放課後の寄り道に行った。

今巷で噂の国防仮面。

その正体は御国大好き国防系芸人の、東郷美森だった。

風に捕まった東郷は部室で異端審問にかけられるように、部員に囲まれながら座っていた。

海斗はため息を吐きながらも、態々学校まで美森を迎えに来ていた。

友奈と一緒に。

友奈は国防仮面が美森だと分かっていたいかなかったのか、その正体に心底驚いていたようだが、海斗は当然知っていたので驚くも何もなかった。

そして、訳を話し始めた。

「で？みんなに申し訳ないってどおいうこと？」

「体が元気になったら居ても立っても居られなくなつて」

「何が？」

恐らく壁のことだろうと海斗は悟。

彼女は背負いがちな性格をしている為、あの件のことも自分一人の所為だと思っ
ているのだろう。

「私が壁を壊してしまったこと。一時の感情とはいえ世界を危機に陥れてしまっ
たのは事実で、それって許されないことだから。私これからどう償えばいいの
か、だから何か罪滅ぼしが出来ないかって考えて……」

「それで国防仮面を引っ張り出してきたのか」

銀もそれなりの事情は知っているので、会話に戸惑うことはない。

「わっしー、随分極端になったねえ」

園子がからかうのように言うので、海斗の笑い声が漏れる。

「か〜い〜と〜」

夏凜が海斗を睨むのを余所に話は続く。

「気持ちには分かるけど突っ走り過ぎよ」

「すみません」

「かつこいいいなあ国防仮面！私もなりたいなー！」

友奈のこういうノリの良さは、湿った空気を塗り替えてくれるので海斗は好きだった。りする。

「実は実は私もこう見えて、国防仮面二号なんよー!!」

「じゃじゃ！私三号になる！」

「三号は銀で四号は俺だぞ！」

「そんなに多いと、何か日曜朝の戦隊もの見たいな感じになってくるな」

友奈に続いて海斗、そのツツコミに銀。

なんやかんやで、銀も結構この感じに馴染んできている。

「全く、夏凜とかが真似してニボシ仮面とか現れたらどうするのよ」

「真似しないわよ！」

一連のコントを経て、少し緩くなった空気の中で友奈が言う。

「東郷さん、みんなのために頑張りたいって気持ちは私たちも同じだよ？」

「そうだよわっしー、なにかあったら私たちに頼って良いんだぜ」

「出来るなら、俺に一番に相談してくれると助かるかな美森ちゃん」

「友奈ちゃん……そのうち……海斗も……」

「うん、三人の言う通り」

「東郷さん」

樹と夏凜も微笑みながら頷く。

「みんな……ありがとう」

その笑顔を最後に、彼女たちの記憶から東郷美森は……消滅した。

そして、時は戻る。

東郷美森と言う少女が世界から消えた日から、ある程度日数を開いた頃。

勇者たちは今回の異変に気付いた。

誰も東郷美森の記憶がない、友奈と園子が違和感に気付きようやく思い出したのだ。

「なんで、私たちの誰も東郷の記憶がないの。こんなまるで最初からこの世界に居なかったみたいじゃない！」

夏凜の言葉に、みんなが顔を顰める。

そして、その日は一度解散し大赦にコネクション出来るもので様子を見ようと言うことになった。

同日の午後七時頃、大赦に園子はやって来ていた。

ある部屋を探して数分、手にはアタッシユケースを持っている。

……それは勇者専用端末が収められているもので、つい先ほど大赦の神官に出してもらったのだ。

ようやく目的の部屋についたのか、園子は立ち止まりドアをノックする。

「私だよ、開けてくれると嬉しいな」

「今開けますので少々お待ちを」

ドアのロックを外しているのか、重苦しい鉄の音が数秒程聞こえてきた。

だが、園子は動じる様子は一切見せず、ただドアが開くのを待つ。

「どうぞ」

ドアが開くと同時に中に入り、手と足を手錠で拘束されている海斗の元へ向かった。

「大丈夫……じゃないよね？」

「まあな、それより端末貸してくれないか園子？」

「ダメ、今は渡したらかーくん一人で行こうとするでしょ？」

「当たり前だろ！もうお前たちのお役目は終わったんだから、これ以上お前たちに変身はさせたくない……」

海斗が叫ぶように園子に言う。

その顔には焦りと怒りが混ざったような表情が見えた。

「かーくんがそう思うように、私やゆーゆもそう思ってるってこと分かってる？」

「それは……」

海斗が押し黙ると、園子は春信の方を向き頭を下げる。

「ありがとうございます春信さん、かーくんを匿ってくれて」

「頭を下げる必要はありませんよ園子様、私がやりたくてやったことですので」

「じゃあ、私とかーくんはこれで」

「……………ありがとう、春信さん」

海斗も小さくそう言って部屋を後にした。

「……………後何度、君たちに重荷を背負わせなきゃいけないんだ……」

春信の言葉を聞いた者は誰も居なかった。

これが、彼が出した最初で最後の弱音だった。

「海斗！アンタ今までどこに居たのよ！」

「かるーく軟禁されてたんだよ、色々あってな」

海斗が手短に事情を説明していった。

「まず一つ、前回の戦いの後俺は眠ってたよな？あの時、俺の魂は神樹様の中で傷ついた部分を加護で癒してもらってたんだ」

「し、神樹様の中あ!？」

「そう。それでその所為か俺と神樹様の親和性が飛躍的に上がったんだよ……分かり易くすると勇者としてのレベルが跳ね上がったと思ってくれ」

「そ、それで、他に何が？」

樹が恐る恐るという感じで聞いてくるので、海斗もそれに答える。

(神樹様の寿命の件は……今は言わない方が良いか)

「その昔、勇者の適性が高い者を神樹様に供物として捧げるといふ儀式があった。それをやることで、神樹様の結界の強度を上げたりなんやりが出来るようになる。神事とも言えなくわないんだがな」

「その儀式って何よ?」

「……神樹様の根に触れて神樹様の中に入る。これがこの儀式の簡単なやり方だ、本当

は体を清めたりして祝詞を唱えながらやるんだけどな」

「それが海斗とどんな関係が……あつ」

銀が答えにたどり着く、残酷な答えに。

「何となくこれから先の言葉が読めてくるだろう？今、俺の勇者適性は友奈より高い」

「で、でも、供物って私たちと同じである部分だけとか……」

友奈の考えは間違いだ。

満開は神の力の一部を借りて使うことから、供物を必要としていたが、これは違う。

「友奈……残念だけどそれは違う。身体も魂もすべて捧げる、それこそが生贄の儀だ」

「生贄の儀……」

「で、俺が今派手に動く俺を供物にしようと考えてる連中から狙われかねないから、春信さんが匿ってくれてたんだ。軟禁に近かったけど」

「そういうことなんよ。ついでに補足するとかーくんはね、神樹様からパワーを貰ってるんじゃないくて天の神の父である伊邪那岐神から力を貰ってるんだぜ」

「て、天の神の父親から!?!そ、それって大丈夫なの?」

風が驚愕して裏返ったような声で問いかけてくる。

「大丈夫な筈ですよ。まあ、男の勇者が少ないのはある血筋じゃないとなれ難いからなんですよね」

「ある血筋って?」

今度は夏凜が落ち着いた様子で聞いてくる。

「初代勇者・柊景夜、みんなは聞いた事ないかもしれないけど……。柊家の初代勇者は俺と同じで男だった、伊邪那岐神から天逆鉾を授かり戦ったと言われている」

「それでね、その代の柊家と上里家と乃木家の当主様たちは恋仲だったんよ。で、

色々あってその三家の中には終景夜の血が入ってて、かーくんは上里の分家。ここまで言ったらしく何となく分かるかな？」

「今、しれつととんでもないことが聞こえた気がするけど聞き流しておきましょう」

夏凜は……ツツコムのを諦めた。

「ええーつと、なるほど海斗の中に景夜さんって人の血が薄くだけど入ってる訳だ！……あれ？この話だと海斗と園子って……」

「案外、血が繋がってる遠い親戚の可能性はあるな」

「かーくんがお兄ちゃんなのは悪くないかな」

そんな風に話が逸れかけたが、なんとか落ち着きを取り戻した風が舵取りをして話を戻す。

「それで、海斗のことは分かったから東郷のことを教えなさい」

「美森ちゃんは今、壁の外に居ます」

「か、壁の外ですか……でも、どうして」

「奉火祭、神世紀が始まる前の初代勇者たちの時代に行われた神事。天の神に赦しを請う為の儀式で、そのやり方は……壁の外の炎に巫女を六人送ること」

「おい、それって……」

「……生贄の儀と同じだよ。巫女の力は神の声を聞くこと、巫女ならその逆も出来なくわない。命を対価にな……」

「そして、わっしーは勇者でありながら巫女でもある稀有な逸材。大赦はわっしーにこう言っただと思う。「奉火祭で巫女六人が外の炎にくべられます、ですが美森様のお力添えを頂ければ巫女はそのお役目を果たすことはないでしょう」だってこう言われたらわっしーは……」

誰もが分かっていた、もしそんなことを美森が言われたら……

「まず間違ひなく引き受ける。そして、その時に眼を付けられたのが俺だ。俺は諱のお陰で神からの不都合な干渉を受けない、だから今回の記憶改竄も俺が受けることはない。美森ちゃんは完全に俺の行動パターンを読んでた、自分が居なくなったら最初に動き始めるのは海斗俺だと、だから俺のことを春信さんに頼んだ」

「じゃあ、兄貴がアンタを匿ったのはそういう理由もあつたってこと？」

「勿論」

ようやく、今回の事件の全貌がみんなに見え始めた。

そして、海斗はここでみんなに問いかける。

「俺は美森ちゃんを助けに行く、例え世界を敵に回しても味方であると誓ったからな。……みんなはどうする？行くか、行かないか。選択肢はちゃんとする、前回みたいに巻き込まれる形じゃない」

どうせ答えなど分かってる、だが海斗は聞かなければいけない。

日守の人間として。

友奈が最初に口を開く、その答えは……

「私も行くー！」

その後はみんなが流れるように自分の意志を言っていく。

そして、残ったのは勇者として動くことの出来ない銀だけだった。

「……海斗に園子、須美のことは任せた。アタシはパーティの準備でもして待ってるよ……みんな行ってらっしゃい！」

『行つてきます』

変身を終えた勇者たちは声を揃えて挨拶を返す。

美森奪還作戦、これが最後の変身になる筈だった。

だが、勇者たちの物語はまだ終わらない。

第一話「地獄に見た花と崇りの刻印」

地獄、そう形容してもいいほどの景色が広がる。

壁の外の世界は炎に包まれており、あつたもの全てを焼はらっていた。
概念の改変。

神にしかできないような芸当。

海斗はスマホの地図アプリで美森の位置を確認する。

「あそこに居るのが、美森ちゃんなのか……？」

「レーダーに反応あつたよ！」

「あつ東郷さんだ、やっぱり東郷さん壁の外に居たんだ！」

「何とかかなりそうね友奈」

「はい！」

三人は喜んでいるが、状況はそう甘くない。
何故なら、東郷が居る場所は、

「ブラックホールか？」

「東郷さんが、東郷さんがブラックホールになってる……!？」

「久しぶりに会ったらブラックホールになってたやつ初めてだわ……」

「お姉ちゃん……」

「周囲にバーテックスも居るじゃない」

無数の星屑が、こちらに向かってくる。

一々相手にしていらキリがないレベルの量だ。

みんなも善戦は出来るだろうが、いずれ誰かにガタが来る。

「どうする、このままじゃジリ貧よ」

「園子」

「うん、あそこまでなら船で行けそうだよ！」

「船って……？」

「満開！」

今代の勇者システムはまた改良されて、最初から満開ゲージが溜まっているのだ。なので、最初から満開を行使することも出来るには出来る。

だが、満開をした後は満開ゲージが溜まらない。

そして、アップデートされた精霊は満開ゲージを消費してバリアを張る。

それ故に、満開をすることとはバリアなしで命懸けの戦いをするということだ。

因みに、園子の満開は美森と似て船型。

オールのようなものが付いていて、それが武器の代わりになりビームも打てたりする。

「あ、アンタ、いきなり満開しちゃって！精霊の加護が無くなっちゃうのよ！

「昔はバリアなかったし、問題ないよ」

「問題ないってー!？」

「さあ、これがわっしー行きの船だよ。乗って乗って」

相変わらずと言うべきか、みんなはこんな状況でも園子の船を褒めていく。

これが、勇者部らしさと言うべきか、何と言うべきか。

海斗は苦笑した。

「まあ、何にせよ。俺が守るから心配はしなくていい」

「おお、かーくんかつこいいね」

美森奪還作戦は始まったばかりである。

園子は全力で飛ばしていた。

間に合わなくなったらいけないという思いが、思いつきり現れてる。けれど、如何せん速度が速すぎるのだ。

海斗たちは、必死にしがみ付いて何とか耐えている。

「みんなー!! 乗り物酔い大丈夫?」

「酔いつて言うか、普通にヤバイよこれー!」

「俺も同感だ! と言うか、もう少し何とかならないのか?」

「中で何が起こってるんだろう」

「東郷さん」

「仕掛けてきたか」

「アイツらもしかして、ここ守ってるの?!」

現れたのはバーテックスの集団。

地図で確認できるだけでも、射手座・牡牛座二匹・乙女座・蠍座・魚座。
この中を突っ込んで行くのは、些か無謀が過ぎる。

「囲まれちゃってるね……」

「私が東郷さんの所に行くよ」

「友奈!」

「絶対一緒に戻ってくるから！」

「ゆーゆ」

「頼んだ友奈。俺も行きたい所だが、こつちを守らないとヤバそうだからな……美森ちゃんを頼んだ」

海斗の顔には、悲痛の色が見える。

自分が助けに行きたい、その思いが強いからだろう。

しかし、今ここでこの船から離れたら帰り際に危険が生じでしまう。

それだけは、何とかして守らなければならない。

「ちよつと大丈夫なの？」

「もう！ちゃんと帰って来なさいよ友奈。部長命令！」

「邪魔してくるのは私たちで叩いちゃいますから」

「あんなものの中じゃ何が起きても不思議じゃないわ。気合よ！」

「うん」

「ゆーゆ、わっしーのことお願い」

「任せて園ちゃん！」

「よーし！それじゃあ一気に行くよーー！」

ブラックホールの真上で友奈が飛び降りる。

その瞬間、海斗も船の外へ飛び出そうとした。

「かーくん、私知ってるんだからね。精霊降ろしは満開ゲージを使わないようにして、身体や精神の負担に収めてるってこと」

「アンタ、また……」

「海斗、どうする気？」

「信長を使う……気にするな。今回の戦いは想定内のものだ。これ以上戦うことはないし、俺はそう簡単に死なない」

嘘だ。

無理矢理のアップデートだったせいで、前に使っていた時より負担が大きくなっていく。

信長のような最強クラスの精霊を降ろせば、身体や精神が安全に保たれる保証はない。

……でも、海斗はそんなことで諦める訳にはいかない。

今の自分は日守陽向でもあるのだから。

「……悪いな、ここで負けるわけにはいかないんだ。来い『第六天魔王・織田信長』！」

「おうよ海斗！」

いつもの羽織を着こみ、周りを見渡す。

そこから中に居る敵を見て、不意に海斗が笑った。

「ハハ、こうなった以上お前らに勝ち目はねえぞ。思う存分俺に……殺されてくれ!!!」

少年の戦いが、幕を上げた。

戦いが終わり数日、日も暮れて先程まで居た勇者部のメンツも帰り。

病室に残っているのは、海斗一人になった。

物静かな病室で、本を読みながら時間を潰す。

時折、美森の顔を見ては微笑んで、読書に戻る。

穏やかな時間が過ぎる中、美森がゆっくりと目を開けた。

「ハハハははは……っ」

「病院だよ、美森ちゃん」

戸惑う美森に優しく声を掛ける。

いつもと変わらない海斗の優しさにうるつときた美森だったが、今が危険な状況だと思ひ出す。

「何で助けてくれたの？このままじゃ世界が火に……」

「火の勢いはもう安定したから、もう生贄は必要ないんだってさ」

「まさか、代替りの人が？」

「違うよ。美森ちゃん、普通なら死んでるレベルの生命力をこっそり奪われてたらしいんだ。それできつとお役目は果たしたんじゃない？でも、タフだから生きていて。俺たちが間に合った。そんな感じみたい」

「本当に……私助かったの？」

「うん、お役目ご苦労様。もうしばらくは病院生活だろうけどね」

「……みんなが助けてくれたのよね……」

「友奈が謝ってたよ。忘れちゃってごめんなさいって。……俺も、すぐに行けなくてごめんね」

「海斗……ありがとう」

海斗は久しぶりに見た美森の笑顔に、少し泣きそうになった。

堪えたけど、苦しくて。

思いつきり泣いた。

大好きだったから。

友奈は、シャワールームで鏡に移る自分の姿を見た。

……左胸、心臓の辺りに出来た怪しい模様。
太陽にも似た、禍々しい刻印。

見る人が見れば驚くだろう。

それはまさしく崇りの刻印。

最悪の証拠なのだから。

第二話 「足掻く人、嘆く人」

クリスマスも目前に迫り、美森も退院したある日。

部活内で友奈が、こんな話をした。

「ここで問題です。キリギリスがアリの借金をコツソリ肩代わりしたとしたら、その後どんな問題が起こるでしょうか？」

『うん？』

この話には全員が首を傾げた。

ある一人を除いては……

「何それ？」

「私にも分かりません……」

「はっ?」

「社会学の事象問題?」

「ええ〜つと、学校新聞のクイズを考えていて〜?」

「ああ、そういうことか」

「それ、クイズになってないわよ」

みんなが少し苦言を呈す中、友奈がもう一度口を開こうとした瞬間。海斗はいきなり友奈の手を掴み、部室を後にした。

友奈が言葉を発する前に――

友奈を連れ出した海斗は、出来るだけ人目につかない場所に移動して話を聞こうとしていた。

当の本人は、自分が何故連れ出されたのか上手く分かってない様だ。
しかも、不自然に顔色が悪い。

(嫌な予感がビンビンだな……)

「友奈、お前なんか隠してることあるだろ？さっきの話で分かった」

あの例え話には、何か意味がある筈。

友奈が遠回しに伝えたかった何かが……

「多分だけど、ア리가美森ちゃんでキリギリスがお前なんだろ？……そうと仮定した場合、起こる問題は……お役目の引継ぎ。こんな所じゃないか？」

あの話からここまで割り出せるのは、一種の才能か、当てずっぽうか。
けれど、彼には確信があった。

最近の友奈から、何かおどろおどろしい気配を感じることに。

それも、友奈が発してる訳ではなく、他の要因があつてその気配が発せられていると

いうこと。

彼は友奈に対し鎌を掛けたのだ。

彼女が引つかかることを信じて。

そして、その思惑は見事に成功した。

「やっぱり、海斗君には敵わないな……。少し待つてね」

友奈はそう言うと、制服を脱ぎ始めた。

「いやいや！ちよつと待て、ここ外だから！」

「大丈夫、他には誰も居ないし。海斗君にだったら見られても良いから」

上の制服を脱ぎ、ワンピースの左肩に掛かっている紐を少しズラした。

出来るだけ見ないようにチラ見していた海斗だったが、左胸にチラツと見えた太陽の
ような模様の刻印。

それを見た瞬間、海斗の表情は激変した。

「友奈、もういい。服を着ろ」

「うん」

海斗は見たことがある。

ある資料の中で、あの模様を。

太陽の刻印……こう言い換えた方がいいだろう。

崇りの刻印と。

日守家の祖先の中でも、この刻印を受けた者は少ないながらも数名居た。

その全てが、崇りによって殺されてしまったが……。

この崇りはあまりにも危険。

崇りについて話そうとすると、感染症のように話しを聞いた者に災いが訪れる。

だからこそ、日守家で諱が採用されるようになったのだ。

二〇歳になったら表立って真名を使っても良いのだが、使う者はあまり多くない。

その所為で、稀に同じ名前が二人いることがある。

最後に、日守家には今まで隠されていた秘密があった。

海斗自身もつい最近知った事なのだが、長男以外にも諱が複数用意されていたらしい。

まあ、当然と言えば当然なんだが。

「美森ちゃんのお役目を引き継いだ、ってことで良いんだよな？」

「多分そう」

「……このことは誰にも言うな。俺には諱があるから崇りは受けないが、他の奴は普通に受ける。下手を打てば死ぬ確率が低いとはいえ数%とはあるからな」

「分かった……ねえ、海斗君？」

「なんだ？」

「これ、治るのかな？ 治らなかつたら……」

「安心しろ、俺が何とかする。苦しい時や辛い時は俺を頼って良いから、何かあつたら連絡しろ」

「ありがと、やっぱり海斗君は優しいね」

「お前のその言葉いい加減聞き慣れたな」

海斗はそう言つてその場を去る。

美森に手早くメールを済ませ、サボると伝えてスマホをしまう。

その後は急ぎ足で、大赦本部に向かつて走った。

何かしらの突破口を見つける為に。

あれから数日、クリスマス当日。

徹夜に徹夜を繰り返す。

海斗の身体には疲労が蓄積されていた。

「おいしい、生きてるか〜？」

「生きてるよ、人の貴重な睡眠時間の邪魔をすんな」

「いや、授業中もバリバリ寝てただろ！」

「そうよ海斗。居眠りは良くないわ」

「かーくんお疲れ〜？そんな時は私のサンチョを貸してしんぜよう！いっぱいあるからね〜」

「園子〜、お前は相変わらずだな〜」

「ホント、東郷の言う通りね。授業中も爆睡してたし」

「でも、海斗君が居眠り何て珍しいね」

勇者部+αの騒々しさは激しい。

この騒々しい感じも、いつもなら問題ないのだが三徹夜明けの海斗にとっては辛い。授業中で補ってはいるが、流石に睡眠時間を削り過ぎたらしい。

あの日以来、大赦で門限ギリギリまで資料を見て。

家に帰ってから、日守の権限で持ち出した資料を見ていた。

今だって、みんながいる中で資料を読んでいる。

読んでいるのは、日本神話の天照大神に関するものだ。

祟りや呪い関係の言葉が出てこないか全力で探し、その解決法を見つけようとしていた。

「海斗？何を見てるの？」

「ん、別に。ただの本だよ」

「まさかエッチイ本？」

陸斗の発言により、海斗はみんなからそれはそれは蔑んだ眼を向けられることになり。

誤解を解くのにそれなりの時間を要した。

年が明けた。

新しい年になってみんなで初詣に行った帰り道、海斗は一人別れて上里の本家に向かつて歩く。

大きな門を潜り、中に入る。

神官たちには通してあるので、スムーズに中に入ることが出来た。

ある広間に通され、中に入ると陽奈がお茶を飲みながら寛いでいるようだ。

「お久しぶりですね。新年のご挨拶……だけではないですよね？」

「ええ。……単刀直入に聞かせて貰いますけど、大赦ではどういう方針で決まったんですか」

「……神樹様の寿命が尽きかけているのはもう知っていますね？」

「はっ」

知っているのは当然だ。

何せ、海斗は何週間も神樹の中で過ごしていたのだから。

その時に、景夜に聞いたし、自分でも薄々感じた。

あの温かさは、尽きかけていた力を振り絞っている故の物だったのだと。

「神婚。こういえば、何となく分かりますか？」

「……人間を神の位まで押し上げる気ですか？ 天の神が黙ってませんよ」

「それを止めるのが、あなたたち勇者のお役目です」

「まだ助かる方法は——」

「そんな希望論が大人に通じるとでも？冗談はよしてください」

「……それでも、俺は諦めません」

「どうぞでい（勝手に）」

冷酷な態度を取る彼女に対し、海斗は一末の物悲しさを感じる。

普段の彼女はもつと明るく、柔和な笑顔が絶えない人だった。

けど、今は違う。

今の彼女は、冷酷に無慈悲に、真実を突き付けてくる上里トッパの女。

「すいませんでした」

一言を残し、海斗は上里家を去った。

彼が去った後、部屋の中から少女のすすり泣く声を聞いた者は居たが何も言わず。ただただ、涙が枯れるのを待っていた。

一月も中頃に差し掛かったある日、海斗は美森に呼ばれ犬吠埼家に向かう。

今日も今日とて資料を探していた彼からしたら、少しばかり迷惑にも感じたが美森に呼ばれた手前、行かない訳にはいかずとぼとぼと本部から歩いていた。

そして、マンションに着いて犬吠埼家の中に入る。

中には、勇者部の面々が居た。

「遅かったな」

「色々あったんだよ」

銀の言葉に適当な言葉を返し、テーブルの周りに集まっているみんなの輪に加わる。

テーブルの上には、

「勇者御記……」

景夜に一度聞いた事がある。

海斗はそう思い、中身の内容を大まかに予想し始めた。

「これを友奈が書いたってことか…」

「最近友奈ちゃんの様子が可笑しかった。その原因が掛かれていますか？」

「こんなのが出てくるなんてな……てか、これってアタシたちも書かなかったか？」

「うん、そうだね。私からも良いかな？」

園子の表情がいつもと違う、真面目な雰囲気を出している。

海斗はこの時点で何となく察しがついていた。

園子は気付いている。

友奈の身体に起こっていることを……

「そのっちゅ？」

「私もゆーゆが心配になつて調べてみたんよ。最近みんなより早く帰つていたでしょー
—実は大赦に行つてたんだ」

「大赦…」

やはり、海斗もここ最近是自己宛ての依頼があると言つて。

あまり部活に顔を出していなかった。

猫探しだったり、みんなでカラオケにも行つたらしいが、彼は何一つ行つていない。

「結論から先に言うと、ゆーゆの様子が可笑しいのわね。ゆーゆが天の神の祟りに苦しめられているからなんだ」

「おい、園子。それって……」

「聞いてミノさん。大社の調べで、この祟りはゆーゆ自身が書いたり話したりすると伝染する。それが分かったの。……だから、この日記は非常に危険な物なんだ。それでも、みんな見る？」

「見るわ、友奈ちゃんが心配なもの」

海斗は止めない——いいや止められない。

ここまでバレてしまえば、確実に今までやってきたものもバレるだろう。

「それじゃあ見るよ。ゆうゆの御記を」

こうして、勇者部は勇者御記を見ていくことになる。

はじめに。

年末に大赦の人たちが私の変化に気付き家にやって来た。

事情は神託や研究を交えて知ったので神聖な記録として残したいから、この本に日記をつけて欲しいと…。

続くかな。

どうしてこんなことになったのか…。

自分は大きな戦いで相当無理をしたようで、体中の殆どを散華してしまった。

さらに、敵の御霊に触れたことで魂が御霊に吸い込まれて気が付くとそこは、東郷さんを助けに行つたあの場所だった。

どこまでも空が広がる世界…。

がんばつて抜け出そうともがいてみたけど、どこまでもどこまでもどこまでも…。

そこは広、がっていた…。

東郷さんの声が聞こえて、私はもう一度帰るために足掻き始めた。

その時、どこからともなく青いカラスがやって来て。

私の手に留まると一度鳴いて、また飛び出していった。

そのカラスは、付いて来いと言つてる気がした。

だから、私はずっとずっと光の方へ進み続けて。

戻つてくることが出来たんだ。

でも、体は違っていた。

私やみんなは散華から回復したけど、あれは捧げられた供物が帰つて来た訳じゃないみたい。

回復した体の機能は、神樹様が作ったものらしい。

それが自分の身体になるまで、時間が掛かった。

強引な満開をして散華した私なんかは、治す為に全身神樹様が作ったパーツになっただけで。

大赦では私を、御姿みすがたと呼んでるとか。

御姿は良く言えばとても神聖な存在なので、神様からは好かれるんだそうさ。

だから、私は。

私の望んだことが、友達の代わりになることが出来て。

それで世界のバランスが守られた。

あれから大赦は異変に気付いて、私を調べてくれた。

分かったことは、外の炎がある限りこの身体が治ることはないということ。

そして、私は今年の春を迎えられないだろうということ。

とても、怖いし。

私の為に一生懸命頑張ってくれてる海斗君に申し訳ないし。

何だか、トンネルの中に居るような気分。

一月七日。

みんなで初詣に来た。

みんななどいると元気が出るけど、うつきないように気お付けなきや。

やっぱり口数が減っちゃう。

食欲はなかったけど、甘酒が美味しくて喉が喜んでた。

でも、家で吐いちゃった。

一月九日。

吐き気は酷かったけど、部屋に居ると体がホワホワする。

また明日って言葉が最近好き。

約束すれば、明日が来ると思えるから。

出来れば、ずっとこの場所に居たいな…。

風先輩は温泉旅行を提案してくれたけど、今の私の裸を見たらみんながビツクリし

ちやう。

とても行けない、ごめんなさい。

一月一日。

今日は調子が良い。

しつかり休んでるのが効いたのかも。

体を動かせて楽しかった。

このまま根性で、良い状態が続くかもしれない。
他にも体に良い事を色々試して見よう。

一月三日。

胸がとても痛くて、なんだか頭がクラクラする。

多分、みんなと会話が成立してなかったかも。

体、折角よくなったと思ったのに……。

一月四日。

いっぱい寝て、体力を回復させなくちや。

でも、電気を消して寝るのが怖い。
暗いのが怖い。

そのまま、暗いものに包まれてしまいそうで。

一月一六日。

今日は夏凜ちゃんを傷つけてしまった。

でも絶対言う訳にはいかない。

ごめんなさい、ごめんなさい。

とても苦しい。

体も痛い、心も痛い。

ぐちゃぐちゃになりそう。

もう可笑しい、私はただみんなと毎日過ごしたいだけなのに。

弱音を吐いたらダメだ。

海斗君に負担を掛けたくない、私の為に頑張りを続けている彼に。

もうこれ以上重しを載せたくない。

私は勇者だから。
もう泣かない。

頑張れ自分、結城友奈。
勇者は挫けない。

とにかく、夏凜ちゃんと仲直りしたい。

でも、本当のことを話せない。

どうすればいいんだろう。

もう、ここでいっぱい書く。

夏凜ちゃん、私夏凜ちゃんのこと大好きだよ。

夏凜ちゃん、本当にごめんね。

読み終えて、最初に放った言葉はこれだった。

「……………めん」

「かーくん……」

「海斗……」

「どういふことなんだよ……これ……」

「治らないってどういふことよ……春は向えられない……」

美森は駆けだした。

行こうとしてる場所なんて大抵検討が付く。

「待つて美森ちゃん！」

「止めないで！すべて私の所為じゃない！天の神の怒りは収まっていなかった。私が受けるべき祟りなのよ！」

「日記を見たでしょ！美森ちゃんに移っても、あいつは祟られたままなんだよ！」

「そんな……」

「大赦はまた……私たちに重要なことを黙って！海斗！何で言わなかったの！」

風の怒りが籠った言葉に答えたのは、海斗ではなく園子だった。

「迂闊に説明すると、みんなに祟りがいくかもしれないから話せなかつたんだよ。でも、かーくんは諱があつて祟られる心配はない。私もそうなんだ。祟りについて詳しいことが全部ハッキリ分かつたのは、ついさっきだから……」

夏凜が自分の言つてしまったことを悔やんで泣いていた。

それを、樹がそつと撫でて癒している。

少年は改めて、自分の無力さを知つた。

その日の夜、信長に勧められて海斗はある一冊の資料を持ち帰っていた。

本の題名は「精霊降ろしと神霊降ろしによる、メリットとデメリット」。読み進めている内に分かったことが一つ。

それは、神霊降ろしの力があれば天の神の撃退が可能だと言うこと。しかも、海斗は神霊降ろしを行使する素養があるということ。

だが、

「いいか海斗、よく聞け。神霊降ろしを行使する事、それ自体は俺の血を引いてるお前だったら可能だ。だが、お前が神霊の力に耐えられるかは分からない。幾ら、満開ゲージで肩代わりが出来ても。持って二分ちよいだ」

「っ!?分かってるよ……それでも。それでも、やらなきやいけないんだ。交渉の方は頼んでいいか?」

「任せとけ」

作戦を変更する。

例え、この身を賭してでも。

「お前のことを助ける……友奈」

どこかで、そう誓ったから。

最終話 「足りなかつたものは絆 (Nexus)」

朝の通学路、ちらほらと同じ場所に向かうであろう人が見えてきた。

左から、美森・友奈・海斗の順で並んでいるため、真ん中に居る友奈の様子がよく分かる。

呼吸が激しく、汗もかいている。

顔色もあまりいい物とは言えないだろう。

「最近、温かくなってきたね」

「うん」

「もうすぐ春だ……」

「そうね」

「東郷さん、海斗君。私ね——」

「うん」

「なんだ？」

「結婚する……」

「「うん……うん?!」」

彼女のそんな発言に、内容を知ってるはずの海斗も驚いてしまう。

二人は急いで友奈に駆け寄った。

「突然ですが……結城友奈は結婚します」

「ななな、何を言ってるの友奈ちゃん！まだ中学生なのに！大体相手は？」

「そっだぞ友奈！」

「落ち着いてよ二人とも。相手は神樹様だよ」

ここでようやく、海斗は神婚の儀の存在を思い出した。

放課後の部活にて、友奈は話した。

曰く、神婚の儀をしなくては炎が壁の外から侵入して来て世界が終わること。

曰く、神婚の儀の以外にも方法はあるが、海斗を犠牲にする生贄の儀しかないこと。

崇りで死ぬか、神婚の儀を行って死ぬか。

友奈は決めたのだ、神婚の儀を引き受けるということ。

「いや、怪しいでしょ。なに引き受けようとしてんの」

「ゆーゆ」

「違うと思います」

「それは違うだろ、友奈」

「みんな…」

「今のみんなの反応で分かるでしょ。友奈ちゃんの考えが間違っていることが…」

「東郷さん…」

夏凜も無言ながらも、友奈を心配するような視線を向けている。

「くうー！それにしても大赦め。友奈。私たちも付いて行ってあげるからバシツと断りなさい」

「神婚なんてする必要ありませんよ」

「園子、今から大赦に連絡入れられる？」

「うん、ミノさん」

「あいよ」

「もう我慢ならない」

「行くわよ。一度潰した方が良い組織になるかもね」

みんなが大赦本部に向かおうとした時、友奈はそれを止める。

「待って…。だから、私は神婚を引き受けるって…」

「その必要はないんだって」

「だって死ぬんでしょ…」

「訳わからない。生贄を変わらないじゃない」

「あと、神樹様と共に生きるって何なのかな？」

「その、なんかゾクツとくるっていうか…」

「あんまり良いもんじゃなさそうだよな」

「とても幸せなこととは思えないわ」

「誰もが友奈の意見を否定する。」

友奈の言ってる言葉を説明するところだ。

「みんなの為に私が犠牲になるから、みんなは幸せに生きてね」

こんな言葉に賛同する者など、この部室の中には一人も居ない。

「で、でも、私が神婚しないと。神樹様の寿命がきて、世界が終わっちゃうんだよ?」

「……なあ、友奈。お前の神婚⇨神樹様の寿命回復に繋がるのは知ってる。でも、お前に行って欲しいなんて誰が言った? 大赦の連中は言ったかもしれない。けど、俺たちの中でそんなこと言ったヤツ居るか?」

「海斗の言う通り。友奈がいく必要はない」

海斗と風の言葉に、友奈は押し黙る。

少し頭を俯かせて、痛む胸に手を当てて必死に考えた。

納得させる方法を。

みんなが自分の決めたことに、賛成してくれる方法を。

「風先輩。勇者部は……人の為になることを勇んで行う部活でしたよね?」

「友奈、これは違う!」

「でも、これも勇者部だと思っんです。誰も悪くない、世界を守るために他に選択肢がないなら。それしかないなら、私は勇者だから」

「友奈！ちよつと頭冷やしな」

「ゆーゆ、それしかないって考えるのやめよう。神樹様の残った寿命で他の方法を考えよう」

「そ、そうよ」

「無理だよ！この半月、海斗君は寝る間も惜しんで探してくれただけ何も見つかってない！私にもう時間が……」

その言葉の途中で、友奈は口に手を当てて塞いだ。

見えた、見えてしまった。

海斗以外の全員に、崇りが。

「私たち知ってるわ。友奈ちゃんが天の神からの祟りで、体が弱っていることを」

「その話はもうやめて！私は何も言ってない！」

「友奈ちゃん大丈夫よ」

「その件も含めて解決してみせるから……！」

「大体可笑しいんです！何で友奈さん一人がこんな目に遭わなきゃいけないんですか
！」

樹の言葉に、早口になりながらも、言葉を口にする。

「でも、でもね樹ちゃん。私は嫌なんだ。誰かが傷つくこと……辛い思いをすることが。
それを今回は私一人が頑張れば……」

「ダメよ！友奈ちゃんが死んだら、ここに居るみんながどれだけ傷ついて辛い思いをす

「……！私、想像してみたけど。後を追って腹を切ってるかもしれない！」

「でも、海斗君だつて一人ですつと戦つてたし。東郷さんだつて、みんなを守るために火の海に行ったんでしょ。あれだつて自分一人で世界を救えるならつて思つたからでしよ！」

「そうだな、でもあれは俺のお役目だ。日守にはそういう決まりがある」

「そうよ、でも壁を壊した私の自業自得でもあるのよ！友奈ちゃんは悪くないじゃない！反対よ！腹を斬るわよ！」

二人は確かに自己犠牲をした。

片方はお役目の為、片方は自分の罪を償う為。

どちらも、自分一人でなんとか出来るならを思い。

そのお役目を引き受けた。

二人とも、みんなの日常を守りたくて自己犠牲を選んだ。

でも、どちらとも友奈とは違う。

似ているようで全く違う。

それしかないから、自分を犠牲にする。

……少女は諦めているのだ。

自分が助かることを、自分の命を。

「そんなの、ズルいよ。私は、東郷さんの代わりに……」

「代わりに……なに友奈ちゃん」

自分の失言に気付くがもう遅い。

出てしまった言葉は取り消すことは出来ない。

世の中はそんなに甘く出来ていないのだ。

だからこそ、今こんな状況になっている。

「友奈さん。友奈さんが言うように、勇者はみんなを幸せにするために頑張らなきゃい

けないと思うんです」

「そうだよ、だから私頑張ってるよ」

「で、でも……」

「みんなって言うのは、自分自身もそこに含まれているのよ友奈」

「し、幸せだよ私は……それで、みんな助かるなら……」

「嘘よ!」

「勇者部五箇条。なるべく諦めない! 私はみんなが生きる可能性に懸けているんだよ!」

「友奈が生きる事諦めんのはダメだよ!」

友奈の五箇条を使った言葉は、銀に正論で言い返される。

「勇者部五箇条。成せば大抵なんとななる！成さないと何にもならない！」

「友奈五箇条をそういう風に使わない！」

五箇条を都合のいいように使おうとする友奈を、風が言葉で制す。

だけど、友奈は止まらない。

いいや、止まることが出来ない。

もう、来るところまで来てしまったから。

「私は、私の時間がある内に。私が出発をしたいと思います！だから、みんなにキチンと相談しました」

「これじゃ報告だよーゆ。相談しなきゃ」

「相談してるよ」

「友奈……その……とにかく無理すんな……」

「無理してないよ！」

「ご、ごめん」

「勇者らしく、私らしくして——」

パチン！

言葉の途中で、そう乾いた音が響いた。

誰かが友奈を叩いたのだ。

叩いたのは……

「海斗……君？」

「友奈。何で全部一人で抱え込むんだ？何で一人で片付けようとするんだ？俺だって抱

え込んだよ、誰にも相談できなくて潰れそうになった」

そうだ、海斗だつて、美森だつて抱え込んだ。

二人はやつぱり姉弟だ。

仲間の事を本当に大事に思っていて、その所為で抱え込んでしまう。

「ならー！なんでこんなこと……」

「俺がお前らを頼らなかつたのが何で分かるか？カツコ悪いからだ。男なのに自分が守りたいって思ってる女の子に頼るなんてカツコ悪いだろ？理由なんてそんなもんだ
！」

「じゃあなんで！」

「お前が諦めてるからだよ！逃げんのは良い、逃げることは負けじゃねえ。そんなことなら怒りはしない。でも、お前は違う、助けたいと言ってるだけで自分の命を諦めてる。勇者なんだろう？だつたら足掻けよ！命が尽きる最後の一秒まで足掻いて足掻いて、

それでも無理だったらしやうがない」

「そんなの……無理だよ！出来っこない！」

「じゃあ、俺を頼ればよかっただろ！辛かったら辛いって、苦しかったら苦しいって。そう言ってくれば俺だって……。頼んのを逃げって言うかもしれないけど、お前の場合は違うよな？負担を掛けたくない？そんなのどうだっていい！俺はお前の仲間で、大切な幼馴染なんだよ！俺はお前のためだったら命懸けたって構わない！」

「そういう所だよ……そういう所があるから海斗に言えないんだよ！」

そう言って、友奈は部屋を出ていった。

それに続いて、園子と美森も後を追う。

全てを言い切った海斗はスッキリした顔だった。

(後は……なんとなかなるか)

友奈は最後に海斗に対して、本音で答えた。
海斗はそれが嬉しかったのだ。

本音を言い合える関係はまだ崩れていない。

だったら、まだ何とかなる。

天の神襲来まで……もう少し。

英霊之碑、その場所に待ち構えていたのは安芸だった。

話した、神婚の意義を。

話した、二年前の銀の活躍を。

話した、外の炎をどうにかする方法も、友奈の崇りをどうにかする方法もないことを。
話した、子供を犠牲にしないと続かなかったこの世界の事を。

「ピーマンが嫌いだったよね？ 凄く厳しいけど、ふとした時に見せるチャーミングな所が好きだったよ。でも、今は……昔の安芸先生じゃないんだね」

「アタシも、いつつも怒られてばっかだったけど。先生が私たちのことを思ってくれてるの知ってた」

「銀の時、一緒に悲しんでくれたのに。その辛さを知ってるのなら！もう一人も犠牲な
んて！」

恩師だった。

色々大切なことを教えて貰った。

大好きだった人で、変わって欲しくなかった人。

「あなたたちのクラスメイトは、その友達は、家族は。もうすぐ来る春を待ち遠しく思い
ながら、家でうどんを食べて。暖かい布団で寝て、今日も平和な日常生活を送っている。
少々の犠牲、このやり方で。大部分の方が幸せに暮らしているのです」

「それなら……あなたたちが人柱になればいいのに」

「風先輩！それは違います……それだけは言っではいけません」

「出来るものなら、そうしています。けれど、私たちでは神樹様が受け入れない。こうい

うことに行かれるあなたたちだから、受け入れているのか……」

安芸がその言葉を言い終わった瞬間、スマホから嫌な警報音が鳴り響く。

「特別警報発令」、天の神が来た。

世界が揺れる、結界ごと壊して浸食していくつもりなのだろう。

「ちよっ！なによこれ！」

「あなたたちの出番です。天の神は、人間が神の力に近づいた事に怒り、裁きを下したと言われています。人間が神婚するなど以ての外」

「バーテックスが……来る……！」

「いいえ」

空が焼ける、この比喩のような表現が適格だ。

空が焼け爛れるとはこういうことを言うのだろう。

巨大な雲雷が、世界を浸食していこうとする。
あれが天の神だ。

「神婚は、友奈様が神樹様の下へ行き。人々の願いの礎になることで契られ、成立します。神婚が成立すれば、人はもう神の一族。人でなければ襲われない。これでみなは、神樹様と共に平穩を得ます。これが最後のお役目。敵の攻撃を神婚成立まで、防ぎ切りなさい」

「……言われなくてもやってみせますよ……」

樹海化が始まり。

戦いは最終局面に。

樹海化が終わり、海斗たちの目の前に居たのは……

「ア……アベル！どうしてここに?！」

「さあな、俺が知るかよ。……神樹が俺を防衛機構として復活させたんだよ、死人を蘇らせるとか。良い趣味してるよ、おたくの神様」

「……海斗？」

「美森ちゃんと風先輩で友奈の所に、それ以外は^天デケ^のエ鏡野郎^神の迎撃だ。満開は各自の判断で使ってくれ」

「……どうせ、何か策があんだろ？そんな顔してるぜ。……時間は稼いでやるから、早くしろよ糞兄貴！」

「ふん！そつちこそ、簡単に死ぬんじゃないやねえぞ！信長！」

「おう、任せとけ！」

また、激しい光に包まれた海斗は一人。
ある場所に向かった。

高天原、本来なら霊体しか入れない場所に海斗は居た。

目の前に居るのは、優しそうな青年。

慈悲深さが体から溢れ出してるようだ。

海斗はゆっくりと息を吸い込んで、冷静さを保ちながら——伊邪那岐神に話しかけた。

「あなたが伊邪那岐神様でしょうか？」

「はい、ここまでよく来ましたね。東郷海斗……日守陽向でもあったか」

「……景夜から話は聞いてると思いますが。お願いします、どうかあなたの力を貸してください！」

海斗は頭を下げる、綺麗に腰を九十度に曲げて。

伊邪那岐はそのことに驚き、急いで頭を上げさせる。

「海斗くん頭を上げて。大丈夫、力は貸すから。条件はあるけどね」

「条件ですか……一体どんなものでしょうか……？」

「なぐに簡単さ。娘である天照大神が人を殺すのを止めて欲しい。私の力を使ってね」

「分かりました！任せて下さい！」

「それと、これは忠告。君たちの……満開ゲージだったか？それに負担を肩代わりさせたところで、持って二分弱。満開ゲージが切れてからは、寿命を代償にしなきゃいけない。景夜だったら一ヶ月寝るくらいで済むんだけど、海斗君は少し私が渡した天津神の力が薄れてるからね」

有り難い忠告ではあるが、それに構ってられるほど海斗に……いいや、人間に余裕はない。

素直に聞きたいが、今回はその忠告を守ることは出来ないだろう。

「ご忠告ありがとうございます。それでは、仲間が待っていますので」

海斗は下半身から徐々に消えていき、数秒の内になくなってしまった。残ったのは人間体になった景夜だけだ。

「行かなくていいのかい？」

「すぐ行くさ……どうだった？俺の子孫？」

「うむ、中々に良い目をしていたな。お前を……人を信じて良かったと思うよ、本当に」

「そうかい、それじゃあな。また戦いが終わったら暇つぶしに来てやるよ」

景夜も海斗の後を追うように姿を消す。

伊邪那岐はそれをただ見つめていた。

彼らが勝つことを祈って。

元の樹海に帰ると、アベルが血だらけで倒れていた。

……一目見ただけで分かる。

これは致命傷だ。

腹部には拳大の風穴が空いている。

もう手遅れだ。

「……バカだな、こんなになるまで戦って」

「うるせえ……こっちの勝手だろうが。それで、どうなん……だ？」

「お前が稼いでくれた時間のお陰で、何とかかなりそうだ。ありがとな愚弟」

「どういたしまして、糞兄貴」

お互い軽く口を言い合ってるが、もう二人に時間は残っていない。

アベルは、最後に言わなければいけないことを思い出し海斗に伝える。

「なあ、兄貴？俺、勇者になれたかな……？なれてたら良いな」

「……お前の戦いっぷりは見てなかったけど、誰かの為に戦うことが出来たお前は立派な勇者だったよ……！」

「ホント、変な兄貴だな。俺が死んで泣くなんて……」

「うるせえ、泣いてねえ」

勇者服の袖で涙を拭い、立ち上がる。

武器を構えてこう言った。

「アベル、先にあつちで待ってる。ゆっくりノロノロと行ってやる」

「……俺が行くのは地獄だよ。ボケ兄貴が……」

そんな言葉を最後に、アベルは眠るように息を引き取った。

涙は流さない、流してはいけない。
背中を押されてきたから、振り返ってはいけない。

「景夜。これまでの勇者がなんで天の神に勝てなかったと思う？」

「あん？俺たちのことバカにしてんのか？」

「そうじゃねえよ……。俺が思うに、足りなかったじゃねえかな？愛と平和を願って戦うだけじゃ」

「……さあな、だとしたら。お前は どうするんだよ？」

「決まってるだろ！愛する人を守りたいという願いと、平和な日常を守りたいという願い。最後に俺は自分が紡いだ絆を持って戦う！」

「愛と平和を結ぶのは——絆か……。面白いな、流石だよお前は」

「だろ、行くぞ景夜。俺たちが、勇者の歴史を終わらせる。お前と俺原点と終点の力で！」

「行くぞ、海斗！」

「変身！」

海斗の周りを昼顔の花弁が舞う。

それと同時に並行で、海斗の変身が行われていく。

これが、きつと最後の変身。

「降りよ、伊邪那岐神!!」

海斗の勇者装束は変わらない、だが纏う雰囲気は先程とは格段に違う。

神々しいまでの輝きが、海斗の周りを包む。

これから二分、いや五分は粘らなければいけない。

「上か！」

瞬間移動で移動し、夏凜の隣に海斗が現れる。

近くには園子や樹も居て、海斗の行動に驚いているようだ。けど、海斗はそんな事を気にすう様子はなく。

夏凜の頬にそつと触れる。

すると、夏凜の身体が淡く発光しだした。

「いきなり現れてなんなのよ!？」

「良いから黙ってろ」

神通力を使うのは集中力が必要不可欠。

景夜はさも当然のようにやっていたと言ったが、海斗からしたら傷を治すだけでも億劫に感じる。

(おい！景夜！もう少し簡単じゃないのかよ?!)

（しょうがないだろう！俺とお前じゃ色々スペックが違うんだよ！）

心の中で景夜に愚痴りながらも、天の神への対処も忘れない。

サジタリアスの小さい矢が繰り出される。

海斗は神通力を使い、下方にいるキャンサーの反射板を圧縮して壊し。

次に、優に十万を超える火縄銃を生成。

神樹に落ちたりダメージがフィードバックするため、全力放火ですべての矢を撃ち落とす。

「俺たちの街に、落ちんじゃねえ——！！！！」

渾身の攻撃は見事成功。

海斗はもう一つの秘策を切る。

これが成功すれば、確実に勝ちへの一步を踏み出すことが出来るのだ。

「来い！天逆鉾」

どこからともなく、それは飛んできた。

西暦時代、景夜が武器としていた使っていた神器。

海斗が思い描く中で、この武器が自分たちが持っている中で最強なのは確かだ。

「…かーくん、どこまで犠牲にしてるの？」

「どこまでだろうな？ 悪いけど、悠長にお喋り出来る程余裕はない」

海斗は天逆鉾に神通力で神の力を込めていく。

その所為で、満開ゲージは後一割の残っていない。

「ホント、ズルいね〜？」

園子の問いに答えることはなく、絶技の為の準備を終える。

絶技とは、天逆鉾の全力開放。

詠唱が必要な上に一度の戦闘で一回しか使えない秘密兵器。

その真価は、槍の穂先に日本国土の総質量を載せて放つというもので、日本神話での

伊邪那岐神と伊邪那美神の国造りの再現に近い。

「これは、絆により作られた最高の一撃」

握る柄の部分に力を籠める。

「大切な者を守るため、大切な明日を守るため」

……後はもう、投げるだけ。

体制を整えて、最後の一節を唱える。

「花を結った勇者たちの想いを載せて」

言い切った、その安堵から力が抜けそうになる。

天の神も力を貯めているのか、レオの巨大な火球を作っていた。

（そんなのに！負けてたまるか！）

(行くぞ海斗！これが、俺とお前の力だ！)

「絆Ne x u s t h e s u p p r e m e b r e a kによって作られた、最高の一撃！」

放たれたの絶技は、景夜が前に使った時とは威力の桁が違った。

あれを超える攻撃を出来る者は、そうそう居ないだろう。

レオの火球を切り裂き、そのまま天の神本体（鏡のようなもの）に直撃した。鏡は所々ヒビが入ったが、まだ天の神は健在のようだ。

「嘘、あれを喰らってもピンピンしてんの」

「そんな、それじゃあ。どうすれば」

「……かーくん？」

こんな状況でも、海斗は笑っていた。

あと少しなのだ。

後は叫ぶだけ。

(景夜、お前も他のみんなみたいに行ってやってくれ)

(おう！任せときな)

「友奈——聞こえてるだろ！俺の話をよく聞け！……諦めるな、目の前にある手を掴み取れ！それと、思い出せ！お前のことを大切に思ってくれてる人たちのことを！」

全てを言い終わった海斗は、ゆっくりと敵を睨み返す。

まだ終わっていないし、終われない。

「もう少し付き合ってくれよ！天の神！」

そこからは、本当に神対神の戦いだった。

あの言葉から五分、どれほどの寿命を持っていかれたのだろうか。

五感の機能は、残ってはいるが。

吹いたら飛ぶレベルの残りカス。

消えるのも時間の問題だろう。

しかし、間に合った。

「ごめんね海斗。遅れちゃって」

「別に待ってなんかねえよ。早く行け！」

「うん！」

友奈が天の神に向かって行くのを見送り、海斗は地面に向かい自由落下を始める。

もう既に意識はなく、体も端から砂に変わっていった。

その日、空に七枚の花が咲いた。

e p i l o g u e 「まだ見ぬ明日（未来）を目指して」

「またここか……」

目が覚めて一番最初に見つけたのは、アベルと景夜。

……神樹様の中に居た。

少し驚くも、何でもないように二人に声を掛ける。

「よっ」

「よっ。じゃねえよ！何死んでんだ！このポケ兄貴！」

「全くだ……。まあいい、ここに呼ばれた時点で何となく察しは付いてるだろうが……。今、神樹が残った力を使ってここを維持している。アイツは神樹お前の身体を作っちゃって
も良いって言ってる。後、もう一つ」

景夜はそう言うと、ある方向に向かって指を指す。

そこに居たのは、二人の若い男女だった。

でも、どこかで見たことのある男女だ。

気弱そうな男性に、快活そうな女性。

何を隠そう、

「父さんに母さん……なんでここに？」

「俺が橋渡しし役になって連れて来てやったんだ。……選択肢は二つ。一つは、極楽浄土

——分かり易く言うと天国に行つてあの二人と過ごすか。おまけでアベルも付いてくる」

「おまけとか言うな！」

「二つ、神樹に新しい体を作つて貰い現世に戻る。さて、どうする」

「なあ、二人と話していいか？」

「どうぞぞ」

景夜とアベルの間を通り、両親の下に向かう。

緊張してガチガチになってしまっているが、それでも二人は優しく抱きしめてくれた母である日守藍子らんこは強く、父である日守健太けんたは優しく。

「久しぶり、父さんに母さん」

「ええ、久しぶり。見ない間に、随分大きくなったわね。うんうん、健太さんにて優しそ
う」

「それを言うなら、藍子に似て明るい子だよ」

「……俺さ、二人にいつぱい話したいことがあつて。ホントは数分じゃなくて一日中話
していたい。でも、少ししか時間がないから。一言だけ言わせて欲しい……二人の息子
になれて良かった。俺を生んでくれてありがとう！」

「私たちも、あなたみたいな息子を生んで良かった」

「うん。本当によく育ってくれた。陽向が息子に生まれて来てくれてよかったよ」

抱きしめていた腕に、より一層力を籠める。

ここに居られる時間は少ないから、思いを込めて抱きしめた。

二、三分程抱きしめた後。

海斗は二人から離れ、笑顔で言った。

「行ってきます。父さん、母さん」

「行ってらっしゃい」

景夜の方に戻り、アベルの顔を見る。

泣いていた。

それが少し悲しくて、アベルの背中を押す。

背中を押されたアベルは、チラチラ後ろを振り返りながら二人の方へ歩いていく。

「景夜……悪いけど。俺はあっちには行けそうにない、みんなの所に戻るよ。アベルの方を頼む」

「良いんだな？」

「大丈夫」

「…そうか、分かったよ。体はもう用意できてる。早く行け……」

「お前と過ごした時間、悪くなかったよ」

「俺もだ」

言葉少なく、海斗は光になって消えていく。

こうして、長かった勇者の歴史は幕を閉じた。

最後の戦いから二ヶ月以上の時が経った、ある日の部活。部長は樹が引き継ぎ、今日も今日とて勇者部活動をしていた。そんな中、銀と海斗が居残り組で暇を持って余していると。不意に、銀が不思議な体験を話し始めた。

「なあ海斗？」

「なんだよ？」

「お前は、アタシが片腕失くした時の戦い聞いた事あるっけ？」

「聞いてないし、出来れば聞きたくないな。生々しい話のごめんだ」

「違うんだって、あの時本当はアタシ死ぬ直前だったんだよ」

そんなの病院で嫌と言うほど見た。

銀が実際に生死の境を彷徨っている間、あの病院に定期的に言っていた海斗は知っている。
いる。

あの時、どれほど危険な状態だったかを。

「確か、銀髪の男の子が助けてくれたんだ。きもーち、海斗に似てなくもなかった」

銀の言葉に、海斗は座っていた椅子から滑り落ちるほど驚いた。

海斗が思うに、その男の子は十中八九景夜だ。

銀髪で、気持ち海斗と似ている。

それに加え、樹海に入ることの出来る存在。

海斗が知る限り景夜しかない。

「大丈夫か?!」

「何とかな……。その話、詳しく聞かせてもらって良いか?」

その日、退屈は銀の話で吹き飛んでいった。

卒業式も終わり春休み。

東郷家は休みを利用して、家族旅行に出かけていた。

神樹様が居なくなつてからは資源が高くなつたが、それでも貯金は幾らかあるため少しくらいのんびり出来る。

因みに、お隣さんである結城家も同行し、とても賑やかだ。

大人は大人、子供は子供で部屋を取り。

それはそれは穏やかな休日を過ごしていた。

ここ最近では防人と呼ばれる集団が、外の世界の土壌調査や水質調査を行つていらしい。

海斗も、夏休みを利用してそこに加わることが決定した。

事前に防人の者達とも話をしたことがあるが、とても善い人だったのを覚えている。

若干名キャラが濃いものも居たが……

「海斗？どうかしたの？」

「海斗、何かあったの？」

「ううん、特には……。にしても、二人とも似合ってるな。美森ちゃんが着付けしたのか？」

「そうよ♪」

「似合ってるだって！やったね東郷さん」

「そうね！友奈ちゃん！」

二人がじゃれている間に、海斗はスマホである計画の企画書を作っていた。地域への移住。

もし、土壌に問題がなければ。

作物を耕すことは可能だし、建物だって作り直すことが出来る。

まだまだ、これからが正念場だ。

「アベル……お前との約束。もう少し時間が掛かりそうだ」

空を仰ぐ、光輝く太陽が見えた。

世界は取り戻した、でも本当の世界が戻ったとは到底言うことが出来ない。
人間の物語は終わらない。

「美森ちゃん、友奈。卒業旅行どこ行くか？」

「うくん……どうせだったら、外に行ってみたいな！」

「そうね、京都や奈良なんか良いわね」

未来を思い描く。

明るくて、楽しくて、きっと苦しいものになる。

それでも、やくそくは守らなければいけない。

「結婚どうするかなく」

人間は歩き続ける、止まることなく。

まだ見ぬ明日^{未来}を目指して。